

---

# 存在するはずのない世界

神滅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

存在するはずのない世界

### 【Nコード】

N0845J

### 【作者名】

神滅

### 【あらすじ】

紅夜鍊こうやれんはどこにでもいるような少年だ。

ただ彼には2つ普通じゃないことがある。

普通の学園生活を望んでいた彼の目の前に大変なことがある。

## 出会い

俺の名前は紅夜練<sup>こうやれん</sup>。

今年から高校生になる。黒髪、双黒の瞳のどこにでもいそうな少年。成績は普通で、どこにでもいるような少年だ。

ただ俺には2つ普通じゃないことがある。1つは身体能力がありえないくらい高いこと。昔、育て親により鍛えられた結果だ。ジャンプすればビルの3階くらいにまで届くくらいまで高く飛べる。

そして、俺にはもう1つ普通じゃないところは超能力が使えることだ。  
・  
・  
・

そして、入学式の日、高校はほぼすべて入学式が行われていた。

そう、俺がこれから入る「私立 洛芦<sup>らくろ</sup>和高校」も当然、入学式が行われる。

「あゝ、本校に入学おめでとう・・・」

校長先生の話開始5秒で眠れた・・・。

そして、目が覚めると

「ですから、本校でより良い学校生活を楽しんでください。これで私からのお話を終わります」

話は終わっていた。

そして、先生に連れられて教室に入る。

入った教室は1 - 6。出席番号順に座ると先生の長い話が始まった。

今度は寝ていると怒られると察して全部話を聞いていた。

今日は長い説明やら証明写真やらで1日が終わった。

放課後疲れた俺に話しかける人がいた。

「ねね、君、来るとき見かけたね」

隣から元気な声がかかる。

「ああ、そついわれたら見かけたな」

「俺の名前は岡崎真悟<sup>おかざき しんご</sup>」

「俺の名前は紅夜鍊。鍊って呼んでくれ」

「じゃ、鍊これからよろしく」

「ああ、よろしく」

よく、一番に話しかけてくる奴よは仲良くなると言われるが本当のようだ。

そして岡崎と一緒に帰ることになった。

「鍊ってさゲームとかやるのか？」

「いや、小説は読むがゲームはまったくだな」

「へー珍しいな」

少し話していると俺の家の前まで来た。

「あ、俺の家ここだから」

足を止めたのは屋敷だった。

きれいな屋敷ではなくボロボロでいかにも何か（幽霊など）がでますよつと言ってるような屋敷。

「鍊ってここに住んでるのか？」

「ああ、2年ほど前から1人でそれまではもう一人いたけどな」

「幽霊とかでないのか？」

「幽霊はいないな」

「あがつてもいいか？」

どうやら岡崎は屋敷の中を探検でもしたいようだ。

「別に良いけど」

言った瞬間は岡崎は隣にいなかった。

「おじやますます」

屋敷に入ったのだった。

俺は家（屋敷）に入りのんびりすることにした。

それからイスに座って小説を読み始めると

扉が開いてそこにいたのは岡崎だった。

「広いな」

「ああ、でも使ってる場所はごくわずかだ」

俺と岡崎は少し小説を読みながら話していると岡崎が時計を見て

「じゃ俺帰るよ」

「ああ、また明日」

岡崎が帰った後も小説を読み続けると

「もう、夜だ・・・」

夜だった時刻的には19:30

昼飯なしですごしてたからかすごくおなかが減った。  
なにかあるかなつと冷蔵庫を開けると

「何もね〜」

空だった。ソースや醤油はあっても食べ物が無い。

買い物に行くしかないようだ。

制服のままだったので着替えて外に出る準備をする。

「寒いな・・・」

夜の道を歩き近所で買い物済ませようとする俺に寒さが襲ってきた。

その瞬間

『ダン!』

すごい音とともに俺は吹っ飛ばされた。そして、電柱に体があたり倒れた。

何が起こったのかもわからずに立ち上がる。

（おいおい、今の普通の人じゃ死んでたぞ）

考えながら元自分がいた場所を見る。何かが飛んできたようにも見えずまったく不思議だった。

次に聞こえたのが

『タン』

（乾いた響きだ。まるで拳銃でも撃ったかのような・・・）

不安になった俺は銃声のなったほうに向かった。

少し力を入れてジャンプして他人の家の屋根に乗る。

はじめに言ったが俺は身体能力が異常なのだ。少し力を入れるだけで家から家に飛び移ることは簡単なのだ俺にとっては。

そして、銃声のなった方向に飛んでいると

洛芦らくろ和高校わこうの制服を着た女の子が2人の大人の男性に拳銃を向けられている。

(誘拐か?)

つと、少し見ていると

女の子が手を一人に向けてると

『ダン!』

つと、俺を吹っ飛ばした音が鳴り手を向けられていたほうの男性は吹っ飛んだ。

「ぐわ」

吹っ飛んだ男性が苦しそうに言う

「こつちも能力を使わないと駄目みたいですね」

つと、もう一人のほうが言うつと拳銃をしまった。

そして、男性の後ろに土でできた巨人が現れた。

(なんだ、あれは)

家の屋根から見ていてまったくわからなかった。

女の子は何も持っていないのに相手を吹っ飛ばす。男のほうは巨人を出す。

意味がわからなかった。わかることは女の子はだいぶ不利になったということだ。

手を巨人に向けて

『ダン!』

何かを撃つが土の巨人は倒れずらしい。

男は巨人に向けて言った

「気絶させる」

巨人が女の子に向かって殴りにいく大きい癖にそのパンチは早い。

女の子はおびえて動けない。

(やっぱここは洛芦らくろ和高校わこうの生徒らしい女の子を助けるべきか)

つと考えがまとまったので飛び出す

巨人のパンチは空振りになった。女の子はその場にいなかったからだ。

そこから少し離れた場所に女の子を抱えた（詳しく言うと姫様抱っこ）俺がいた。

「ああ、俺、痴漢とかじゃないので安心してください」

つと俺が女の子に向かって言う。

「キヤー！」

女の子が悲鳴を上げる。

（当然だよな）

つと納得しながら、女の子をおろすと女の子は顔を真っ赤にして俺から離れる。

はあ、つとため息していると

「お前はそいつの仲間か？」

男が聞いた。

「いいや、ただのそこら辺にいる一般人ですよ。それにまったく知らない他人ですね。共通点を言うと同じ学校の制服を持ってるくらいかな？」

俺が答えると

「まあ、いい死人が1人出るだけだ！」

つといつて巨人が俺に向かって動きだす。

（出てきたのは良いけどこれってピンチじゃん！？）

「後先考えずに動くだけじゃだめなんだ」つとという、育て親の言葉が頭に浮かんだ。

巨人は俺にパンチしてきたがそれを俺は両手で受け止めた。

「馬鹿な俺のゴーレムが一般人に止められるなど・・・」

（とめれはしたけどだいぶつらいよ）

男はゴーレムが俺の行動を封じている間にしまった拳銃を取り出し俺の心臓に向ける。

「でも、残念だったね。終わりだよ」

『タン』

乾いた音がした。

それと同時に

『ドン!』

ゴーレムのパンチが地面にめり込んだ。<sup>コンクリート</sup>

女の子は悲鳴を上げながら泣いていた。

「派手にやってしまったな。死体の後処理もしなければならぬな」  
つと、ゴーレムの手をよけさせて死体を確認する。

「!?!」

だが、手の下には何もなかった。男はあたりを見渡す。

「甘いんだよ」

俺はつぶやきながら男の後ろを取った。そして、俺は両手で木刀を持って男の顔面に思いつきりたたきつけた。

「つく。いつの間に……」

「拳銃で撃たれる前に巨人<sup>ゴーレム</sup>の後ろに移動したんだよ」

「馬鹿な……」

そのまま男は気絶した。同時にゴーレムも消えた。

(なんだったんだ。いつたい……。そういえば女の子は!?)

そして、女の子がいるか確認すると俺が降ろした場所に座りこんでいた。

「大丈夫?」

つと駆け寄って聞く。

「あ、はい……」

「それはよかった……」

俺はいきなり倒れた。

「大丈夫ですか!?!」

『ぐう』

お腹が鳴った。

「腹が減った。もう、無理動けない……」

「お嬢様!」



黒い車がやってきて窓を開けて叫ぶ。

黒服の男性が出てくるどうやらさっきの連中とは違うようだ。

「お嬢様大丈夫ですか!？」

1人が聞いてくる。

「はい、危ないところを助けてもらっただんで・・・」

「貴様か!お嬢様を危ないめにあわせたのは!」

つと、空腹で動けない俺の袖をつかんで持ち上げる。

「あのく、その方は・・・」

「貴様!」

ドカ。顔面を殴られた。

(あれ、痛くない・・・。でも、意識が・・・)

そのまま気絶してしまった・・・。

どうなる俺!。

## 出会い（後書き）

第一話終了しました。

アスラクラインが好きだったので書きたかった二次創作。  
読者の皆さんにも楽しんでもらえるとうれしいです。

## 悪魔と超能力者（前書き）

女の子を助けた錬。その後、女の子の知り合いらしき人に殴られ気を失った錬の運命はいかに

## 悪魔と超能力者

目を覚ました俺は布団の中だった。

「どこだここ……。っう……。」

(頭が痛い……)

「気がつきました?」

横から声が聞こえて布団から飛び出して戦闘態勢になろうとするが足が滑ってこけてしまう。

「大丈夫ですか?」

「誰ですか、あなたは……」

見てみると黒服で男性の大人だった。

「昨日のこと覚えてない?」

(昨日? 昨日っていつたら女の子を助けた時のことか……。っ。って、それが昨日ってことはあのまま寝てたのか俺は……)

「土の巨人を出した方の仲間だったら、俺は即殺されてますね」

「そうですよ」

(っということとは車からお嬢様って叫んでた方の仲間か……)

「黒い車の女の子を「お嬢様」って呼んでたほうの仲間ですか」

「はい、その通りです」

(なるほど、それなら納得がいく)

「じゃ、俺学校があるのでこの辺で失礼します」

「今日は土曜日、休みのはずだが」

「あの〜、帰らせてくれませんか?。お嬢様も無事だったんですし」

「いろいろ、聞きたい事があるんでな、もう少しここにいてもらいたい」

「聞きたい事って?」

「それは社長とお嬢様から聞かれると思いますので」

「そうですか」

『ぐう〜』

「・・・」

「すみません。帰らせてくれないなら何か食べ物・・・」  
「いいですよ」

男は立ち上がって部屋を出て行く。

(それにしても何なんだ・・・聞きたいことって・・・)

男が帰ってきたときにおにぎりは何個かもって来てくれた。  
それを全部食べて。

「ありがとうございます。ごちそうさまでした」  
「いえいえ」

「社長がこられたので私はこれで」

つと、男は部屋から出て行った。

そして、入れ替わりでやさしそうな顔をした黒服の男性と私服の女の子が入ってきた。

「おはよう。少年」

「おはようございます」

男性が挨拶したので挨拶し返す

「お、おはようございます」

女の子も挨拶をする。

「昨日は危ないところ娘を助けてくれてありがとうございます」

男と同時に女の子もお辞儀する。

「いえいえ、何もしてませんよ俺は」

「娘から話は聞いてます。あ、娘は話すのが苦手なので基本的に私が話しますね」

「そうですね」

つと、挨拶を見ているも苦手というのはわかる。

「そつちよくに聞きます。あなたは何者ですか？」

「ただの一般人ですよ」

「いいえ、違います巨人を素手で受け止め。何も持っていないはずだったのに突然に木刀を持っていたらしいじゃないですか」

巨人を止めていたのはばれていても、能力のほうまで見られてると

は……。

「じゃ、逆に聞きますけどあなたたちこそ何者ですか？」

難しい顔をする男

「男は巨人を出して、その子は何も持ってないのに空気を弾丸のように打ち出す。なにものなんですか？」

「……」

（疑問は聞いた。安心させるためにはこっちから話さなければならぬ）

「俺は、ある人により鍛えられているから巨人を素手で止めました。そして、木刀のことは俺の能力です」

「やはり、あなたは悪魔ですか」

（悪魔、なんだそれは……）

「悪魔？俺は超能力者ですよ」

「超能力？」

「俺は命のないものをこの世界と違う世界に飛ばせます。例えば、木刀とかをね。ただし飛ばすためにはその物を素手で触らないといけない。そして、その反対もやることができます。目の前に飛ばしたものを出すことができます。見せましょうか？」

「やって見せてくれ」

静かに男は言った。俺は男の目の前にわかりやすく手を出す。

その瞬間俺の手は木刀をつかんでいた。

男も女の子も目を大きくしてる。

「驚いたな。本当に出てくるとは……」

「信じてもらえましたか？」

「信じるしかないだろう。目の前でやられては……」

「真剣も出せますけど木刀だけじゃないってことも証明しましょうか？」

木刀を消して話す

「いや、いいよ」

「俺の話はそれまでです。あなたたちのこともはなしてくれませよ

ね？」

「ああ、いいでしょう。私たちは悪魔です」

（悪魔？どっからどう見ても俺と同じ人間にしか見えない）

「あなたと基本的に同じですよ。ただ能力が使えるだけで悪魔と呼ばれてます」

「能力つという空気と弾丸と巨人召喚ですか」

「はい。その能力です。男は基本的に何かを召喚する能力。私の場合、鳥を出せます。女はさまざまな能力が使えます」

「なるほど」

「本当は人間より高い運動能力を持つてるんですけど私たちにはそれほどの力がありません」

「そうなんですか」

（大体が解ってきた。俺を吹っ飛ばしたのは女の子の能力で巨人は男が召喚できたと・・・）

「つで、俺はどうしたほうがいいんでしょうか？」

「つと、言つと？」

「その子は洛芦らくろ和高校わこうの生徒じゃないんですか？」

「そうだ。今年からの入学で本当は親戚の家に引き取ってもらってる」

「そうなんですか。俺も洛芦和高校に今年から通っています」

「そうなんですか」

「この話は内密にしたほうがいいのでしょ？」

「そうしていただけるとありがたいです。後、娘と同じクラスだとうれしいですね」

そんなことをさらりと言うと、女の子が

「お父さん！」

なにか怒ったような声で言い出した。

「あ、ごめんごめん」

「まあ、そうだといいですね。きれいな子がクラスにいるとうれしいですし」

そういうと女の子は顔を赤くして

「お、同じクラスになれるといいですね」  
つと言い出した。

(正直なことをいったままでなんだけどね・・・)

昨日は良く見てなかったけど、長い黒髪にスタイルも良い子だ・・・。

「そつういえば自己紹介をしてませんでしたね。私は黒月弥蛇くろつきやた」

「俺は紅夜 鍊 苗字は嫌いなので鍊つと呼んでください。呼び捨てでどうぞ。いちよ、クラスは1-6です。」

「私は・・・黒月静音くろつきしずね。昨日は学校に行けなかったのでクラスは解らないです。呼ぶときは呼び捨てでどうぞ」

(黒月か・・・なんか聞いたことある名前だな・・・)

「今後、娘のことをよろしくお願いします」

弥汰さんが頭を下げる。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

俺も頭を下げる

「お、お願いします」

黒月も頭を下げる。

「鍊さん、これからどうするんですか？」

弥汰さんが聞いてきた。

「とりあえず家に帰してくれるなら帰って掃除、整頓ですね。教科書とかがごちゃごちゃなので」

「そうですね。車を用意しますね」

「いえ、走って帰りますよ。言いましたが運動能力には自身ありませんので」

「そうですね」

それから、黒月の家を出るで黒月のお見送りを受ける。

「あ・・・ごめん。洛芦和高校ってどっちか解る？」

黒月に聞いてみる。

「あ、あっちの方向だと思います」



指の向く方向を確認して

「ありがとう。また会えるといいね。さようなら」

「さようなら」

つと行って俺は指のさされた方向に行った。

家に帰るまで時間はかからなかった。

（さて、掃除をするか）

掃除と整理には日曜日の夕方までかかった・・・。

悪魔と超能力者（後書き）

のんびりこのまますすんでいきたいとおもいます

## 高校生活に生徒会（前書き）

入学式の日には黒月 静音と出会い悪魔の存在を知った超能力者  
これから学校生活が始まる 錬

## 高校生活に生徒会

朝7時に目が覚めた。

今日は月曜日だ。これから俺の高校生活が始まる。

朝食を食べ、学校の準備をして家を出る。

(黒月家に悪魔がいるいるあったな・・・)

考え事して歩いてると後ろから背中を叩かれる。

「おはよう、錬」

「おはよう、岡崎」

入学式の日には仲良くなった岡崎だった。

「これから高校生活だな」

「ああ、そうだな」

「高校で絶対彼女作るぞ」

「高校は彼女作る場所じゃないぞ」

(恋愛か恋をするなんて思ったことないな)

「いやいや、高校は出会いの場所なのだ」

「じゃ、がんばって相手見つけろよ」

「お前も手伝ってくれよ」

「自分の相手くらい自分で探せよ」

どうでも良いような話をしていると学校についた。

岡崎と話していると先生が来た。

挨拶をし終わると

「入学式は家の用事で来られなかった子がいるって話したな」

(まったく覚えてない。そういえば俺の前の席が空いている)

「じゃ、入ってきてくれ」

先生が呼ぶとドアが開いてきれいな女子が入ってくる。

「「おおー!!」」

男子が騒ぐ

「静かにしろ」

先生に注意されながら・・・。  
それにしてもきれいだ。長い黒髪でスタイルも良い・・・  
(って、黒月じゃないか！)

目を大きく開いて驚いた  
ある程度、静かになつたところで先生が「自己紹介してくれるかな？」  
と聞き

「く、黒月静音です。よろしくお願いします」  
男子生徒が質問する。

「彼氏いるの？」「気になる男性は？」「好きな男性ってどんなひと」  
「スリーサイズを教えてください！」

どうすればいいのかわからないまま黒月は立っていた。とっとうか  
誰だ最後の質問したの・・・。  
先生も止めればいいのに「少し、答えてあげて」と言った。

「あの・・・」  
黒月が話し始めたと同時に静かになる。

「その・・・。彼氏はいません」

「おおー！」「男子がまた、騒がしくなる。」

「気になる男性は・・・」

しゃべりながら俺のほうを見てる気がした。気のせいだろう・・・。  
「秘密です。好きな男性は・・・優しく、困った時に助けてくれる人です」

男子が騒ぎながら自己紹介が終わった。

「君の席はそこね」

と、俺の前の空席を指差した。

(やっぱりですか)

そしてHRが終わると

黒月が話しかけてくる。

「あの・・・」

「どうした？」

「一緒のクラスになれたね。錬君」

「ああ、それも席が前だからな。おどろいたよ」

「同じクラスでうれしかった・・・」

笑顔で言われて少し顔が熱くなった気がした。

「まあ、これからよろしく」

「よ、よろしく」

次のHRが始まった。先生の話が永遠に続いて正直眠い・・・。

だが、睡魔と闘い何とかHR終了まで起きていられた。

「錬、大丈夫か？眠そうだが・・・」

眠そうな顔を見て、岡崎が聞いてくれた

「無理、眠い。眠るから先生来たら起こしてくれ」

「ああ、いいよ」

持つべきものは友。友の言葉を聴きおれは目をと閉じた。

数分後、やけにうるさい。眠れない・・・。

「ねえ、どこにすんでるの？」「俺の家、おいしいケーキ屋なんだ

けど来ない？」

前の席からだ・・・。たぶん、黒月に質問を男子がしてるのだろう。

「あの・・・、その・・・」

黒月の声もかすかにする。だが、まともな返事ができていないようだ。

「ねね・・・」「俺の家・・・」

繰り返される言葉・・・。眠れない・・・。

俺は閉じてた目を開けて。

「うるさい」

前の席の男子たちをにらみつけながら言った。

「なんだよお前」

一人が聞いてくる。

「うるさいんだよ。会話するのもいいが一方的な質問だけだと会話じゃないぞ」

「・・・」

「黒月の声も聞かずにペラペラ。うるさいぞ」

「じめん」

黒月に誤って男子たちは、その場を離れた。やっと眠れると思った。

「あの」

黒月が話しかけてきた。

「どうした？」

無視できずに聞く

「あの・・・」

何を言うのか待つ俺。

「あ、ありがとう」

「ああ、いいよ。別に、眠ってたらうるさかったただけだ。そっと寝かせてください」

「あ、うん。お休み」

そして、もう一度目を閉じて眠りに・・・

「錬、先生来たぞ」

つけなかった。

3度目のHRが始まったのだ・・・。

眠くてもがんばって全話しを聞いた。

3度目のHRは早めに終わった。

「今日の授業はここまでだ。帰る準備だけして待つとけ」

先生は素晴らしい残して教室を出て行った。

やっと、眠れる。俺は少しの眠った。

少し眠ると先生が戻ってきて終わりのHRを終わらせた。

学校が終わったので帰ろうとすると放送が流れた。

『1-6の紅夜 錬君今すぐ第一生徒会に来なさい』

(あゝ聞き覚えのある名前とクラスだな)

『繰り返しします。1-6の紅夜 錬君今すぐに第一生徒会に来なさい』

い

(同じ名前の人っているんだな)

そうあってほしかった。

「錬君、呼ばれてるよ」

黒月が現実を言ってくれた。

( やっぱり俺なんだよね・・・ )

「錬君、もしかして金曜日の・・・」

黒月は自分が教われてたときのことかきっかけで俺が呼ばれてると思ってるのだろう。

「そんなわけあるか。もし、そんなことがあつたとしても。俺は俺がやりたいようにやったから後悔なんてしてない」

「錬君・・・」

ああ、何言つてんだろ俺。岡崎も会話に入ってきた。

「かつこいいね」。錬は、ほれちゃうね」

「冗談はよせよ」

「ところでいなくていいのか？」

「そろそろいかないとな」

「じゃ、逃げることになったら言ってくれよ」

「悪いことやつてないやつがなんでにげんだよ」

「じゃ、また明日」

2人に別れを告げる

「また、明日・・・」

黒月も言う

「無事に帰って来いよ」

こんなことを言うのは岡崎だ。

「俺は、戦場に戦争しに行くんですか？」

そういつて俺は教室を出ていた。

学校の地図を見ながら(まだ、覚えてない)第一生徒会に向かう。

(なんでこの学校一と二の生徒会があるんだ・・・)

そして、第一生徒会の扉の前に来た。

ノックをして入る。

「1-6の紅夜 錬です」

中には3人の男子がいた。



「わざわざ、来てもらって悪かったね」

椅子に座った男子が話す。この状況から見るとこの人が生徒会長だろう……。

「僕の名前は川井 真、かわい まことここ第一生徒会の会長をやっている。君を呼んだのは、この、第一生徒会に入ってもらいたいからだ」

（話がよくわからない。てっきり、金曜日の悪魔との戦闘のことだと思っていた）

「お断りします。よく解らない組織に入るほど暇じゃないんで」

「じゃ、僕たちが何をしてるか言いますよ。僕たちは昔まで悪魔の力が世界を滅ぼすとして、校内の悪魔の殲滅を許可されていた」

俺は、驚いた。昔までこの人たちは黒月のような悪魔を殺していたと言っのか……。

「だが、この世界は救われた。この高校のある生徒のおかげで世界は救われた」

「へー、よかったですね」

「良かったんだよ。でもね、君のクラスにいるよね黒月さん」

俺はこの人たちが何をしようとしてるか最悪の状況まで考えてしまった……。

（まさか、黒月を……）

あくまで冷静に答える。

「ええ、いますね」

「あの子は危険な存在なんだよ」

「なにがですか？。世界は救われて平和になったんでしょ？」

「あの子には悪魔の力が2つあるんだよ」

「え……？」

「左目を緑色に染めることであの子は空気を圧縮して弾丸のように撃つことと」

左目が緑色？そんなの気にしたことがない。

「右目を赤色に染めたとき、あの子は赤色の目で見た人の記憶が見えるんだよ」

驚いた。記憶を見るってことがどんなことか解らないがそんなことができることに。

「その能力をあの子は使おうとはしないが危険なんだよ。2つの能力の持ち主が契約者を持つとどうなるのか」

「契約者？」

「性的な関係を持つということだ」

・・・

（この人よくそんなことを恥ずかしげに言えるな・・・）

「ある話では、2つの能力を持ったもの使魔トウターは契約者の命令も無視して暴走した。悪魔の血が弱かったおかげで簡単に事件は収まった」

「使魔トウターってなんですか？」

「どうやら、そこまで詳しく知らないようだな。使魔トウターは雌の悪魔、まあ、女の悪魔、黒月さんのようなね。その女の悪魔が契約すると現れる物なんだよ。愛の結晶ともいえるがね」

（まだまだ悪魔のことを知らないんだな俺は・・・）

「そこで、君が一番、彼女に近い存在だと我々は感じた」

（なるほど、危険な存在ができるまえに作れないようにするか）

「それで、一番近い存在の俺を呼んで何しよう？」

「第一生徒会に入り、黒月さんとの縁を切るって誓ってもらいたい」

「嫌です。あいつは俺にとって大事な友達です」

「なら、ここで死んでもらおう」

そう、言い終わると川井会長と後2人の生徒会員は俺に拳銃を向けた。

「ここは日本ですよ。銃刀違反じゃありません？」

「それが許されているんだよ」

『タン』

乾いた音がする。会長が撃つたのだ。

「無駄ですよ」

会長の後ろで俺が発言する。

「そんなもので殺せるほど弱くない」

「なら大人数で撃てばいい」

2つの扉が開いて4人の男が新たに入ってきた。

「7対1、絶望的だね」

「そうかな」

(やばい、非常にやばい。3人くらいなら何とかできるって思ったけど人数が多い)

『タンタンタンタン』

ドサ。

ジャンプして室内を飛び回っていると足に被弾した。

「つく」

「僕たちも君を殺したくないんだよ」

拳銃を向けながら会長が言う

「そんなものに向けて言うことばとは思えませんね」

「ああ、これで終わりだ」

そのとき

『バン！』

扉が吹き飛んだ。

高校生活に生徒会（後書き）

錬の絶対絶命！？そのときヒーローがやってくるかもしれない

## 機巧魔神と無力な己（前書き）

高校生活初日第一生徒会に呼ばれ行ってみると悪魔がどっのどっの  
言われ争うことになる。

そして、鍊の絶対絶命のピンチの時にやってきたのは！？

## 機巧魔神と無力な己

扉が吹っ飛んだ。廊下側の扉だ。

「何事だ!？」

川井が叫ぶ。廊下にいたのは……。

「黒月!？」

廊下にいたのは左目が緑色の黒月だった。

(扉を飛ばしたのは黒月の能力か……)

黒月には左目を緑色になると能力が使える、その能力は空気を弾丸のように飛ばすことだ。

「錬君!？」

俺の撃たれた足をみて驚く。

俺に向けられていた拳銃がすべて黒月に向けられる。

「逃げる黒月!」

俺は必死に叫んだ。

そして、何とか立ち上がるうとする。

「私がいなくなれば良いことなんです」

黒月がそんなことを言い出した。

「だから!。錬君はもう立ち上がらないでください!？」

いつもはハッキリといえないのに今回に限ってかすらすらと言い出す。

「俺の周りにいなくなっって良い奴なんていねえんだよ!。来い白翼はくしよく」  
俺の超能力で目の前に刀(真剣)を出す。白だけのただの刀にか見えない

「何だその力は!？」

振り返って俺を見た川井が驚く。

片足で飛び生徒会員の持つてる拳銃を斬る。

「うわぁー」

「っく」

「タン」

俺に拳銃を向けなおした川井が撃つ。銃弾を刀で弾く。

「すごいね。拳銃は効かないか。なら、来い紅玉<sup>ルビ</sup>」

川井の影から機械の腕が出てきてその後から体も出てくる。腕も体も真っ赤な物体だった。簡単にたとえるとロボットだ。身長は4メートル前後でかなり大きい。

「なんだ、これ・・・」

見たことのない物体に驚く。

「<sup>アスラ・マキナ</sup>機巧魔神・・・」

黒月がつぶやく。

「そう！。機械仕掛けの悪魔。悪魔に対抗する手段だ！」

川井が言う。

「行け、紅玉」

機械の腕が動き俺を殴りにくる。結構早い、回避できない・・・。刀でガードすると折れてしまいそうだったから素手で受け止める。ジュウ・・・

手が焼けるように熱い。手を離して回避する。

(手が軽いやけどになった)

「紅玉の温度は最高2000まで上げることができる」

「そんな、馬鹿な・・・」

(白翼の能力は使えるのだろうか・・・)

俺の持つてる2本の刀には不思議な力があるって育ての親から聞いていたが何の力かも知らない。

「死ね。紅夜 連！」

「もう、やめて！」

黒月が叫ぶが紅玉はもう一度殴りかかる。俺は刀を鞘に戻し抜刀した。

「刀じゃ2000に耐えれないよ！」

しかし、刀は紅玉の手を斬ったのだった。斬ったと言っても傷がついたくらいだった。

「なんだ、その刀は・・・」

「白翼、翼が羽ばたいたときすべてを無力になる。って、聞いていたが本当だったのか」

『パン』

その瞬間。錬の肩が拳銃で撃たれた。

後ろに生徒会員がいたのだった。

俺は刀を地面に落とし倒れた。

「これで終わりだ」

川井が拳銃を俺の心臓に向けて引き金を引こうとする。

「やめて！」

黒月が再び叫ぶ。

「私がいなくなれば、こんなことしなくてもいいんですよ」

「ああ。だが黒月家を敵にするべきじゃないからね」

俺に拳銃を向けたまま話す。

「私が身代わりになって死にます。それでいいでしょ」

「馬鹿、さっさと逃げろ。お前が死んで俺が生き残ってもちっとも

うれしくないぞ」

必死に言うが声が全然出ず。声が届かない。

「・・・」

「錬君を殺すより。原因である私を殺す法がいいでしょ」

「良いだろう。ただし抵抗はするな」

「はい」

「黒月」

叫ぼうとするがまったく声が出ない・・・。

「ごめんね。錬君」

俺は無力だ……。一人の友達も救えないなんて……。

そして、俺は気を失った。



## 機巧魔神と無力な己（後書き）

オリジナル機巧魔神紅玉<sup>アスラ・マキナ ルビー</sup>

能力は自分の体を最高2000に変える。

呪文募集中

原作で言っていると嵩月のような能力です。

出会いと家族 (静音) (前書き)

タイトルに(静音)と書かれているこの話は黒月 静音目線で進みます。

回想なので少し気おつけて呼んでください

## 出会いと家族（静音）

私の名前は 黒月 静音 これから高校生になる。

私は高校生になると同時に親戚の家に取り取ってもらった。高校が近いからだ。

そして、私は普通の人間じゃない。私は悪魔なのだ。

空気の弾丸を作ることできるし、見た人の心の中を覗くことができる。

普通の悪魔は1つの能力しかないのに私は特別に2つの能力があり、いろんな人から狙われていた。

そう、入学式の夜も・・・。

入学式の日、私は家庭の事情で入学式に出れなかった。

そして、夕方、学校に行き出れなかったことを誤りこれからのことを聞いていた。

そして、学校の帰り道、襲われた。

「君が、黒月 静音さんだね。ちょっと、一緒についてきてもらおうよ」

相手は、大人の男性が2人拳銃を持つてる。

拳銃をみて私は走り出した。

そして、後ろを見ながら左目を緑色にして能力を使う。

空気の弾丸を飛ばした。

『ダン！』

音はすごいが男たちに当たらなかった。

『タン』

相手も拳銃を撃ってきた。

逃げようとした方向の壁に銃弾が当たり足を止めてしまう。

「逃げるのはやめろ」

1人が言った。

私が1人に手を向けるつと

「馬鹿、避ける」

向けられてないほうの男性が言ったがもう遅い。

『ダン！』

手を向けていたほうの男性は空気の弾丸にあたり吹っ飛んだ。

「ぐわ」

苦しそうに言う。

「こつちも能力を使わないと駄目みたいですね」

もう一人の男性が言って拳銃をしまう。

男の悪魔は魔精霊サブ・ジンを生み出すことができる。

そして、出てきたのは土でできた巨人が現れた。

『ダン！』

空気の弾丸を撃っても倒れない。

怖かった。動けなかった。今までは父親が助けてくれたけど……。

私はここで死ぬ……。

巨人の腕が私に向かってくる。

目を閉じた。

その時、誰かに抱えられてる気がした。

目を開けると同じ年齢の男の子がいた。

「ああ、俺、痴漢とかじゃないので安心してください」

怪しくないつとアピールするがすごく怪しい。自分がお姫様抱っこ

されてることに気づき。

「キヤー！」

悲鳴を上げる。

男性は私を下ろす。私は顔を真っ赤にして男性から離れる。

(いったい何者なんだろ……)

まったく解らない。知り合いでもないのにこんな私を助けてくれる

なんて……。

「お前はそいつの仲間か？」

男の悪魔が聞く

「いいや、ただのそこら辺にいる一般人ですよ。それにまったく知らない他人ですね。共通点を言っと同じ学校の制服を持つてるくらいかな？」

助けてくれた男性は洛芦らくろ和高校の生徒のようだ。

「まあ、いい死人が1人出るだけだ！」

つといて巨人が男の子に向かって動きだす。

そして、男の子は両手でゴーレムを止めた。

「馬鹿な俺のゴーレムが一般人に止められるなど・・・」

（ありえない。魔精霊の力は人間と比べ物にならないほど高いはずなのに）

男性はゴーレムが男の子の行動を封じている間にしまった拳銃を取り出し男の子の心臓に向ける。

（助けてあげなきゃ・・・）

心の中ではそう思うが動けない。

「でも、残念だったね。終わりだよ」

『タン』

乾いた音がした。

それと同時に

『ドン！』

ゴーレムのパンチが地面コンクリートにめり込んだ。

私は悲鳴を上げながら泣いていた。

（私が何もしなかったからあの子は・・・私を助けたからあの子は・・・）

何もできなかった自分をせめる。

「派手にやってしまったな。死体の後処理もしなければならぬな」  
つと、ゴーレムの手をよけさせて死体を確認する。

「!？」

だが、手の下には何もなかった。男はあたりを見渡す。

「甘いんだよ」

男性はつぶやきながら男の後ろを取った。そして、男性はいつの間

にか木刀を持っていて男の顔面に思いつきりたたきつけた。

「つく。いつの間に・・・」

「拳銃で撃たれる前に巨人ゴレムの後ろに移動したんだよ」

「馬鹿な・・・」

（あの一瞬でそんなことができるのだろうか・・・）

そのまま男は気絶した。同時にゴレムも消えた。

（怖い。助けてくれたけどこの人も私を狙っているのだろうか）

私はいつの間にか座り込んでいた。

「大丈夫？」

心配してくれているがいつでも能力が使える準備はしながら返事をする。

「あ、はい・・・」

「それはよかった・・・」

男の子はいきなり倒れた。

「大丈夫ですか!？」

いきなりのことに驚いて聞いてしまつ。

『ぐう』

男の子のお腹が鳴った。

「腹が減った。もう、無理動けない・・・」

「お嬢様!」

黒い車がやってきて窓を開けて叫ぶ。

（迎えに来てくれたんだ・・・）

それは自分の知り合いの車だった。

「お嬢様大丈夫ですか!？」

1人が聞いてくる。

「はい、危ないところを助けてもらつたんで・・・」

私が言い終わる前に。

「貴様か!お嬢様を危ないめにあわせたのは!」

つと、倒れてる男の子の袖をつかんで持ち上げる。

「あの、その方は・・・」

私を助けてくれたつと言う前に

「貴様！」

ドカ。男の子の顔が殴られ。

男の子は気を失った。

「お嬢様どうします？」

「その方は私を助けてくれた恩人です・・・」

やっと全部いえたが、男の子を殴った後だった・・・。

そして、今日は親戚の家でなく父親がいる実家に帰った。

そして、今日あったことを話した。

全部話すと

「そうか、かつこよく見えたんだな」

「そんなことないよ・・・」

つと言いながらあったことを思い出すと、

(かつこよかつたかもしれぬ・・・)

顔が熱くなる。

「一目ぼれでもしたかな？」

「そ、そんなことないです」

顔を真っ赤にして言い返すが父親は笑う。

「まあ、同じ学校で生活するから仲良くなれるかもな」

笑いながら話。

「もう、寝ます・・・」

「お休み、静音」

そういつて私は眠りにつく。

翌日

彼にいろいろと話を聞いた。

同じ1年生つてことと名前。自分が超能力者で悪魔とかのことはしらないと言うことも。

そして、ある程度話をして帰っていった。

錬君が帰ると父親と話をする。

「いい子だったね」

「はい」

「婿にほしいくらいだね」

「はい・・・ってなにいつてるんですか!？」

反射的にはいつて言ってしまったが何を言わせてるんだこの人は・・・顔が真っ赤になる。

「まあ、これからは親戚の家で迷惑をかけないようにな」

「あ、はい」

「それと、錬君と仲良くやるんだよ」

「またですか」

「良い契約者を見つけてもらわないと心配コントラクタでな」

「契約をするために人と仲良くするものじゃありません」

「そうだな」

「お父様は錬君をきにいつてるんですか？」

「ああ、良い子だと思ってるよ。できれば契約者コントラクタになってもらいたいくらいにね」

「・・・もう、寝ます」

「お休み、静音」

日曜日は親戚の家ではまた金曜日のことを聞かれる。

(心配してくれてるんだ・・・)

また、金曜日に錬君が助けてくれたことを話す。

「それで錬君が・・・」

「静音ちゃん、錬君の話をしてるとうれしそうだね」  
親戚のお姉さんが言う。

「え・・・」

顔が赤くなる。

「青春だね」

ニヤニヤしながら言う。

「・・・」



「今度、家につれてきてよ」

(それもそうだ……。今度お礼に……)

「コントラクト契約者にしてもいいと思ってるの？静音ちゃんは」

(錬君と契約か……)

顔が真っ赤になる。

「わ、私もう、寝るね」

「あらあら、照れちゃってかわいい」

そして、自分の布団の中で錬君のことばかり考えていた……。

(そういえばクラスどうなるんだろう……。錬君は1-6についてたな……。私も1-6にならないかな……。)

顔を赤くして眠りについた。

出会いと家族 (静音) (後書き)

次回も静音目線で進みます。回想ばかりでつまらないかもしれません^^;

## 高校生活と自分より大切な人（静音）

月曜日

私は6時に目が覚めた。

朝食を食べ、学校の準備をして家をでる

「いつてきます〜」

「「いつてらっしゃい」「

みんなが返事してくれる。

学校までは徒歩で通学してる。10分くらいでつくのだ。

入学式に出てないので転校生扱いでまず職員室にいった。

担当の先生と少し話した。

「君が担当する1-6にはいつてもらおうね」

私は驚いた。

「あ、あの、クラスはどこって？」

「ん？1-6だよ」

（よかった、錬君と同じクラスだ）

「まあ、仲良くできると思うよ」

「はい！」

そして、先生に1-6に連れて行ってもらう。

ドアまでくると、

「入ってねっていつたら入ってきてね」

「はい」

（まるで転校生だな）

「おはよう」

「おはようございます」

「入学式は家の用事で来られなかった子がいるって話したな。今日は来たので入ってきてくれ」

呼ばれたので教室の中に入っていく。

教卓に立って少しあたりを見渡すと

(あ、錬君だ・・・)

錬がいた。目を大きく開いてた。

(私が入ってきて驚いたのかな)  
そんなことを思ってるよ

「自己紹介してくれるかな？」って言われ

(緊張する・・・)

「く、黒月静音です。よろしくお願いします」

男子生徒が質問する。

「彼氏いるの？」「気になる男性は？」「好きな男性ってどんなひと」「スリーサイズを教えてください！」

(ど、どうすれば)

先生も「少し、答えてあげて」っと言った。

「あの・・・」

私が話そうとすると静かになる

「その・・・。彼氏はいません」

「「おおー！」」男子がまた、騒がしくなる。

「気になる男性は・・・」

(錬君・・・)

しゃべりながら錬のほうを見てしまう。

「秘密です。好きな男性は・・・優しく、困った時に助けてくれる人です」

男子が騒ぎながら自己紹介が終わった。

「君の席はそこね」

先生が空席を指差した。

(錬君の前だ・・・)

そしてHRが終わると  
ホームルーム  
振り返って話す。

「あの・・・」

「どうした？」

「一緒のクラスになれたね。錬君」

「ああ、それも席が前だからな。おどろいたよ」

「同じクラスでうれしかった・・・」  
笑顔で話す。

「まあ、これからよろしく」

「よ、よろしく」

次のHRが始まった。

何事もなくHRが終わる。

HRが終わると男子が集まって私に質問をしてくる。

「ねえ、どこにすんでるの?」「俺の家、おいしいケーキ屋なんだけど来ない?」

(なんて答えれば・・・)

「あの・・・、その・・・」

「ねね・・・」「俺の家・・・」

繰り返される言葉・・・。何を言い出せばいいかわからない  
「うるさい」

錬が男子たちをにらみつけながら言った。

「なんだよお前」

男子の一人が聞いた。

(と、止めなきゃ・・・喧嘩になる・・・)

っと思っても何も言い出せない・・・。

「うるさいんだよ。会話するのもいいが一方的な質問だけだと会話じゃないぞ」

「・・・」

「黒月の声も聞かずにペラペラ。うるさいぞ」

「ごめん」

(なぜか、顔が熱くなる)

黒月に誤って男子たちは、その場を離れた。

「あの」

「どうした?」

私の声をちゃんと聞いてくれる。

「あの・・・」  
なかなか言い出せない。

「あ、ありがとう」

「ああ、いいよ。別に、眠ってたらうるさかったただけだ。そつと寝かせてください」

（それでも、私は嬉しかった。ちゃんと話を聞いてくれることや困ったとき助けてくれることが）

「あ、うん。お休み」

言ったときには

「錬、先生来たぞ」

錬の隣の席の子が錬を起こした

3度目のHRが始まったのだ。

HRは早めに終わった。

「今日の授業はここまでだ。帰る準備だけして待つとけ」  
先生はそういい残して教室を出て行った。

私は後ろを気にしながら、帰りの準備を進めた。

学校が終わったので帰ろうとすると放送が流れた。

『1-6の紅夜 錬君今すぐ第一生徒会に来なさい』

（錬君が第一生徒会に・・・）

第一生徒会とは昔まで悪魔の殲滅と校内の安全を取りしまう生徒会なのだ。

『繰り返します。1-6の紅夜 錬君今すぐに第一生徒会に来なさい』

（もしかして、金曜日のことが・・・）

不安になった。私のせいで錬に迷惑をかけていないか

錬を見ると・・・

固まっていた。

「錬君、呼ばれてるよ」

私が言うと。

ため息をついた。どうやら自分でないこと祈ってたようだ。

「錬君、もしかして金曜日の・・・」

私は自分が襲われてたときのことばかりじゃなかったかと思つた。「そんなわけあるか。もし、そんなことがあつたとしても。俺は俺がやりたいようにやつたから後悔なんてしてない」

「錬君・・・」

(いい人だな・・・)

「かつこいいね」。錬は、ほれちゃうね」

錬の隣の席の人も話に入ってくる。

「冗談はよせよ」

「ところでいかなくていいのか?」

「そろそろいかないとな」

「じゃ、逃げることになつたら言ってくれよ」

「悪いことやつてないやつがなんでにげんだよ」

「じゃ、また明日」

「また、明日・・・」

私も言う。

「無事に帰つて来いよ」

こんなことを言うのは隣の席の人だ。

「俺は、戦場に戦争しに行くんですか?」

そういつて俺は教室を出ていた。

「あいつは、いろいろかかえこみすぎなんだよ・・・」

「あ、あの・・・」

「ああ、俺は岡崎 信吾ね。よろしく」

「よ、よろしく」

戸惑いながら言う。

「君は、この世界を知る人?」

(!?)

「そういうあなたは・・・」

「知ってるよ。ここは第2の世界。1の世界は滅び世界は2の世界に託した」

「知ってるってことはあなたは・・・」

「悪魔だよ」

（この人は・・・。校内でそんなことを・・・）

「君みたいに特別なことはないけど変わった能力を持ってるよ」

「そうなんですか」

（どうやら2つの能力のことも知ってるようだ）

「まあ、鍊のこと頼むよ」

そんなことを言った岡崎君は消えた。

（なにが・・・）

そして、

『タン』

かすかだが拳銃の音が聞えた。

驚いて聞えた方に行く。

『タンタンタンタン』

拳銃が乱射してる。

聞える方向には第一生徒会があった。

（やっぱり・・・）

私は空けようとするが

（開かない!?)

硬くて開かないのだった。

（仕方ない・・・）

左目を緑色に変えて

空気の弾丸で扉を吹き飛ばす。

『バン』

扉が吹っ飛んだ。

「何事だ!?’

誰かが叫ぶ。

「黒月!?’

中にいた鍊が驚いたような声で言う。

鍊は床に倒れてた。



「錬君!？」

錬の足をみて驚く。足には血が出ていて、拳銃で撃たれたのだろう。拳銃がすべて黒月に向けられる。

「逃げる黒月!」

錬は必死に叫ぶ。

そして、何とか立ち上がるうとする。

「私がいなくなれば良いことなんです。だから!。錬君はもう立ち上がらないでください!？」

(迷惑をかけるくらいなら……。死んだほうが……)

いつもはハッキリといえないのにすらすらと言い出す。

「俺の周りにいなくなって良い奴なんていねえんだよ!」

その言葉が心に響いた。

「来い白翼」

錬の超能力で目の前に刀(真剣)を出す。白だけのただの刀にか見えない

「何だその力は!？」

振り返って俺を見た生徒会の人が驚く。

錬は片足で飛び生徒会の持つてる拳銃を斬る。

「うわあー」

「つく」

『タン』

錬に拳銃を向けなおした生徒会の人撃つ。銃弾を刀で弾く。

(すごい)

「すごいね。拳銃は効かないか。なら、来い紅玉」

生徒会の人影から機械の腕が出てきてその後から体も出てくる。

腕も体も真つ赤だった。身長は4メートル前後でかなり大きい。

(機巧魔神……。悪魔に対抗するための……)

「なんだ、これ……」

「機巧魔神……」

私がつぶやく。

「そう!。機械仕掛けの悪魔。悪魔に対抗する手段だ!」

アスラ・マキナ  
機巧魔神を呼んだ人が言う。

「行け、紅玉」

機械の腕が動き錬を殴りにくる。

錬は手で受け止めた。

ジユウ・・・

錬は手を離して回避する。

「紅玉の温度は最高2000 まで上げることができる」

「そんな、馬鹿な・・・」

「死ね。紅夜 連!」

「もう、やめて!」

私が叫ぶが紅玉はもう一度殴りかかる。錬は刀を鞘に戻し抜刀した。

「刀じゃ2000 に耐えられないよ!」

しかし、刀は紅玉の手を斬ったのだった。斬ったと行っても傷がつ

いたくらいだった。

驚いた。アスラ・マキナ 機巧魔神の能力を無効にしたのだ

「なんだ、その刀は・・・」

「白翼、翼が羽ばたいたときすべてを無力になる。って、聞いてい

たが本当だったのか」

『パン』

言い終わったその瞬間。錬の肩が拳銃で撃たれた。

後ろに生徒会員がいたのだった。

錬は刀を地面に落とし倒れた。

「これで終わりだ」

生徒会の人が拳銃を俺の心臓に向けて引き金を引こうとする。

「やめて!」

黒月が再び叫ぶ。

「私がいなくなれば、こんなことしなくてもいいんですよ」

「ああ。だが黒月家を敵にするべきじゃないからね」

錬は拳銃を向けたまま話す。

「私が身代わりになって死にます。それでいいでしょ」  
「……」

錬が何かを言ってるがまったく聞えない。

「錬君を殺すより。原因である私を殺す法がいいでしょ」

「良いだろう。ただし抵抗はするな」

「はい」

「……」

錬が何か言ってるが聞えない。多分やめろとか言ってくれてるんだろ。……。

「ごめんね。錬君」

そういい残して第一生徒会室を出た。

そして、私は第一生徒会につれられて倉庫に行った。

（私はここで殺されるのか……。あの人のためになら……。）

「黒月君」

そう呼ぶのは第一生徒会長の川井だ。（ここにくるまでに自己紹介をしています）

「……」

「君を殺さなくてもよくなった」

（今何を言った……。？）

「え？」

「君を殺さずに悪魔の力を消すことができるらしい」

「そんなことは……」

「2つの能力を1つにすることさえできれば僕たちは君の事に関しては何も言わないよ」

「何とかなるんですか？」

「ここで、1つの能力を消すことができる人と会うことになってる」

（私は助かるのだろうか……）

「お待ちしました」

倉庫の中から聞こえた。

「すまないな急に呼んでしまつて」

「いえいえ」

倉庫の中にいたのはお坊さんだった。

「その子の悪魔を取り除けばいいんですよ」

「ああ、2つの能力のうち1つ取り除くことができればいい」

「それでは、そのことをこちらへ」

お坊さんは椅子に指を指す。

(座れつてことかな・・・)

私は椅子に座つた。

「取り除くとき激痛がおこるので縛らせてもらいますね。儀式中に暴れると中止することになるので」

「はい」

「それでは第一生徒会のかたがたはかえつていただいていいですよ。時間がかりますので」

お坊さんは生徒会を帰らせようとす。

「いや、そのこはうちの生徒だから我々は見守る義務がある」

「仕方ないですね」

お坊さんの両目が緑色に輝いた。

「では、何もできないようになってもらいましょう」

黒い妖精が出てきた。

黒い妖精はものすごい勢いで第一生徒会の周りを回つた。そして、

いつの間にか生徒会全員は黒い箱の中にいた。

(何で・・・)

「何をする!?!」

「邪魔をされると厄介なんでね」

「来い紅玉!」

川井の影からアスラ・マキーナ機巧魔神は現れなかつた!?!。

「無駄ですよ。その中は別世界。話ができるが機巧魔神は出せませ  
ん」

「何が目的だ!」

「私はね、欲しいんですよ。他人の心を覗く力が！。だから、生徒会に2つの能力者の使い魔は暴走するつとトウター言う嘘まで流した」  
（この人さえいなければ・・・。私と錬君は何事もなくいられたのに！）

どうしようもない怒りがこみ上げてくる。

「何！？」

「いくらなんでも使い魔は暴走トウターしませんよ。使い魔なんですから」

「お前、まさか・・・」

「私は悪魔を殺して殺した者の能力を吸収する儀式を行う！」

（私を殺して・・・。私の能力を吸収する・・・）

「儀式には3時間かかるからな。邪魔されたくないんだよ」

「貴様！」

「すまないが死んでもらうよ」

「い、いや！」

（！？）

能力を使おうとしても目が緑色にならない・・・。

「君を縛ってる縄は対悪魔製で触ってることで悪魔の能力は使えなくなるんだよ」

「そ、そんな・・・」

涙がこぼれる。

（誰か・・・助けて・・・）

自分が言い出した事なのに死ぬのが怖い。

「おい、お前ら、儀式が終わるまで俺を守っている」

坊主の格好をした悪魔が言つと奥からたくさんの人が出てきた。

「じゃ、儀式を始めよう」

私は、ここで死ぬんだ・・・。

そうして、涙が止まらないまま儀式が始まってしまった。

そのとき

『ドン』

鉄の扉の方から音が聞こえた。

高校生生活と自分より大切な人（静音）（後書き）

次回は錬に戻ります。

生徒会で自分の無力さをしった錬は今どこに！？

友の思いは何時か（前書き）

生徒会室で気絶した俺は自分の無力さを憎んでた。

## 友の思いは何時か

俺は目を覚ました。

あたりを見渡すとそこは自分の部屋だった。

(俺は第一生徒会で気を失ったはず・・・)

「目が覚めたか？」

扉が開いて声が聞こえる。

「誰だ？」

入ってきたのは岡崎だった。

「友達の名前を忘れるなんてな」

「岡崎なんで・・・」

「言つたら、逃げるときは言えって」

(何言ってるんだこいつは・・・)

「何も言わないから入ってみたらお前しかいない」

「そつだ、黒月は！」

「入ったときはお前だけ、場所をかえたんじゃないか？」

(あいつらなら校内で何かしようとは思わないはず・・・。ならどこだ。どこで・・・)

考えてるとき岡崎は小説を読み始めた。

「で、黒月がどうしたんだ？」

「黒月は俺のために死のうとしてる・・・」

「そりゃそつだろうな、第一生徒会に2つ能力者の悪魔ドクターの使い魔は凶暴って情報ができてるからね。殺そうとするね」

岡崎はすらすらと言い出す。

(こいつ、一体何者・・・?)

「俺は悪魔だからな」

「嘘だろ・・・」

「本当さ、能力は闇の力を召喚できる。能力を使つと闇の力が俺に流れ込む」



「そつだ。こんな話してる場合じゃない……」

「お前、傷がある。あんま動くな。それまでこれでも読んでろ」  
岡崎は自分が読んでた本を閉じて俺に投げる。

「じゃ、俺は帰るから」

岡崎が帰ろうとする。

「黒月を探すのを手伝ってくれ」

俺は頭を下げた。

「無理だ」

岡崎は言った。

「なんで……」

「見つかつてる人を探すのは矛盾してる」

「え？」

「本はいろいろ書いてるんだよな」

そんなことを言っつて岡崎は消えた。

俺は受け取った本を開く。

1ページ目にしおりがあつてしおりにこう書かれていた。

『ちくわ洛芦和高校の倉庫の中』

(岡崎あいつは何を考えてるんだ……)

俺は家から出ようとしたとき玄関に白翼アスラ・マキナ(悪魔や機巧魔神の攻撃を無効化する刀)が置かれていた。

柄には血がついていた。

「まさか、あいつ……」

白翼は俺以外の人が持つと熱を放ち拒絶反応がおこる。

(岡崎はこれと俺を逃がしてくれたのか……)

白翼を持って能力で消す。

「ありがとう」

ここにいない人に礼を言つて家を飛び出す。

学校にはすぐについた。

倉庫を見つけてあけようとするが

(あかない!?)

中から鍵が閉まってるようだ。

俺は思いつきり素手で鉄の扉を殴った。

『ドン』

鉄でできてる扉が少しへっこむ。

もう一度殴る。

『ドン』

少しずつへっこんでいく。

俺の手は血が出てくる。

それでも何度も殴る。

『ドンドンドン』

やがて、扉は外れた。

「黒月！」

俺は倉庫の中で黒月が椅子に縛られてるのを見つけた。

「な、なんだお前」

「紅夜 錬！？」

洛芦らくろ和高校わこうの学生じゃない人と黒い箱の中から川井の声がした。

そして、黒月はこっちを向いた。

黒月は泣いていた。

「錬君……」

いつもより弱弱しい声で黒月が言った。

「紅夜」

「川井会長どういうことですか？あなたたちがそこに入ってるって事が良く解らない」

川井は簡単に説明した。

「なるほど、能力を取り除ける坊主を呼んだら裏切られてその中に入って、坊主は能力を奪うために嘘の情報を流して黒月を殺すつもりなのか……」

「そうだ」

「会長はそこから出たら黒月を狙いますか？」

「いや、無害だということが解れば君たちには何もしない。やるこ

とは生徒の安全を作る」

「そうですか、解りました。来い、紅翼<sup>コウヨク</sup>」

俺の手が真剣をつかむ。紅翼は炎のように真っ赤な刀で刃が反対についてる逆刃刀。

そして、紅翼で黒い箱を斬る（逆刃刀なので斬るって言うっても自然と峰打ちとなり人を斬っても人は死なない）

紅翼に斬られた黒い箱は消え中から生徒会のメンバーが出てくる。

「お前どうして？」

川井が聞く。

「雑魚をよろし」

そういつて俺は飛び出した。

「行かせねえよ」

そういつて学生じゃない集団が俺を囲む。

「来い、紅玉<sup>ルビ</sup>」

後ろから紅玉がでてきて援護してくれる。

「坊主！」

俺はジャンプして坊主に斬りかかる。

坊主はそれを見て避けた。

「待たせたな黒月。大丈夫か？」

「・・・うん」

泣きながら答える。

「もう大丈夫、安心しろ」

「うん」

泣き止まないが返事はする。

「かっこつけてるんじゃないー！」

坊主が持ってた棒を2つに分けて中から刀身が出てきた。

「仕込み刀か・・・」

坊主は俺に切りかかるが

「でも、遅い」

簡単にかわして坊主を蹴る。

坊主は壁まで吹っ飛んだ。

飛んだ坊主を追って俺が走る。坊主が壁に当たった瞬間俺が紅翼で腹を斬る。

「ぐあ」

「安心しろ。殺しはしないし手加減もした」

逆刃刀なので斬るって表現しても実際は斬れてません。

坊主が気絶したのを確認して黒月の座ってる椅子に向かって刀の刃の方で縄を斬る。

そのころには学生以外の人も全員生徒会に捕まっていた。

「錬君」

「黒月、無事でよかった・・・」

（本当によかった・・・）

「私・・・私、怖かった」

黒月が抱きついてくる。すごく恥ずかしい・・・。顔も真っ赤になる。

「さて、黒月 静音君」

川井が言い出す。

「君の危険性はなかった。今までの行動を許してもらいたい」  
生徒会のメンバー全員が頭を下げる。

「別に、いいですから。頭上げてください」

あわてて言う黒月。

「さて帰るか・・・」

こうして長い1日が終わった。

友の思いは何時か（後書き）

黒月を守れた鍊

次回は未定

これまだまだつづげれるかな・・・

## 暇な時間に生徒会と恋愛

入学して初めての学校生活で生徒会に行き、足と肩を拳銃で打ち抜かれ、初めての高校の友達が悪魔であることを知り。

学校の倉庫の中で死闘をした。俺、紅夜 錬は高校生活2つ目を家で過ごすことになった……。

「って、なんでだー！」

昨日のことを考えていると叫んでしまう。

俺は拳銃で撃たれたのに学校まで全力疾走して、倉庫で戦ったので体がボロボロなのである。

なので、俺は1週間の自宅学習になった。(第一生徒会のせいでもあるので公欠してくれた)

「動かなければ、お前なら一晩で直せたのにな」  
学校の帰りに俺の家に寄った岡崎が言う。

「だから、あんま動くなって言ってやったのに」  
「普通行くだろ！。友達の命が危ないんだぜ？」

大声で言うと、台所から泣き声が聞こえる。

「わ、私がいなければ……。私がいなければ錬君が怪我することもなかったのに……」

黒月だ……。

黒月も学校の帰りにお見舞いとして来てくれた。

黒月は自分のせいでこうなったことになったと思っていて「何かやらせてください」と言い出したのである。

はじめは断っていたのだが……。

断ったときに黒月は涙を流して「私は迷惑ばかりかけていてなにもできないんですね……」つと言われて手伝いしてもらってる。現在は俺のためにおかゆを作ってくれてる。

「いや、黒月のせいじゃないから！。全然違うから！」

けが人の俺がどうしてみんなにこうも気を使わないといけないのだ

ろうつと思っただら負けのような気がした。

「それにしても、俺が行かなくても解決するとは思ってなかったよ」「なにか？。俺が行ってなかったら岡崎が行ってくれてたのか？」

「ああ、どっかの誰かさんの刀持ってきたら火傷して皮膚が焼けて血がどばどば出てきてそれを止めたら即行こうと思ってたのに」「どうやら岡崎も行くようだった。

「っで、火傷は大丈夫なのか？」

「ああ、闇の力で直した」

「俺の傷も直してくれよ・・・」

「お前の刀と同じで俺以外が闇に触れるとダメージしか出ないぜ。今のお前なら一発で殺せる」

「そりゃひで・・・」

「つま、安静にすることだな。来週にはでてこれるんだからよ」

（1週間も何もしなかったら体が鈍るな・・・。みんな帰ったら筋トレだけでもしよう）

「筋トレとか体を動かすこと絶対禁止な」

笑顔で岡崎が行った。（こいつ俺の心が読めるんだか・・・）

「じゃ、俺帰るよ」

「もう帰るのかよ」

「いや、黒月さんと二人っきりにしたほうがいいかなっと思いまして」

岡崎が大声で言った。

『ガシャン』

台所の方で聞こえた。

（こいつわざと大声でいって聞こえるようにしたな・・・）

「まあ、明日小説10冊ほど持ってくるから、運動はするなよ」

「はいはい、解りました」

「黒月さん。もしも、錬が変なことやろうとしたら言ってくださいね」

それを聞いて俺の顔は真っ赤になる。

「俺を何だと思っただんだ!？」

「黒月さんの未来の契約者」  
コントラクター

(契約つてことは……。黒月と性的な……。わぁー!止まれ。  
俺の思考回路!)

俺は頭を壁にぶつける。

「じゃね〜」

岡崎は帰った。変な空気にするだけして帰りやがった!

「れ、錬君……」

黒月の顔がひよっこりと扉から現れる。

岡崎の話が聞こえていたのか顔は真っ赤だ。

「どうした?」

「あ、あの……。ありがとうね。昨日のこと……」

「ああ、別にいいよ」

「か、かつこよかったよ」

黒月の笑顔を見るとドキッとしてしまう。

「いいよ。俺が好きでやったことだから」

「それでも、嬉しかったです」

そっぴいなながら部屋に入ってくる。

「そうか……。それはよかった」

「錬君だったら、私は……」

俯けながら言った。黒月の顔がすごく赤い。

(ちよつと待て、何だこのムードは……。もしかして……)  
俺は少し期待をする。

「私は……」『ピンポン』

チャイムが鳴った……。

「私が出ますね」

顔を真っ赤にした黒月が玄関に行く。

俺は緊張感がなくなったのかため息をついてしまう。

(黒月は何を言おうとしたのだろう……。気になる……)  
次に入ってきたのは川井だった。



「やあ、紅夜君」

「お久しぶりです。川井会長」

俺は入ってきた川井をにらみつける。

「おっと、戦いに来たんじゃないのにその目つきかい？」

「こうなったのはあんたらの責任ですからね」

「それにかんしては悪かったと思う。嘘の情報だとわからずにいたから。その分君の休んでる1週間は公欠になっている」

「それはもう聞きました」

「それで君に頼みたいことがある」

「突然ですね・・・」

「第一生徒会に入ってもら・・・」

「嫌です」

言い終わる前に言っただけでやめた。

「今回見たいなことでもみんなに心配かけるわけにもいかないし。校則を取り締まるのも嫌です」

「安心してくれ。君は大きな事件などがあつたときにだけ動いてもらう」

「たとえば今回みたいなことですか？」

「ああ、そうだ」

「嫌です」

「なんでだ」

「何で俺が戦わなきゃいけないんですか!？」

「君と黒月君のためでもあるんだよ」

黒月が後ろにいることも気にして会長は小声で言った。

「どういうことですか？」

俺も小声になる。

「君の超能力に彼女の心を見る能力。すばらしい物だからこれからも狙われるかもしれない。だから、第一生徒会に入って身を守ることも大切じゃないかな？」

（確かに、俺はともかく、黒月はこれからも狙われるかもしれない。

・・・その情報を手に入れやすくするなら第一生徒会に入っておくのが正しいかもしれない)

「すぐには言わない。考えておいてくれ」

「そうですか」

「まあ、第一生徒会は生徒全員の見方だからな」

「それはありがとうございます。拳銃で撃ってくれなかったらもつと感謝できたのにな」

最後に会長に痛い言葉を言っておいた。

「それではいい返事を期待してる」

会長は出て行った。

黒月が不安な顔をしてこちらを覗いていた・・・。

## 暇な時間に生徒会と恋愛（後書き）

黒月と自分の身を守るために生徒会に入ることを進められる。  
どうする、錬！？

決断そして友の涙（前書き）

自分と黒月の身の安全のため第一生徒会に入ることを進められる鍊。  
どうする鍊！？

## 決断そして友の涙

(さて、どうしましょうか・・・)

俺は迷った。第一生徒会に入るかどうか決めなきゃいけないのだ。

「れ、錬君」

黒月が話しかけてくる。

「どうした？」

「わ、私のことは気にせずに分らしくいてくださいね」

(どういう意味だ？。話が聞こえてたのか？)

「まあ、無理だな」

「え？」

「大切な友達を見捨てて生活できるほど、俺うまくできてないから」

「もしかして・・・」

「黒月を守るためだったら俺は第一生徒会に入るぞ」

「そんなこと・・・」

「お前が望んでなくても俺がやるんだ。お前だって言っただろ？。

俺らしくしてくださいって、俺は俺らしくいるんだよ」

「無理しないでください！」

「大丈夫。無理はしていない」

「な、なんで私のためにそこまでするの？」

泣きそうな顔で、聞いてきた。

「決ってる。黒月お前が大切だからだよ」

俺が言い終るつと黒月は泣いた。

「ありがとう。グズ。ありがとう」

「俺は俺らしくいないとだめなんだよ」

こうして、俺は第一生徒会に入ることになった。(まだ、報告をし

ていないので正式に入っていない)

「私も帰るね」

泣いた顔で玄関に向かう。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫だから・・・」  
そして、黒月は帰った。

俺は小説を読んで黒月の作った。おかゆを食べた。  
美味しかった。

(黒月って料理上手だったんだ)  
食べてすぐに眠った。

深夜、目がさめた。殺気を近くで感じたからだ。  
そして、すこし起き上がると。

「バリッ！」

目の前で窓がわれたのだ。われた窓から人が入ってくる。

「貴様さえいなければ・・・私の計画はうまくいっていたのだ！」  
昨日の坊主だった。

その手には仕込み刀を持っている。

(こいつ、作戦失敗した復讐に俺を・・・)

紅翼を取り出すが体を動かそうとすると激痛が走る。

「死ねー！」

(やばい。避けられない！)

体を動かそうとしても言うことを聞いてくれない・・・

「ああ、やっぱりこうなつたか・・・」

割れた窓から声が聞こえる。

「だ、誰だ！？」

刀を止めて坊主が聞いた。

「誰だって、岡崎ですけど？。あ、鍊おじやまするよ」  
入ってきたのは岡崎だった。

「どうしてここに？」

突然入ってきた岡崎に驚いて質問する。

「詳しいわけは後だ。坊主をなんとかする」

坊主と岡崎は両目を緑色に変えた。

(悪魔同士の戦いが始まる!?)

黒い部屋を作る能力と闇の力を召喚するって言った能力の戦い・  
。

坊主が妖精を出したが、岡崎は能力を使ってるはずなのに何も変化がない。

「何も召喚しないなんてなめているか？」

「召喚したさ、見えないだけだ。召喚したのは闇だからな」

そして、岡崎は何もしてないのに坊主は岡崎のいる方に引っ張られた。

引っ張られる方向に黒い障害物を作って坊主は自分を止めた。

「こんな風に引力で敵を引っ張ったりできるし」

次の瞬間。坊主は岡崎から遠ざかる感じに岡崎のいる方向と真逆に飛ばされる。

さつきと同様に、飛ばされる方向に黒い障害物を作る。

「斥力も使える。まあ、闇の力が多い夜ならの話だけだな」

話し終わると岡崎のいた場所に黒い箱ができていた。

「油断したな！」

「油断?。してないから」

黒い箱の中に入ったと思っただ岡崎は坊主の隣にいた。

「なぜだ!。確実にブラックルーム(黒い箱)に入れたはずなのに」

「入ったのはドッペルゲンガー。俺の影だ」

よく見ると月明かりで坊主の影はあるのに岡崎の影はない。

「ドッペルゲンガーは俺と同じ身体能力で物にも触れて話もできる。便利だろ？」

「お前、いくつも能力がつかえるのか!？」

「いやいや、俺は自分の体内に闇を召喚して闇を使って戦ってるだけだ。少し特殊だから解りにくいかな」

「そんな、馬鹿な！」

仕込み刀で岡崎を切ろうと斬りかかる。

「俺の能力は使い道がたくさんあるんだよ!」

岡崎の手が黒くなっていくと、言うより岡崎の手の周りに黒い何かがまとわりついてる。黒い手に刀が当たった。

『ガチン』

刀は鉄と鉄を当てたような音になった。

「俺の闇を使うことで俺は強くなる」

そのまま、坊主の腹にめがけて黒い手で殴ると一撃で坊主は倒れた。

(見えなかった。殴るときの手の動きが)

「闇をまとわせることで身体能力も一気に上がる」

(強い。強すぎる……)

岡崎は強かった……。

「さて、何でここにいるかってはなしだったな？」

「ああ」

「ランニングしてたら強い殺気を感じたから来た。それだけのこと」

「それはそれは、偶然で怖いね」

「じゃ、こいつを第一生徒会につきだしてくるよ」

「あいあい」

「窓、壊れたから別の部屋で寝ないと風引くぞ」

「あいあい」

「じゃ、また明日」

「ありがとうな」

岡崎は窓から出て行った。

それから俺は布団を移動さして眠った。



## 決断そして友の涙（後書き）

原作と違い。第一生徒会≡悪魔の敵ではなく。第一生徒会は生徒全員の味方なので悪魔を守ることには何の問題もないっという設定になっています。

## 自分の気持ちと友の気持ち

翌日、

俺は起きて昨日のおかゆを食べる。冷めていても美味しかった。俺は黒月たちが来る前に片手片足でやれる筋トレをやった。

(やっぱり、体鈍っているな)

結構な時間筋トレをした。

そろそろ、学校が終ってお見舞に来るだろうから筋トレをやめる。

(汗をかいたからタオルで拭かないとな)

「は、はい、タオルです」

タオルが差し込まれる。

「お、ありがとう」

お礼を言う。

・・・

タオルが差し込まれた方を見る。

黒月が立っていた。

汗を拭いているが、変な汗が出るのを感じた。

「お、おはよう・・・」

俺が先にあいさつをする。

「おはようございます」

笑顔で言ってるが、怖い・・・。

「錬君」

「はい」

「絶対安静なんですよね？」

絶対に怒っている・・・。

「は、はい」

「錬君は安静にしないとイケません!!」

珍しく黒月が怒った。

「ごめん・・・」

「錬君は安静にしてないと、わ、私……」

黒月は涙目だ。

「解った！。安静にしてるから！」

「私のせいでごめんね……」

「黒月お前のせいじゃない！。お前に会えてうれしいしお前つと入ると楽しいだから泣かないでくれ！」

「錬君……」

そして、俺はふとんに入った。

泣きやんだ黒月が聞いてくる。

「電話借りてもいい？」

「いいよ」

黒月はどこかに電話をし終わると、

「れ、錬君」

戻ってきた黒月はいつもの黒月だ。

「どうした？」

「今日から、と、と」

「と？」

「と、泊まって良い！？」

（ああ、泊まっていくのか……。つて！？、ええ！？、一応、俺春期の男の子ですよ）

「お、俺は別にいいけど、黒月の親が許可するのか？」

顔が真っ赤なのが解る。黒月の顔が見れない。

「許可はもらいました」

（良いのか！？。おっさん！？）

「じ、じゃ、錬君が、直るまで泊めてもらいます」

「ああ」

こうして、黒月が泊まることになり。

順調に体は直った。

黒月に筋トレをしているのを見られると涙目だ目になるのには困った。

「錬君も明日から学校に行けるね」

私服の上にエプロンを着ている黒月が皿を洗いながらいった。

「ああ、これも黒月のおかげだ」

俺の肩も足も完治したのだ。

「いえいえ」

笑顔で振り替える黒月。

(黒月は何を着てもキレイだな)

俺は誰かをキレイっと思うことはまったくなかった。が黒月っとなつて胸がドキドキすることがおおくなつた。

(こついつのを恋愛っていうのかな?)

自分は黒月が好きなのだろうか?

そんなことを思うことが多くなつた。

「ねえ」

突然聞かれて驚くが冷静にいる。

「どうした?」

「錬君は昔どんな子だったの?」

「俺か?」

「うん」

(昔の俺か)

「俺は、子供のころに森に捨てられていた」

「え!」

突然のことに驚く黒月。

自分の気持ちと友の気持ち（後書き）

次回

錬の過去の話。

まだ、4月終わらないんだよな・・・。

## 森の中での出会い（前書き）

黒月が突然、俺の昔について聞いてくる。そして、俺は森の中に捨てられたと言っ。

## 森の中での出会い

俺は昔、森に捨てられていた。刀と共に……。

山の中に住んでいた。紅夜鬪夜「こじつとやじつと」は狩りをしに外に出かけていた。

「森を荒らす猪が現れたのはこの地域のはず……」

鬪夜は森を荒らす猪を探していた。

『ズドン！』

遠くで木が倒れる音がした。

「向こうか」

音のしたほうに急ぐ。

到着した鬪夜は目を疑った。

5歳くらいの子供が自分の何倍も大きい猪と戦ってるのだ。

「うわあー！」

意識があるのか不明な顔で戦う。

子供の手には刀がある。

元は白かったのだろうが血で真っ赤になっている。

よく、見れば猪には刀できられた傷がある。

（このガキ、何で猪と戦ってるんだ！？。それに刀をなぜ持ってる！？。どれだけ力があるんだ！）

森の中に子供がいる時点でおかしなことだが猪と戦っているのもまたおかしいことだ。

しかも、猪にはたくさんの傷があるのに子供に傷1つ見当たらないのだ。

（まさか、森を荒らしていた猪が子供に負けるのか？）

猪は倒れた。それと同時に子供も倒れた。

「大丈夫か！？。しっかりしろ！」

子供に駆け寄って話しかける。

子供を家に連れ帰るため子供と刀を持つ

刀を持つと

(!?)

手が火傷した。

(このガキはこんな物を振り回せたのか!?)

不思議な子とともに家に帰った。

それから、子供を家に連れ帰り看病する。

三日後、子供は目覚めた。

子供は記憶を無くしていた。この子に錬つと名づけた。

それが紅夜錬の誕生だった。

錬を育てた。それと同時に錬の親を探した。

親は見つからなかった。こうして、俺が親として育てた。鍛錬を続けさせて強い肉体作りをした。

錬には不思議な力があつた。素手で触つた生きていない物を消すことができ消した物を取りだすこともできる。そして、初めから持っていたのは白翼と紅翼一(両方とも鬪夜が名づけた)だった。

この、2本の刀は錬以外を嫌う。錬以外の者が持つとやけどをするくらい熱くなる。

2本の鞘にはこう書かれていた。

「すべてを無力とする力」

意味がわからなかった。

自分にも物心ついた。

父さん(鬪夜)から自分が本当の息子じゃないことも、自分には不思議な力一(超能力)があることも、2本の刀のことも聞いた。

それでも、鬪夜は本当の息子のように育ててくれた。でも、鍛錬は辛かった。

小中学校は一匹狼情態だった。家に帰っても小説を読むか体を鍛えることしかしていなかった。

そして、今高校生になった。



「これが、俺の昔だな」

「通り、自分の過去を話した。（父さんから聞いた話だけど）」

「そんなことがあったんだ・・・」

黒月は意外な話に驚く。

「まあ、鍛えたおかげで、誰かの役に立てるからな」

黒月は黙った。自分のせいで迷惑をかけてるっと思ってるんだろう。

「俺は、誰かのためにかをするのは好きだよ。嫌いなのは自分が何もしないせいで、友達が傷ついてることだな」

黒月も顔を上げた。

「私は、錬君の邪魔になつてませんか？」

真剣な目で見つめながら聞かれた。

「バーカ、邪魔になつてるんだつたら、すぐに追い出してるよ。お前も俺にとつては大切な人なんだよ。だから、もう死ぬとかいうんじゃないぞ」

黒月は涙を流しながら「ありがとう」つつぶやいたように見えた。その後、いつものように別々の部屋で寝た。

## 森の中での出会い（後書き）

怪我を治した、鍊は高校生活2日目を送る

俺の高校生活って一体・・・(前書き)

体が完治した鍊、これから、高校生活が始まるが・・・

## 俺の高校生活って一体・・・

朝日と共に俺はおきた。

まだ、黒月は起きていないようだ。

(黒月にはいろいろ世話になったから俺が朝飯作るか)  
台所に入り飯のしたくをする。

とりあえず、目玉焼きと味噌汁を作った。

ちようどできたときに黒月が起きて来た。

「おはよう。黒月」

「おはようございます」

「食事の準備ができてるから、着替えて座っていてくれ」

「あ、はい」

黒月は部屋に戻っていった。

ご飯の準備を終わらせる。

終わって少しすると、黒月が入ってきた。

「準備できてるから食べよう」

「はい」

「いただきます」

二人はご飯を食べ始める。

食べてると黒月が驚いて言った。

「おいしいです」

「それはよかった」

「料理できるんですね・・・」

「ものすごく驚いてるな・・・」

「力は強いですけど料理もできるなんて思ってませんでしたから  
苦笑しながらいった。

「まあ、森の中で住んでいたから親父の帰りが遅いときとかは一人  
で作って食べていたからな」

「そうなんだ」

「だから、安心して食ってくれ」  
「あ、はい」

それから、ご飯を食べ学校に向かった。  
家を出た瞬間、岡崎を見つけた。

「よう、岡崎」

「おはようございます」

「やあ、錬に黒月夫婦」

・・・。一瞬で岡崎の近くに入り思いつき殴る。  
「危ないな」

俺の全力のパンチの両手で受け止める。

「まあ、怒るわりに顔が真っ赤でうれしそうだよ。錬」  
相手にしていると疲れそうだ・・・。

「さて、高校生活2日目行くか」

「彼女と一緒に登校いいね」

(俺は岡崎を無視するぞ・・・)

「彼氏との登校をしている気持ちはどうですか？」  
おちよくる相手を変えた岡崎。

黒月は

「え、か、彼氏ってれ、錬君のこと？」

(すごく、動揺してるよね!?)

「錬以外に誰がいるんですか!」

「れ、錬君とわ、私が・・・」

ボン・・・

黒月が顔を真っ赤にして倒れた。

「ちょ、黒月しっかりしろ」

倒れた黒月を見て驚く。でも、倒れてる黒月はどこか幸せそうな顔  
をしている。

それから、黒月をおんぶした錬が学校に行って保健室で寝かせた。

(初日も、大変だったが、二日目の朝からこれって俺の学園生活ど  
うなるんだ!)

俺の高校生活って一体・・・(後書き)

二日目の朝からこの調子で大丈夫だろうかつと思いつつながら書く作者です。

はつきりいつて4月が無駄に長すぎます。5月は1話か2話で終わらせたいと思ってますがそれもうまく行くか解りません^^;

## 人の気持ち

教室に戻って椅子に座っていると視線を感じた。

視線を感じたほうを見てみると何人かがこちらを見ていたがすぐに目をそらす。

「どうした？」

隣で岡崎が聞いてきた。

「なんか知らないが視線を感じる。たまに殺意も」

思ったことをはっきり言うと

「ああ、黒月をおんぶして登校の話が広まってるんだ。うらやましいとか殺してーとか思う奴もいるだろう」

「マジかよ」

「黒月は美人だからな」

(確かに美人だ。だから、一目ぼれする奴とか多そうだな・・・)

「まあ、心配するな」

「ん？」

「黒月はお前のことを結構思っているって俺は予想してるから親指を突き立てて岡崎が言った。

「何を心配してるんだ俺は？」

「ん？黒月が他の男性に取られないかの心配してるんじゃない？」

「ば、バカ言え」

「そんなこといって顔は真っ赤だよ。口は素直じゃないけど・・・」

言い終わらせる前に殴りかかった。

「危ない危ない」

岡崎が両手で俺のこぶしを受け止める。

「反応良いなお前」

「まあ、人間じゃないからね」

そういえば岡崎は悪魔なんだ、悪魔は人間より強い身体能力がある。

そんなことをしていると先生が来て授業が始まった。

「作者からのお知らせ、授業風景まで書く気はぜんぜんないので基本飛ばします」

授業が終わり昼休みに入る。

「学食に食べに行くけど、鍊もいくか？」

岡崎が誘ってくれる。

「いや、弁当あるし行きたい場所もある」

「彼女のところですか？」

真剣な顔で岡崎が聞いてきた。

「お前な、なんでそういう方向ばかりにいくんだ？」

「お前の恋を応援してるからだよ。まあ、食ってくるよ」

そうして、岡崎は教室を出て行った。

(さて、黒月の様子見てから弁当食べるか)

保健室に向かう。

「失礼します」

そついいながら保健室に入る。

「ああ、紅夜君ね。黒月さんは今さつき起きたところだよ」

保健室にいた先生が言った。

「私、弁当食べてくるからいいとももらえる？」

「解りました」

「弁当ここで食べていいから」

「了解です」

そして、先生はいなくなった。

「黒月、大丈夫か？」

ベットの上で寝込んでいる黒月をみた。

「あ、大丈夫です。午後からは授業に出れます」

「そうか、それは良かった」

「心配かけてごめんね」



「いやいや、昼飯はどうするんだ？」

少し疑問だったんで聞いてみた。

「もう、大丈夫なんで学食で何か食べよう」と

「じゃ、こいつやるよ」

そういつて持って持ってきた弁当を黒月に差し出す。

「え？」

「朝、お前の分も作つといたからよ」

(実は渡したのは自分の分でそれを渡したら弁当がなくなるのは現実だ。それでも、黒月に元気が出るように俺の作ったスタミナ料理入りの弁当を渡した)

「いいの？」

「渡すために作ったんだから良いに決まってるだろ」

「でも、錬君の分は？」

(さすが黒月弁当が1つしかもって来てないことに気づく)

「ああ、授業中に食った」

適当にうそをついた。

黒月は何か考えて、

「じゃ、いただきますね」

「ああ、どうぞ」

黒月は弁当を受け取った。

そして、先生が戻ってきた。

「紅夜君ありがとうね」

「あ、はい。じゃ、俺は教室に戻るよ」

黒月にそう告げて俺は出て行くこととする。

「あ、ありがとう」

そんなことを黒月が言ったように聞こえた。  
教室に戻ると

「やべー、腹減った」

机に倒れこむ俺がいた。

「本当にバカだなお前」

隣に座っている岡崎が言った。

「ああ、バカだよ俺は」

「そんな、バカにプレゼントだ。ほら」

岡崎がそういつて俺に何かを渡した。

渡されたものはアンパンだ。

「こうなるだろうとおもって買ってきてやったよ」

「いいのか？」

「さっさと食べ。先生か黒月が来たら食べなくなるだろ？」

そして、俺はすぐに食べ始めた。

（黒月が来て食べてるのを見られると、自分のせいではじめそうだから）

「そういえば、第一生徒会の申し出どうするんだ？」

食べてる最中に岡崎が聞いてくる。

俺はアンパンを食べ終わらせてから返事を返す。

「お前、情報はやいな・・・」

「まあ、いろいろとね」

「とりあえず、悪魔関係のことだけすればいい条件だし第一生徒会に入ろうと思ってる」

「そうか、じゃ、俺と・・・」

岡崎が言おうとしたそのときに先生と黒月が教室に入ってきて授業が始まった。

放課後、

俺は黒月から空になった弁当を受け取って「ありがとう」「っと言われた。

岡崎が何か言い出そうとしてたのを思い出して聞こうと思ったら岡崎はすでにいなかった。

「錬君、第一生徒会に行くの？」

「ああ、入りに行かなきゃいけないからな」

「私のために入ろうと思ってるならやめても良いんだよ・・・」

「何度言われても答えは変わらないよ」

「・・・」

黒月が何か考えこむ。

「それじゃ、私も第一生徒会に入ります」

「え!？」

「錬君ばかりに苦勞をかけていただけません。」

「いや、そんなことに氣を使わなくても良いけど」

「私がいたら迷惑ですか・・・」

黒月がなみだ目で言ってきた。

「まあ、俺は良いけど川井会長がなんていうやら・・・」

「うう・・・」

今にも泣きそうだ。

「本当に入ろうと思ってるんだな？」

黒月がうなずく。

(はあ、なんだか厄介なことになってきた)

「まあ、俺からも頼んでみるから、泣くなよ」

「は、はい」

それでも泣きそうな顔だ。

こうして2人は第一生徒会に向かった。

人の気持ち（後書き）

とくになし！

## 真実

第一生徒会室の扉の前まで来た。

「黒月はここで待ってる」

「え？」

「いきなり来たら驚くだろ。だから、先に話をつけておく」

「はい」

そして、黒月を廊下に残して第一生徒会室の部屋の扉を思いっきり蹴った。

『ドン！』

蹴られた扉はいきよいよく開いた。

「ひつれいします。1 - 6の紅夜 錬です」

生徒会にいた人は驚いている。なぜなら、一週間前に戦った奴が扉を蹴って入ってくるのだから。

「やあ、錬君。考えはまとまったかい？」

川井は冷静に話しを始める。

「ええ、決めましたよ」

「なら、廊下にいる黒月君も入ってきたらどうだ？」

川井は黒月が廊下にいることを何時知ったのだろう。

「黒月、入ってきていいらしいよ」

「え、はい」

黒月も生徒会室に入ってくる。

「なんで、わかったんですか？」

「なんとなくだよ」

笑顔でそんなことをいうと話を戻した。

「それで、大きな事件だけを手伝ってもらつつというこちらの要望にはこたえてくれるのかな？」

「ああ、大きな事件のこのみを手伝う変わりにいろんな情報をもらう。そう思っているんですよね？」

「そうだよ。いろんな情報を渡そう。そして、黒月君はどうするんだい？」

俺との交渉が1分足らずで終わり黒月の話が変わる。

「私は、錬君と同じで手伝いますので情報をください」

「いいでしょう。それでは、呼ぶときは基本的に2人一緒という形で」

「あ、はい」

黒月が同意し

「わかりました。それじゃ、話も終わっただんで帰りますよ」  
俺が帰ろうとすると

「もう、帰るのかい？」

「ええ、大きな事件はないでしょ？」

「今はないけど、紹介しとくメンバーがいるよ」

「別にどうでもいいんですけど」

「へえー、俺はどうでもいいのか」

俺の真後ろから声が聞こえた。

(気配も何も感じなかったぞ……。でも、聞き覚えのある声だったきが)

「お、岡崎君!？」

「やあ、黒月に錬」

振り向いてみると岡崎がいた。

「岡崎、なんでお前がここに・・・」

「言っただけだったけど俺は第一生徒会の一人なんだよ」

「そんな馬鹿な!俺が入ってきたときには俺が呼ばれたときにお前は  
はいなかったはず」

「ああ、あの時ね。あの時は食堂で飯食べていた。生徒会室きたら  
お前が倒れていてびっくりしたよ。」

「じゃ、何で黒月がつかまったとき俺の家に行った？」

「お前の家を知ってる人間が連れて帰ったんだ。そして、能力消し  
の話も聞いていたからお前が何してもよかったからな。まあ、能力

消しも使い魔<sup>ドウター</sup>も嘘なんて知らなかったがな

「……」

「聞くことはそれだけか？」

「ああ、それだけだ」

「とりあえず。お前と黒月に情報をあげるのも、大きな事件の時呼び出すのも俺の仕事になってるからこれからもよろしく」

「ああ、よろしく」

「よ、よろしく」

「つと、言っても弱みを握ってどうこうするとか情報を与えないとかしないから、基本今までどつりに接してくれ」

「言われなくてもそうするよ」

つと言いながら俺は岡崎の顔を殴ろうとする。

「そうそう、いつもと同じように接してくれればいいよ」

つと、言いながら俺のパンチを受け止める。

「じゃ、俺は帰るよ」

「ああ、俺はこれから生徒会の雑用とかやるから」

「あ、待ってください私も一緒に帰ります」

そして、俺と黒月は帰った。

これから、第一生徒会メンバー（仮）として高校生活をおくる。

## 真実（後書き）

これで4月終了です。

今回の話は短いってところは見逃してください^^;



## 覚悟と約束

時はあつという間に過ぎていき5月に・・・

俺と黒月は生徒会の手伝いに呼ばれることなくこれた。

岡崎からはちゃんと情報ももらっている。

黒月とはたまに買い物に付き合わされる。

俺が小説を購入しに行くときについてきて服などの買い物に付き合わされる。別にいやじゃないけど・・・。

そのたびに「デートか？」っと岡崎は聞いてくる。

まあ、黒月みたいな子が彼女だったら・・・

そんな平和な生活が続いていた。

朝、学校で黒月と会話をしていると

「錬と黒月、ちよつと来い」

そんなことを廊下から岡崎が言った。

廊下に行くと言った顔をして

「第一生徒会に行くぞ」

小声ではつきりと言う。

「マジかよ」

「え・・・」

平和はいつまでも続くものじゃなかったのだ・・・。

初めての第一生徒会の手伝いが始まったのだ。

第一生徒会室に行く

「錬君に黒月君。君たちにはじめての仕事だ」

「何をすればいいの？」

「ある場所で暴れている機巧魔神アスラ・マキナーを止めてもらいたい」

「機巧魔神って、会長の・・・」

「僕のじゃない流雅しゅうが 陰いんつと言う自分物おのづかが使う薔薇輝ローズナイトが町の不良グ

ループメンバーを襲ったのだ」

「え？」

俺と黒月が聞いてしまう。俺のような人並み外れた人間ならまだしもただの人があんな化け物と戦えるはずがない。

「それで負傷者30名全員が全治1ヶ月以上の怪我だ」

「ひ、ひどい・・・」

黒月が言った。

「しかも、その場所は今度の校外学習で行く場所だ・・・。そして、僕、王鈴君、紅夜君、黒月君、岡崎の5人で出る」

「その間の出席はどうなるんですか？」

「安心したまえ。公欠だ」

（そんなに公欠を使っていて良いのかなっと思ったが事情が事情なだけ何も言わないでおく）

「じゃ、とりあえず今日も公欠になっているから3時間後に校門前集合、集合しだい出発」

「・・・了解」

こうして、俺たちは準備を始めた。

とりあえず、小説5冊、着替え、食べ物（おにぎりなど）を準備した。

能力で消せないかなっと思っ荷物を入れたリュックを消そうとしたが

（やっぱり消えないか）

俺の能力には弱く多きものや重いものは無理なようだ。

こうしてリュックをかついで学校に向かう。

俺がついた時は会長だけがいた。

「会長、到着しました」

「紅夜君か」

「ひとつ良いですか？」

「なんだ？」

「薔薇輝の能力は何なんですか？」

そう、紅玉には自分の体を2000に変える能力がある。当然薔薇輝にも能力があるのだろう・・・。

「薔薇輝は時を止める・・・」

「え？」

「薔薇輝の鎖に触れた物は人間でも何でも時が止まる」

「そんな馬鹿な！鎖に触れた時点で死ぬって言うことですか！？」

「ああ、君がとまったら終わりだ」

「え？俺がつて・・・」

「君には無力かする翼があるんだろ？」

そう、俺の使う二つの刀には不思議な能力がある。それは機巧魔神の能力を無力にできること。

「君以外なら君が助ければ良いが君が止まったら終わりだ」

そんな話をしていると3人がやってきた。

「全員集合したか。それじゃ出発しよう」

こうして用意された車に乗って目的地に向かった。

車の中でいろいろな説明がされた。現地の近くの知り合いの宿屋に泊まるとか、近くの不良グループがあるので何かあったらすぐにかんすることか。

説明をされていると目的地に着いた。

「それじゃ、夜になるまで自由行動だ。でも、夜は絶対に戻って来い」

こうして解散した。俺は岡崎と同じ部屋で小説を読んでいた。

「錬はどんな小説読んでるんだ？」

「適当だな、恋愛ものから殺人もの。そういう岡崎は？」

「恋愛ものしか読まないな」

「へー。好きなんだな」

「いや、読まなきゃいけないんだ俺は・・・」

「え？」

「雄型は補完として自身が愛している者に関する記憶を失う。だから、本に出てくる物語を愛して偽りの愛を犠牲に俺は力を使い続ける」

小説をたんと読み言う岡崎。

「まさかお前・・・」

「俺は昔愛してた人を守るために能力を使ったらしい。まあ、他人から聞いた話で記憶には残っていないがな」

（岡崎は大切な人を守るために記憶を・・・）

「気にするな。俺は愛を偽ってでも力をだす・・・」

（こいつの覚悟はすごいものだ。自分をどれだけ犠牲にしても守ろうとしている）

「俺、屋根で少し風に当たってくる」

「ああ、わかった」

俺は屋根で夕日を見つめながら考えていた。

（岡崎はどんな思いで力を使い人を守ってきたのだろう・・・）

「ちよつといい？」

屋根に上るために使ったはしごから黒月が現れた。

「ああ」

「聞いたの？悪魔の力の源」

「雄型の方は聞いた」

「そう・・・」

「なあ、黒月。岡崎は何で人のために自分の気持ちを偽ってまでいるんだろうな」

「・・・」

黒月は何も言わない

「すまない。変なこと聞いて・・・」

「大切だからだと思います」

黒月が口を開いた

「・・・」

「錬君も会長さんもみんなが大切だから自分を偽ってまでも岡崎君は守ろうと思ったんです」

「そうなのかな・・・」

「錬君には自分の命に変えてでも守りたい人はいませんか？」

(自分より大切な人・・・)

ふと、思い出すのが入学式の日と高校生活初日だった。

(あの時、俺は自分の命を捨てる覚悟で飛び出していたんだな)

「いなんですか?」

黒月は興味津々に聞いてくる。

「俺が自分の命を賭けて人を守ろうとしたのはお前のためだったな」

「え?」

「入学式の日、悪魔なんて知らない俺は魔精靈サブ・ジンをみて驚いた。

本当に死ぬかも知れないのに飛び出した。高校生活初日、肩と足撃たれたことも忘れて必死にお前を助けるために俺は動いた」

話していると黒月の顔はどんどん真っ赤になっていく。

「だから、俺の大切な人はお前かな?」

「そ、そうなんです。う、嬉しいです。でも、怖くないんですか?」

「黒月は怖い?」

「もちろんです。少し間違ったら、死んじゃうんですよ・・・」

「だったら、俺はお前を守ってやるよ」

「え?」

「命にかえてでもお前を守ってやるよ」

「え、え・・・」

(・・・。やべえ、言ってから思ったが何か告白みたいに聞こえる)

「や、約束してください」

「え?あ。うん」

「錬君はどんなことがあっても死なないでください」

「難しい約束だな。まあ、なんとかするよ」

「約束ですよ・・・」

「ああ」

約束をして、いるそのとき。

「流雅 陰が現れたぞ!」

会長の声が響き渡った。

## 覚悟と約束（後書き）

錬と静音のかわした約束。

しかし、そのとき流雅 陰が現れた。これから2人の運命は・・・

## 魔神相剋者は正義を語る

「流雅 陰が現れたぞ！」

会長の声を聞き、あたりを見渡すと薔薇色の機巧魔神アスラ・マキーナが暴れていた。

「あれが、薔薇輝ロードナイト!?」

騒ぎがぜんぜんないのは時を止めて何もできなくしているのだろう。

「黒月、俺は行くよ」

俺は返事を待たずに屋根から屋根へジャンプして薔薇輝がいる方へと向かった。

薔薇輝がいる場所につくと薔薇輝から出ている鎖が建物を縛っている。

建物を見ながら笑っている奴がいた。

（こいつが流雅 陰なのか？）

「お前がこの事件を起こしているのか？」

俺が聞いてみると笑うのをやめてこちらを見て

「貴様も邪魔をするのか、貴様も！」

殺意をこめた視線がこちらに向く。

そして、俺に向かって鎖が飛んでくる。薔薇輝の時を止める鎖だ。。。

（これに縛られると確実にやられる！）

俺は後ろに飛んで回避する。

「逃がすか！」

鎖がたくさんやってきた。

（数は5本か、白翼で切っているとどれかにつかまるか・・・）  
飛んでくる鎖を回避しながら俺は考える。

「ちよこまかと厄介なやつめ」

俺を捕まえるために集中する流雅。

「どうしてお前は人を襲う！」

鎖から逃げながら問う。

「貴様に答えるつもりはない！」

(どうやら理由はあるみたいだな・・・)  
そんなことを考えてると車がやってきた。

「錬君！」

黒月が窓から顔をだす。

(黒月たちが乗っているのか)  
車が止まり4人が降りる。

「僕たちは君の行為をみとめずに止めに来た！」

「今日はうるさい奴が多いな」

鎖の1本が黒月たちに向かう。

「逃げろ！」

「もう、遅い！」

白翼を出して黒月たちを守ろうと走る。

(間に合わない!?)

「キャ・・・」

黒月が悲鳴を上げるがもう、何もかもが遅い。

黒月たち4人は鎖に捕まった。

「動くな！」

流雅が叫ぶ。

「動けばわかるよな？」

流雅の手にはナイフがあった。

「つち」

俺は足を止める。

「そつだ。それでいい」

「お前がやったことは解ってる。だから、おとなしく捕まれよ！」

「俺は捕まるようなことをしていない。俺は！、不良たちを退治している正義だ！」

(こいつは、自分が正しいとでも思ってるのか?)

「人質をとってどうするつもりだ？」



「どうもしないさ」

「じゃ、開放しろよ」

流雅をにらみつける。

「今日は手を引いてくれるならいいけど？」

(どうする……。どうするべきだ……。)

「もしも、手を引かないなら一人ずつ殺そうか」

(もし、俺が奴ならどう行動をする……。)

「手始めに、こいつからかな」

流雅のナイフの先に動かない岡崎がいる。

(……。)

「さあ、どうするんだ？」

(岡崎なら……。良いかな?)

そう思い、俺は持つてる白翼を思いっきり鎖に向かって投げた。

「な!」

手を引くと思っていたのか驚いて後ろに下がる流雅。

白翼は鎖に当たり、鎖は切れた。

「キヤー!」

止まっていた悲鳴が動き始める。

「薔薇輝ロードナイトの鎖が!。つち!」

流雅はすばやくナイフで岡崎を刺そうとする。

「岡崎、避ける!」

「え?」

岡崎は近くに流雅がいることを知り黒いオーラをまとう。

岡崎は雄型の悪魔で闇の召還ができ、自在に闇を操れるのだ。

『ガキン』

ナイフが黒いオーラにあたるとそんな音がした。

「つく」

黒月、岡崎、壬鈴、会長は流雅から離れた。

「悪魔か」

冷静な声で流雅が言った。

「会長。どうします?」

「全員油断するな!そして、捕まえる」  
そのとき

「流雅、何やってんのよ?」

ロードナイト  
薔薇輝の後ろから人が出てきた。

「霞!」

(どうやら知り合いか・・・)

「手を貸そうか?」

「いや、使い魔ドクターが来てくれたんだったら、もう、大丈夫だ」

「まさか、魔神相剋者アスラ・クラインなのか!」

(また、知らない単語がでてきたよ・・・)

「おいで、ライディ!」

流雅の後ろに雷が落ちた。

その中から光輝く虎が出てきた。

「さあ、本番はこれからだ!」

**魔神相剋者は正義を語る（後書き）**

流雅と戦っている中、霞と呼ばれる少女が現れた。

そして、流雅が呼ぶと雷とともに光り輝く虎が現れた。

そして、魔神相剋者の意味とは！？

## 果たせない約束、大きな力の差

「さあ、本番はこれからだ！」  
流雅はいった。

「敵が少し増えたところで変わるかよ！」

俺は強気で流雅に向かって。

「やめろ！錬」

「錬君、やめて！」

岡崎と黒月が俺を止めようとするが気にせず突っ込む。

（鎖は切れる！これなら安心して近づける）

紅翼コウヨウを持ちながら薔薇輝ローズナイトに近づく。

（厄介なあいつから・・・！？）

俺は驚いた。目の前にいたはずの薔薇輝がいないのだ。

「後ろだ！」

岡崎が叫ぶ。後ろを振り返ると虎に乗った薔薇輝ローズナイトが俺に襲い掛かる  
うとしている。

（早い！？）

「終わりだ」

俺は虎は前足で俺を殴りながら地面に叩きつけた。

「がはっ」

弱った俺に鎖が巻き付いていく。

「はあ！」

岡崎が黒いオーラを手に集めて虎を殴りにかかる。

「甘いんだよ」

流雅がつぶやいた。

薔薇輝の片腕が岡崎を襲う。

「つく」

闇の力で受け止めたがそれと同時に鎖が岡崎を巻きついていく。

「なめるな！」

岡崎から鎖が強引に鎖が遠ざかる。これは、岡崎が召還した闇の力の1つの使い道で斥力だ。

「面白い能力だな」

注意が岡崎にいつていたので俺は、そのうちに鎖を断ち切り抜け出す。

「じゃ、そろそろ終わりにしよう！」

アスラ・マキナ トウター  
機巧魔神と使い魔が急に動かなくなった。

「やばい！共鳴しあってるぞ！」

今まで何もしていなかった会長が叫ぶ。

「共鳴？」

何も知らない俺が聞く。

「逃げて！」

黒月が叫ぶ。俺は言われたとおりに逃げる。

しかし、すべてが手遅れだった……。

機巧魔神の方から音が聞こえた。

「闇より永き悠遠より覚めし 其は、科学の鎖が縛る刻！」

その瞬間、俺はすごい勢いで鎖に縛られた。

その瞬間から俺の時は止まった……。

時が動き出した時は体がぼろぼろだった。

時が止まっているときに攻撃をされたのだろう……。

「ガハ」

吐血した。

相当やばいのかもれない……。

そんな状態でもあたりを見渡すと

同じようにぼろぼろになった岡崎、会長、王鈴がいた……。

(ちよつと待て)

俺の心の中がどんどん白く染まっていく。

(黒月がない！？)

真っ白になる。

見渡しても、見渡しても黒月だけがない。

「黒月ー！」

大声で叫ぶが返事がない。

俺は、黒月がどこに行つたのかを考える。いや、どこに行つたのか大体わかつていたがそれを信じようとしない自分がいたのだ。

(どこかに隠れてるんじゃないのか?)

そんな期待をして回りを歩くが誰もいない。

「錬、大丈夫か？」

歩いている俺をみて、岡崎が訪ねた。

「黒月がない……」

俺がつぶやきながら地面に倒れた。

「おい！錬！」

岡崎のこれがどんどん遠くに……。

次に目覚めたときは布団の中だった。

(ここは、会長の用意した宿か……痛！)

体を動かすとあっちこちで激痛が走る。

俺の体を見ると包帯で巻かれていた。

(そうか、俺はあそこで倒れて……。そうだ、黒月は！)

俺は激痛が走つても部屋を出て会長たちのところに行つた。

「錬！起きていて大丈夫なのか!？」

心配そうに岡崎がたずねた。

「黒月は、黒月はどこだ」

俺がにらみながら会長に聞いた。

「いない」

(今なんて?)

「え？」

「ここにはいない、流雅に連れて行かれたんだろう……」

「何で、何であいつが！」

「2つ目の能力だよ」

黒月には他の悪魔と違い2つ目の能力があり、その能力は相手の考えがわかると言う物だ。

「その能力をほしがる者は多い」

「じゃ、黒月は・・・」

「最悪の場合・・・死んでいる・・・」

俺は、もう立っているだけの力もなくなった。

バタリとその場に倒れた。

「錬！」

「俺は、俺はまた何もできなかった・・・」

「錬、お前はがんばりすぎだ。今日は部屋でゆっくり休め」

俺は岡崎に連れて行かれ部屋の布団の中に入れられ、黒月を探しに行くに危ないからっということとで布団の上から縄で縛られた。

「安心しろ、黒月は俺が探してやる。お前は助けに行くときのために今はゆっくり休め」

「嫌だ！俺が黒月を探しに行くんだ」

俺は布団から抜け出そうとすると

「仕方ないな」

岡崎に思いつきり殴られ気絶した・・・。

**果たせない約束、大きな力の差（後書き）**

またしても、黒月を守れなかった鍊。

黒月がつれさらわれた理由とは？



大切な人を守るため！（前書き）

流雅に連れさらわれた黒月を助けるために錬たちが動く

## 大切な人を守るため！

「起きろ、起きろ馬鹿」

誰かにゆすられて起きる。

「誰だ・・・」

「親友の顔まで忘れたか？」

目の前にいたのは岡崎だ。

「布団に入れられてその後にはその後に布団の上から縄を縛り、その上気絶さ

せる奴を親友って言うなら俺は、そんな世界で生きていけない」

「じゃあ、黒月を助けずにここで死ぬか？」

(！?)

「見つかったのか！」

「ああ、見つかった」

「すぐに行くぞ」

「ああ、今向かってる」

見てみると今いるのは部屋の中じゃなく車の中だ。

「これから作戦を話す」

会長が話しを始める。

「僕と王鈴君で霞と呼ばれる悪魔を止めて君と岡崎で黒月の救出&

アスラ・クライン魔神相剋者との戦闘でいく」

「魔神相剋者って何なんだ？」

(知らないワードを言われても困る・・・。)

「ドクター使い魔とアスラ・マキナ機巧魔神を持つ者のことだ。まあ、流雅のことだ」

「ハンドラー演操者とは違うのか？」

「まったく違う。ドクター使い魔と機巧魔神が共鳴することで強力な力を発

揮する」

(そういえば俺の時を止められるときものすごい速さで鎖が・・・)

「そのため、魔神相剋者は強敵になる」

「だから、体が丈夫な俺と岡崎、さらに俺は魔力を切れるから」と

「ああ、それもある」

「解りました。それでいいです」

「じゃ、よろしく頼むよ」

会話が終わり少しすると目的地に着いた。

「この倉庫だ。基本的に使われていないがここを流雅のアジトとなつている」

「すぐ、行こう」

俺がせかす。

「ああ」

こうして4人が倉庫に入っていく。

倉庫の中は真つ暗だった。

「暗いな」

岡崎が言った。

「じゃ、照らしてやるよ」

倉庫の中からそんな声がした。

そして、光る槍が飛んできた。

「避ける！」

会長が叫びみんながその場から離れる。

壁に当たったときバチバチつとなつて消えた。

「へえー、やるじゃん」

「悪魔の方が」

「悪魔だけど悪い？」

「ちようどいい。岡崎と錬は先に行け」

「行かすと思う？」

「通させるさ」

会長が話しているときに俺はすでに進んでいた。

「動いてるのが丸わかりだよ！」

今度は光る球体が飛んでくる。

俺はとつさに白翼を取り出し切り裂く。

光る球体は刀に触れると同時にきえた。

「それが例の刀ね」

「そういいながら近づいてくる。」

「お前、敵が4人つてわかってるのか？」

岡崎が霞の背後から攻める。

岡崎は殴りにかかる。

「あんだこそ馬鹿じゃない？」

霞はすぐに振り変えると同時に光る球体を岡崎に投げつける。

球体が岡崎に当たると同時にバチバチ鳴らして消える。

「電撃か」

「そうだよ。君は珍しく肉体強化の力を持つてるんだね」

お互いの能力を確認している悪魔たち、

その間に俺は奥へ進む。

「錬！先に行け！」

岡崎が叫ぶ

（静かにしてるよ・・・！）

霞は振り返り俺の居場所を認識した。

「行かさないよ！」

霞が手に力を込める。

「隙だらけだな」

岡崎が背後から詰め寄り殴った。

「つく。1人通ったか」

「これでよし・・・」

「じゃあ、3人を倒してから流雅と一緒にやるか」

3人を置いて俺は倉庫の奥に向かうと地面に階段があった。

（地下に続いているのか？）

覗いてみると奥に人がいるような気がした。

入ってみると流雅と黒月がいた。

「うーうー！」

口に布を噛まされていて黒月が何を言ってるのか解らない

「やあ、やっぱり君がここまで来たね」

「まるで、すべて見通してる感じだな」

「ああ、君はすごいからね」

「そりゃどうも」

「それで、君は自分の彼女を取り返しにきたのかな？」

「まあ、そんなとこだ」

「そうかい、君は大切な人を助けられる力があるもんね。俺と違って流雅の表情が変わった。

「来い！薔薇輝ロドナイト！ライデイ！」

機巧魔神と使い魔が現れた。

（いきなりかよ）

そんなことを思いながら白翼の柄に手を置いていつでも抜刀できる状態にする。

「君を見てると過去の自分を見てるみたいで非常に不愉快だ！」

「勝手に想像して不愉快になってんじゃねーよ」

魔神相剋者と超能力者の戦いが始まった

大切な人を守るため！（後書き）

昔の自分を鍊と照らし合わせてる流雅。  
流雅の過去になにが！？

悲しき能力の代償（真悟）

「はあ！」

霞が腕を振ると同時に光る刃が迫ってくる。  
それを闇の力でガードする。

「お前、そんなに使うと非在化するぞ」

「戦場で敵の心配？そんなに余裕かい？」

俺の背後に回って攻撃をしてくる。

「来い、紅玉！」

会長がアシラ・マキナ機巧魔神を召還して援護してくれる。

「演操者ですか」

「お前たちの好き勝手にはさせない」

「邪魔です！」

（演操者である川井を狙って！？）

「やめろ！」

「二人とも眠ってる！」

壬鈴と川井に電撃が向かう。

俺は必死に闇の力を出す

（間に合わない・・・）

「うわー！」「キヤー」

電撃を受け二人は倒れた。

「高電圧を当てたから、当分起き上がれないよ」

「よくも・・・」

「悔しい？それでも、ここは戦場だよ」

（こいつ・・・）

「お前・・・楽に倒れるって思うなよ！」

「良いね！その目！」

まだ、夜じゃない。引力、斥力を使うことはできない。

霞は手に電気を集めそれを槍にして投げる。

「なめるなよ……」

俺はそれを避けて霞に近づいて殴る。

「油断しすぎ」

霞はそういった。俺は霞を殴る直前で……

「うわー！」

電撃を受けた。

「私の能力の使い道は投げることだけじゃないんだよ。雷を身にまとってよろいにもできる」

「っち」

(だとすると近距離攻撃は不利か)

「そして、こんな使い方も！」

霞は手に電気をためてそれを刀の形にして振る。それを何とか避ける。

「ほら、どうした？」

刀を振り回す霞。

「あまり見せない取って置きを見せてやるよ」

俺は自分の身にまとわせた闇を右手に集中させる。

体の運動能力を闇をまとわせて上げていたので闇がなくなった足の運動能力が低下して霞の攻撃を避けれなくなった。

「やあー！」

電気の刀を思いつきり振る霞。

「黒き炎はすべてを焼き尽くす。黒炎！」

俺は闇の力を炎にした。黒き炎。この炎はどんどん温度があがって行き、水をかけても酸素がなくなっても燃え続ける。自分が消そうとするまで。

電撃の刀で切られ、高電圧が来るが俺は右手で相手を殴りかかる。

「食らえ！」

(闇の力で体を守っていなかったので電撃のダメージがすごい。だが、こいつを当てれば……)

「あたらないよ」



殴りかかる右手を刀で振り払う。

「うわぁー！」

右手からまた電流が流れる。

（川井さん。ちよつと無理かも・・・）

右手が地面に落ち。倒れた。

「結構時間がかかったね」

霞は動けないかを確認してから地下に続く階段に向かう。

（やっと、油断した・・・）

俺は、その瞬間を見逃さなかった。

右手の黒炎はまだ消えていない。

右手で相手の足を掴む。

「な！」

さすがに驚いた反応をする。

「油断したな」

「うわぁー」

黒い炎が霞を包み込む。

「暑い！暑い」

「その炎は水などじゃ消えない」

「くそ！」

霞は俺に止めを刺すのかナイフ（本物）を取り出した。

「死ねー！」

『ドン』

鈍い音がした。

俺にナイフが刺さったのだ。

だが、ナイフに刃はついていない。

「黒き炎はどんなものでも最後には燃やす」

「う・・・」

霞は力尽きたか倒れた。

俺は黒炎を消した。

「さすがに殺すわけには行かないからな・・・」

(能力を使いすぎた・・・)

俺も力尽きて倒れた。

(ああ、あの本の物語って何だっけな・・・)

自身が愛している者に関する記憶を失う。これが悪魔の能力の代償。

(本の物語に出てくる人を愛することで非在化を食い止めてるがそれがなかったら俺はとっくの昔に消えている存在・・・。存在するはずのない存在・・・。)

そんなことを考えているといつの間にか眠ってしまった。

悲しき能力の代償（真悟）（後書き）

自分の記憶を犠牲に霞を倒した岡崎。

次回

錬の暴走。彼女の目に映る悲しい現実。

## 夜は紅に染まる

俺は白翼をいつでも抜刀できるようにし薔薇輝ロドナイトに向かって走る。

「成長していかない」

後ろから虎が迫ってくる。

前からは薔薇輝の鎖が襲ってくる。

「ワンパターンはだめだろ」

俺は紅翼を取り出して鞘ごと後ろに思いっきり投げる。

「ぐうわー！」

虎に直撃して虎の動きは止まる。

鎖が俺の目の前まで来てそれを白翼を抜刀して切る。

鎖は簡単に切れる。

「へえー。すごいね」

「俺をなめると痛い目にあうぞ」

「大した自信だけど、君じゃ俺には勝てないよ。そう、昔、俺があの子を救えなかったように・・・」

流雅はうつむいた。

「過去に何があったかは知らないが、不良たちを傷つけても関係ないだろ!？」

「奴らは罪人だ!世界が罰則しないとこのなら俺が罰を与える!」

「どんな罪を犯したか知らないし、だったらなぜ警察に報告しない!」

「言っても信じてくれやしなかったさ!」

「それに、黒月は関係ないだろ!」

「貴様らが俺の邪魔をした罰にこいつを見せしめに殺す」

(黒月を殺す・・・?)

「ううーうー!」

口に布を噛まされていて黒月が何かを伝えようとしている。

「それが本気ならお前を殺すしかないようだな・・・」

「それほどこの女が大事か？」

「大事だ！」

即答する。

実際、俺は黒月がきつかけでいろんなことがあった。でも、黒月を憎んだり、恨んだりはしていない。黒月に出会えたことが俺にはうれしいからだ。俺は黒月のことを……。

「だったら、動けなくした後目の前で大事な人を奪ってやるよ」

「ガLLLLL！」

後ろから虎が襲い掛かってきた。

反応できずに左腕を噛まれる。

「うわあ！」

噛まれた箇所から電気が流れ込んでくる。

噛み付いてる虎を右手で持った白翼で切ろうとすると噛むのをやめて逃げられた。

「はあ、はあ……」

「相当ダメージが大きかったようだな」

「黙れ！」

虎と薔薇輝が共鳴をし始めた。

俺は恐れずに薔薇輝に近づく。

『闇より永き悠遠より覚めし……』

呪文を言い終わる前に薔薇輝を切る！

切っても傷は浅い。

「な！」

「呪文が言い終わる前に攻撃すればいいんだよ！」

「……」

「どうした？驚いて何もいえないのか？」

にやりを笑う俺。

「呪文なんておまけみたいな物なのに近づいて余裕をみせるなんてね」

共鳴は終了していた……。

ものすごい速さで鎖が飛んでくる。

(やばい・・・)

俺はかすかに見える鎖を刀で切り落とす。

「うーうー！」

(黒月が何かを伝えようとしてる?)

地面から、鎖が出てきた・・・!?

鎖の1本が地面に刺さって地面から俺の下まで来ていたのだ。

俺は気づけずに縛られる。

時が止まった・・・。

私は何もできない、ただ助けられるだけだった・・・

彼の手伝いをしようと第一生徒会に入ったけど結局、足手まといに  
しかならなかった。

そんな私を彼は『大事だ』っといってくれた。

うれしいが・・・。私のせいで彼が傷つくのはいやだ・・・。

私がいなければ彼は普通な生活をできていたのに・・・

(どうして、私のためにそんなに必死になってくれるの・・・? 錬

君・・・)

「さんざん助けるだのいつておいて結果はこれか?」

錬を捕まえた流雅は笑っている。

(悔しい。錬君の手伝いをしたかったのに足手まといにしかかって  
いないことが)

「ねんのため、両足と両肩を刺しておくか」

ナイフを取り出し動かない錬の肩と足を刺す。

私は目を閉じて涙を流す。

「殺しはしない。絶望した顔を見るまで」

私によって来る流雅。

「さあ、絶望した顔を見せてくれ」

錬を縛ってた鎖がなくなり錬の肩と足から血が出てくる。

「ガハ」

苦しそうになる錬。

「さあ、無力な少年よ。目の前で大事な人を失う姿を見てるんだな！」

流雅が私にナイフを向ける。

「やめる！」

「さあ、死ね！」

ナイフが私ののどに向かってくる……。

（ごめんね。錬君、私のせいで辛い思いばかりさせちゃって……）

目を閉じた私の顔に液体がつく。

「やめろっていつてんだろ！」

（私は死んでいない？）

恐る恐る目を開けると錬の手にナイフが刺さっていた。

流雅は抜こうとするが錬がナイフをつかんでいて抜けない。

やっとの思いでナイフを抜いた流雅。

最後の力を使ったのかナイフが抜けると同時に錬はその場に倒れた。

「ううー！（錬君ー！）」

声を出しても布が邪魔で言葉にならない。

「っち、虫の息の癖に邪魔しやがって」

倒れた錬をける流雅。

（最後まで守ろうとしてくれた錬の姿がかっこよかった。でも、彼は……）

『闇の深淵に封じられし』

錬の声だった。

あれだけ刺されて無事であるはずがないのに錬は声を出してる。見てみると黒い髪の毛がどんどん赤に染まっていく。

『其は、夜を紅くれないに染める者！』

「な！」

（えー！！）

錬はぼろぼろの足でもう一度立ち上がったのだ。

『お前を殺したくはない。俺を戦わせるな  
いつもとが違う雰囲気だ……。』

「ぼろぼろになってでも立ち上がるか！」

『薔薇輝ロドナイトが立ち上がった錬に攻撃を仕掛ける。

『戦いたくないのに、俺に刃を向けるのか……』

錬が冷静な声で言う。

「死ね！」

『ドン！』

薔薇輝ロドナイトの鎖の攻撃ですごい音がした。

「ううー！（錬君！）」

『そう叫ぶな、俺はこんなじゃ殺せない』

鎖の攻撃した場所にいたはずの錬が地面に落ちている白翼を拾う。

「いつの間に!？」

『遅いんだよ』

「ツチ」

（おかしい、髪の色といいさっきの呪文から何かがおかしい）

錬は紅翼も拾ってから再度言った。

『お前じゃ、俺に勝てない。だから、あきらめる。戦いたくないんだ俺は……』

「黙れ！」

『トウター』

使い魔と薔薇輝が共鳴を始めた。

『闇より永き悠遠より覚めし』

『何を言っても無駄か……』

紅翼を能力で消して、白翼を構える。

『其は、科学の鎖が縛る刻!』

呪文が終わると同時に目では追えない速さで鎖が錬に襲い掛かる。

『邪魔だ』

錬の声がした瞬間。

錬は薔薇輝の後ろにいた。

薔薇輝の鎖はばらばらに斬られていた。



(何があつたの?)

一瞬でいろんなことがあり、何が起こつたかわからない。

一瞬の中で錬は鎖を回避しながら走り。しかも、鎖を斬っていた。

「な!」

『だから、いったら?俺には勝てないって』

薔薇輝は振り返りながら錬を殴りにいく。

「ううー! (危ない)」

『ドン!』

この音は錬が薔薇輝に殴られたのではなく、錬が薔薇輝の腕を斬りおとした音だつた。

『仕方ない。戦いたくないがそつちがその気なら戦うしかないのだろっ……』

「う、うわあ!」

流雅は恐怖で悲鳴をあげる。

『我、世界の闇より現われし』

錬が呪文を唱える。

『其は、夜を紅に染める者!』

錬が飛び、見えないくらい早い速度で薔薇輝を斬る。

すぐに薔薇輝は傷だらけになつた。

(もしも、これが人間にやっていることなら。真っ赤な血がそこらじゅうに……)

私は夜を紅に染めるつと言つ意味があたりを血で真っ赤にするつと言つ意味だと知つた。

薔薇輝は傷だらけになつて演操者<sup>ハンドラー</sup>である流雅の影に戻つた。

『次は貴様だ』

白翼の刃を流雅に向ける。

「や、やめてくれ……」

『いまさら何を言う。貴様が始めたことだ』

刃に向けた錬が飛ぶのを見て私は必死に叫んだ。

「ううー! (やめて!)」

言葉にはならなくても大きく。

錬は止まった。

『・・・』

(よかった・・・)

流雅はこの隙を見逃さなかった。

ポケットから新たにナイフを出し私に向けて投げる。

「大事な彼女のピンチだぞ！」

「うう！（キヤー）」

『ドス』

いやな音が響いた。

ナイフは私に当たらなかった。

『大丈夫だ。俺が命に変えてでも・・・てやるから・・・。お前は逃げる』

錬が私の前に出てきて庇ってくれたのだった。

それと同時に私を縛ってた縄も切ってくれていた。

そして、彼は私に倒れ掛かってきた。

赤かった髪の毛がいつもの黒い色に戻る。

手で布を破り叫んだ。

「錬君ー！！」

私に倒れ掛かっている彼は返事をしなかった。

夜は紅に染まる（後書き）

黒月を庇ってナイフを刺された錬はいつたい！？  
悲しみの中、黒月の第二能力が発動される！

力の解放（静音）

「錬君！・・・錬君！」

私が抱きしめてる彼の名前を呼んでも返事はない。

「無駄だ。死人は返事をしない」

立ち上がりながら流雅が言った。

「なんで、何でこんなことを」

「自分の苦しみを他人にも知って貰おうとね」

笑みで流雅が言った。

「昔、俺は霞と別に彼女がいた。その彼女は、不良に絡まれて重度の怪我で意識不明になった」

「え・・・」

（この人にはそんな悲しい出来事があったの・・・？）

「俺は彼女を副葬処女にして薔薇輝ベリアル・ドールとして俺の近くロードナイトにいてる。そして、彼女の復讐をする！」

「じゃ、なんでつらい気持ちを他人に知らせるんですか!？」

「つらいことも何も知らない平和なお前たちを見ていらつくだよ！」

壁をたたきながら言った。

「そんなの間違ってます！」

「間違い？俺が正義なんだよ！」

「そんな・・・くつが・・・通るって思ってるのか？」

抱きしめてる彼はかすかな声を出す。

「錬君！」

驚いて大声を出す。

「貴様、まだ生きていたのか！」

「はあ・・・。黒月・・・。逃げる。俺をおいて逃げる」

（こんなときでも私のことを・・・）

「だめです・・・。錬君も一緒じゃないと」

「俺は無理だ・・・」

「そんなこと言わないでください!」

錬は声を出さなくなった。

「錬君!」

「大体、俺の存在忘れてないか?」

流雅が言う。

「しよせん!誰もここから出れないんだよ」

「出ます。あなたを倒してでも」

「無理だ。薔薇輝ローズライトはいなくなったがライディがいる」

使い魔である虎が前に出る。

「今のあなたじゃ私に勝てません」

「それはどうかな!」

私は能力を開放して左目を緑にして空気の弾丸を撃てるようにする。

「貴様にライディの速さについていけるかな?」

虎は走り出すとすごい速さで走った。

「無駄です」

私は2つ目の能力を開放する。

右目を赤に染める。

『このまま、後ろから攻撃・・・』

この赤い目で見た人の記憶、考えてることがわかるようになる。

後ろに空気の弾丸を撃つ。

「ギャウ!」

虎が悲鳴を上げる。

「な!?!」

『なんで、攻撃してくる方向が解ったんだ』

「私の赤い目で見た人の考えてることがわかります」

「そんなばかな」

「降参してください」

「俺は負けない!」

階段の前に立ちふさがる流雅。

「お前の負けだ」

流雅の後ろから聞き覚えのある声がする。

後ろから流雅を殴り気絶させた彼は

「岡崎君」

「黒月、無事だったか」

「私より、錬君が・・・」

なきながら言う。

「錬が？」

岡崎が入ってくるとナイフが刺さっていて倒れてる錬の姿をみて。

「錬！」

「私を庇って・・・」

岡崎はすばやく駆け寄って刺さっているナイフを抜き取って傷口を見る。

「これはひどい・・・。ナイフが刺さっていた傷口が広い・・・」

「ほかにも足や肩も・・・私どうすれば・・・」

岡崎は足や肩を調べるが

「傷口なんてないぞ？」

「え？」

(たしかに時を止めてたときに刺して、動き始めたときも血を出してたはずなのに・・・)

「とりあえず傷口を閉ざさないと・・・」

「わ、私救急車呼びます」

外に向かう私に岡崎が叫ぶ。

「それじゃ間に合わない！」

「え・・・」

(それじゃどうすれば・・・)

「この場で傷口をふさぐ」

岡崎は両目を緑に染めて能力を開放する。

「何を・・・」

「俺の黒炎で火傷させて傷口をふさぐ」

「それで何とかなるんですか？」

「無理だったら死ぬ。後はこいつの精神だ。錬に声をかけてちょっとでも意識が戻るようにしろ」

「はい」

岡崎は手に黒い炎をまとわせる。

「錬君・・・起きて」

「行くぞ」

黒い炎を傷口に近づける。

「うわぁー！」

悲鳴を上げる錬。

「錬君、我慢して！」

私は悲鳴を上げ続ける錬の手をとって励ます。

「もう少しだ・・・」

黒炎を操りながら言う岡崎。

私にとって長い3分間が過ぎた。

「これで終了だ・・・」

岡崎は疲れた声で言う。

「錬君は・・・」

私が聞いた。

「解らない。後はこいつの精神がどれだけ強いかな・・・」

その後宿泊先に戻った。

意識のない錬と一緒に。

(錬君・・・)

意識がなく布団の上で眠っている横で私は錬のことを思い続けた。すると・・・。

「うう・・・」

錬が気がついた。

「錬君！」

大声で彼の名前を呼ぶ。

「黒月か・・・耳元で大声を出さないでくれ・・・」  
錬の意識はハッキリしているらしい。

「それにしても、ここは会長の用意した宿か・・・」

「うん・・・」

「黒月」

「・・・」

「泣いてるのか？」

「・・・」

私は返事をしなかった。私は泣いていたのだ。  
悲しいのではない。

（錬君が生きていてうれしかった）

「ごめんな。心配かけて」

「いいえ、私のせいです。捕まった私が・・・」

「いいや、俺が守れなかったただけだ。手でナイフを受け止めて倒れるなんて・・・」

私は驚いた。

（錬君は自分が呪文を唱えて髪を赤く染めていたことも忘れている？）

『ぐううー』

錬のお腹がなった。

「あはは」

苦笑する錬

「何か持つてきますね」

「すまない」

「いいえ、いいんです」

そして、私はおにぎりを持っていった。

おいしそうに錬はそれを食べた。

食べた後、疲れて錬は眠った。

私はおきている人に錬が気がついたことを知らせてから眠った。



平和な休日（前書き）

流雅の事件が終わり平和な休日のお話

## 平和な休日

俺はいつもの時間に起きた。  
廊下を歩いてると岡崎がいた。

「おきても大丈夫か？」

「ああ、平気だ」

「お前は立派だよ。大切な人を守るなんてな」

「守れてはいないよ……。最終的には気絶してお前が助けに行つたらしいじゃないか」

岡崎は少し黙つた。

「ああ、そうだな。でも、お前は大切な人のために自分も犠牲にする覚悟だつたんだろ？」

「お前の覚悟に比べたら小さなもんだよ……」

「俺は人を愛せない。愛しても、愛しても俺は相手のことを忘れる。仕方がないことなんだよ。覚悟でもなんでもない宿命なんだよ」

「それでも、お前はすごいや……」

「お前は立派な覚悟も何もいらぬ。大切な人だけを守れ。そして、幸せにしろ」

「大切な人って何なんだろうな……」

「その答えはお前にしか見つけられない」

「そうだな……」

「とりあえず、今日は流雅の処分だのなんだので帰れないから自由にしてろつてよ」

「了解」

「後、飯は台所にあるもの食えだつてさ。料理できるならしてもいいつて聞いている。じゃ、俺は部屋で本でも読んでるよ」

「ああ、解つた」

台所に行つて朝食を作る。

「あ、錬君、おはよう」

「おはよう、黒月。少し待ってる朝食ができる。2人分くらいはあるからよ」

「うん。ありがとう」

俺は料理を皿に乗せて黒月と一緒に食べた。

「岡崎君たちの分はいいのかな？」

食べてると黒月が聞いてきた。

「多分、岡崎はもう食べてる。会長たちはどこにもいない」

「そうなんだ」

食べながら何かを考えている黒月。

「そういえば、錬君もう大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ。戦闘するのはきついが日常生活は普通にできる」

「よかった」

それを聞いて笑顔になる黒月。

「そういえば岡崎が今日は帰らないから自由にしていって言うってたぞ」

「そ、そうなの？」

「らしいよ」

食べながら会話をする2人に沈黙が訪れた。

黒月が何か考え事をしてるようだった。

「れ、錬君・・・」

「ん？どうした？」

「もし、もしもですよ。今日やることがないのなら買い物に付き合ってもらえませんか？」

（やることか）。何も無いな・・・）

「別にいいぞ」

「本当？」

「ああ、本当だ」

「あ、ありがとう」

笑顔でお礼を言う黒月。

俺はドキドキしていた。

(こいつの喜んでる顔みてるどキドキするな・・・)  
朝食を食べ終わり岡崎に2人で出かけてくるつと伝えると。

「デートか？デートなのか!？」とかいいだしてうるさいので無視して出かけた。

買い物はすぐに終わった。

お土産、買いに行っただけだからである。

「本当にありがとう」

ただついてきたただけだがうれしそうに笑う黒月。

「別にいいよ。暇だったし・・・」

「それでもうれしい」

会話しながら歩いてると本屋があった。

「錬君、本屋があるけどどうする?」

(そういえ今日は読んで小説の続編が・・・)

「すまん。黒月、少し待っててくれ」

「うん。いいよ」

黒月をその場に残して本屋に入って目当ての本を探していると

「や、やめてください!」

黒月の声でした。

(なにが!?)

俺は急いで本屋を出た。

近くに黒月がいて黒月を4人の男が囲んでいた

「ちょっとだけ、俺たちに付き合ってくださいよ」

「いやです!」

(まるでどっかの小説に出そうなシーンだな)

「おい」

男に話しかけると

「なんだデメエ」

「俺の連れに何かようか?」

俺が聞くと、男たちは笑いながら

「じゃ、少し借りていく」

そついいながら1人の男が殴りかかってきた。俺はそれを右手で受け止める。

右手に少し力を入れると

「うわぁー！」

悲鳴を上げた。

「おいおい、やめてくれよ。お前たちが先にやってきたことなのに俺が悪人みたいじゃないか」

俺が言うのと残りの3人も殴りかかってきた。

「今だ！黒月逃げる！」

黒月に逃げるようにいいながら、三人の攻撃を紙一重でかわす。

「はい」

黒月は走り出した。俺は攻撃をかわしてから黒月のほうに走り。

「行くぞ」

黒月の手をしつかりつかみ走る。

2分くらい走ってから速度を落として止まる。

「大丈夫か？」

「ハア・・・ハア・・・。大丈夫です」

黒月の顔は真っ赤だった。

(ちよつと、早く走りすぎたか)

「まあ、撒いたようだな」

来たほうを見つめる。

「よかった」

息の整った黒月が言った。

「大変だな美人なもの」

顔を真っ赤から普通の顔に戻りつつあった黒月の顔が再び真っ赤になる。

「わ、私は美人じゃないですよ」

目をそらしながら黒月が言つと

「そつか？綺麗だと思っけど？」

俺が言つと

「そ、そうですね？」

「ああ、少なくとも俺はそう思ってる」

「そ、それはうれしいです」

「さて、帰るか」

「は、はい」

平和な休日（後書き）

次回

休日の午後とそれから

## 月の輝き

俺たちが宿屋に戻ったときには昼飯の時間だった。

「朝食は作ってもらったんで昼食は私が作りますね」  
まだ、顔が赤い黒月が台所に行く。

（まあ、任せようか・・・）

俺は部屋に戻って岡崎に帰ったことを伝える。

「おお、デートは・・・」

俺を見るなりそんな発言した岡崎をとりあえず殴りかかる。

珍しく受け止めずに避ける。

「危ないね」

「ただいま」

「お前、挨拶をするより早く友達を殴るって何だよ！まあ、おかえり」

「お前の発言がなければ挨拶が先だったのにな・・・」

「どっち道、殴るのかよ!？」

俺の発言に怒りを表す岡崎。

「っで、まじめにどうだったんだ？」

「本買いに本屋寄ってるうちに黒月が不良に絡まれて逃げた。そんなとこだよ」

「不良か、何で逃げた？お前なら人気のないとこに誘って倒すのも簡単だろ？」

「それじゃあいつと一緒にだろ？」

「あいつ？」

「流雅だよ」

「ああ・・・」

流雅は彼女を傷つけた不良を憎んで不良をターゲットにしていた。

「俺は最悪の場合じゃないとあいつみたいにならない」

「っでことは最悪な場合ならお前はあいつみたいになるのか？」



「黒月が本当に危険だったら俺はどんなことをしてでも助け出す」

「黒月だけ特別か・・・」

「な！・・・」

いつの間にか黒月だけは助けるって自分で宣言していて顔が赤くなっている。

「あれれ？顔が赤・・・」

とりあえず岡崎を殴った。

「素直じゃないね。良かったな黒月」

俺の拳を受け止めながら扉の方に向いて話しかける。

俺は驚きながら扉の方を見た。

扉の方には顔を真っ赤にした黒月がいたのだった。

「あ、あの、昼食できたんで・・・」

そういつて黒月は走り去った。

「思いつきり聞かれたね」

岡崎が走り去った黒月を見て言った。

「お前、黒月がいるのを知っていて教えなかっただろ」

「もちろん」

親指を立ててにっこりするこいつをみて殴ってやりたかった。

「まあ、黒月が準備してくれてるんだし食べに行こうぜ」

「ああ」

そして、2人は黒月の料理を食べに行った。

「・・・いただきます」

3人は昼食を食べ始める。

（おいしいけど）

料理はすごくおいしいが

（すごく気まずい・・・）

料理をガツガツ食べる岡崎とちらちらこつちを見て目線が合つと顔を赤くして目線をそらす黒月。

（この会話のない状況。すごく辛い！）

「黒月」

ちよつと声をかけてみると

「え・・・あ。はい！」

（すごく気に入ってるなさっきの話・・・）

「すごくおいしいよ」

「そ、それはよかったです」

顔を赤くして目線をそらす。

（会話続かない！）

岡崎が食べるのをやめて手を動かして合図を送ってきた。（なぜか解る）

『俺に気にせずお前の気持ち黒月に告白しろ』

（って何いってんだあいつは！）

俺の顔が赤くなるのが解る。

俺は合図をり返す。

『後でお前を殴ってやるよ』

それを見て

『チャンスは今だ。レッツゴー！』

（どうい風になつたんだ！）

そんなことをしながら昼食を食べ終わった。

「私が片付けはしますよ」

黒月が片付けてくれるようなので岡崎と共に部屋に戻って。

「お前、何で告白しなかつたんだよ？」

やっぱり話してきた・・・。

「しないっての！」

「えー」

「なんで告白するんだよ」

「黒月が嫌いなのか？」

「い、いや・・・。好きとか嫌いとかじゃなくて・・・。」

「何なんだよ？」

「解んねえ・・・。」

「あいまいなやつだな、まったく・・・。」

岡崎はその辺に座って本を読み出す。

(まったくだ……。自分がいまいいなやつだって自分が良くわかってる……)

俺も座って本を読み出した。

結構な時間、本を読んだ。

窓を見ると夜だった。

俺は、立ち上がって扉のほうに歩く。

「どうした？」

岡崎が本を読みながらたずねる。

「外で風当たってくる」

「了解」

はしごを借りて屋根に上る。

(今日も月が輝いていて空は綺麗だ)

屋根で寝転がって空を見上げる。

(俺はよく夜空を見上げている。自分とは何者で何のために生きているんだろうか？そんなことがあるからだ)

「好きですね」

おれは驚きながら声の聞こえたほうを見ると

黒月がいた。

「ああ、俺はよく夜空を見上げてる」

「そうですね」

景色が夜空のせいかわ黒月がいつもより綺麗に見えた。

「隣いいかな？」

「ああ」

俺の隣に座る黒月。

「綺麗だね」

「ああ。綺麗に輝く月と星。綺麗な夜空だ」

少し沈黙する。

「鍊君」

「どうした？」

「無理はしなくていいんだよ……」

「昼間の話のことか？」

「うん」

（やっぱり気にしてたか……）

「無理はしてないぞ。俺はお前を守ってやるってここで約束したただろ？」

「でも、それじゃ……錬君は……」

（黒月は俺のことが心配なのか……）

「俺は大丈夫。約束したろ？どんなことがあっても死なないって、今回は岡崎に助けてもらったが次は大丈夫。お前がピンチならかけて助けてやるからよ」

「どうして……どうしてそこまで私のことを大切にしてくるんですか？」

黒月は涙を流しながら聞いてきた。

「決まっている。俺にとってはお前は特別だからだよ」

（何でだろう。岡崎にはごまかすことができるのに）

「どうして……私なんかを……」

（黒月にだと素直になっってしまうだろうか？）

「さあ、わかんねえよ。でも、俺はお前が大切だったことは変わらないんだ」

「それで……錬君は本当にいいの？」

「ああ。俺は一度決めたら変えないタイプなんだよ」

「ありがとう……。先に戻るね……」

黒月は屋根から下りて部屋に戻った。

「本当……。あいつの前だと素直になっってしまうな……」  
俺も部屋に戻って眠った。

月の輝き(後書き)

次回予定なし!

## 平和な日々

俺はいつもの時間に起きた。  
廊下を歩いてると岡崎がいた。

「おきても大丈夫か？」

「ああ、平気だ」

「お前は立派だよ。大切な人を守るなんてな」

「守れてはいないよ……。最終的には気絶してお前が助けに行つたらしいじゃないか」

岡崎は少し黙つた。

「ああ、そうだな。でも、お前は大切な人のために自分も犠牲にする覚悟だつたんだろ？」

「お前の覚悟に比べたら小さなもんだよ……」

「俺は人を愛せない。愛しても、愛しても俺は相手のことを忘れる。仕方がないことなんだよ。覚悟でもなんでもない宿命なんだよ」

「それでも、お前はすごいや……」

「お前は立派な覚悟も何もいらぬ。大切な人だけを守れ。そして、幸せにしろ」

「大切な人つて何なんだろうな……」

「その答えはお前にしか見つけられない」

「そうだな……」

「とりあえず、今日は流雅の処分だのなんだので帰れないから自由にしてろつてよ」

「了解」

「後、飯は台所にあるもの食えだつてさ。料理できるならしてもいいつて聞いている。じゃ、俺は部屋で本でも読んでるよ」

「ああ、解つた」

台所に行つて朝食を作る。

「あ、錬君、おはよう」

「おはよう、黒月。少し待ってる朝食ができる。2人分くらいはあるからよ」

「うん。ありがとう」

俺は料理を皿に乗せて黒月と一緒に食べた。

「岡崎君たちの分はいいのかな？」

食べてると黒月が聞いてきた。

「多分、岡崎はもう食べてる。会長たちはどこにもいない」

「そうなんだ」

食べながら何かを考えている黒月。

「そういえば、錬君もう大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ。戦闘するのはきついが日常生活は普通にできる」

「よかった」

それを聞いて笑顔になる黒月。

「そういえば岡崎が今日は帰らないから自由にしていって言ってたぞ」

「そ、そうなの？」

「らしいよ」

食べながら会話をする2人に沈黙が訪れた。

黒月が何か考え事をしてるようだった。

「れ、錬君・・・」

「ん？どうした？」

「もし、もしもですよ。今日やることがないのなら買い物に付き合ってもらえませんか？」

（やることか。何も無いな・・・）

「別にいいぞ」

「本当？」

「ああ、本当だ」

「あ、ありがとう」

笑顔でお礼を言う黒月。

俺はドキドキしていた。

(こいつの喜んでる顔みてるのとドキドキするな・・・)  
朝食を食べ終わり岡崎に2人で出かけてくるつと伝えると。

「デートか？デートなのか!？」とかいいだしてうるさいので無視して出かけた。

買い物はすぐに終わった。

お土産、買いに行ったただだからである。

「本当にありがとう」

ただついてきたただだがうれしそうに笑う黒月。

「別にいいよ。暇だったし・・・」

「それでもうれしい」

会話しながら歩いてると本屋があった。

「錬君、本屋があるけどどうする?」

(そういえ今日は読んで小説の続編が・・・)

「すまん。黒月、少し待っててくれ」

「うん。いいよ」

黒月をその場に残して本屋に入って目当ての本を探していると

「や、やめてください!」

黒月の声でした。

(なにが!?)

俺は急いで本屋を出た。

近くに黒月がいて黒月を4人の男が囲んでいた

「ちょっとだけ、俺たちに付き合ってくださいよ」

「いやです!」

(まるでどっかの小説に出そうなシーンだな)

「おい」

男に話しかけると

「なんだデメエ」

「俺の連れに何かようか?」

俺が聞くと、男たちは笑いながら

「じゃ、少し借りていく」



そういいながら1人の男が殴りかかってきた。俺はそれを右手で受け止める。

右手に少し力を入れると

「うわぁー！」

悲鳴を上げた。

「おいおい、やめてくれよ。お前たちが先にやってきたことなのに俺が悪人みたいじゃないか」

俺が言うに残りの3人も殴りかかってきた。

「今だ！黒月逃げる！」

黒月に逃げるようにいいながら、三人の攻撃を紙一重でかわす。

「はい」

黒月は走り出した。俺は攻撃をかわしてから黒月のほうに走り。

「行くぞ」

黒月の手をしっかりとつかみ走る。

2分くらい走ってから速度を落として止まる。

「大丈夫か？」

「ハア・・・ハア・・・。大丈夫です」

黒月の顔は真っ赤だった。

(ちよつと、早く走りすぎたか)

「まあ、撒いたようだな」

来たほうを見つめる。

「よかった」

息の整った黒月が言った。

「大変だな美人なもの」

顔を真っ赤から普通の顔に戻りつつあった黒月の顔が再び真っ赤になる。

「わ、私は美人じゃないですよ」

目をそらしながら黒月が言つと

「そっか？綺麗だと思っけど？」

俺が言つと

「そ、そうですね？」

「ああ、少なくとも俺はそう思ってる」

「そ、それはうれしいです」

「さて、帰るか」

「は、はい」

## 新たな問題

「起きてください」

眠っているとそんな声が聞こえた。

「もうすこし・・・」

俺は布団をかぶった。

「錬君、起きないとおいてきぼりですよ」

「うう」

俺は起きれない。

「もう！」

布団がいきよ良く放れていく。

「うう」

ようやく起きる。

(岡崎か?)

目の前にいたのは黒月だった。

「錬君、おはようございます」

正直、驚いた。

(なんで黒月が入るんだ)

「おはよう」

「今日は帰るからしたくをしなといけませんよ」

「ああ、解った」

「ご飯できてるので食べてくださいね」

「ああ」

そういつて黒月は部屋をでた。

俺も部屋をでると

「彼女に起こしてもらえるのは良い物だな」

岡崎がいた。

「お前か? 黒月に俺を起こすように言ったのは」

「いや、俺は「錬、遅いな」っとしかたってないぞ」

「そうか」

「まあ、黒月が「私が起こしてきます」「って言うとは思わなかったな」

「へー」

「まあ、帰る準備急いでやれよ」

「了解」

まあ、準備の前に腹ごしらえ。

朝食をすぐに食べきった。

その後帰る準備をした。

「変える準備してもさ、また校外学習で来るんだぜ……」

「そうらしいな」

くだらない会話をしながら帰る準備をして、車に乗り込む。

「じゃ、お願いします」

会長が疲れた声で言った。

車は動き出して学校に向かう。

「そつえば会長」

最初に話し出したのは岡崎だった。

「なんだ？」

「流雅の処分はどうなったんですか？」

「……」

(そつえば何も聞いてないな……)

「流雅の処分は機巧魔神アスラ・マキナの剥奪となった」

「そんなことができるんですか」

「ああ、できる」

「それでどうなりました？」

「逃げ出したよ。剥奪される前に」

「……!?」「」

俺と岡崎、黒月は驚いた。

「私たちが連行してるときいきなり仲間が流雅を逃がしたのよ」

「そんな馬鹿な！」

壬鈴が言ったことを信じない岡崎が声を出す。

「いや、実際にあつたことだからなんともいえぬよ」

「それでこちらを裏切つた仲間はどうなつたんですか？」

俺が冷静に聞いてみた。

「自分がやつたことは認めましたが体が勝手に動いたといつてたよ」

「え……」

（体が勝手に動いた？そんなことがあるはず……）

「僕は悪魔の能力で操られたと思つてる」

会長は言つた。

「そんな能力があつたら誰も勝てないでしょ……」

「いえ……。あります……」

俺の発言を否定しあるつと言つたのは黒月だつた……。

「私の父親から聞いた話なんですけどある悪魔は一時的に体の自由を奪い操ることができると聞いたことあります」

「そうか……」

黒月の説明を聞いていやな顔になる会長。

「その悪魔と流雅が手を組んでる確率が高い。今後注意しよう」

（1つの事件を解決したと思つていた俺たちにいやな報告と新たな問題に悩まされた）

「そ、そういえば、その悪魔は能力を使うと操つてる間は動くことができないらしいです」

「となると、誰かを操つてるときは完全に無防備になるのか」

「はい」

（でも、そんな自分の弱点があるやつがこのこと目の前に出てくるだろうか……。きつと、どこかで隠れてバラバラになつたところを狙うだろう……）

「なんにしても何事もなく終わることを願いたいがそうも行きそつくない、みんな注意するように」

暗い会話していると学校についた。

「それではこれで解散する」

みんなが解散と聞いて帰り始める。

ただ、会長だけは学校に行った。

「錬君……」

俺の後ろから黒月が声をかけてくる。

「どうした？」

「そんなに心配しなくても大丈夫だと思うよ……」

（さっきの話で俺が心配してるって思ったんだろう……）

「心配はしてないよ。ただ、不安なだけだ。俺の翼」（紅翼と白翼）  
で防げるのかどうか……」

「そ、そうですね……。大丈夫だと思いますよ」

「ああ、ありがとう」

「それじゃ、また今度学校で」

「了解」

黒月は家に帰った。

（本屋によってから家に帰るか）

俺は本屋に向かった。

これで少しの間平和な生活が戻ってきたと信じて……。

## 新たな問題（後書き）

とりあえずこれで1回目の生徒会の手伝いの内容は終わりました。  
次回からのことも考えながら書いていきたいと思っています。

## 校外学習1日目 嵐の前の静かさ

俺は今バスに乗っている。

今日から、校外学習で前回生徒会で行った場所に2泊3日する。

(不安だ……。流雅が逃げたりそのときに契約されている悪魔以外にも見方に悪魔がいるような雰囲気だった。あいつは不良グループを攻撃してたりするが今のところそういうニュースも何もない。もしかしたら校外学習で襲われる可能性が高い。そのときはクラス全員を守らなければいけない……)

「はあ……」

なんだかため息がでた。

「どうした？」

隣にいる岡崎が聞いてきた。

「なんでもねえよ」

「そうか」

再び窓の外の景色を見つめる岡崎。

(こいつに悩みつと言つ言葉があるのか?)

そんなことを考えていると

「流雅のことなら心配するな」

こつちを向かずに岡崎が言った。

「心配してない。前回のやられた分をやり返せるか気になったただけだ」

「そうか、それならいい」

(こいつ、本当は悪魔じゃなくてエスパーじゃないのか……)  
そんなことを思ってるうちに

「全員降りろついたぞ」

先生が目的地についたことを知らせた。

「また、戻ってきたな……」

「あぁ」



2週間ほど前に死闘をしたこの場所に。

「まあ、気楽にいよう」

「ああ、絶対に出会うわけじゃないからな」

その後、先生の後についていきいろんな観光名所を回った。

正直、暇だった。

下宿先に戻ったところには夜だった。

「じゃ、明日は自由行動をとる地域の人に迷惑をかけるなよ」

『ハイ』

こうして先生たちの呪縛から解放され部屋に入ると、

「何かの因縁か？」

「俺も聞きたいな」

2人で一部屋（結構狭い）なのに

また、岡崎と一緒にだった。

「お前、何か組んでるのか？」

俺が聞いた

「いや、ただのくじ引きだった」

部屋に入る前にくじ引きで部屋を決めていたのだ。

「なんでお前と一緒にの部屋なんだ!？」

「俺が聞きたいな。まあ、別にいいだろ何かあったとき行動がとり

やすい」

「何もないことを願いたいな・・・」

「俺もだ」

しかし、そんな平和は長くは続かないのだった・・・。

「やつらがここについたようだな」

闇の中やつらは話していた

「明日の早朝にやつを連れ去り残りをおびき出して狩ろう」

「それがいいな」

「今、やつらに復讐を」

校外学習1日目 嵐の前の静かさ（後書き）

校外学習1日目、何事もなく終了2日目と3日目はまた長くなりそうです^^；

校外学習2日目 動き出した影（前書き）

校外学習2日目、奴らが動き出す。

## 校外学習2日目 動き出した影

校外学習2日目の朝問題が起きた・・・。

俺はいつもより早く目が覚めた。

俺の布団の隣の布団の中にはまだ岡崎がいた。

(できるだけおきないようにしよう。うるさいから・・・)

俺はカーテンを開けて窓の外を見る。

(今日も晴天。自由行動なにをしようか・・・)

今日何をするかを考えていると窓の外に見覚えのある人がいた。

そう、霞だった。

2週間ほど前に捕まえ逃げられた流雅が契約した悪魔だった。

俺は目を疑った。

(なんでこんなところにあいつが?)

何かの間違いかと思いつながら見ていると近くの窓から飛び降りた人がいた。

その人は眠っている黒月を抱えて窓から飛び降りたのだ。

その人の顔も知っている。

(流雅!?)

黒月を抱えて

(なぜやつがこんなところにいるのかは多分復讐だろうがなぜ黒月を抱えているのだろう)

俺はそんなことを気にしながら岡崎を蹴って起こした。

「何すんだよ!」

「流雅が現れた。しかも、黒月を抱えてる」

「は?」

「俺一人じゃ無理だ。協力しろ」

岡崎は寝ぼけた顔で窓の外を見る。

「何だよこれ!」

「今あいつは油断してる二人で襲い掛かればいけるはずだ」

「解った」

俺と岡崎は寝間着のまま窓から飛び降りた。

俺は着地すると同時に流雅のいるほうに走る。

「来たか」

流雅は俺を待っていたかのように言った。

「黒月を放せ！」

紅翼を取り出して襲い掛かる。

「させない」

横から電撃が来る。

「無駄だ」

俺は刀を振って電撃を消す。

「ライダー」

流雅は使い魔ドクターを呼んだ。

流雅の後ろから虎が現れた。

俺は出てきたライダーを刀で斬る（逆刃刀なので斬るって言っても自然と峰打ちとなり生き物を斬っても死なない）

「ガウー」

斬られた虎はそんな声を出して倒れた。

「次はお前だ」

「怖いねー。でも、まだ俺にたどり着くには早すぎる」

流雅が言い終わると同時に背後から霞が襲ってくる。

「岡崎！」

俺は岡崎を呼ぶ。

「了解」

横から霞に向かった攻撃する岡崎。

「また、あんたか」

「すまないねー。俺も親友の頼みなんでね」

俺のことを親友と言ってるがスルーして

「薔薇輝ロードナイトをださないのか？2：1でお前が不利だぞ」

俺は不意打ちで薔薇輝を出されるのを恐れて薔薇輝を出すように仕

向ける。

「ククク・・・」

（なんだ？笑ってるのか？）

「ハハハハハ！」

流雅は何か壊れたように笑う。抱えてる黒月は落とさないように注意はしてるようだ。

「何がおかしい？」

俺がにらめつけながら聞いた。

「確かに2：1だな・・・。お前が1人で不利な状況で」

（何を言ってるんだ？俺には岡崎が見方にいるので俺が1人になることは・・・）

「うわぁ！」

考えているうちに後ろから蹴り飛ばされた。後ろに立っていたのは岡崎だった。

「岡崎？なぜお前が・・・」

「言つたる？2：1でお前が不利だつて」

流雅はライディに黒月を乗せながら言った。

「岡崎！どうしたんだよ！？」

「・・・」

岡崎は何も言わない。

（そつえば、奴らの中には人を操ることができる奴が・・・）

このときやっとなついた。岡崎は相手の悪魔の能力であやつられてる子と。

岡崎は両手に闇を召喚して俺に向かって襲い掛かる。

「っく」

俺は刀を岡崎に向ける。

岡崎とは喧嘩をよくやってる。いつものように戦えるはずだ・・・。

岡崎は俺に突進して来た。

俺はそれをかわして岡崎を切るうとする。

（この刀で能力を無力かすることができてるのか？それ以前にダメー

ジは岡崎の中に入ってる悪魔じゃなく岡崎にしか当たらないんじゃないか？)

その迷いが最大の間を作る。

岡崎の蹴りが腹部に直撃する。

「ガハ」

蹴られて倒れそうになる。

それを追い討ちするように闇のオーラをまとった手で殴りに来た。それを紙一重でかわす。

(やらなきゃ・・・やらなきゃやられる・・・)

俺と岡崎が争ってるうちに流雅たちは逃げる準備が整っていた。

「じゃ、俺は逃げるよ。あと、そいつの能力は1時間続くから後40分だ」

「待て！」

余所見をしてるうちに岡崎が容赦なく殴りかかってきた。

「くそ・・・」

流雅たちはライディに乗ってこの場から離れていった。

校外学習2日目 動き出した影（後書き）

次回

黒月を目の前でさらわれて親友に刃を向けることになった。望に満ちたこの状況で救いの手があるのだろうか・・・ 錬、絶



校外学習2日目 刃の先に（前書き）

錬の目の前でさらわれた黒月。

さらに、岡崎は悪魔の力によってあらつられている。

大切な人をさらわれ、友に刃を向けなければならぬ錬。  
迷いの中、錬は？

## 校外学習2日目 刃の先に

俺は愚か者だ。目の前で黒月が連れさらわれた。

「やめる！岡崎」

「・・・」

流雅たちが立ち去っていつても岡崎は操られたままだ。

（岡崎を紅翼で斬る（峰打ち）しかないのか？）

考え事をしてと容赦なく岡崎が殴ってくる。

「う・・・」

顔面に直撃して、少し痛い。

（考えるより。行動するしかないか・・・）

ずっと、握っていた紅翼を構える。

岡崎はジャンプして空中から蹴りかかってくる。

（甘い！）

岡崎の足をつかみ、もう片方の手で握ってる紅翼で顔面を斬る。

岡崎を斬ると同時につかんでいた足を離すと岡崎は吹っ飛んで近く

にあった木にあたって止まった。

「岡崎、意識を取り戻したか？」

駆け寄ってみると

腹部が思いつきり殴られた。

（嘘・・・だろ・・・？）

紅翼の力でも能力がかき消せない。

さっきと比べ物にならない威力だった・・・。

岡崎を見ると右手は黒いオーラに包まれている・・・。

「なんで・・・。なんでだ！」

「・・・」

岡崎は答えない。

岡崎は俺の方に走ってくる。

「どうして・・・どうしてなんだ！」

そして、俺の意識は吹っ飛んだ……。

「ここからは誰目線でもないです」

錬の髪の色が黒から赤に変わっていった

『闇の深淵に封じられし』

口が開いていないのに錬が声をだした

岡崎は錬に向かって走っていく。

『其は、夜を紅くわぬいに染める者！』

岡崎は黒いオーラで包んだ右手で錬を殴りかかったが……。

『やめろ。戦うべき、相手はお前じゃない』

赤髪の錬は岡崎の右手を片手で受け止めた。

通常のパンチなら片手で受け止めれるだろうが、能力で強化された

パンチなら両手でも防ぎきれないはずなのに。

岡崎は驚いた表情もせず左足で蹴りかかる。

錬はしゃがんでそれをかわし、

『俺は先に進む』

岡崎の右腕を両手でつかみ思いつきり投げる。

岡崎は闇を地面に着けて勢いをとめる。

その間に錬は流雅たちが去ったほうに走りだす。

岡崎はすぐに錬を追いかけた。

『やはり戦うしかないのか』

追いかけてくる岡崎を見て錬は走るのをやめる。

紅翼を鞘に戻し抜刀の体勢になる。

岡崎は闇を操り針のようにとだらせて錬に向けて飛ばす。

『我、世界の闇より現われし』

錬は抜刀する。

『其は、夜を紅に染める者！』

抜刀と同時に針のようなものはすべて打ち落とされ、岡崎の方に向かって走っていく。

岡崎は逃げようとするが、

「遅い」

岡崎の肩に紅翼があたる。

「ハアア！」

そのまま振り払い岡崎は倒れた。

「つく……。時間が……」

鍊もその場に倒れた。

その後、起きてきた先生によって2人は看病された。

校外学習2日目 刃の先に（後書き）

また赤髪になった鍊、一体鍊になにか！？。  
そして、岡崎や黒月の運命は！？

校外学習2日目 再び戦場に（前書き）

岡崎を吹っ飛ばして倒れた鍊。

## 校外学習2日目 再び戦場に

目が覚めるとホテルの部屋の中にいた。

「うう……」

（ホテルの中か……）

「目を覚ましたか？ 錬」

聞き覚えのある声……。

「ああ……」

岡崎だった。なぜか左肩に包帯を巻いている。

（そういえば、俺は岡崎と戦ってぼろぼろになって気絶したんだ……）

気絶する前のことを思い出した。

（あれ？ でも、なんで岡崎は怪我をしてるんだ？ それに俺は怪我をしていない？）

「どうしたんだ？ その怪我は」

俺が聞くと難しい顔をして岡崎は言った。

「体を操られてな何も覚えていないんだ……」

（うそだ……。流雅を逃がした男は意識はあるけど体を操られていたつと言っていた。だから、岡崎がいったことはうそになる。でも、どうしてそんな嘘を……？）

疑問を抱えながら。

「黒月は……」

「流雅のそこだ。多分あの場所だろう」

俺はそれを聞いて立ち上がるうとする。

「お前……大丈夫なのか？」

「たいした傷はない」

「……」

何か考える岡崎。

「解った。俺もついていこう」

「岡崎、お前は左肩が・・・」

「俺の力は使えるんだよ」

「すまない」

「いやいや、友達の恋人を助けるのは・・・」

言い終わる前に殴りかかる。

「危ないな」

「そういえば、学校は？」

「もちろん、自由行動だ。どこに行ってもいいらしい。ただし、時間通りに帰ってこなかったら生徒指導室に呼ばれるらしい」

「それはまた」

苦笑いする。

「さて、行くか」

「まて・・・」

急いでるのだが岡崎を止める。

「どうしたんだ？」

「こ・・・、紅翼がない・・・」

「紅翼ならそこにあるぞ」

「ん？」

見てみると袋に包まれてる刀らしきものがあつた。

中身は紅翼だつた。

「どうして？」

「俺がうまいこと情報操作した」

「そうか、それはどうも」

紅翼を能力で消す。

「行こう」

「ああ」

そうして、俺たち二人は二週間前の戦場に足を運ばせた。

「また、来てしまったな」

「ああ、別に来たくなかつたけど・・・」

「ようこそ、絶望の場所に」



「！？」  
「」  
「」

俺と岡崎は驚いた。倉庫の上に霞がいた。

校外学習2日目 再び戦場に（後書き）

倉庫の上にした霞。絶望の場所の意味とは？  
次回から戦闘ばかりです。ああ・・・。

校外学習2日目 戦場はあまりにも過酷で

驚いた俺は刀を取り出した。

すぐに抜刀体勢に入る。

(こいつは雷を使うんだったな・・・)

岡崎から聞いた情報を心の中で確認する。

岡崎も驚いた顔から冷静な顔に戻る。

「そうあせるなよ。錬」

「何でだ？」

(さっきまで岡崎も驚いたくせに・・・)

「あいつは俺に復讐したがつてるんだ」

「だったら、さっさと潰して先に行こう」

俺が戦闘態勢のまま話す。

「先に行け。錬」

そういつて俺を押し出す。

「な！」

俺は押されて倉庫の扉のほうに進む。

ドッペルゲンガーが扉を開ける。

(いつの間に能力を!?)

扉の中に入れられる俺。

『バン!』

入って、すぐに扉をすぐに閉められる。

「岡崎！」

「さっさと行け」

(岡崎は何か急いでる?)

「すまない。だが、追いついて来いよ」

「馬鹿か？俺がお前に追いつけない。っつても？」

「じゃ、追いつかれないようにするか」

俺は倉庫の中に入っていくことにした。

(死ぬなよ。岡崎)

「さて、1対1で決着でもつけようか？」

「まだだろ？」

俺は能力を一旦使えない状態にする。

「お前の力は夜になってこそ発揮するんだろ？」

霞は俺の本気と戦う気なのか……。

「いいだろ」

時間がかかるのは解っているが承諾した。

(戦うなら本気でってことか……。錬、すぐにはいけそうにない……)

(岡崎の野郎……。かつこつけやがって……。)  
倉庫の中を歩いてた。

「流雅！来てやったぞ！」

とりあえず大声で叫んでみた。

……

(あゝ誰もいねー)

地下への扉は鍵をかけられていた。

それから倉庫の中をぐるぐる回っているだけだ。

「なんで、誰もいないんだ！」

また、叫んで見る。

『カタン』

(！)

近くから何かが倒れた音が聞こえた。

俺は音のした方にゆっくり足を進める。

俺は倉庫の隅にある大きな鉄の箱を見つけた。

(この中に誰がいる……)

俺は白翼を取り出した。

そして、白翼で鉄の箱を切り。

「誰だ！」

っと、叫びながら入る。

入ってみると中は真っ暗だった。

「うーう」

うめき声だけが聞こえる。

能力で懐中電灯を取り出し中を照らすと……。

「黒月！？」

黒月が両手両足を縛られて口にテープか何か張られて置かれていた。寝ているときに連れさらわれたのでパジャマ姿で寒そうだった。

「黒月、大丈夫か？」

口に張られていたテープをとり、両手両足を縛ってるものを斬った。

「れ、錬君……」

いつものやさしい声がする。

「良かった……」

(とりあえず、見たところ怪我はないな……)

怪我がないことに安心をする俺。

「れ、錬君ここはどこなんですか？」

「ここは、流雅の倉庫の中だ」

「そ、そうなんですか……」

「とりあえず、こんな箱みたいなところでよっ」

「そうですね……」

俺が倉庫からでようとすると……

『ズドン！』

俺は背中に空気を圧縮されたものをぶつけられた。

(！？)

驚いて未だに何が起こったのかわからない……。

(なんで……。なんで黒月が俺を攻撃するんだ！？)

校外学習2日目 戦場はあまりにも過酷で（後書き）

岡崎と別れた錬は黒月と再会をするが黒月は錬を撃った。  
錬は何をすればいいのだろうか？

校外学習 2日目 俺たちの運命（真悟）（前書き）

霞と本気で戦うために夜を待つ岡崎。この二人の結末は・・・。

校外学習 2日目 俺たちの運命（真悟）

俺は夜を待った。

「そろそろだね」

倉庫の上で座ってる霞が言った。

夕日は沈み。夜が世界を支配する……。

あたりが暗くなった瞬間。

光る物体が俺の方に飛んでくる。

霞が放つ電撃だ。

（あの野郎……）

急いで能力を開放して闇の力で電撃を消す。

「やるね」

闇の力を溜めた球体を作り、それを霞の方に向かって投げる。

霞はジャンプしてそれを避ける。

「夜の支配者は俺だ！お前じゃ俺に勝てない！」

霞は俺の目の前に着地した。

「それはどうかな？」

霞は手に電撃を集め手を振ると……

針のように細い電撃が無数に飛んで来た。

（っち！？）

予想外の攻撃に途惑いながら。

自分の目の前に薄い黒いの壁を作った。

壁に当たった、電撃はすぐに消えた。

（いろんな攻撃方法があるのか）

『ドス』

（！？）

俺の腹部あたりに、何かが刺さる。

「こんな薄い壁じゃ、攻撃をふせげないよ」

壁を貫いた剣の形をした電撃が刺さっていた。



「っく！」

刺さった場所から電流が流れる。

「これで、終わりだ」

(この状況で剣を振られたら、確実に下半身とはお別れになる!?)  
とっさに斥力を使う。

「!?!」

いきなり体が離れていって、驚く霞。

「これは!?!」

引力を発動して離れていく霞を近づける。

さらに、右手に闇の力を集め黒い刀を作る。

(これで突き刺せば……)

「っく」

相手も引力の勢いを利用して俺に剣を向ける。

『カン!』

電撃の剣と闇の刀がまじわる。

「何でだ!これほどの力を持っていながら同族を倒すようなことをする!」

霞が怒りながら話す。

「おかしいか?力を知らないやつのために何のかかわりのないやつのために使うのは」

「お前は、自分を代償にして他人をたすけるのか?」

「ああ、罪のない者が傷ついていくなんて間違ってる!」

霞が剣を振る。

俺は、それを避けて相手の右腕を斬りに行く。

霞は後ろに飛ぶ。

「っち」

「お前、その力を自分のために使おうと思わないのか?」

「俺の力は俺の使いたいように使う!」

「それは残念だね」

霞は剣を振り電撃の玉を飛ばす。

俺はそれを刀で切る。

「ハアア！」

霞は俺の目の前で剣を大きく振りかぶっていた。

（斥力も刀も間に合わない!?）

後ろに飛びながら斥力も発動するが距離はあまり離れなかった。

（あたる!）

剣は振り下ろされ俺の右胸にあたった。かすただけだったのでた  
いしたことがないが・・・。

『カン』

俺の制服の内ポケットに入っていた物が落ちた。

そう、それは拳銃だった。

（まずい、切り札が・・・）

「!?!」

その拳銃を見て驚く、霞。

俺は引力で拳銃を俺の手元まで引っ張る。

「動くな！」

剣の先が俺の首に向けられる。

「!?!」

驚いて能力を切ってしまう。

「それでいいわ」

（おかしい、今なら俺を殺せたのに生かす意味があるのだろうか？）

「君、本当にすごいよ。最初で最後の誘いだよ。私たちの仲間にな  
らないか？」

（なるほど、仲間に引き入れるために・・・）

しかし、俺の答えは決まっている。

「お前みたいに怒ったら、すぐに口調が変わるような奴とつるんで  
も面白くねえよ」

「交渉決裂」

剣が俺のほうに向かって来る。

斥力で霞を遠ざけながら、左に飛ぶ！

『ザク!』

飛んだときに右肩に剣が刺さり、電流が流れる。

「うわああ!」

さつきまでと比べ物にならなかった。

右肩を押さえて地面に倒れている俺を殺すために近づいてくる霞。

俺の目の前に、さつき落とした拳銃が落ちていた。

(こいつを使えば、今は何とかなるが……。多分、この次にはあいつがいる。弾丸は1つしかないここで使うわけには……)

「これで、終わりよ!」

霞は俺の目の前まで来ていた。

(もう、だめなのか……)

『ボタン』

「え?」

さつきまで、何事もなく暴れていた。霞が俺の隣に倒れた。

「ハア……ハア……」

すごく、苦しそうだ……。

霞の手は、まるで存在をしていないかのように透明になっていた。

「お前、まさか!」

立ち上がりながらいった。

「そうよ、非在化が進んでいるのよ……」

非在化とは。

この世界が悪魔という不純物を消そうとする行為である。

能力を使えば使うほど非在化は進んでいく。そして、悪魔は契約者コントラクターを得ることで、この世界に存在する。しかし、契約者の思いが少なければ非在化が進む……。

「お前、なんでそんなにまでして!」

「君が、正義を信じて戦うのなら……。私は流雅を信じているだけ……」

「くそ!」

非在化はとめることができない。唯一とめることができるのは契約

者の思い。しかし、それさえもなくなった霞はもう、消える存在・  
。。

「これが、悪魔の背負う運命でしょ？」

そういったときには。。。。

霞の体は消え去った。。。。

「これが、悪魔に生まれてきた運命だというのなら。。。。どうし  
ようもないのか。。。」

落ちてる拳銃を持って、錬の待つ倉庫の中へと入っていく岡崎には、  
新たな覚悟が生まれたのだろう。。。。

校外学習 2日目 俺たちの運命（真悟）（後書き）

次回予告、

錬が背中を見せると攻撃をされた。回りには黒月しかいないのに誰が!？。

校外学習 2日目 疑問と怒り！（前書き）

黒月に攻撃された鍊。

その後二人は・・・。

そして、黒月になにが？

## 校外学習 2日目 疑問と怒り！

(俺は黒月を助けるために倉庫にやってきた……。なのに、なぜ……。黒月が俺を攻撃してくるんだ!?)

俺は黒月に攻撃され吹っ飛んだ。後に素早くあいていたコンテナの中に入った。

「ねえー。錬君ー。どこー？」

近くから黒月の声がした。

(なぜだ？、理由がわからない)

コンテナの中で荷物を壁にして隠れながら何が起こっているのかを考える。

(黒月の偽者……。ってことはないか……。能力を使って俺を攻撃したし。操られているにしても岡崎が

操られていたときはなにもしゃべれなかったはず……。黒月がしゃべれるのはなぜだ?)

考え込んでいると、

「みーつけたー」

発言と共にナイフが飛んできた。

「うわぁー！」

慌てて避ける。

「逃げないでよ。一発でしとめて上げようとしたんだからさ」

俺は黒月と距離をとりながら木刀を出す。

「錬君……。それで私を殴るの？」

なみだ目で言われる……。

(う……)

俺の心が一瞬の隙を作り、それを黒月は見逃さなかった。

『ドン！』

空気の弾丸が俺の体に当たる。

コンテナの中から吹っ飛んで別のコンテナに当たる。  
「う……」

近くから弾丸を受けて鉄でできたコンテナにあたるとさすがに痛い。痛みを感じながら前を見ると、さっき、投げたナイフを持った黒月が俺の心臓にめがけて突進してきた

俺はしゃがんで回避した。

『カン！』

コンテナとナイフがあたりいい音がした。

「ツチ」

ナイフを持ってない手で能力を使う。

「つく」

空気の弾丸にそなえて顔を腕でガードするが……

間に合わなかった。俺の右腕らへんを風がつつかしていった。

(外れたか……)

そして、右腕から血が出てきた。

「え？」

何かで切られたような感じに腕から血がたらりと流れる。

俺は黒月から離れる。

「どうしたの？反撃しないの？」

笑みを浮かべながらこっちにくる。

「はぁ……はぁ……」

いつの間にか息があがっている。

俺はその場に倒れた。

「もういい、殺せ」

(こいつに殺されるなら……)

黒月は罨かと思いつつ。

「では、心を見せてもらおう」

右目を赤に染めた……。



そして、俺を見つめてニヤリと笑みをこぼし。

「それじゃ、さようならだね」

ナイフを持っている手を俺の心臓に向ける。

(さようなら……。俺の大切な人たち……。そして、……。な  
黒月……)

俺の心臓に向かっていくナイフがとまった。

「止まってー！」

驚いた。本当に驚いて黒月がいったと認識するのに時間がかかる。

「錬君ごめ……」

『タン』

乾いた音が黒月の言葉をかき消した。

そして、黒月が俺の方に倒れてきた。

まるで……。死人のように……。

「く、黒月！！」

俺の大声が倉庫に響き渡った。

「うるさいな。錬」

銃声のした方向から岡崎が現れた。

「黒月が……。黒月が……」

岡崎は冷静な口調で言った。

「わかってるよ。そんなこと」

「岡崎手当てを……。何か治療する方法を！」

俺は感情を抑えられないまま。黒月を抱えて起き上がる。

「必要ねーよ」

「何言つて……！」

『んだよ』つと言っ前に俺は岡崎が持ってた『物』を見た。

黒い鉄の塊……。いわゆる『拳銃』つというやつだ。

「お前が黒月を……」

「打ったのは俺だよ」

さらりと言った。

俺は黒月をコンテナに持たれかけさせるように置いて。

「何でだ？」

「お前だってピンチだったろ？」

「だったら、殺してもよかったっていつのか!？」

俺は岡崎を思いっきり殴った。

校外学習 2日目 疑問と怒り！（後書き）

黒月を撃った岡崎。

そして、岡崎に殴りかかる錬。

世界は悲しみでできている！？

校外学習 2日目 悲しみの中(前書き)

岡崎が黒月を撃った。その事実<sup>に</sup>怒る鍊。  
悲しみの中に何が？

校外学習 2日目 悲しみの中

俺は岡崎を殴った。

だが、いつものようにとめられた。

「錬、俺の話を聞け！」

「言い訳でもするのか！岡崎！」

俺は怒りに身を任せて岡崎の腹部を蹴り飛ばした。

『ドン！』

勢いよくコンテナにあたり苦しそうに倒れる。

「ガハ！」

俺は岡崎の声を聞いて生きていることを知るとコンテナに向かって突進した。

「つく」

岡崎は目を緑に染めて能力を使う。

岡崎の闇が岡崎の全身にまわり運動能力を上げる。

俺は殴りかかるが避けられてコンテナに拳があたる。

『ゴン！』

コンテナの俺の拳の当たったところが少し凹んだ。

「錬、やめろ！黒月は・・・」

俺は岡崎に飛び掛った。

「生きている！！」

「え？」

驚いた俺は岡崎の目の前で着地を失敗し、こけて倒れた。

（黒月が生きているって？）

「拳銃を撃つたのは俺だ。だが、打ち出したのは銃弾じゃなく、睡眠弾だ。だから、黒月は死んでもいなければ怪我すらしていない」

「そんな・・・」

「真実だよ。黒月は生きてる」

（俺は、俺は！）

「俺は大丈夫だ。自分をせめるな」

「うあああ！」

(俺はかけがえのない友を・・・殺そうとした・・・！)  
涙した。友を殺そうとした自分がいやになった。

岡崎は黒月のところに近づいて、

「正常だな。これで黒月は安心だ」

黒月の状態を確認して俺の方を向いた。

「おい、そこに倒れてる馬鹿」

(・・・)

「俺の右肩は死に掛けた。この先に、ここまでのことを仕組んだ奴がいるはずだ。馬鹿なお前でも何をすればいいか、わかるだろ？」

(俺に戦って来いっというのか・・・)

「お前がやったことは消えない。だからっといって、お前はここでずっと落ち込んでいいのか？」

操られていた黒月のこと、俺を襲わせたこと。すべてを仕組んだ流雅をほって置いたら第二第三の犠牲

者がでるんだぞ！」

「・・・」

何もいえない・・・。

「お前は力を持っているのに使わないのか？」

「・・・」

少し静かになる。

「・・・錬君・・・」

かすかな声がある。

「錬君ごめんね」

(黒月・・・)

「岡崎。黒月は操られていたのか？」

俺は疑問に思っていたことを聞いた。

「いまさらか、操っていたよ」

「そう、思えるのはなぜだ？」

「あいつがお前を傷つけるはずがない」

「そうか・・・」

俺は立ち上がる。

「黒月を頼む」

「ああ、解った。あいつは外にいるぞ」

岡崎は右肩に黒いオーラをまとわせている。こいつはこれで治癒ができるらしい。

「何で知ってるんだ？」

「来る前にちよつとな」

「そうか、行ってくる」

「すまない。直ったら俺も・・・」

俺は最後まで聞かずに出て行った。

校外学習 2日目 悲しみの中（後書き）

自分がいやになる。錬は悲しみの中にあつたものは絶望なのかも知れない……。

そろそろ校外学習終盤！

それにしても2日目の夜長すぎ？



## 校外学習 2日目 煉獄

俺は倉庫の扉を開けた。

「くると思ってたよ」

「流雅。お前は俺が裁く」

紅翼を取り出して構える。

「ここに着いたってことは黒月を殺したか？」

「お前の計画はすべて失敗だ。後は、お前が裁かれて終わりだ！」

「へー、二人とも助かったか。じゃ、俺が始末するか。来いライデ

イ！」

雷とともに光り輝く虎が現れた。

「お前は、人を傷つけた！俺はお前を許さない！」

「薔薇輝ロドナイト！」

流雅の影から機巧魔神アスラ・マキーナ が現れ鎖が俺に襲い掛かる。

「うああ！」

紅翼を逆刃（切れる方）で切り裂いていく。

使い魔ドクターが光となって薔薇輝野中に入っていく。

「!?!」

薔薇輝が光だし手に光る斧を持っていた。

「消える！」

流雅が叫んだ瞬間、斧が俺の方に向かってきた。

「所詮、能力俺の翼には効果がない」

俺は紅翼で受け止める。

『ガン！』

斧が刀にあたり、刀は弾かれて倉庫の屋根の上にまで飛ばされた。

「な!?!」

能力は触れただけで消えるはずなのに消えずに、自分の手元から消えた紅翼。

そして、休む間もなく鎖が俺に向かってきた。

とつさに白翼を取り出し切り裂く。

「どうした？俺を裁くのじゃないのか？」

薔薇輝の後ろで笑う流雅。

「くそ」

鎖をすべて斬った後には斧が俺の方に来た。

（避けるしかない！）

飛んで避ける。

斧は避けれたが再び鎖が飛んでくる。

（避けない）

上空じゃ逃げ場も動くこともできない。

「錬！」

確かに俺にはそう聞こえた。

体は何か引き寄せられる。

岡崎の引力の力だ。

引力で進む方向にある鎖を斬りながら岡崎の近くに着地する。

「大丈夫なのか？」

「ああ、問題ない」

薔薇輝は斧を俺たちのいる方に振る。

「岡崎伏せる！」

俺の指示で岡崎はしゃがんだ。

俺は刀で斧を受け止めるが、勢い良く来た斧は止まらずに俺の体ごと吹っ飛ばした。

後ろの壁にあたる。

「ぐ……今だ岡崎！」

岡崎は立ち上がり流雅の方に向かった。

「食らえ、黒炎！」

右腕に黒い炎をまとわせて、右手で殴りかかる。

「甘い！」

薔薇輝は持っていた斧を手放し。右腕で近づいてる岡崎に裏拳を当てる。

「え……」

岡崎は何もできずに飛んだ。

生えてあった木にあたると岡崎は止まったが木は倒れた。

「岡崎！」

名前を呼んでも返事が返ってこない。

「どうやら裁かれるのはお前の方みたいだな」

「……」

岡崎は頭から血を流して倒れたまま動かない。

目から涙が……。

「お前は絶望しなければならぬ。もつともつとだ！」

「すいません。父さん……。俺はあの武器をもう一度使います……」

「」

白翼を消して、使ってはならない武器を取り出す。

「来い！、煉獄！」

俺の手に赤い刀を呼び出す。

「お前の目が赤く……」

「安心しろ、俺は悪魔みたいに能力は使えない。これはこの刀の力

だ」

「刀の？」

「これで争いは終わる……」

俺は駆け出す。薔薇輝に向かって。

「そんなに死にたいか！」

光る斧をもう一度、作り出し俺に向かって振り下ろされる。

「地獄を見せてやる！」

俺の刀と斧が交わった。

その瞬間、

「バリッ！」

光る斧は砕けた。

「な……!？」

俺はそのまま薔薇輝の右腕を切る。

『ドン！』

斬ったところが粉々になっていき。右腕は落ちた。

「そ、そんな馬鹿な！」

俺は煉獄を消して流雅の目の前まで走った。

「歯を食いしばれよ！」

そう俺は告げて、流雅の顔を思いつきり殴った。

少し飛ばされて流雅は倒れてる。

「うう……。や、やれ。薔薇輝！」

俺の後ろにある機巧魔神が動き始めた。

白翼を取り出し。切りかかろうとしたとき。

薔薇輝の動きが止まった。

「おい、おい！何をやってる……」

ハンドラー  
演操者を無視して何も使用としない薔薇輝。

「くそー！」

時刻は0時……。こうして長い2日目の夜が終わりを告げた……。

校外学習終了と更なる問題・・・

俺たちは3日目の0時、病院に運ばれた。  
そして、少し眠った。

「岡崎・・・」

もつとも、重症だったのは岡崎だった。  
黒月に関しては怪我も無く無事だ。

俺は昨日の傷が嘘のように傷は無かった。  
俺は岡崎の病室を訪ねる。

「お、元気そうだな」

平気な顔をした奴がいた。

「・・・」

言葉を失った。

「さて、みんなのところに戻るぞ」  
そういつて病室を出る。

「っていいのかよ。病室からでて!?!」

「眠るためにおかれたらしい、偶然にも空きがあったから」  
心配した自分がバカみたいだ・・・。

「今度こそ流雅は終わりだからな」

そう、あの時、流雅は捕まった。

「ああ、そうだな。それにしても人を操る悪魔はどうなったんだろ  
うな・・・」

岡崎が黙る。

「多分・・・。非在化したとおもう・・・」

非在化とは能力を使いすぎた悪魔の末路。  
透明になって消えてしまう・・・。

「そうか・・・」

「まあ、俺たちは俺たちのやるべきことをしよう」  
やるべきことは・・・。

「先生、すみませんでした！」

学校側に謝罪だ……。

「お前らは!!!」

そして、黒月も含めた3人は3日目を外出できずに先生との行動をして、学校にもどつてからも停学処分が待っていた。

その間、黒月の様子がおかしかった……。

そして、停学処分を受け終わった俺たちは学校に久々に登校できた。

「岡崎く。久しぶりだな」

早速、岡崎に出会った。

「久しぶりく。暇だったな」

俺たちは暇に過ごした日々を話した。

そして、黒月は学校に来ていなかった。

(熱だろうか?)

つと、思いつつ放課後に見舞いに行った。

「お嬢様がいない!」

「封印の扉の中か!？」

「みんな、さがせ!」

黒月家は騒動があった……。

黒月が入らないようだ……。

「すみません。静音さんおられますか？」

ちよつとたずねてみた。

「お前、紅夜か!？」

一人が俺の方を見て驚く。

「え……、はい」

「貴様のせいでお嬢様は!」

殴られた。思いつきり……。

「え!? 一体な……」

後ろから背中を蹴られた。

「貴様、よくものこのこと！」

たくさんの人が俺を殴ったり蹴ったりした・・・。

「っう・・・。」

気が遠くなって・・・。

校外学習終了と更なる問題・・・（後書き）

久々の更新がこんな駄作だなんて恥ずかしいです・・・。



思いはやがて・・・。(前書き)

短編続きます・・・。

思いはやがて……。

「世界は矛盾でできている……。解るか？」

俺は夢を見ているのだろうか……。

「はい。父さん」

夢の中には幼いころの俺と父さんがいた。

「お前の力は矛盾したものだ」

そう、俺は人間にはない力を持った。矛盾した人間……。

「そして、お前が持っていた3つの剣。煉獄は絶対につかってはならない。なぜなら煉獄の力は……」

「うう……」

懐かしい記憶を見ながら起きた。

「錬さん、目覚めましたか？」

弥汰さんが目の前にいた。

「ええ……」

俺は状況を確認する。足は座らされてる椅子とがっちり縛りつけられていて、手は後ろで縛られていた。

「友達を心配して来てみたんですけど、どういうことでしょう？」

弥汰さんの後ろにいた人が怒ったのか少し動く攻撃しようと動く。それを弥汰さんは止めた。

「校外学習がありましたよね？」

弥汰さんが冷静に聞いた。

「ええ、大変でしたよ」

「娘は帰ってきてから「錬君に嫌われた」と言い続けていたんですよ」

おれが嫌った？そんなこと……。もしかして、操られた時の記憶があるのか……。

「嫌った覚えもありませんし、嫌ったとしたらここにこないでしょ」

う?」

「そういい終わると、後ろから殴られた。多分金属の何かで……。」

「ふう……。」

「お嬢様を侮辱でもしにきたんだろう!」

「後ろから聞こえた殴ったのはこいつだろう。」

「よさないか!」

「しかし!」

「それで、今、黒月は……。」

「俺は必死に言った。」

「まだ聞くかこの!」

「さらにもう一撃食らう……。」

「意識が飛びそうだ……。」

「やめろ!」

「弥汰さんがそういうと後ろの奴も動かなくなる。」

「地下の封印の間にいるが、鍵を閉められている。外からじゃ、絶対に開けられない」

「そう説明した。」

「そうですね……。」

「弥汰さん、俺にはわかりません!なんでこいつを始末しないんですか?」

「?」

「後ろから聞こえた。」

「こんな、ガキを殺しても娘が立ち直るってわけでもないだろう!」

「弥汰さんが怒った。」

「すいませんが、扉の前まででも良いので行かせてもらえないでしょうか?」

「このガキ……。」

「前からも聞こえたが弥汰さんが止めた。」

「説得できるとでも言うのか?」

「弥汰さんが聞いた。」

「説得なんてしませんよ。ありのままを言うだけですよ。」

「説得なんてしませんよ。ありのままを言うだけですよ。」

俺は弥汰さんを見た。

「良いだろ。あわせてやっても良かったが開かないからな」  
弥汰さんは承諾した。

そして、縛られていた手足は解かれて黒月のもとに……。

黒い月の心はどこに・・・（前書き）

大変更新が遅れました。

自作が思いつかずにもうひとつの作品を中心に書いてました。

黒い月の心はぎゅんぎゅん……

つれられた先は地下で大きな扉があった。

「この扉の先に静音が入ます」

弥汰さんが言った。

「黒月、聞こえるか！」

できるだけ大きい声で言った。

「……」

返事が無い。

「紅夜 錬だ。「俺に嫌きらわれた」とか言ってるって聞いたけどよ。そんなことは全然ないし、良い奴だと思ってる。また、学校に来いよ！」

「……」

「何かあるなら、一人で抱え込むな！お前のそばには良い人が多いからな！」

返事が無いが大声で話す。

「それじゃな。次会う時は学校だと良いな」

そう言つて大声を出すのをやめる。

「俺が言いたいことは言いました。」

「そうか。誰か錬さんを玄関までお連れしろ」

弥太さんがそう言つと2人の男性が俺を案内して玄関まで出した。

そして、そのまま俺は家に帰って眠った。

翌日。

（黒月は学校に来ているかな？）

そんなことを考えながら登校をしてると……

「紅夜さんですね」

目の前に黒いコートと帽子をかぶった人が話しかけてきた。

「そうですよ」

そういつた瞬間に……。

「なら……。死んでもらいます」

いきなりコートの中からナイフを出して俺に向かって構えて突撃してくる。

「っな!？」

少し反応が遅れて腹部あたりに傷ができ血が出てくる。

「何なんですかねー……」

近くの塀に背中預けて聞く。

「我々の計画にはあなたが邪魔なんですよ」

黒い帽子で見えなかつた顔から緑の瞳が現れる。

(こいつも悪魔なのか!?)

目を見た瞬間。世界が曲がって見えた。

(何だ。これは……)

膝を地面について必死に状況を確認する。

『私の能力は幻聴や幻を見せたりできるんですよ』

黒服を見るがぶれて3人ほどいるように見える。

(どうすれば良いんだよ……)

「死んでもらいます」

黒服がナイフを構えて俺の心臓に向ってさしに来る……。

俺は後ろに避けようと塀を飛び越えるために飛ばうとする。

「錬!何をやってる。しゃがんで前に進め!」

聞き覚えのある声が出た。

その言葉通りに行動をする。

俺は黒服の体をすり抜けて道路に倒れた。

(!?)

「っち、能力が切れましたか」

能力が切れたおかげで黒服の位置が解る。

黒服は俺の真後ろにいた。

(塀を後ろにしていたはずなのに……、なぜ黒服が俺の後ろに?)

その前から幻を見ていたのか!?)

「あいつはなんだ?」

岡崎が隣にいた。

(こいつが助けてくれたのか……)

「あいつは幻と幻聴を使う……」

岡崎は瞳を緑にして黒いオーラを纏う。

俺は紅翼を取り出して構える。

「これはこれは……。岡崎家の人ですか。これはあなたにも良い話なはずなんですけどね」

黒服が言い出す。

「なんだと?」

「黒月のお嬢さんは危険な存在です。それを消そうとしてるのだから」

(!?)

「まさか、お前、黒月に能力を使って……」

「良く気づきましたね。紅夜さん。あなたは邪魔なんですよ。もう少しで自殺まで追い込んだのに、今日こそは死んでもらうので邪魔をさせません」

「て、お前!」

「錬!良くわからないが先に行け!」

岡崎は冷静に指示をだす。

「……。つち。任せた」

「おやおや、そうきましたか」

俺はその場を離れて黒月家に向った。

「すみません。あけてください」

黒月家の門の前で俺は門が開くのを待った。

「この糞ガキ!お嬢様にあんなことをしてのこのこ出てきやがって」  
門が開いた瞬間、大勢の人が刀や能力で俺に襲い掛かってきた。



「死ね!」「うおー!」

「何が起こってるんだ!？」

俺は門の上に飛び上がり避けるが状況がわからない。

「お前が昨日の夜、暗殺をしようとしたのはわかってるんだよ!」

(そんなこと・・・。!?)

俺は『そんなバカな』と思ったが黒服のことを思い出した。

もしかして幻で・・・。

そんなことを考えてると能力でできた風の鳥が俺を襲ってくる。

「くそ!」

俺は近くの屋根を移動して逃げた。

俺はそれから逃げて近くのビルの屋上に身を隠している。

そんな中、俺は黒月を見つけた。

(何をやってるんだ?)

そう思つて飛び出そうとしたが・・・。

黒月は今までにない速さで進んでいる。

(能力の使い方何かやったのか・・・)

後を追おうとすると黒月の家にいたの人がその後を追っていた・・・。

(何か嫌な予感をする・・・。)

俺も黒月の後を追つて屋根の上を移動する・・・。

黒月は今は使われていないビルの中に入つていった。

(何かあるのか?)

その後を追ってきた黒月の家にいた人が入つていった。微かにこんなことを聞こえた。

「もしかして、お嬢様はここで飛び降り自殺とかないだろうな・・・」

「バカ、縁起でもないこというな」

俺は夢中になつて屋根の上から降りた。

「それは可能性としてありえるんですか!？」

「!？」

俺が出てきたことに驚く一同。

「や・・・」

「殺れ!」

いきなり襲い掛かってきた。

「くそ!」

俺は襲い掛かってくる人の攻撃を避けながら中に入った。

黒い月の心はどこと・・・(後書き)

これからも更新が遅れるかもしれませんがどうぞよろしく願います。

## 目覚めた力

中に入ると先に入ったメンバーが襲ってきた。

「貴様」

「死ね」

「くたばれ」

ひどい言われようだ。

俺はそのまま上に上がる。

なぜなら、ここに人がいるということはこの黒月はいない。

最上階まで走り抜けた。

つというか、黒月家の人多すぎね？

階ごとに5人くらいいたけどこのビルは12階立てなのに……。

「!？」

そこには弥太さんが入た……。

「なぜ、貴様がここに？」

(時間が無いっていうのに……)

「どいてください。あいつに言わなきゃいけないことがたくさんあるんです」

「親として、暗殺を使用とする奴を娘に合わせると思つか？」

「誤解を解く暇すらありません」

俺は屋上を目指そうとすると……

緑色の大きな鳥が邪魔をする。

翼を羽ばたかせるとその突風で倒れそうになる。

「あなたはここで死んでもらう」

部下何人かを階の捜索にあてて弥太さんは俺を殺そうとする。

「やるしかないんですかね？」

紅翼を取り出す。

その瞬間。

魔精霊である鳥が俺の右肩に、その鋭いくちばしを刺した。

「!？」

一瞬のことに反応ができない。

「死んでくれ」

そのまま、俺を殴る。弥太さん。

くちばしは深く食い込んだ……。

(俺はこんなことで死ぬのか?)

(嫌だ……)

くちばしを抜く魔精霊。

倒れていく俺の体……。

(俺は……。俺は死んでも良いから……。大好きな黒月は死んでもらいたくない!)

その思いを持った俺は無意識に意味のわからないことを言った。

『闇の深淵に封じられし』

自分の何かが変化していくのが解る……。

『其は、夜を紅くれないに染める者!』

力が……。今まで無かった力が今なら在る!

「貴様、ただの超能力者じゃなかったのか?」

『そうみたいだ。俺も始めて知ったから許してくれよ』

俺は言い終わった時には駆け出していた。

『はああ!』

紅翼を構えて魔精霊を切る。

魔精霊は大きな翼を羽ばたかせ羽を飛ばしてくる。

羽は鋭く。足や手に刺さった。

俺はそれでも止まらなかった。

『落ちろ』

叩きつけるように刀を振ったが、空振りに終わった。

背後に無数の何かが刺さった。

振り返ると前にいた魔精霊が後ろにいたのだった……。

『そんな、バカな……』

捕らえきれないほどの速度だと……。

「君じゃ、私に勝てないよ」

いつの間にか、正面にいた弥太が俺を思いつきり殴り、俺は、その場に倒れた。

「時間をくつた。屋上に行くぞ。静音はそこにいるはずだ」

聞こえてくる。人が移動してる足音が・・・。

また何もできないのか・・・。救いたい奴すら救えないのか・・・。

(まだまだまだやることあるんだ・・・！)

『ま、まだまだ・・・。まだ、諦められませんよ』

俺は刀を支えに立ち上がる・・・。

「何もしなければほって置いて上げたのに」

そうつぶやいて弥太と魔精霊が振り返りこちらを見た。

『我、世界の闇より現われし』

俺は頭の中から聞こえる言葉を言う。

『其は、夜を紅に染める者！』

「若造が！」

自分の限界の速度で魔精霊に向って駆け出す。

魔精霊は自らの体を回転させてくちばしで俺を狙う。

『あいつに一言、言っただけでやるまでは倒れてられないんだよ！』

俺の思いは届くことは無かった・・・。

なぜなら・・・。くちばしが俺の右肩を貫いていたからだ・・・。

(そういえば、右肩・・・。何時、直ったんだろう？そういえば、

俺の髪の色が赤いな・・・)

俺は自分の体の変化に気づきつつその場に再び倒れた。

## 月は堕ちた（静音）

私は今。ビルの屋上から飛び降りようとしてる……。すべての始まりは、あの時からだった。

（校外学習 2日目の夜）（参考：疑問と怒り！）

錬君の心を見てしまった時から……。

『（さようなら……。俺の大切な人たち……。そして、大好きな黒月……。）』

あの時から、自分には罪悪感があった。

私は錬君のことが好きだった……。

錬君に好かれたと思うていた。でも、あんなことになってしまっ  
なんて……。

私は私の事を好きだと思ってくれる。錬君の事を殺そうとしていた……。

校外学習が終わってから封印の間に入って鍵を閉めた……。

一人になりたかったのだ……。

その中で私は毎回、同じ夢を見た……。

私が錬君を刺し殺す……。そんな夢を何度も何度も見続けた……。

そんな時……。錬君が扉の前に来た……。

錬君が良い奴とも言ってくれて学校に来いっと言いに来るためだけにわざわざ来た……。

それだけでうれしかった……。でも、幸せは続かない……。

翌日……。

私は封印の間から出て学校に行こうと決意した。

廊下を歩いていると話し声が聞こえた……。

「あのガキもかわいそうだよな」

「ああ、昨日のガキか」

どうやら錬君の事のようにだ……。私は隠れながら話を聞いた。

「お嬢様を説得させるためにつれてこられたんだって？」

私は本当とは思えなかった……。

「社長も、ガキを殴ってまで連れてくるとはね……。」

もう、何も信じれなかった……。

私は走りだした。能力を使い。走りだした。

これが、黒服の能力が見せた幻想とも知らずに……。

私が走って着いた場所は……。昔、お父さんと一緒に来たビル……。

私は、生きること……。誰かに迷惑をかける事に疲れた。

『死のう』

その言葉だけが頭の中にあつた。

そして、屋上に行き。『死のう』っとしている。

く現在く

飛び降りれば死ぬ高さだ……。足や手が震えている……。

怖いんだ……。死ぬのが……。

『バン』

「静音！」

私の名前を叫びながらお父さんが出てきた。

「お父さん……。」

「バカなことはやめなさい！」

とめようとこちらに来る。

「来ないで！」

叫んでしまった。

お父さんは不思議そうに立ち止まった。

「何で、何で昨日……。錬君を無理やり連れてきたんですか」

「何のことだい？」

とぼける父親を見て。

「馬鹿にしないで！」



叫ぶと静かになった。

「昨日のことは錬さんが来たんだよ。信じてほしい・・・」

「もう、私は生きることになりました」

私はゆっくりと傾いていって・・・。

「やめる！」

お父さんは能力で魔精霊を出すかすべては手遅れ。

私の体は大空に飛び出していった。

## 俺の望み

「黒月が飛び降りる少し前」

（上で騒いでる・・・。）

（黒月はどうなったんだ？）

（そもそも、俺は死んだのか？）

ために手足を動かす・・・。

（右腕以外は動く・・・。そういえば肩をやられたんだっただんな・・・。）

倒れる前のことを思い出しながら意識を取り戻していく。

（まだ・・・。倒れるわけには行かないな・・・。）

俺は立ち上がった。

そして、ゆっくり・・・。ゆっくり、屋上を目指す。

屋上から聞こえる声・・・。

「昨日のことは錬さんが来たんだよ。信じてほしい・・・。」

（弥太さんの声だ・・・。）

「もう、私は生きることになりました」

（黒月の声だが・・・。あいつ、もしかして・・・！？）

「やめろ！」

（間に合え！）

足が痛むがそんなことを気にせず走りだす。

屋上の扉の近くには黒月家の人がいた。

「退ける！！！」

そう叫びながら突っ込んで押し倒しながら進んだ。

走りながらあたりを見ると黒月の姿がない。

「まだ動けるのか！」

後ろから弥太さんや他の人の声が聞こえるが気にしない。

俺は扉からまっすぐ進んでそのまま飛び降りた。

「黒月！」

下には魔精霊と黒月がいた。

「錬君！」

魔精霊は急降下するが黒月に追いつけない。

俺も加速してるが追いつけそうにない。

俺は魔精霊に追いついた。

「お前にかまつてる暇はない」

そう言うが魔精霊は翼を飛ばたいて鋭い羽を飛ばす。

何本も刺さる。

「うわああ」

叫んでしまった。

「錬君！やめて、ペク！」

黒月が言うのと魔精霊も攻撃をやめた。

魔精霊の名前はペクって言うのか……。

俺はペクのくちばしを掴む。

「協力しろ。大事な人を救うんだからよ」

ペクはくちばしを無理やり開いて。俺の手が離れた。

（だめか！）っと思ったその時。

ペクの翼が俺をたたきつけた。

その勢いで黒月に追いついたが……。すごく、痛い……。

「よお、黒月。次、会う時は学校が良かったんだけどな」

俺がどうでも良い話をする。

「何で、何でそこまでしてきたんですか！」

黒月は叫んだ

「大事だからに決まってるだろが！」

俺はその叫びより大きな声で叫んだ。

「何で……。何で」

黒月は泣き出した。

「泣いてる時間も……。説教する時間も無い。後で説教してやるからな！」

俺は左手で黒月の手を掴み。

上に（ペクがいる方に）できるだけ大きく投げた。

投げたつと言つても勢いを殺すくらいにしかないっが……。

ペクは黒月の服をくちばしで銜えた。

（これで……。黒月は大丈夫だな……）

「黒月！」

俺はどんどん遠く行く（俺だけが落ちてるから）黒月に向つて言つ。

「ばい！」

泣いて、「はい」つといえてない。

「俺はお前のことを嫌つてるわけじゃないからよ……。頼みごとをする！」

（もうすぐ……。地面に激突する）

俺は地面に向けて左手を突き出す。

運がよければ左手が壊れて終わりにできる……。

「俺の分も生きてくれ！」

『ドン！』

自分の頼みごとを言つて俺は地面に激突した。

「錬君！！！！！」

黒月の声が聞こえて……。

俺は赤い液体を流し何事もできずに、ただ倒れた。

俺の望み（後書き）

黒月家騒動編（完）

## 『生きる道』

(暗い……。暗い闇の中にいるようだ……)

そうか……。俺は死んだのか……。

当然だよな……。

あんなところから飛び降りて……。

死ななかつたら化け物だな……。

……。

黒月はどうなったんだろうか……。

あの後、どうしてるのだろうか……。

俺のために泣いてるのか？それともまだ、死のうとしてるのか……。

まあ、死人の俺にはもう関係ないかも知れないがな……。(

思い出すのは……。自分の過去……。

親父に拾われて……。自分の力を教えてもらい。

刀の力はどれほど危険かを聞き……。

力をつけた。

それから、中学校生活が始まり。誰にも相手にされず終わった……。

そして、親父に行けといわれていくようになった。高校……。

初日に黒月と岡崎に出会って……。それから俺は変わった……。

生徒会に喧嘩アスラ・クライシスを売って……。いろんなことを知って。

校外学習に魔神相剋者に出会って。

黒月に殺されそうにもなったな……。

そういえば、あの時が初めてだな……。

岡崎と戦ったのは……。

いろんなことがあった中で……。

使ってはならない武器『煉獄』を使って……。

その後だったな……。

黒月が学校に来なくなったのは……。

それから、悪魔がやってきて……。

そういえば岡崎はどうなったんだ？

すっかり忘れてたな……。

いろんなことがあったな……。

15年くらい（捨て子だったので実際年齢不明）生きていて。

この1年がすごく充実していた……。

俺はやっぱ死んだのかな？

ふざけ合っ俺と岡崎の姿……。

黒月の笑顔……。

思い浮かぶいろんなもの……。

いやだ……。まだ死にたくない……。俺は遣り残したことがた

くさんあるんだ……。

「嫌だ！」

そう言っ俺は目が覚めた。

「あ……」

全身が痛む……。起き上がれない。

俺は布団の中にいた。もちろん、全身が痛むのでこれまでのことが

夢落ちつと言っわけではないようだ。

周りを見ると見覚えのある場所……。

どこっだけな……。

落ちたときに記憶もあやふやにでもなったかな……。

どこか思い出そうとしてると近くのドアがあいた……。

「すみません。ここどこですか？」

いきなり、そんなことを聞いた。

「れ、錬君!？」

（その声は黒月!？）

「あー。良かった。まだ生きてるみたいだな」

黒月はすぐに近づいてきた……。

『パン』

そして、俺の頬をたたいた。

「どうして……どうしてですか!？」

泣きながら言ってる。

「……?」

頭がぼんやりしてる……。

「どうして、あんなことをしたんですか!？」

(ああ……。そう言うことか……)

(何で、黒月を追って飛び降りたかっと思ってるか……)

「瞬間の中に『黒月が好きだから』っと思う言葉が出たがいえない……。

「さあね。とつさに動いたからかな……」

適当なことを言った。

「ぐず……。何で、あんな無茶なことをしたんですか……」

涙を落としながら何度も何度も言った。

心が痛む……。

「まあ、その……。あれだ……。二人とも無事でよかったじゃないか……」

「錬君は全然無事じゃありません!」

目の前で怒られた……。

「錬君は後のことを考えなさすぎです。もしも……。もしも、錬君が目覚まसानかつたらどうしたんですか!」

「……」

必死に怒る黒月……。

(こんな姿……。見たこと無かったな……)

「残される人の気持ちも考えてください!」

「す、すみません……」

(あれ……。俺が説教するはずだったのに……。俺が説教されてる……?)

そのことにやっと気づいたが……。

(まあ良いか……)



「どうして、どうして私なんかの為にそこまでするんですか・・・」  
「お前だからそこまでやるんだよ・・・」

(・・・)

(とっさにすごく恥ずかしいこと口走っちゃまった!?)

「え・・・」

黒月の顔が赤くなってる・・・。

自分の顔も赤くなっているのだろう・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

(気まずいつて!)

「静音ちゃん顔真つ赤だよ」

その沈黙を破る明るい声・・・。

「ひゃ!」

「わぁ!」

驚く俺と黒月・・・。

「いやー。君が紅夜鍊君か」

もう一人老人の声・・・。

二人は一体!?

## 存在するはずのない

老人と黒月より少し年上の女性がいた。

「あ……。はい俺が錬です」

「孫から話は聞いている。屋上から落ちたんだね。良くそんな怪我で終わったね」

「まあ、親に体を頑丈にするように育てられましたから……」

「それは良いことだ」

そう言つて満足そうな顔をするおじいさん……。

「わしは医者でな。君の治療をしたが……。二、三日で直るだろう」

(おいおい……。屋上から落ちたくせにそれくらいかよ……。この人やぶ医者じゃないだろうな?)

「おじいちゃんは昔病院で働いてたから、信じて大丈夫だよ」

「そうなんだ……」

「自己紹介がまだだね。私は静音ちゃんの従姉妹の楓かえでよろしくね」

「わしが静音の父親の父親。まあ、おじいちゃんの弦祭げんさいじゃ」

「あ、俺は黒月のクラスメイトの紅夜 錬です」

「まあ、私たちは悪魔じゃ無いけど大体のことは知ってるから」

「そ、そうなんですか……」

「たとえば、静音ちゃん的能力とか、君の力とか、静音ちゃんの好きな人とか、静音ちゃんのスリー……」

「楓ちゃん!」

楓さんが何か言おうとしたときに黒月が大声で言った。  
なぜか黒月の顔は赤い。

「錬君1つ良いかい?」

老人が真剣な目で聞いた。

「はい?」

「君は一体何者なんだい?」

「力があるただの一般人ですけど？」

「いや、そう言うことじゃない。私が勤めていた病院で君のレントゲンを取ったんだが……。君には普通は人が持たない臓器や

あるはずの場所に無かったりするんだよ」

一瞬、この老人が何を言ってるのか解らなかった。

「どういうことですか？」

「君は普通じゃないんだよ。能力以外にも特殊な人間だということだ。まあ、普通の人間より少し変わってるくらいだがね」

(少して……。そんな次元じゃなくなってるんじゃないか……)

「まあ、特に問題ないから大丈夫」

「はあ……」

(こつちにしては真実をしっているいろいろ問題なんだが……)

「そんな腕じゃ家事はできないだろう……。家にゆっくり泊まっ  
ていくといいよ」

「ありがとうございます」

「孫がお世話になってるから当然のことだよ」

「こちらこそお世話になってます」

「おじいちゃんはそろそろ仕事だね」

「そうか、そんなじかんか……」

時計を見た楓さんが伝えて弦祭さんが時間を確認して言った。

「それでは、私は失礼する」

そう言っ出て行った……。

(おじいちゃんと呼ばれていたが……。だいぶ、若くて元気あるな……。声は老人なのに……)

「じゃ、朝ごはん食べようか」

「手伝います」

そう言っ楓さんと黒月が立ち上がり出て行った。

俺も立ち上がるうとするが……。

(両肩……。痛い……)

激痛で起き上がることもすらできなかった。

「錬さん一人ですね？」

窓の方から声が聞こえた……。

（俺のことを知ってる？）

鍵が開いてた窓から入ってきたのは……。

「先日は勘違いをしていて……。すみません」

入ってきて早々……。頭を下げた弥太さんだった……。

「頭上げてください。事情はわかってもらえてみたいなので俺はそれだけで良いんですよ」

「そうですね、それは良かった」

態度がすごく変わった気がした……。

「あなたは娘の命を恩人です」

「俺はやりたいことをやっただけであって、そんなこと気にしないでください」

「じゃ、気にしないんで。これからも娘をお願いします」

「はい」

そして、弥太さんは窓から出て行った……。

タイトルなんて書けばいいの? 「作者」

窓から出て行った弥太さんを見ながら……

「なんだったんだ……」

俺は窓を見ながらそうつぶやいた……

「錬君。ご飯ができたよ」

ドアから黒月が読んだ。

「あ、ああ……」

(さっきのことは言わなくて良いか……)

俺は立ち上がる……

(全身が痛む……。しかし、何事も無いように見せなければ……)

痛む全身に鞭を叩いて立ち上がりドアに向つ。

「錬君安静にしてない!」

(あー、そうか医者からどういう状態か聞いているのか……)

寝起きのせいか……。全然頭が回らない……

「大丈夫だ……。俺は頑丈なのは知ってるだろ?」

そう言つて進もうとすると……

「本当かな?」

後ろから楓さんが俺を蹴った。

「う!」

蹴ったといつても相手からしたら軽く蹴った程度で普通なら何も感じない程度だった……

今の俺にはそれを耐えれない状態にあつた……

「錬君!？」

黒月が心配そうに叫ぶ。

「けが人は無茶しないでね」

楓さんがそう言つて俺を椅子まで運ぶ……

「すいません」

俺は謝るつと・・・。

「誤るなら、静音ちゃんと契約しなさい」

「ブ！」

二人が吹いた。

「何言ってるんですか！」「楓ちゃん！」

二人の声が重なる。

「どうしたの？二人とも顔が真っ赤だよ？」

「・・・」

静かになる・・・。

「2人とも面白いねー」

（絶対遊ばれてる・・・）

「さ、食べよ」

楓さんはすごく満足そうだ。

「いたたきます」

箸で掴んで食べようとすると・・・。

（痛！）

箸を落としてしまった・・・。

「あれ？」

「錬君」

「大丈夫？」

心配そうな2人

「寝起きでちよつとふらついているのかな？」

そんなことを言っつて箸を掴むがまた落としてしまっ・・・。

「静音ちゃん、錬君に食べさせてあげたら？」

「！？」

二人とも顔を真っ赤にして反応をした。

（・・・え？食べさせるつて・・・く、黒月が・・・）

俺の頭の中でオーバーヒートしそうになっている・・・。

「た、食べれますよ・・・。自分で」

そう言うが黒月は迷ってる・・・。

俺は箸を掴んで手を離さないようにしっかりと持つ。

「れ、錬君……」

黒月に名前を呼ばれる……。

振り向くと黒月が箸でご飯を掴んでいる……。

「あーん」

真っ赤な顔をして言う。すごく恥ずかしそうだ……。

「食べれるよ」

どっどん顔が赤くなるのが解る……。

「あーん」

そう言ってもやめない黒月……。

俺の口が少しずつ開いていく……。

「あーん」

(すごく恥ずかしいって！)

顔を真っ赤にさせて黒月が顔を真っ赤にした錬に「ご飯を食べさせた。

「……」

(恥ずかしくて黒月の顔が見れない)

「すごく面白いね」

一人笑う人がいた……。

こんな感じにご飯を食べていった……。

序章は終わり本編に？（前書き）

錬と黒月の話を書いているときりが無いので飛ばして物語を進めます。



## 序章は終わり本編に？

錬と黒月の幸せ（？）のひと時はすぐに終わり……。  
本日から夏休みを迎えようとしていた。

「錬は夏休みにどっかいくのか？」

親友の岡崎との雑談でふとそんな話題がでた。

「俺か？俺は親父のいる実家に帰ることくらいかな」

「どこにあるんだ？」

「どうせならついてくるか？近くの山に住んでる」

「山か……。なんて名前なんだ？」

「名前は知らないが……。掲示板があるな」

「いや……。掲示板に書いてるだろ山の名前……。」

「いや、『家族のことを思い出してみてください』とか『自殺はやめましょう』とか書いていたな」

「……。もしかして・不賭山ふとさんか？」

「あー、そんな名前だった気がする」

「良くお前生きてるな……」

岡崎は珍しいものでも見るかのように俺を見た。

「いや、住みやすい場所だろ？」

「自殺スポットで有名なとこだぞ……」

「熊とかいのししとか入るけど……。大丈夫だろ？」

「普通の人間は大丈夫じゃねーよ」

「それで、来るか？」

「死にたくないから行かないな」

「そんな、大げさな」

俺は笑った。

「黒月はどうだ？」

俺は隣に座っている黒月に話しかけた。

「え？な、何が？」

びつくりした。黒月がこっちを見る。

「こいつの実家に帰るとき一緒に来るか？だってよ」  
俺の代わりに岡崎が言った。

「じ、実家って事はお父さん。い、いるんじゃない……」

「別に良いんじゃないね？」

「え、それって、私を……」

（黒月が何かぼそぼそ言ってるが聞き取れない……。まあ、良いか……）

「とりあえず、行くのか？」

「はい！」

嫌に元気良いな……。

「じゃ、行く日決まったら連絡するよ」

「はい！」

『生徒全員は体育館に集まりなさい』

「行かないとな」

「ああ」

「はい」

こうして、1学期が終わった。

そして、夏休みの山の中で

（そろそろ。長期休暇か、あの馬鹿が帰ってくるかな？）

熊の屍を持ってふと思った。

「まあ、どうでも良いか」

そうして彼、鬨夜は今日も元気に1日を過ごす。

息子が持ってくる問題事など知らずに……。

## 実家へ

夏休みのある日。

俺は実家に戻る日が来た。

俺を育てた。紅夜鬪夜の元に。

（・・・よし、準備はできた・・・。黒月を待たせると悪いし行くか）

そして、家を出た。

駅の前で待っている黒月を見つけた。

「おはよう」

「おはようございます」

律儀に頭を下げる黒月。俺は時間にも気にしながら黒月との会話を楽しんだ。

そして、数分後。

「そろそろ時間ですね」

時計を見た黒月が言った。

「ああ、荷物持つよ。俺にとつちや重いとも感じないからな」

そう言っつて黒月の荷物を持ち上げる。

「あ・・・」

「ん？」

「良いのに・・・」

「いっつて、さて、乗ろうぜ」

そう言っつて駅に入って電車に乗り込む。

「そういえば・・・。鍊君のお父さんってどんな人？」

「俺の親父か・・・。まあ、厳しい人だな・・・。そして、山にもつてるようで夜になったらどこかに出かけることがある不思議な人だ・・・」

「へー・・・」

「まあ、怖い人じゃないよ。他人には・・・」

(俺に向ってなら真剣を向けてくるからな・・・)

「そ、そうなんだ・・・」

黒月の雑談をしつつ目的地にたどり着く。

そう、森の近くの駅・・・。

「ここからは歩くから、しんどくなったら言ってくれよ」

「だ、大丈夫です」

そうは言うが・・・。

1時間後・・・。俺たちは・・・。

山の中にいた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「黒月、休憩を取ろう」

「大丈夫ですよ・・・」

息切れをしているがそんなことを言う。

(・・・)

「解った解った」

俺はしゃがんだ。

(あー・・・。やっぱり恥ずかしいかも・・・)

「おぶって進むから乗れ」

「え・・・?」

「ほら、早くしろよこっちだって恥ずかしいんだ・・・」

「で、でも、私・・・」

「ん?」

「重たいですから・・・」

顔を赤くして黒つきが言った。

「大丈夫だ。なんとも無いからよ」

「うん・・・」

黒月が俺に乗る。

(重いつて言うが・・・。全然重くないぞ・・・)

「しっかり掴まれよ。ちょっと飛ばすからさ」

「はい・・・」

黒月は俺にしつかり捕まる……。

(背中にやわらかいものが……。それに良いにおいも……。)  
俺は理性を保つことに精一杯だった……。

二人とも顔を赤く染める……。

「重くないですか……？」

「ああ、大丈夫だ……。」

俺は前を向いてそういった。

「行くぞ……。」

「はい」

俺は荷物を掴んで強く地面を蹴り木に登って木から木に飛び移って  
いく。

「すごい……。」

黒月が耳元でそういった。

「俺の親父はもっとすごいぞ……。」

「そうなんだ」

そして、森の中で俺は急に立ち止まった。

「どうしたの？」

黒月が不安そうに聞いた。

「来る！」

黒月と荷物を降ろして俺は木刀を構える。

『バン!』

その瞬間に俺の木刀は折れて宙を舞った。

## 普通の家？

宙に舞った木刀が地面に落ちる。

その時には俺の首の近くに木刀があった。

「くくつく」

木刀を持った紅夜鬪夜は笑っていた。

「何笑ってんだよ親父」

「え！」

俺の発言に黒月は驚いた。

「始めまして、俺が紅夜鬪夜。この馬鹿の父親ってことになってる」

「始めまして、錬君にお世話になってる黒月静音って言います」

二人はとりあえず挨拶から始めた……。

「それにしても錬」

「ん？」

「同じ木刀なくせに碎けるなんて、まだまだ俺には追いつけないな」

「あの速度で反応できたことだけでもほめてもらいたいものだね」

はつきり言ってこの親父がどのくらいの速さできたのか解らない……。

。。それに体重と勢いをつけた木刀を受け止めたら折れるだろ……。

。この親父が相手だったら……。

「まあ、良く帰ってきたな。まあ、家に行こうか」

親父が荷物を持ち。俺が再び黒月をおんぶする。

黒月は結構断っていたが……。その位置から家までの距離を聞いておんぶすることになった。

親父は「先に行くよ」とかいつてすごい速度で帰っていた……。

俺も木から木に渡って家に向う。

「錬君のお父さんってすごい人ですね……」

走っていると黒月が話しかけてきた。

「いや……。アレはもう、すごいというか何者かわからない……。

俺以上に人間か怪しい……。」

子供の頃、川に落ちて流されていた時。水面を殴っただけで周りの水がはじかれてその間に俺を助けたとか言っていたこともある。。。

（思えば……。あの人は悪魔なのかも知れないな……）  
人並み外れた親父に疑問ばかりが浮かんでいく。

「そ、そうなんだ……」

その後少し会話をしながら移動をすると家に着いた。  
懐かしい実家の扉を開けて

「ただいま」

「お帰り」

いつもの挨拶をかわす。一人生活をしていたせいかなこんな会話ですら良いものだと思ってしまう。

「お邪魔します」

その後から黒月が入っていた。

「さあ、のんびりくつろいでくれ。どうせ何にもないからな」

我が家は畳の上にタンスやテーブルが家具で置かれていて他には特に目立つものが無い。

たまに親父が町に行って食材は買うが1月に一回あるか無いかな。。。

思えば親父はどこから金を調達してるのだろう……。

「さて、お客さんもいるし今日は豪華な晩飯でもするか」

「気を使わなくても……」

「いや、親父のことだ自分がた……」

言ってる途中でゴツンと頭を軽く殴られた。

「嫌なことをいうな。まあ、さくって狩って来い」

普通の家庭ならこのかってこいは何かを買って来いって意味だろうが俺の家でそんな常識は通用しない。

なぜなら、親父が渡したのは木でできた槍だからだ……。

「え？」

この場に慣れていない黒月だけが疑問に感じている。

俺はため息しながら立ち上がり木の槍を持ち。白翼を取り出して家を出た。

錬が出て、

「さて」

錬がいなくなったことを確認した鬨夜はまじめな顔で黒月を見つめた。

「黒月さん。あなたはあいつのどこまでを知っている？」



襲撃！

静音 side

闘夜さんと二人きりになった時に聞かれた。

「私は……」

私は知っていることをすべて話した。

能力や意識がなくなったとき呪文を言って髪が赤く染まることなど……全部だ。

「そうか……。暴走のことも知ってるのか……」  
暴走つと聞いた時びっくりしてしまった。

「暴走つて……。意識は無いけどそこまで……」

「俺は暴走状態のあいつに殺されかけた……」  
さらに驚く言葉が出てきた……。

「そ、そんな……」

「これだけは解ってほしい。あいつの暴走には2段階ある……」

「2段階ですか？」

見たこと無い……。私が見たことあるのは髪を赤くした時だけだ……。

「基本的なのが1段階目だ。呪文を唱えて髪が赤くなる」

（髪は赤くなるんだ……）

「2段階目は1段階目の状態と同じだが……。目が赤くなって完全に敵味方がついていない状態になる……」

「え……」

「暴走つといつてもわずかな意識から敵味方は解るんだが2段階目はまったく解っていない。現に俺は一度殺されかけた……」

私は解らなかつた。

この闘夜さんがそれほどまでして錬君を育てた意味も……。

なぜ、そんなことが起こるのかも……。

「まあ、そんな感じだけど仲良くしてやってくれ」  
この人が何を考えているかも……。  
その後、少し雑談をした。

静音 side END

錬 side

暗くなってきた頃大物の猪を狩った俺は上機嫌で家を目指していた。

(!?)

家に近づいていくと、後ろからの殺気を感じた。

猪の屍を放り投げ紅翼を出して構える。

数人の黒い影の中の一人が俺に向ってきた。

影が何かを投げた。

それを刀で弾く。

『キン』

鉄と鉄がぶつかる音がした。

地面に突き刺さるそれを見る。

短剣だった……。

(マジかよ……)

心の中でつぶやいていると影が何か(おそらく短剣)をもって襲い掛かってきた。

「何なんだよお前！」

そう言いながら襲い掛かる相手に切りかかる。

それを相手は受け止め再び音が鳴った。

相手は何も言わずに武器を振る。

俺はそれを受け止めながら複数入った影のことを気にする。

錬 side END

黒月さんと雑談をしていると隠している殺気を感じた。

(・・・。隠そうとしてる殺気が近づいている・・・。数は・・・3人か)

気配だけである程度のが解つたので立ち上がり。

「錬の奴が遅い。少し見てこよう。黒月さんはここにいてくれ。入れ違いになつたら困るからな」

「あ、はい」

心配しないように言った。

(そういえば、錬の奴も帰ってこないな・・・。襲われたか?・・・。まあ、死にはしないだろ・・・)

息子の心配を全然せずに家を出る。

そして、家を出ると地面を強く蹴り錬の倍以上の速度で移動する。

殺気を出している本人たちを見つけた。

「山のおくにご苦労様です。さて、なにしにきたのかな?」

そんなことを言つて敵の前にでた。

敵はバラバラになつた。一人だけが家の方に向つた。

俺は家に向つた奴を追撃しに行く。

二人が後ろから何かを投げるのを感じた。

俺は振り向かず地面に足をつけ。急加速をした。

家に向つた奴に追いつき横から蹴りを入れる。

相手は俺の蹴りを両手で受け止め移動することをやめる。

「へー。良く受け止めれたな」

暗くて相手の顔が見えない。

そこに後ろから二人が追いついてきた。

二人は短剣を持ち迫ってくる。

俺の片足を受け止めた奴は足を掴んで仲間がいるほうに俺を投げ再び家を目指す。

(結構力強いじゃないか!)

そんなことを考えている間も投げ飛ばされ続け。後ろの敵が短剣を振りおろした。

俺の背中に短剣が刺さるが深くは刺さらなかった。

俺は注射を打たれるような痛みを感じながら敵の一人に蹴りを入れる。

「ぐは！」

そんなことを言って飛ばされていった。

それを見て驚いてる。もう一人に両足をつけ力強く蹴った。その勢いで家の方に進み。蹴られたほうは飛ばされて近くの木にぶつかった。

俺は全速力で家に向う。

敵はもう、家の前に入った。

俺は拳を作り家の前に入るそいつを思いっきり殴る。

はずだった・・・。

そいつは俺の存在に気づいて拳を避けた。

俺の勢いは止まらず家の壁にぶつかり・・・。家の壁が壊れた。

「キヤー！」

中にいた黒月さんの悲鳴が上がる。

俺は気にせずに足を上げ敵に攻撃を続ける。

それに気づいた敵は俺の横から殴った。

威力は無いが片足で立っていたので倒れて転がる。

土ぼこりが上がる中、木刀を置いてる場所まで転がり木刀を取り。

敵にめがけて振る。

敵は短剣で受け止める。

短剣に木刀が刺さる。

（切れ味の悪い短剣だな！）

そう思いつつ後ろに飛ぶ。その頃やっと土ぼこりがなくなってき始めた。

相手の顔を見るとどこかで見たことのある顔だった・・・。

その時、

「お父さん。何でもかじっているの!？」  
黒月の言った1ことで争いは終わった・・・。

## 力を持つもの同士

俺の紅翼と敵の短剣。

刀と剣が交わる。

奴バックステップと同時に短剣を投げる。

紅翼で弾く。

「ッチ」

舌打ちをしながら服の袖に手を入れる。

俺は後ろに退く敵に追い討ちをかけようと踏み込む。

袖から4本の短剣をだして3本を投げる。

(!?)

俺はあわてて横に飛ぶ。

相手もそれにあわして飛ぶ。

そして、短剣を俺に向けて振り下ろす。

長い刀じゃすぐに対応できないのをついた敵の攻撃だった。

俺は左腕で受ける。

「っぐ！」

痛む左腕。

着地を失敗して俺は倒れた。

この隙に奴は家の方に向う。

(いかせねえ・・・!)

俺はすぐに立ち上がる。

そして、地面を強く蹴り。

敵の前に行く。

「うっとうしい！」

そう言っつて敵は俺を蹴る。

蹴りを手で弾いて俺の拳が奴の顔面に当たる。

「が！」

手加減をしていないので奴は少し吹っ飛んで地面を転がっていく。

「手加減してるとだめだな・・・」

「そうだな・・・。他の奴もつぶさないとだめなんだよな」  
少し会話をすると。

『闇の深淵に封じられし』

俺が呪文を唱え。

奴は服のポケットから箱を取り出す。

『其は、夜を紅くれないに染める者！』

唱え終わると髪の毛が赤く染まる。

(この能力を使いこなせてる！)

俺は自分の能力が使えることで確信する。

相手はそれを見て驚きながら取り出した箱から薬のようなものを出す。

それを口の中に入れる。

俺は刀を向ける。

敵と俺が飛ぶ。

俺の方が少し速い。

『ドン！』

奴の腹部に俺の刀が直撃する。

倒れこむだろうと思っていた敵は俺の目の前にいた。

「なぜ・・・？」

今、敵を斬ったはずなのに手ごたえもあつた・・・。

目の前から殴りかかる。

頑丈に鍛えた俺の体にはあまりダメージは無い。

俺が殴る。

「ガ！」

敵が吹っ飛ぶ。

敵に追い討ちをしようと思ふ。

「はああ！」

拳を作り敵に向ける。

そのときだった。

突然、気持ちい風が吹いたのは

そう、親父が俺を木刀で叩き落としたのだ。

「ガハ！」

地面に叩きつけられて俺は気絶した・・・。



## 過去の真実と別世界の人間

俺が気がついた時には家にいた。

「気づいたか」

目の前には親父がいた。

「何なんだよ親父」

「・・・意識あつたのか？」

「当然だろ？」

「暴走を使いこなすのか・・・」

(暴走？あの状態を親父は見たことあるのか・・・)

「何なんだよそれ・・・」

「おきました？」

隣の部屋から黒月が顔をだす。

「ああ、大丈夫。起きたから」

俺の変わりに親父が言った。

「お邪魔してます」

黒月の後ろから奴がいた・・・。

そう、俺と戦っていた奴だ・・・。

俺は紅翼を取り出した。

「貴様！」

そう言つて飛び出そうとしたとき・・・。

「やめろ」

つと親父の蹴りが腹に入った。

「がは！」

俺は壁まで吹っ飛んだ。

「この子は黒月さんの親戚だぞ」

「マジかよ・・・」

「本当です・・・」

黒月も同意する。

「知らないとはいえ……。すみません」

奴は謝った。

「俺の方こそすまない……」

「まあ、おたがいに誤ったところ悪いが……鍊、お前もいろんなことに首を突っ込んでいるようだから本当のことを言おう」

「本当のこと？」

「ああ、お前はこの（……）——世界の人間じゃない」

「はあ？」

「お前は異次元が歪んだときにできた歪から出てきたんだ」  
明かされる真実……。

「嘘だろ……」

「ああ、本当だ。昔お前とであつた話は半分は嘘だ」

あの話か……。猪と戦つてたとかの……。

「刀を持つてたが戦つてたのは猪じゃなく俺と戦つていた」

「親父かよ！」

思わず突っ込んでしまった。

「見た目が人間できるわけにはいかなかった。だが……。お前は悪魔でもない力を使った……」

「それが暴走？」

「暴走もだが……。刀の方だ……」

「刀？」

「お前は刀を出すだけじゃない……。刀を構成し何も無い場所から刀を作りだしたんだ……」

「なんだよそれ……」

「俺との戦いの中で崖に落ちて記憶を失い。おとなしくなつたお前を俺は育てた」

（そんなことがあるなんて……）

「その時にお前は刀を作る方法を忘れて他の能力に目覚めた。お前が作った3本の刀を残して……」

「そうなのか……」

「ああ、真実だ。どうだ？嘘をついていた俺がにくいか？」

「いや、別に良いんじゃない？」

「そうか」

笑う俺と親父。

言葉ではああ言ったが・・・。

俺の心の中では黒いもやもやが残った・・・。

「あの・・・。私たちもいるのにそんな話して良いんですか？」

黒月が言った。

「別に良いだろ？」

「特に問題はないな」

（特に知られて困ることじゃない）

俺はそう思った。

## 別世界からの訪問者

そして、寝ていた部屋を出ると・・・。  
半壊した居間と弥太さんがいた。

「久しぶりだね。お邪魔してるよ」

「お久しぶりです。じゃないよ！」

そう、弥太さんはふつうに飯を食べてた・・・。

「もしかして、あなたたちもあの中にいたんですか？」

「ああ、暗くて錬さんだとは思わなかったよ」

笑いながら話す弥太さん。

「いやー、それにしても誠二と戦っても無事とはねー。強いですね」

誠二とは戦った男のことか・・・。

そつえば特殊な技を使つたな・・・。

「親父さんやめてください。あまり知られたくないんで」

俺の後ろで誠二が言った。

「誠二って言うのか。俺は紅夜錬。よろしくな」

「静姉がお世話になってます。黒月誠二。あなたより1つ年下です。よろしく」

俺はすぐにおかしなこと気づいた。

「何で俺の年を知ってる？」

初めて会ったはずなのにこいつは俺の年を知っていた・・・。

「まあ、家で静姉が良く話してるんで。あ、黙ってた方が良かったかな・・・。まあ、いろいろ知ってます」

「そうか、それなら良い」

会話を終え。自分の部屋で眠ろうとすると・・・。

『ギーーーーー』

爆音が響いた。

「なんだ!？」

俺が部屋を出ると全員が驚いていた。そう・・・。親父以外の全員

は……。

「解らない。だが、嫌な気配がする」

弥太さんが言った。

「来た……。来てしまったのか……」

親父は諦めたような風に言った。

そして、立ち上がり自分の刀を取りにいった。

「親父、なにがおこってるんだ？」

振り返らずに言った。

「何、同じだよお前が現れた時と。次元が歪んでる」

「歪んだらどうなんだよ!？」

「同じだって言っただろ?何かが来るんだよ」

親父は刀を持って外に出る。

「俺も行く」

「私もついていきます」

俺と黒月が言った。

「娘が行くなら、行かねばなるまい」

「静姉が行くなら」

結局全員が行くことになる。

「遊びに行くんじゃないぞ!」

「解ってる!」

親父の怒鳴るが俺はそれにすぐ俺が返事した。

「死ぬ気で着いて来い」

そう言つて家を飛び出す。

俺もその後に行く。

俺は必死に親父を追った。

親父が立ち止まった。

「ここだ」

そこには歪みがあった。

歪んでいた。その空間のみが……。

後ろから黒月たちが来た。

「何だよこれ」

自分の中からそんな言葉が出た。

『グオオオー』

そして、歪みの中から爆音と共に何かが出てきた。

それは黒くて……。

機巧魔神の物だった。

「今回は人じゃないようだな」

爆音の中親父が言った。

「まさか……」

「そんな……」

「これは……」

俺と黒月、誠二は驚いた。

それは、機械仕掛けの悪魔。機巧魔神アスラ・マキナだったから……。

「機巧魔神！」

俺がそう叫ぶ。

黒い機巧魔神は歪みから姿をすべて出して歪みはなくなった。

『コノセカイは、ホロンデイナイ』

機巧魔神がしゃべったのだ……。機巧魔神はしゃべらない……。

呪文を唱えるが会話じゃない……。

「はああ！」

親父が剣を抜いて切りかかる。

『キン』

そんな音がした後、親父の刀は折れた。

『人間力……。ソコニイルノ八実験体09カ。何ヲシテイル？殺

セ』

機巧魔神は俺を見てそういった。実験体？09？何だそれは……。

「なんなんだよお前は！」

俺は機巧魔神に切りかかった。取り出したのは白翼。機巧魔神の護

法装甲も意味が無い。能力を断ち切る刀。

『記憶ノ調整ガデキテイナイノカ』

機巧魔神は俺の刀に触れた瞬間……。

『バリッ！』

いかなる攻撃もどんな高温にも耐え。その形を保っていた白翼は……。

跡形もなく……。碎け散った。

その場にいた俺、親父、黒月は驚いて動きが止まった。

その間にも機巧魔神は俺の首に手を出し。首を掴んだ。

「ガハ」

（息が……。できない！？）

『記憶ガ消エテイルノカ、再生サセナケレバ』

意味の解らないことを言う機巧魔神。

黒月と親父が同時に動いた。

「錬！」

「錬君！」

黒月は風の刃を出す。

親父は背中に背負っている予備の刀を抜く。

『邪魔ダ！』

親父の刀は折れ。黒月の風は消えた。

「錬さん！」

遅れて弥太さんも魔精霊を出す但那中間に

俺の頭の中に何かが入ってきた。

そして、機巧魔神は手を離し魔精霊にの攻撃を止め返り討ちにする。

俺はひどい頭痛がおこった。

「あああああ！」

頭が割れそうだ……。

## 記憶のかけら

(何だこれは……)

薄暗い。試験管や設備があることから研究所のようだ。

『実験ハウマクイッテルノカ?』

一体の機巧魔神が言った。

『実験体098今マデトチガツテ順調ダ』

設備の中には人間がいた。

俺は思い出した。歪みから出てきた機巧魔神が言った。

『記憶ノ調整ガデキテイナイノカ』

『記憶ガ消エテイルノカ、再生サセナケレバ』

(これが俺の記憶だというのか……)

『記憶ノ調整モ順調ダ。我等ガ神ヲ殺シタ人間達ヲ殺スヨウニオシエテル』

(……。俺は人間を殺すためにいたのか……)

『能力ガアルト聞イタガナニガツカエル?』

『システムトシテ武器ヲ自在ニ作レル。シカシ、反抗シタトキノタ

メニソレノ対策モデキテイル』

『ソレハ、楽シミダ』

(武器を作る?そんなことできるはずが……)

そこで俺の記憶は途切れた。

「うわあああ！」

一瞬で見た記憶の映像。一気に頭の中に入っていく記憶。混乱する。前はどっちだ……。

右は……。機巧魔神はどこだ……。

俺の視界は全くないと言っても良いくらいだった。

静音 side



( 錬君の様子がおかしい……。機巧魔神に掴まれてからだ……。)  
私は闘夜さんと戦ってる機巧魔神を注意しながら錬君のそばによる。  
「錬君大丈夫!？」  
苦しそうに頭を抑える錬君。

「ち、近づくな!」

錬君は近づくと私の腕を掴み。お父さんのいる方に投げる。

「静音大丈夫か!」

痛みは全く無い。

「うん……」

錬君の髪が赤く染まっていった。

( 暴走…… )

その言葉だけが私の頭の中に出てきた。

( でも、赤いのは髪だけだ。まだ、第一段階。錬君は意識はあるはずだ…… )

私はもう一度錬君に駆け寄った。

『う……。ぐわあああ!』

それは、叫びだった。

私の方を見た錬君の目も赤かった。

「離れる!もう、錬は意識をもつてない!」

闘夜さんも叫ぶ。しかし、私は動けなかった。

『ガウウウ!』

紅翼を抜き。私に切りかかる。

( 避けなきゃ…… )

考えてはいても動かない。

「静姉!」

横から誠二が私の手を引っ張ってくれた。

「しっかりしなよ!」

誠二が怒鳴る。

「……うん」

返事はしても言葉の意味は全然解っていない。

その時、私の横を風が通る。

『ドン!』

闘夜さんだったと認識した時には鍊君を蹴り飛ばしていた。

鍊君は森の中に消えていった。

「全員。この場を離れる! 後、馬鹿息子の面倒もお願いします」  
闘夜さんが叫ぶ。

## 記憶のかげら（後書き）

中途半端なところで終わっています。

## 能力、開放！

鬪夜 side

俺が指示したとおり弥蛇さんたちは指示したとおり離れてくれた。馬鹿息子は……。どうにかしてくれんことを祈る。

『貴様一人デナニガデキル？』

「化け物が黙ってる」

機巧魔神に似た化け物。

俺は生きている間に3度も能力を使うとは思ってもいなかった。

「さあ、闇に沈め」

俺は能力を開放する。

『死ネ。神へノ反逆者』

（神……。まさかな……。）

俺は1つの推測をすぐに捨てる。

「さあ、終わりにしよう」

俺の武器が黒き闇の剣が来る！

「さあ、来い。闇の剣」

俺が出した剣を掴む。

『……。貴様悪魔力！』

「さあ、俺の闇の剣に刻まれる」

俺の手にあるのは俺の悪魔としての能力。魔精霊サブバジンの黒き剣の召喚。

「これを使ったのは10年ぶりだ」

化け物は俺に突っ込んでくる。

俺は向ってくる化け物に目掛けて剣を振る！

化け物は俺の剣を後ろに飛んで避ける。

「機械仕掛けの癖に素早いな」

化け物は再び突っ込んできて俺を殴る。

剣で防御するが剣は碎け散った。

そのまま殴られる。もう一度殴ってきたがそれを避ける。俺の能力で作った剣は簡単に砕けた。だが、ここからが本当の力だ。

「再構築」

そうつぶやくと、砕けた剣の破片は闇に溶け込み新たな剣になる。化け物は驚きさえせずにもう一度、突っ込んでくる。

俺は近くにあった剣を取り斬る。

敵の拳に当たり敵の拳にひびが入る。俺の剣は再び砕けた。砕けた破片も剣になる。

「諦める。ここはもう、俺のフィールドだ！」

剣を3本取り。

「融合！」

3本の剣が1本になる。

敵に近づき再び斬る。ひびの入った場所にあたり。腕が砕けた。

俺の剣は砕けていない。

「俺の剣は砕けるたびに強くなっていくんだよ」

静音 side

闘夜さんが心配だけど私は錬君が飛ばされた方に急いだ。

「静姉！解ってるのか。錬さんはいつもと違うんだぞ！」

解ってる……。十分に。だから、私が何とかしてあげたい。何度も私を救ってくれた。

彼を今度は私が助けてあげるんだ。

お父さんは一足先に行ったのも心配だ。

「やめんるんだ！錬さん！」

お父さんのそんな叫び声が聞こえた。

お父さんの姿が見えた。

「お父さん！」

「静音！離れるんだ！」

服がボロボロで少し血がついてる。

「グオオオ！」

錬君がお父さんに襲い掛かる。

お父さんはジャンプして魔精霊サブ・ジンのペクをだして背中に乗る。

錬君は大木にあたり止まるが木を上りある程度のところで飛び。ペクを追う。

「ペク！上だ！」

お父さんがそう言う。ペクは上に向って飛ぶ。

錬君は木にしがみついて、木から木にジャンプして行ってペクを追う。

ペクは上に向うのを諦めて大きな翼を羽ばたかせて鋭い羽を飛ばす。錬君は羽を避けながら進む。

その時、お父さんが錬君の方に飛び殴りつける。

羽ばかりを気にしていた錬君は殴られ地面に落ちる。

地面に落ちた錬君は動かなかった。

「死んだ……。いや、あの子は丈夫だから大丈夫だろう」

お父さんが私の方を見ていった。

「錬君……」

私は複雑な気持ちだった。

錬君を攻撃しなければ殺されるかも知れない。この状況が。

校外学習の日錬君もこんな気持ちだったんだろうか……。

そんなことを考えていると。

「親父さん！危ない。まだ、動けるぞ！」

「な！」

お父さんが振り返った時には遅かった。

錬君の手がお父さんの腕を掴み。そのまま大木に突っ込んでいった。

木にぶつかるとお父さんは

「うわあああ」

今まで上げたこのない悲鳴を上げた。

「お父さん!」「親父さん!」

叫ぶと同時に錬君がこちらを見た。

錬君が駆け出す。

「くそ!」

誠二がポケットに手を突っ込んで魔丸マガンを入れた箱を取り出す。  
私は誠二の腕を掴んで横に飛ぶ。

錬君は私達がいた場所を通過して森の奥の方に行った。

「魔丸は一日一回しかつかえないでしょ!」

誠二は悪魔の血が8分の1だが受け継いでいる。

しかし、悪魔の力を発動することはできない。

彼は能力を使うためにいろいろ考えた結果。

魔丸といわれる丸薬を飲むことで一定時間能力を発揮できる事が可能になった。

「静姉!やらなければやられるんだ!」

(そんなの解ってる。でも、そんなの嫌だ……。校外学習のあの時、錬君自分の命を賭けてでも私を救ってくれた)

「静姉にはやれないから俺がやるしかないんだ」

(今度は、私が救うんだ!)

「暴走を止めれば元に戻るから……」

「止まるはずないだろ!あの勢いを」

「私が止めるから!」

そう言っただけ錬君は誠二のそばを離れた。

「ガウウウ!」

少し走ると錬君を見つけた。

(暴走は感情によって起こってるって闘夜さんはいってた……)

「錬君。落ち着いて!」

そう言っただけ錬君はこっちを向いた。

「ガウウウ!」

錬君が駆け出すと同時に私の目の前まで来ていた。

(見えなかった……!?)

私はぎりぎりのところで攻撃を避ける。

（錬君ごめんね）

私は心の中で誤った。

これからやることは、やってはいけないこと。

人の心を覗く事……。

私は右目が赤く染まっていく。



私がいるから（静音）

私が見た錬君の心は・・・

（なにこれ・・・）

錬君の心にあつたものは闇

何も見えない。

何も考えていない。

闇の中に一人の子供がいた。

その子の手は血に染まっていた。

私が見てるのを知ってるかのように振り向いて。

『お前も俺を殺すのか？』

私は思わず目を閉じた。

（そんな、そんなことって・・・）

『うわあああ！』

（錬君は何らかの記憶操作で・・・。自分以外の人信じれなくなつて・・・。それ以前に今までの記憶すらないのかも・・・）

錬君は再び駆け出す。

私は錬君を見る。

どこから攻撃するかを考えたら。それが解って避けることは簡単だ。

『殺される前に殺すだけだ』

攻撃なんて考えていなかった。

背後に錬君が現れた。

振り向くと拳が飛んできた。

私は拳を両手で受け止めるが・・・。

勢いの良い錬君の拳は止まるはずもなく。

私は後ろに転がった。

錬君は倒れている私に向つて突撃してくる。

（どうすればいい？どうすれば錬君は止まってくれる？）

私はそんなことばかりを考えていた。

錬君は拳を私に向けて放つ。  
もうだめだと思つた時。

「静姉！」

誠二が錬君を蹴り飛ばした。

『ガウ！』

錬君は一回転して立ち上がる。

「逃げる。俺がやる！」

誠二が殺意をこめた言葉で言った。

（だめだ。そんなのじゃだめだ・・・）

私は立ち上がった。

（そうだ。錬君が止まってくれてくれるって思ってるからだめなんだ。あの時、錬君が私を止めてくれたように。今度は私が錬君を止めてあげないと）

私は歩いた。

錬君に向つて。

少しずつ。少しずつでも。

錬君は攻撃できる体勢だ。

「静姉危ない！」

誠二が飛び出そうとすると

「黙つてて！」

私は怒鳴つた。

そのとき、錬君が駆ける。

私の目の前で拳を作り。殴る。

私の腹部に拳はあたり。

私は意識が飛びそうになる。

私はお腹を押さえてかがむ。

「静姉！」

誠二が私の名前を叫ぶ。

「大丈夫だよ・・・」

誠二に言ったのではなく。錬君に向けて言った。

「君は一人じゃないから・・・」

錬君は動揺しながら殴る。

「びゅん！」

私の顔の横を拳が通る。

「私が君の味方だから」

そう言っつて私は錬君を抱きしめた。

私がいるから（静音）（後書き）

この物語に終わりがあるのかなっと思っしまいました・・・。

## 化け物の脅威と罪人（静音）

抱きしめられた錬君は……。

『うわわわああー！』

叫びと共に錬君の体は元に戻っていた。

赤い髪と目は黒に。

「ごめんな黒月……」

「良いんです……。私も迷惑をかけてますから、お互い様です。だから、気にしないでください」

「ごめんな黒月……」

何度も錬君は言った。

一旦、手を離して錬君の顔を見た。

（泣いている……）

「ごめんな……」

そう言つて錬君は倒れた。

「錬君！」

「スウスウ……」

錬君は眠っていた。

「おやすみ」

私は優しくそういった。

私の赤い瞳にはさつきまでの恐怖や孤独のようなものはなく、いつものようなやさしい彼に戻っていた。

（よかった……。戻ってきてくれた……）

私は安心して能力を解く。

私は錬君の頭を膝の上に置いた。

（地面だと痛そうだもんね……）  
すると

「静姉、離れて」

ナイフを持った誠二が言った。

「誠二、何考えてるの？」

誠二の目には錬君が映る。

「危険な存在です。今のうちに消さないと」

誠二は本気だ。

「誠二、何を言ってるんですか？」

「解るだろ！親父さんすら敵わないんだぞ！だから、今しかないんだよ！後々脅威になるならここで絶つんだ！」

「彼は私の大切な人です！そんなことさせません！」

「・・・何でそこまでするんだ？静姉はたくさん助けられたんだろうが。今さっきのこいつは静姉を殺そうとしたんだぞ！」

「私は！彼を殺そうとしたことがあります！」

「な・・・」

そう、操られていたとはいえ。事実。

それを聞いて驚いて二・三步後ろに下がる誠二。

「なのに、彼は死のうとしている私を助くれました」

「・・・」

ビルから飛び降りたあの日。彼は私を助けた。

「何でつと聞いたら。答えてくれました」大事だからに決まってるだろうが！』つと。私も同じです」

「・・・」

うつむいたまま、誠二は何も言わなくなった。

「私は『彼が好きだから』だから、必死になれるんです！だから、

私は彼を守ります！」

（これが、自分の正直な気持ち・・・）

「おい、誠二」

眠っていたであろう、錬君が目を覚ましていた。

「錬君！？大丈夫なの！？」

「ああ、立てるよ」

そう言っつて錬君は立ち上がる。

「誠二、俺を殺るなら今だぞ。はっきり言っつて、今回の騒動は俺の

責任だ。俺が責任を取らないといけない」

ナイフを持ったまま、誠二は何も言わない。

「それに、俺は人間でも悪魔でもないんだ。化け物さ。何時暴れるか俺にもわからない」

「覚悟はできてるつと・・・」

「ああ」

ナイフを構える誠二。

「錬君！何言ってるの！誠二もそんなものしまつて！」

私は止めようとするが

「俺は罪を犯したんだよ！償わなきゃいけないだよ！」

「私は良いから！私は大丈夫だから！」

必死に叫ぶ。

「お前だけじゃないんだよ。俺は解ってる。弥蛇さんを攻撃をして、弥蛇さんは今頃ボロボロだろう。それに誠二お前にもいるいる迷惑をかけたんだ。それが俺の罪なんだよ！」

止まらない。二人とも・・・。

「じゃ、覚悟してください」

誠二は構えたナイフを振る。

「やめて！」

私の叫びは何の意味もなかった。

錬君は倒れた。

（誠二は錬君を・・・）

私は目を閉じた。

すると・・・

「いてて・・・」

錬君の声だった・・・。

「俺からの罪はこれだけだ」

誠二は錬君の目を見て言った。

誠二はナイフの持った手で殴ったのだった・・・。

「良いのか、化け物を殺すのは今だけだぞ」

錬君は言った。

私にはどうしてそこまで言っのか解らなかった。

「錬さん。あんた、逃げたいだけじゃないのか？」

。。。。

静かになった。。。。

「これだけのことをして、自分は生きている。それが許せないんじゃないのか？だから、罪を償うつて形で殺されようとしてるんじゃないのか？だったら、迷惑だ。あんたが死んでも何にもならない」  
私は錬君を見つめた。。。。

錬君は声を殺して泣いていた。。。。

そのとき、アスラ・マキーナ機巧魔神が現れた。

「全員逃げろ！」

アスラ・マキーナ機巧魔神を追ってきた闘夜さんが叫んだ。



化け物の脅威と罪人（静音）（後書き）

錬の記憶を取り戻し、自分の正体を知った。

悪魔でも人間でもない。

錬の過去に何が!？。

あ、こんなこと書いても次回内容は『VS機巧魔神』です

## 親の背中を見て子は育つ

俺は黒月たちとの会話の中、自分が嫌になった。

(畜生！こんなことなんてあるのかよ……。俺の正体が……。奴  
(機巧魔神)が……。こんなことって！)

俺は親父と共に来た奴を見る。

『実験体09。コノ場ノ者をスベテ殺セ』

俺に命令する奴に俺は言う。

「黙れ神の子！俺は俺のやりたいようにやる！」  
デウスチルドレン

(そう、こいつらは神が作った子供……。神の力は自分を存在させ、世界を非在化させる能力  
デウス

ある。神が滅びた時に滅びる前に存在の力を使って生み出された物)

俺の声を聞いた誠二や黒月は驚いて俺の方を向くが再び逃げ始める。

『記憶ヲ、取り戻シテモ、敵対スル裏切り者メ！』  
デウスチルドレン

神の子は全部で5体いる。その中でこいつの能力と名前を思い出す。

(名前はシヴァ。すべてを粉碎する能力！)

「錬避ける！」

俺は木刀を出してシヴァに向って振る。

シヴァは能力で木刀を砕く。

そして、機械仕掛けの右手で俺を掴みにくる。

「錬！」「錬君！」

親父と遠くから黒月が叫ぶ。

その時、掴みに来た右手を紅翼で弾く。

『ナンダト！』

シヴァさえ驚く現状。

「記憶を取り戻したおかげでお前の弱点解ったよ」

『バ、バカナ！』

「錬、何だその弱点って」

隣に来た親父が聞いた。

「あれ、親父。その目は……」

親父の目は緑色に輝いていた。弥蛇さんのように……。しかも、見たこともない黒い剣を持っている。

「そんなことより。奴の弱点だ！」

「ああ、あいつは触れるか触れないかのぎりぎりのラインにある物を粉碎することができる」

「煉獄って思ってた良いのか？」

「煉獄の劣化版だな。粉碎しかできない。しかも、一度つかったら一定時間使えなくなる。能力以外に恐れるものはない！」

「なるほど。解った」

親父は前にでて剣を構える。

親父は普段と違って息を切らしている。

「もしかして、それ使ってる……」

「気にするな……」

小さく言った。

（能力を使えば疲れるから今まで……）

「親父……。待ってる！」

「……は？」

俺は右手を上げる。

「錬、ここは戦場だぞ」

「少し、時間を作ってくれ」

俺はそう言い返す。

そのときシヴァはこちらに向っていた。

（やれるはずだ……。奴らは言っていた。俺は武器を作る能力だと……）

やれるなんて自信はない。しかし、やれるはずだ……。それが俺のシステムだから！

親父は飛び剣を振る。

シヴァの能力により砕かれる。

（構成、構築……）

思い浮かべる。俺が作る武器を……。  
思い浮かべる。親父が使う武器を……。  
「再構築！」

親父の武器が砕け散った破片が再び剣になる。  
「集まれ！」

親父の声に従い親父の手に近づいていく。

『ヤラセン』

シヴァはそれをとめに動く。

(もう少しだ)

しかし、シヴァの行動はすでに遅かった。

「融合！」

親父の近くに集まった剣が1つになる。

それは、親父の2倍はある大きさだった。

「砕ける！」

その剣を軽々と持ち上げ振り下ろす。

敵の能力はまだ使えない……。

その場にいたすべての者がシヴァは死ぬと思った。

「ガハ！」

親父が吐血するまで。

「親父！」「鬨夜さん！」

叫ぶがすべては間に合わない。

武器は砕かれ。破片は消えた。

親父の瞳は元に戻っている。

(急げ……。親父に剣を……。！)

『死ネ』

シヴァは親父を殴る。

親父は簡単に飛んだ。

『シブトイナ、マダ死ナナイカ』

(来る！)

右手に力が集まる。

☞ ウェポンチャージ  
武器補充!  
☞

親の背中を見て子は育つ（後書き）

記憶と共になくした能力ウェポンチャージ武器補充  
この力はシヴァ撃ち取れるのか

## 武器補充（ウェポンチャージ）

俺の理想を現実にする！

俺の右手が俺の理想を手にする。

俺の造った武器は大剣より大きい赤い剣。親父の身長の2倍はある。

昔、馬に乗った敵将と一緒に斬るために造られた剣。

「斬馬刀『紅』」

紅つと名づけた剣は見た目ほど重くはない。

『武器生成シタダト！？』

「錬、な・・投げる」

親父が剣を求めていた。

紅を親父に向けて投げる。

『サセン』

シヴァは俺と親父の間に入った。

俺は無視して剣を投げる。

放物線を描きながら進む。

シヴァが剣に手を触れ粉碎する。

「イツケー！」

砕けたが柄だけは親父の下にたどり着く。

『コレデ終ワリダ』

「それは．．．．．どうかな．．．」

それは親父の言葉だった。

柄を掴み取ると．．．．

砕けた刃が再生されていた。

砕けた破片はなくなっている。

（なんなんだ．．．．あの剣は．．．）

俺が作っておきながら俺はあの剣の力を全く解っていない。

「行くぞシヴァ！」

親父は駆け出す。

その時、俺は世界が歪んでいるように見えた。

(なんだ・・・)

地面に膝をつける。

「錬！」

親父が叫ぶ。

(黒月の声は聞こえていなかったってことは……。ちゃんと、この場を離れたんだ……。俺は何を考えてるんだ……。自分の身が危ないって言うのに黒月のことをな……。俺が死んだらあいつは泣くかな……)

俺は立ち上がり敵を見つめる。

(なら、倒れるわけにはいかないな)

親父とシヴァが戦ってる。

親父の剣は何度も砕かれるがそのたびに再生する。

シヴァには傷がついていった。

「親父離れる！」

大声で叫ぶ。

俺は禁忌の力を使う。

「解った。許す！」

そう、これは親父が止めた力。

「来い！煉獄」

右手に再び力が集まる。

俺の命令によって赤い刀が現れる。

『武器生成力、ダガ、無駄ダ！』

シヴァが何か言う。

俺には何も聞こえていなかった。

『さあ、終わりにしよう！破壊の神！』

俺が飛ぶ。

俺がこの刀が砕けないと信じてる。

『死ネ。実験体09』

『くたばれ。破壊の神』



俺の煉獄は一撃必殺の刀。

その時、俺の体に異常を感じた。

(体が動かない!?)

ウエボンチャージ  
武器補充をしてからだ。

体がおかしくなってきたのは……。

『ヨウヤク効イテキタナ。才前ガ反抗シタトキノタメノモノダ』

シヴアの拳が俺を捕らえる。

『ガハ!』

シヴア的能力も発動し骨が何本か砕けた。

左腕に力が入らない……。

右腕はまだ煉獄を持つくらいはできる。

「錬! やっぱ、俺にまかせとけ!」

親父が再びシヴアと交戦する。

(何もできないのか? 迷惑をかけ……。足手まといになるだけな

のか俺の力は……!)

体が熱くなる。

(駄目だ! 怒りに身をまかしたら駄目だ……。!)

何も失いたくない。その心が俺を止めた。

『うおお!』

煉獄を自分に向けて。

自分の左肩を刺す!

**武器補充（ウエポンチャージ）（後書き）**

理想を現実はその気持ちが無んとなんてありません。

自分の肩を自分で刺す錬。

感想などお待ちしてませう。

## 煉獄の力

俺は肩に刺した煉獄を見つめながら集中する。

「錬！何やってんだ！？」

『親父！静かにしてくれ！』

「・・・」

親父とシヴァが戦う音しか聞こえなくなった。

（俺の理想を現実にするんだ・・・。神々が作った・・・反抗した  
時のためのシステムを殺すんだ！

どうすれば良いかなんて解らない・・・。だが、何もしないなんて  
嫌なんだ！）

俺の持つ最強の武器『煉獄』は理想を現実にする刀。

その能力は・・・。

俺の考えた理想を現実にする事。

例えば・・・煉獄で岩を斬ろうとする。その時に岩が砕けると思  
つていればその岩は切れるのではなく・・・。砕ける。

紙に刀を当てながら破れるっと思えば破れる。

そう、この刀を持つものは敗北を知らない。

触れた時点で勝利が決定するからだ。

しかし、強すぎる力は破滅を呼ぶ・・・。

昔・・・。

俺がまだガキだった頃・・・。

熊に襲われていました・・・。

「錬。危なければ助けてやるからがんばれ」

その時、親父は木の上で高みの見物をしていた。

俺は熊と必至に戦った白翼で。

ありえないような子供の時の体験。

その時に使ったのが煉獄だった。

自分の変化も解らずに……。

その刀を使ったのだ……。

何の迷いもなく……。

使ったのだ……。

煉獄が熊を斬ったときに……。

俺は考えてしまった……。

細切れに切れになってしまえって……。

熊は思ったとおり細切れになった。たったの一撃でだ……。

「お前……。何をやった!？」

親父は必至に聞いた。

煉獄を何度も使ったびに解った。

これは理想を叶える武器だと……。

ただし、壊す力しかない……。

直すことはできない。

壊すことしかできない。

だから……。今、少しでも俺が死ぬ。ようなことを考えた瞬間、

俺は死ぬ。

俺の緊張はすごいものだ。

何もしていないのに緊張で汗が出てくる。

(死ぬ……。俺の体を止める物!)

必至に想像する。

動けるようになった俺を……。

動く体を……。

そして、それを止める存在を殺すことを!

『消える!』

『貴様が消工口』

その時、目の前にシヴァがいた。

この時、考えてはいけないつと解っていた。想像してはいけない。

己の死を・・・。

しかし、その恐怖すら今の俺には命を危険にするものだ。

「錬ー！」

親父の声が俺の頭の中で響いた気がした・・・。

## 神の剣

シヴァが俺の目の前でその機械でできている手を伸ばす。

『うわああああ！』

俺は紅翼を肩から抜く……。

『違反者ガ！死ネ』

俺の中の暴走が始まった。

『闇の深淵に封じられし』

「やめる錬！」

親父の声は届かず。

シヴァの手が俺を掴む。

『其は、夜を紅くれないに染める者！』

瞬間に腕が砕け散った。

煉獄を刺し、腕を砕いたのだ。

『ソノ刀ハ！？』

シヴァが驚きながら言うがすべてはすでに終わっている。

『消える！破壊の神の子デウスチルドレン』

煉獄がシヴァを一刀両断した。

『我ラノ物ダ！』

真つ二つになりながらもシヴァが言った。

『我らの物？』

違和感を感じつつ……。シヴァを破壊する。

（砕け散れ……。神の子よ）

『我ラノ世界二行ケ神ノ剣ヨ！』

俺の手が握っていた……。煉獄がどこかに消えた……。

まるで、俺の能力で消したかのように……。

（神の剣って何なんだ？）

シヴァは俺の理想のつと全く同じように破壊された。

俺は煉獄を呼び出す。

「来い煉獄！」

何も出てこない……。

「煉獄！」

何度言っても出てこなかった……。

「錬、どうしてだ……？どうして、暴走状態になる呪文を唱えていつものままでいられるんだ？それと、煉獄はどこに行ったんだ？」

「あれは……。煉獄が生み出した暴走だ。だから、煉獄が消えたら止まる。そして、煉獄がどこかにいった……。」

親父がそでを掴んで怒鳴る。

「どこかって何だよ！？あれほどの力が悪事に使われたらどうなるか解ってるだろ！？？」

「ないんだよ！呼び出しても出てこない！あ……。」

「なんだよ！？」

「飛ばされたんだ……。」

「なんだと！？」

「シヴァにも自分は無理でも小さな物くらい飛ばせるんだよ」

「飛ばしたってどこにだ！」

「存在するはずのない世界だよ。そう、神が死ぬ間際に存在の力で作った世界。そこにはシヴァを含む5体の神の子がいる。たぶん、そこにだ」

「煉獄が……。悪事に使われたら……。地球は終わりだぞ！」

俺は袖を掴む親父の手を掴んだ。

「無理だよ。あの刀は俺以外の者には扱えない」

冷静に俺は答える。

「だと良いんだがな……。」

（奴らは煉獄を神の剣つと確かに言った……。神に何か関係しているのか？）

「悩んでも仕方ないか……。帰るぞ。黒月さんたちが待ってる」

「ああ……。」

親父が先に家に向かい、その後を追った。

## 神の剣（後書き）

煉獄の説明を前回やったばかりですが・・・。  
煉獄には退場してもらいます^^；  
さて、次回からどうしましょ・・・。



## 自分の意思

家に帰った俺は。

「錬君腕大丈夫なの!？」

黒月が俺の帰りと同時に寄ってきた。

「ああ、大丈夫。俺は人間や悪魔より再生能力あるから。5日くらいでいつものようになるよ」

骨が砕けたつといてもいまや自分が化け物でどれくらいの能力があるか解っているからなんだか冷静にいられる。

「そうなの?」

「ああ」

「良かった……。みんな戻ってるよ」

安心して、黒月は部屋に戻っていった。

(気まずい……。誠二とは許すとか言ってたけどあんな感じだったし……。弥蛇さんについては俺が怪我させたし……)

俺は重い足を動かして部屋にはいる。

入ると同時に雄二が俺を睨む……。

それを無視して、親父の横に座る。

弥蛇さんは包帯をしているが元気そうだ……。

そして……。

「……」「……」「……」

沈黙……。

「あーそういえば……」

親父がこの沈黙を破った。

「俺の馬鹿息子のご迷惑をかけてすみません」

親父が頭を下げる。俺もそれと一緒に下げる。

「気にしないでください。私も錬さんにはいろいろやりましたからね」

「いいんですか!？」

俺じゃなく親父が言った。

「私も錬さんの肩を貫いたり羽で串刺しにしましたからね・・・」

(・・・。確かに、そんなことあったな・・・)

俺にやられたことって思ってみればたいしたことじゃないかも知れない・・・)

「俺もその意見には何も言いません」

雄二が言った。

「錬さんは、静姉を守れますか？」

雄二が俺の目をまっすぐ見る。

「俺は・・・」

(守ってやりたい・・・。しかし、『暴走』その言葉が俺の考えを迷わせる)

「何を迷ってるんですか？怖いですか？自分の暴走が！」

雄二が叫ぶ。

「怖いさ！自分が自分じゃなくなるんだぞ！」

「二人ともやめて！」

黒月がとめに入った。

「じゃ、こうしましょ。腕の怪我が治ったら俺と勝負してください。そこで証明してください。静姉を守れることを」

「なんで争うの？」

「解った。ルールは？」

「錬君やめなよ！なんでそこまで」

「黒月、大丈夫。負けないから」

「そうじゃなくて！」

「じゃ、お前木刀で戦え」

親父が言った。

「雄二、お前確か練習用の斬れないナイフあったなそれで戦え」

「どうしてとめないんですか！？」

「こうでもいわないとこいつら真剣で殺しあうからな・・・」

「でも・・・」

「こいつらにとっては大切な戦いなんだよ。解ってやってくれよ」

「でも……」

「何時戦うんだ？」

「治ってからだ」

「解った」

「何で、話すすめてるんですか!？」

こうして、俺と雄二の決闘が決定された。

## 親は子を見ている

その夜。

森の中で俺はあるものを作ろうとする。

（構成、構築・・・）

あの時。親父の剣が砕けて再構築するのを見て能力ができた。いや、再構築したっと思ったからできた。

なら、俺の暴走を止めるっと思った物を作れば！

「ウェボンチャージ  
武器補充」

右手に集中する。

（！？）

「ガハ！」

途中で止まり。吐血する。

咳を何度もする。

（なんだこれ……。前はなんともなかったのに……。迷っていてもしかたない……。俺の代わりは誰もいない……。）

再び構成と構築をする。

「ウェボンチャージ  
武器補充」

再び右手に集中する。

口から血を出しても無視し、武器の生成に集中する。作ろうとする物の1/3ができ始めた頃。

俺の右手が痛みだす。

「うわああ！」

声を上げてしまう。

武器の生成は失敗し1/3できていたものも跡形もなくなっている。

（あの時はこんなことがなかったのにな……。）  
意識が朦朧する。

だが、はつきりと解っていることがある。

俺は作らなければならぬ！

「ウエボンチャージ  
武器補充」

静音 side

胸騒ぎがして目を覚ます。

私の隣にはお父様と雄二が眠っていた。

再び眠ろうとした時。

「うわああ！」

(!?)

微かに錬君の声が聞こえた。

私は二人が起きないように静かに部屋を出て錬君の眠る部屋の扉を少し開ける。

布団はたたまれていて錬君の姿はなかった。

(どうして、いないの？何かあったの!?)

私は外に向う。

「黒月さん。できれば行かないでもらいたい」

外に出る扉の前で鬨夜さんが座っていた。

「どうして!?錬君の悲鳴が・・・」

私はこの人の考えが全くわからない。

「あいつは戦ってるんだ。自分と・・・いや、暴れる体と」

「え・・・」

(何を言ってるの?この人は・・・。暴れる体って・・・)

「あいつの考えていることはなんとなくだがわかるんだよ。なぜ、

あの時、言葉に迷いを持ったのか。今現在何をやっているのか・・・

「

「どうして、行かない方が良いんですか？」

「俺が奴なら、こんな自分を見せたくないからだな。まあ、俺の勝手な想像だと思っなら行ってくれ」

(何をやってるのだろう・・・。気にはなる。けど、錬君はどう思うだろう・・・。こんな夜中にやっていることを思うと見られたく

はないのだろう)

「解りました・・・」

私は振り返って自分達が寝ていた部屋に向う。  
部屋に戻る前に言う。

「錬君にもしものことがあったら。あなたを許しません」

「ああ、そうしてくれ」

あっけない返事が返ってきた。

そのまま私は部屋に戻り布団の中に入る。

(錬君は無事だろうか・・・。悲鳴は聞こえなくなった。それって・・・)

私にとって不安な夜になった。その夜。私は眠れなかった。

親は子を見ている（後書き）

錬が暴走を止めるためにがんばり、静音はそれを心配に見守るって  
事を考えて書き始めました

## 剣は人の為に

気がつくのと、俺は地面に倒れていた。

口の中には鉄の味……。

（最近、気絶することが多いな……）

手の中には……。

（何も無い……）

俺は重い体を動かす。

立ち上がるだけで息切れをする。いや、息を吐くというより血を出しているっと言っても良いかもしれない。

しかし、俺の体が動かないことはない。

（やっぱり、俺の体は化け物の体か……。やっぱり、人間じゃないのか……）

解っていたことだが、実際に感じてみるのは嫌なものだ。

「何思ってたんだろうな……。俺が化け物って事実は変わらないのにな……」

ボソリつと独り言をする。

（それでも……。化け物にだって守りたい人がいる！）

俺が守りたい人は黒月静音。

決して変わらない事。

俺の気持ちは変わらない。

あるのは迷い。

迷いの原因は暴走。

（迷いを断たねば先にはいけないか……）

今までやってきたことをタダ繰り返す。

「ウェポンチャージ  
武器補充」

右手に集中する。

「ゲホ！」

口の中にある血を出す。



(とめない……。とめたくない！)

体はボロボロ。しかし、俺の思いだけが武器補充ウエボンチャージを続けさせた。

右腕に痛みが現れる。

それでも、止めない。

(守りたい……。黒月が……。だから、迷いをなくしたい！)

理想を現実にする！

終わった……。

口から血を流しながら。

「できた……」

俺の体は限界に来ていた。

その場で倒れる。

闘夜 side

(これは、錬の戦いなんだ……。俺が手を出して良いものじゃない……。そもそも、何を手伝えるか解らない……)

黒月さんにはああ言ったが……。錬の奴、死んでないよな？)

俺は錬が作った剣、紅をもって外に出る。

錬の声が聞こえた方に走る。

(こっちの方についてあいつどれだけ奥に……)

そんなことを考えていると、錬が倒れていた。

血を口から流しながら……。

(マジかよ……)

俺の心の中でそうつぶやく。

錬の口元に手を当て息をしていることを確認する。

(生きてる……。自分が化け物か……。嘘でもないかも……)

俺は錬を抱えて家に向おうとする。持ち上げると右手から何か落ちた。

(何だこれ……)

落ちたのは小さな剣の形をした物。大きさとしてはキーホルダーに  
できそうな位だ。

（錬が握っているって事は大事な物なのか・・・）  
俺はそれを拾い大事に持って家を目指した。

剣は人の為に（後書き）

錬が静音を思う気持ちを作ったのは小さな剣・・・。

その剣が持つ力は？

もうすぐ、実家の話は終わります

## 親父

目が覚めると家だった。

「親父か？」

「大体予測はできてたか？」

俺は上半身だけを起こす。

「俺を拾ってもって帰れるのは親父だけだろ？あの場所から」

「黒月さんの親父さんもできそうだな」

俺は苦笑した。

「いや、親父だね。あの森で俺を探して帰ってこれるのは森を知ってなければ無理だからな」

「まあ、俺が運んだんだがな。そういえばこれは大事なのか？」

(！？)

親父の持つている物を見て驚いた。

(アレは俺の中に浮かんだ俺を止めるために作るうとした理想像だったからだ)

「ああ。大切な物なんだ」

「何か知らないが大事に持つとけ」

そう言つて投げた。

俺はあわててキャッチした。

「酷い傷があつたが……。作つたのか？」

親父の目が鋭いものになった。

「作つたよ」

「最初は何もなくても、次から傷ができるようになったか……」

「ああ、吐血に右腕に痛み。凄い物だった」

「そのうち死ぬぞ？」

「死なないさ。守りたい物があるから」

親父はいつもの顔に戻り。

「そうか、お前はお前のやりたい用にやれ」

そう言つて立ち上がった。扉を開ける前に。

「そうだ。木刀での試合後に後で稽古をするか？」

「片腕だけで何ができるか不明だけどな」

「昼飯の後だ」

「はい。親父、1ついいか？」

扉を開けようと扉に手を当てたが止まる。

「親父なら俺の暴走状態を止めれるのか？」

静かな時が過ぎた。

「赤目になつたら俺でも不意打ちしか無理だ」

「頼みごととしても良いか？」

「大体解つてる。親をなめるなよ？じゃ、昼飯を食べてからだぞ」

もう一度言つてから親父は出て行った。

親父と話していて時間を見ていなかったが……。

時計を見ると夜の2時半。

「もう一度寝るとか言えば良いのにな……。あの人も素直じゃないな……」

俺は親父の親切を感じながらもう一度眠りに着いた。

## 親父（後書き）

あれ？この作品って何を書こうとしたんだっけ？

そんなことを感じ始めました・・・。

暴走を止める為に作った剣。

親父はまるですべてを知るように語る。

いろんなことに疑問を持ちながら。この作品は進みます。

## 下山

目が覚めると11時。

服を着替えて部屋をでる。

「おはよう」

「おはようございます」

「おはよう」

黒月や弥蛇さんが挨拶をする。

「飯はできてるぞ」

親父が挨拶なしに言う。

「ああ、いただきます」

手を合わせ言う。箸を持って、昼飯を食べる。

「うまい・・・」

「本当ですか？」

「ああ、うまい」

（普段、親父が作っている味じゃなかった）

「親父、味でも変えたのか？」

「いいや？違っぞ」

やや笑って答える。

（馬鹿な・・・）

「あ、あの・・・。私が作ったんです・・・」

黒月が恥ずかしそうに手を挙げて言った。

「なるほど。どつりで・・・。おいしかったよ」

「あ、はい・・・」

「ふ・・・。ハハハツハハ」

いきなり弥蛇さんが笑い始めた。

「何ですか。お父さん！」

顔を真っ赤にした黒月が大声で言った。

「いやいや、まるで希沙羅シハラのことを思い出してね」

「お母さんと？」

「昔、私と希沙羅もそんな事があってね」

「そ、そうなんですか。わ、私部屋に戻りますね」

黒月は真っ赤になった顔を隠すように出て行った。

「クハハハ」

珍しく親父は額に手を当てて笑った。

「ハハハハ！」

二人の笑い声を聞きながらご飯を食べた。

そして、30分後。

こっそりと親父と俺が家を出て森の中にいた。

その時、俺の作った小さな剣を小さな袋に入れ、それを首からかけていた。

「このあたりなら、暴走しても家には行かないだろ……」

「はい」

「さて、やるか……。一度きりだ」

「はい」

お互いが真剣だ……。

俺は自分の暴走する呪文を唱える。

『闇の深淵に封じられし』

ドクン。

普段は気にならない心臓の鼓動が気になる

『其は、夜を紅に染める者！』

俺の体に異変を感じる。

「鍊、意識はあるか？」

親父が俺に問う……。

『ああ……。まだな……。』

「そうか」

親父が安心したその時……。

胸が痛くなる。



『うわああ』

体中に痛みが走る。

膝をつく。

「錬!？」

親父が駆け寄る。

それでも体から痛みはなくならない。

「はあ……。はあ……」

体中が熱い。

「お前……。戻ってるぞ」

「はあ……。はあ……」

(言われてみれば体の異変が消えている)

「俺は……。暴走していない？」

「ああ、これで安心だな」

「はい」

その後、家に戻った。

その頃には俺の中にあつた迷いはなくなっていた。

次の日、黒月一家と一緒に山を降りた。

「治つてからですよ」

黒月一家と別れる時今まで口を開かなかつた誠二が言った。

「ああ、解つてる」

言い返すと、誠二はすぐに歩きだす。

「良いの？」

「ああ。そのうちお邪魔しに行くよ」

「ああ、いつでも来ると良いよ」

「それじゃ」

俺も家の方に歩いていった。

## 下山（後書き）

実家編終わりましたー！

いやー・・・。

だいぶ、作品設定がめちゃくちゃになりましたね・・・。

錬の武器を作る能力に煉獄の理想を実現にする力。

錬の過去、親父が悪魔。神の光臨・・・。

ってこの作品このままでいいんでしょうか^^；

これからもお願いします

## 思いは剣に

俺の腕は治った。

(普通の人間ならまだまだ直らないんだろっな・・・)

「さて」

電話で黒月の家にかける。

「もしもし、紅夜です」

『錬君!?!』

「腕治ったから明日、試合しに行くから。誠二に伝えてくれる?」

『え、明日来るんですか・・・。あ、解りました』

「それじゃ、明日」

『うん』

電話を切る。

その日は筋トレをした。

次の日。

俺は動きやすい服装で出かけた。

そして、数分で黒月の家に行った。

インターホンを鳴らすと黒月が出てきた。

「錬君。おはようございます」

「おう、おはよう」

黒月が出てきた。

「本当に試合するの・・・?」

「ああ、やるよ」

「どうしてそこまで?」

「約束したからさ。お前を守るってね」

「・・・。負けないでくださいね・・・。」

顔を赤くして答えた。

「勝つために戦うよ」

「はい。家の裏に道場で誠二が待ってます・・・」  
「解った。ありがとう」

俺は黒つきの横を通って家の裏の道場に向う。

扉を開くと誠二が木でできたナイフで投擲の練習をしていた。

「またしたな」

「待たせて怒らせるのかと思いましたよ」

「そんなことしないよ」

「じゃ、やりますか」

「ああ、良いよ」

「俺に負けたら、静姉に関わらないと誓ってください」

「解ったよ」

「あなたがもしも勝ったら・・・」

「俺が勝ったら、お前の代わりに黒月を守って見せるよ」

「じゃ、やりますか」

誠二が投擲に使ったナイフをポケットやいろんなところにしまう。

「このコインが落ちたら始まりですよ」

そう言つて、100円玉を取り出し落とす。

『トン』

畳の上に100円玉が落ちた。

瞬間に俺に向つて木のナイフが飛んできた。

木刀を出しナイフを叩き落とす。

「1つの物に集中しすぎですよ」

誠二は俺の目の前にいた。

俺の左腕を掴み。右手で肘関節あたりを殴られる。

「つつ!?!」

直ったばかりの腕が悲鳴を上げる。

誠二は両手で俺の左腕を掴み投げた。

俺は畳の上に倒れる。

「はあああ!」

投げた終わると素早く右手を離し持っている木のナイフを俺の喉に

目掛けて振り下ろす。

「なめるなよ！」

右手で持ったままの木刀をで誠二の右手を弾き、ナイフを落とす。

「つく！」

誠二は攻撃が失敗すると判断すると後ろに軽く飛ぶ。

俺は立ち上がり、持っている木刀を投げる。

誠二は横から蹴り木刀を蹴る。

俺は新たな木刀を出し強く踏み込み誠二に向って木刀を振り下ろす。

「片腕で何をするんですか」

誠二は両手にナイフを持ちナイフで木刀を受け止める。

(右腕だけじゃ突破できないのかよ)

お互いに後ろに飛び距離をとる。

「はあ、はあ・・・」

「はあ、はあ・・・」

二人とも息切れをしている。一瞬の戦いだがその一瞬で結構体力を使った。

「まだまだ、これからですよ」

誠二が強気の発言をする。

「何言つてやがる。俺とお前じゃ差があるんだよ」

俺も強気の発言をする。

まだ、二人の戦いは終わらない。

## 戦う者たち（前書き）

先に言っておきます。

結構現実離れした戦いで矛盾など多いかもしれません^^；

## 戦う者たち

俺は誠二に向って飛び出し、攻撃をする前に強く踏み込み。木刀を振る。

誠二はそれを後ろに避ける。

そして、ナイフを投げる。

俺は素早く打ち落とす。

「はあああ！」

誠二の気合を入れた拳が俺の顔を殴った。

「つぐ！」

俺は木刀を上には振り上げる。誠二はとっさに後ろに飛んだが間に合わずに顎に木刀が当たる。

「つが！」

(両手の一撃だったら今ので決まっていたのに)  
片手しか使えないのが残念だが……。

相手はそんなことを気にせず攻撃をしてくる。

甘い考えを捨てないと負ける。

誠二は背中から倒れこみ。すぐに立ち上がった。

新たなナイフを取り出す。

「いくら持ってたんだよ。お前……」

「さあね！」

今度は誠二が先に動いた。

一瞬で俺の後ろまで移動する。

俺は木刀を後ろに投げる。

誠二はそれを予測してたかのようにしゃがんで回避した。

2本の木製のナイフが俺の右肩に向って来る。

俺はナイフと肩の間に木刀を出す。

ナイフの攻撃を木刀が受け、木刀からの衝撃を肩に来る。

「つぐ」

「自分の周りだったらどこにでも出せるんですね」

誠二は俺を蹴り倒してから離れた。

「はぁ……。まだまだ、余裕そうだな……」

（正直やばい……。木刀が後2本しかないはずだ……）

「はぁはぁ……。自分の状態を教える奴なんていないでしょ」

少しの沈黙の後に同時に……。いや、誠二の方が少し早く動き出した。

木刀を出し全力で誠二を叩く。

誠二は反応が遅れたようで右手のナイフだけで受け止める。

『バン！』

ナイフは砕けて木刀は誠二の右肩に当たる。

「が……！」

右肩にある木刀を右手で掴み。左手のナイフで右肩を突く。

ナイフが当たった右肩に痛みが走る。

「おおおお！」

俺は木刀を手放し右足を軸に左足で蹴る。

「うぁぁぁ！」

誠二は木刀を持ったまま右足で蹴る。

右足と左足がぶつかり合う。倒れたのは誠二だった。

（力なら勝ってるが……）

誠二は内ポケットから前に飲んでいた薬を取り出し飲み込む。

「悪魔の力、見せてやる」

確か、前に戦った時は薬を飲んだ時に手ごたえが合っても攻撃が当たっていないかった。

「諦める、負けだ」

誠二は俺の木刀で切りかかる。

俺は振り上げた一瞬の隙を突いて蹴る。

蹴りが当たった感覚はあったが同時に腹部に痛みが走った。

木刀の突きが俺の腹部に命中していた。

痛みを堪えながら倒れないようにバランスを取る。



次に首に目掛けてナイフが飛んできた。

俺は最後の木刀を出してナイフを防いだ。

俺の腹部を突いた木刀を掴み誠二のいる方に強く足を踏み込む。

「はああ！」

回転して右足に勢いをつけ誠二を蹴る。

「ぐう！」

誠二が木刀を手放し、両方とも倒れこむ。

倒れこむ前に木刀を誠二のほうに思いっきり投げる。

誠二は木刀を蹴り弾き飛ばした。

お互いが倒れこんだすぐに起き上がり殴りあう。

俺が先に誠二を殴ったはずなのにしゃがんでいた誠二が俺の脚に蹴りを入れていた。

俺は解った。こいつの能力・・・

（こいつは相手に思い込ませる事ができる。攻撃をしようとしてるように思い込ませ、攻撃があつたように思い込ませる。それが誠二の能力）

俺はよろけながら誠二に向って飛び膝蹴りをする。

誠二はそれをしゃがんで避ける。

俺は壁に激突し壁が壊れる。

外にでた。外は青い空に輝く太陽の光があつた。

誠二が俺を追いかけ外に出て、俺を殴る。

ように思えたがこれは思い込まされているだけだ・・・  
つと、思ったら。

思いつきり殴られた・・・。

転がって行って家にあつた小さな池に入った。

「ゲホゲホ！」

池から出る。

誠二は攻撃をやめない。

池から出てきた俺を蹴る。俺は右腕を振り水滴を飛ばす。目に水が入り、攻撃が甘くなった。

右足で渾身の一撃を繰り出す。

『ドン』

誠二は簡単に吹っ飛び道場の壁にぶつかる。

「ぐ……」

「俺の頑丈さをなめてんじゃねーよ……」

誠二は立ち上がることがなかった。

それを見て安心した俺はその場に倒れた。

## すれ違ふ心

起き上がると壊れた道場が見えた。

「倒れたとこのままか・・・」

目の前には倒れたままの誠二もいる。

「勝ったのか・・・」

自然と笑みがこぼれる・・・。

俺はその場に座って体力の回復を待つ。

しばらくすると誠二が気がついた。

「うう・・・。ここは・・・」

「よお」

誠二が俺を見ると残念そうに言った。

「俺は負けたんですか」

「ああ、俺もさっきまで倒れてたがな」

「強いですね」

「悪魔の上の存在なのかな？俺は」

「そうですね・・・」

俺は立ち上がる。

「さて、試合も終わったし戻るか」

「そうですね」

ボロボロな体の二人が黒月の家に入ると黒月が出迎えた。

「お帰り」

「ただいま」

「お邪魔します」

黒月は俺たちを見て

「派手にやったね・・・」

「まあ全力だったしな」

そう言っただけ俺は誠二を突き出した。

「先に手当てしてやってくれ。思いつき蹴ったから体どうなってるかわからないからな」

「うん」

「え、錬さんの方がひどいんじゃない？」

「体のつくりが違うんだよ」

「それじゃ、あの部屋で待てって誠二が終わったら手当てします」

「それじゃ、遠慮なく上がらせてもらって待つよ」

そうして黒月が待っていてっと言っていた部屋で待つことになった。

(やばいな……。左肩、また壊れたかもな……)

二人の前では平然としていたが内心は焦っていた。何もしていないのに左肩から痛みが来る。

(あんま、見られたくないんだよね……。怪我してる姿を……)

静音 side

私は誠二を連れて薬が置いてある部屋にいる。

「ほら、上着脱いで。傷がわからないでしょ」

「はいはい……」

「はいは一回。うわ……」

誠二の体はどこどころに真っ赤になっていた。

「木刀と木のナイフでよくここまでできるね……」

「錬さんは凄いよ。俺なんて足元にも及ばない」

そう、錬君は凄い。魔精霊サバジンを素手で止めたり人じゃないような力を持っている。

「錬さんに負けたよ」

「うん」

返事をしながらシップをはる。

「力じゃないよ。自分が死んでも諦めないって気持ちがあるから」

「錬君は人の為に命を使っても守ろうとするからね」

誠二が振り向いて言った。

「違つよ」

「え？」

「静姉のためになら命を使つてでも守ろうとしてるんだよ」

「え……」

錬君を意識してしまい顔が熱くなる。

「静姉はそんな錬さんが好きだもんね」

カアア……

「もう、そんなこと言わない！」

顔が真っ赤になって、誠二の赤くなつてるところをつねる。

「いたたた……」

「はい、終了」

そう言うとおつねつたとこを押さえていた誠二が上着を着る。

誠二が立ち上がり部屋を出る時に言った。

「俺は、静姉の契約者コントラクターは錬さんがいいと思つてるよ」

「だから、そう言うことを言わない！」

真っ赤な顔でむきになって言った。

（錬君が契約者だったら……）

考えただけで耳まで真っ赤になる。

錬 side

さつきまで痛かった左肩も痛みがなくなつていた。

（刃物などでやったつて事ででもないから直りが早すぎだろ……）

そんなことを考えてると扉が開いた。

「錬君の番だよ」

黒月だ。

「俺は大丈夫だよ。もう、直つたから」

座りながら言った。

「そんなこと言つて無茶するんだから、ちゃんと見ますつて」

「いやいや本当だから……」

「手当てしますから」

つと黒月に引つ張られ違う部屋に連れて行かれた。

「上着を脱いでください」

「大丈夫なんだがね・・・」

(正直もう手当てをしなくても良いくらいまで直っている)

「私のせいで怪我したんですから手当てしますって」

「解ったよ・・・」

いくら言っても無理だと思いつつ上着を脱いで座る。

「ほら、大丈夫だろ？」

「本当だ・・・」

黒月は驚いた顔をした。

「まあ、頑丈な上に直りが早いからな」

「はい」

俺は脱いだ上着を着る。

「あの」

「ん？」

「錬君は前に私だからそこまでやるって言いましたね」

(いきなりそんなことを言われても困る・・・。何時だっけな・・・)

)

思い出すこと2秒程度。

(屋上から飛び降りて目が覚めたときのことか)

「ああ、言っただよ」

「私も、錬君の為にならいろいろなことができます。力になりたいん

です。だから、だから・・・。私のコント・・・」

「やつほー。誠二と試合したらしいけど大丈夫なの？」

真っ赤になった黒月の言葉を楓さんがさえぎった。

「あれ・・・。何かまずかった・・・？」

「い、いえ。な、何もまずくないですよ」

「そっか・・・。じゃ、また後で」

嵐のように過ぎ去った・・・。

・・・。

沈黙・・・。

「黒月」

「は、はい」

「力になってくれるのはうれしい。だが、無理はしないでくれよ」  
そう言って俺は部屋を出ようと立ち上がる。

「はい」

「ありがとうな。黒月」

そう言って部屋を出た。

扉を閉めた後ダッシュで部屋を離れた。

(い、息苦しかった・・・)

すれ違う心（後書き）

まあ、こんなもんかな……。誠一VS錬は……。



## 悪魔の家

そして、俺は弥蛇さんの部屋にいた。

なぜ、部屋から走った俺が弥蛇さんの部屋にいるかというところ……。走っていた俺は弥蛇さんに出会って部屋に連れて行かれただけである。

「誠二に勝ったんだな」

「まあ、結構危なかったですがね」

「道場を壊したのは君だろ？」

「あら？知ってました？」

「まあ、少し見せてもらってたからね」

（見てたのか……。弁償しなきゃいけないよな……）

「本当にすいません！」

「いやいや……。取り壊す予定だったからね」

「嘘でしょ」

「いやいや、本当本当」

「そうなんですか」

「君は本当に強いね」

「まあ、鍛えられましたから……」

「悪魔に勝てるなんて凄いですよ」

「そうですね」

「君は静音の事を良く思ってくれているようだね」

「まあ、いろいろありましたけどね」

殺されかけたり。殺しかけたり。まだ2学期始まっていないのにい  
るんなことがあった。

「今度俺とも戦うか？」

「また肩を貫かれると困るからやめておきますよ」

「そうか、今日は晩御飯も食べていきなさい」

そういえばいつの間にか夜だ……。

(昼飯を食べていない・・・)

「ありがとうございます」

「それじゃ」

「話終わりました?」

後ろの扉から誠二が入ってきた。

「ああ、終わったよ」

「じゃ、借りてきますね」

「ん?」

腕を掴んで引きづられて俺は移動した。

「どこに行くんだ!??」

「屋根の上」

「じゃ、自分で行くから手離せ」

「ああ」

俺は誠二と共に屋根の上に入った。

## 満月と新月

屋根の上に入った。

「良い空ですね」

夜空は雲もなく満月が昇っていた。

「ああ、満月だな」

「満月ですね・・・」

・・・。

(つれてきたからには、用事あるんじゃないのかよ・・・)

「あなたは俺たち黒月一族のことを知ってますか？」

「ん？」

「俺たち一族は昔、悪魔同士で結婚をした事があるらしい。悪魔の一族の血はどつちかを選ぶしかない。静姉みたいに2つの能力を持つことはできない」

(確かに、子供はどちらかの能力を引き継ぐしかない。引き継いだ能力の一族を告ぐことになる)

「その時、二人の子供がいてお互いに違う能力を受け継いだ」

「それじゃ、2つの一族にわかればなれに・・・」

「ああ、炎の能力を受け継いだ嵩月一族と風の能力の黒月一族に分かれた」

なるほど・・・。

「皮肉な物だ。嵩月は満月のように輝き。俺たちの一族は新月、見えないような存在なのによ」

「悪魔も大変だな」

「俺たち一族は影の存在とされていた」

「・・・」

「そんなもんなんだよ。俺も一族も」

「そんなんじゃないだろ。この一族が影？こんな良い一族で影だった？笑わせるなよ」

「やっぱ、良い人だな」

「あ？」

何を言い出したんだこいつは

「俺の能力気づいたか？」

「相手に思い込ませるってくらいならな」

「もともと雄の悪魔の能力は魔精霊を召喚するものだったんだ」

（確かに、俺のものである雄の悪魔は魔精霊を召喚していた。しかし・・・、誠二は何も召喚しない・・・）

「俺は悪魔の血を8分の1しか受け継いでいない」

「なにが・・・」

「俺の親父のおばあさんが悪魔だったがそれからずっと人と結婚。

普通はないのだが悪魔の血が極端にうすいらしい」

「だったら何で悪魔の能力が使える」

「あの飲んでいた薬。あれは、悪魔の力を増幅させる物だ」

「そんな物・・・」

「あるんだよ。俺が作った」

「へー、そうか・・・」

（こいつもこいつなりに大変だな・・・）

「俺はどうしても強くいたかった・・・。静姉を守れるくらい」

「そうなのか・・・」

「俺じゃ力が足りないですね」

「安心しろ俺が力を貸す。黒月は俺が守る」

「その言葉信じましたからね」

その時の誠二は緊張も何も無い笑顔だった。

## 満月と新月（後書き）

さあ、夏休み編もそろそろ終了。

今回の話は黒月の関係とかをイメージしてかいたよー

## 終わりは始まりを意味する

岡崎 side

(そろそろ2学期が始まる・・・)

ふと、悪魔でもないのに馬鹿力を持った友の顔を思い出す。

(あいつも、元気にやってるかな?)

「真悟！ちよつと来なさい」

扉が開かれ親父が俺を呼んだ。

「はい」

俺は親父について行った。

集まったのは家で一番広い部屋だった。

その部屋にはすでに一族の半分以上の人数が集まっていた。

「どうしたんですか？この人数・・・まるで」

「戦争が起こるんだよ」

俺は耳を疑った・・・。

「何があつたんですか！」

「昔、お前が良く遊んでいた原田一族だ」

「え？」

原田一族とは昔、俺が6歳の頃、同じ年齢の子供がいるということ  
でよく遊びに行った悪魔の一族だ。

「そんなことないでしょ！霧とは・・・、いえ、原田組とは同盟を  
結んでいなかったのですか!？」

「ああ、結んでいたが何時までも続かないつということだ」

「そ、そんなばかな・・・」

「争いに参加しろとは言わない。争いがあることだけでも知ってお  
いてもらっただけだ」

「解りました・・・」

そう言つて部屋を出た。

俺は不安だった……。

(霧が争いを仕掛けてくるなんてあるはずない……)

霧とは原田組の娘で俺と良く遊んだ。

俺の……。初恋の相手でもある……。

その時、突然倒れそうになった。

「!？」

(一体何が……)

自分の両手を見たとき、右腕が消えかかっていた。

(非在化か……。自分の心を偽り続けられないってことなのか?)

「まだ、まだ消えないんだ……」

つぶやいて俺は自分の部屋に戻った。

side END

いろんなことがあったが黒月家に別れを告げ、俺は家に戻った。

黒月は泊まって行けば良いとも言っていたが、そこまでお世話になることはできないので断った。

俺は夜道自宅に向かいながらもうじき始まる学校のことを考えていた。

「岡崎の馬鹿は元気になっているだろうな」

夏休みになって全く顔を見ていない友のことも考えていた。

終わりは始まりを意味する（後書き）

岡崎が懐かしすぎてフルネームを忘れていました。  
さて、また悪魔達の関係の話が始まります・・・



## 戦争

2学期の初めの登校日、つまり、始業式。

この日、いつもと違うことがあった。

岡崎の席に誰も座っていないことだ。

久々に顔を見る担任。

点呼を取り岡崎のところで

「岡崎は欠席か？」

どうやら連絡が入っていないらしい……。

HRが終わると

「岡崎さん、何かあったのでしょうか……」

黒月が聞いてきた。

「夏休みに何かあったのかな」

二人はなにも思いつかないまま体育館で始業式が始まり、終わった。

放課後、俺だけが第一生徒会に呼ばれた。

「久々だね。紅夜君」

「久々ですね。会長」

にらみ合う二人。

「何で呼ばれたのか聞いたって良いでしょうね？」

「もちろんだ。君も知っての通り岡崎君が来ていない件についてだ」

(岡崎に何かあったのか……?)

「岡崎君は悪魔関係の戦争に巻き込まれている」

「戦争?こんな小さな町で戦争なんて起こっていたら誰でも気づくでしょ」

「悪魔達の戦争は普通と違う。闇の中で動き、誰にも気づかず行われる。今回は岡崎一族と原田一族で行われている」

「それでどうしろと?」

「この戦争を止めてもらいたい」

「戦争を止める?どうやって?戦争はどっちかの一族が辞めない限

「続きますよ」

「なら、原田一族を潰してくれ」

会長の冷たき一言。

「本気で言ってるんですか？会長」

「ああ、本気だ。解決方法がそれ以外にないのだろう？」

「悪魔だって人間と同じで生きてるんですよ」

「だったら、どうしろって言うんだ？止めるにはどちらかがやめなければならぬ。しかし、そんなことできるはずがない。この状況でどうやって止めるんだい？」

「何とか、何とかしてみますよ」

「良いだろう、この件は君に任せよう」

冷たき会長の目が俺を見つめる。

「ええ、止めてやりますよ。戦争を」

そして、第一生徒会室から出る。

（この事件は速攻で解決させなければならぬ…。明日と明後日は休日…。この期間中に解決させるしかないのか）

廊下を歩きながら今後について考える。

「錬君」

廊下には黒月がいた。

「ん？帰ってなかったのか？」

「はい」

「一緒に帰るか？」

「はい」

「錬君は戦争を止めるんですか？」

黒月は帰り道で突然そんなことを言った。

「知っていたのか…」

「いえ、大体予測はできてました…」

下を向いて言う。

「止めてみせるよ戦争だろうがなんだろうが…」

「錬君なら…、錬君ならできると思います」

「だから、心配なんてするなよ」

「はい。私はこっちなので」

そう言っつて、黒月と別れた。

「さて、まずは岡崎のどこについて話してみるか」

## 止まった歯車

俺は現在危険な状況にいる…。

まず、目の前に岡崎が入る。

そして、隣に銃を持ったおじさんがいる。

(なぜだ…。どこで間違えた…)

十分前、

岡崎一族の門の前まで来た俺は門を蹴り破った。

その直後色んな人が出てきて銃を構えられたりした結果。  
現在にいたる。

「何しに来た？」

「友達に対して冷たくないか？」

岡崎はため息をついた。

「どこの世界に友達の家の門を勝手に開けて入ってくる友達がいるんだよ」

「ここにいるだろ！」

「自信満々にいうな！」

怒られた…。

「どうせ、第一生徒会から来たんだろ？」

「流石だな、早速言うが戦争をやめろ」

「死にたいのかお前」

銃を構えたおっさんが言う。

俺はおっさんをにらみつけた。

「死ぬのは俺とは限りませんよ」

「なんだと！」

「やめてください。本当に戦うと死ぬのはこちら側かもしれませんので」

岡崎が冷静に止めた。

「こんな、ひよっこに馬鹿にされて黙っていられるか！」

『タン！』

銃口が火を噴いた。

「会話中はお静かに！」

その瞬間には俺は銃口の前にいなくて、おっさんの腹部に一発殴っていた。

おっさんは静かに倒れた。

「これで、静かになるだろ」

「怖い怖い、俺も眠らないようにしないと。それにしても夏休みは何かあったか？」

「まあ、いろいろなことかな」

「とうとう、契約したのか？」

「何の話だ？」

とりあえず拳を作りながら聞いた。

「冗談だ。いろいろあったのか。まあ、俺たち一族もいろいろ合ったのさ」

「それでも、争いは醜い。やめないのか？」

岡崎は俺を睨んで言った。

「やめれないとこまで来たんだよ」

「そうか。やめたいとは思っているんだな？」

「ああ、やめたいさ。どっちも良いこと無いからな  
俺は立ち上がり言った。

「向こうの代表と話に行こう」

「だめだ。それだけはダメなんだ」

岡崎は強く否定した。

「何でだよ。戦いたくないだろ？」

「ああ、そうだが、俺が行くとまず捕まえられる」

「なんでだ？顔を知られてない俺とお前なら、偽名使えば…」  
「知られているよ。俺の一族と向こうは仲が良かったからね」  
「なんで、何でそんなことが…」  
俺は再び座り岡崎の話を聞いた。

事情を聞かされた俺は

「なら、遊んでいたその子に会って和解できないのかよ！」

「ダメだ…」

「何で！」

「あいつは、俺を嫌っているだろう…」

「え？」

「これ以上は言えない。行くなら一人で言ってくれ。頼む…」

「…解った」

俺は岡崎のいる部屋から出て岡崎家を後にした…。

岡崎 side

(この戦争は止まらない…。

いくら錬が動いても止まってくれぬことは無い…。

もうすぐ俺は消えてしまうそれは、あいつに対する裏切りしかない  
らない…。

悪魔と悪魔の交戦は止められない)

岡崎は一人部屋の中で泣いた。

## 悪魔

とりあえず、着きました。

原田一族の門の前…。

前回。岡崎一族では失敗したが今回は大丈夫だ…。

10分後…。

「さあ言え。岡崎家の手下なのか!？」

俺はまたしても捕まったのだ。

しかも今回は手首を縛られている。

「えーっと。自分は戦争なんてよくないと思うんですよ…。向こうだつて望んでないだろうし…。」

「はあ?何言つてんだ?仕掛けて来たのはあいつらだろ?」

この時…。矛盾が起こった…。

(岡崎は原田がやってきたと言っていたのに原田は岡崎…。おかしい、矛盾している…)

このことを言つたとしても相手が嘘をついたとか言つたら…。

俺はあえて黙つた。

「この方は岡崎家と無関係ですよ」

俺に詰め寄る。大人たちの奥の方から聞こえた。

「あの家には真悟以外にこの年の子供はいないですから」

「ですが…」

「この人の疑いは晴れました。これ以上なにか?」

「…。」

後ろから出てきたのは青髪の女性だった。年齢としては俺より2つくらい上のような気がした。

容姿は黒月よりは綺麗ではない。(ただ、鍊が黒月を好きって事もあり)

「無実開放か…。よかつたよかつた」

俺は完全に安心していた。

大人たちが部屋から出て行った後。女性と俺だけになった。女性はナイフを持ち近寄る。

俺は縄を切ってくれるのだろうと思っていた。もちろん、甘い考えだった…。

ナイフを首元まで持ってこられ。

「さて、話してもらいましょうか。なんで、ここに来たのか」  
焦った。いや、危ないと思った。

「俺は、第一生徒会って言う生徒会の命令でこの悪魔同士の戦争を止めろって言われただけさ」

「そう」

ナイフを首元から離す。

（納得したのか？）

「岡崎家にはもう行ったの？お互いがやめないと戦争は止まらないでしょ？」

「ああ、行ったよ。岡崎とは同じクラスで友達だからな。まあ、大人たちに拳銃を頭に突き立てられながら真悟と対話したからな」

「へー。真悟は元気？」

（いきなり、話が変わった。真悟の事を聞くということは気になるのか？それとも…。敵の情報を知りたいだけなのか？）

「ああ、元気さ。戦争を止めたいと思ってる」

「でも、ここには来れない。当然だよな」

そう、当然なんだ。

「岡崎…。真悟は君なのかな？まあ、この一族の誰かに嫌われているって言うっていた」

「嫌われているね…」

「もしも、あんたがその人だったら許してやって欲しい」

「多分、それは私だけど…。嫌っている分けじゃないよ…。多分、真悟は自分が悪魔が故に嫌われていると思ったんだよ…」

（悪魔が故？なぜだ…。何がそうさせているんだ…？）



「私の方から戦争を回避できるようにがんばってみるから。君は帰りなさい」

ナイフで縄を斬りながら言った。

「でも」

「でもない。これは悪魔達の問題だからね」

そうして、俺はその日の夜に原田家を追い出された。

(俺にできることはあるのだろうか…)

悪魔（後書き）

争いを嫌う者…。

その者たちの願いは届くのだろうか…。

## 門番

次の日の夜。

事件がおきたのだ…。

何事もなく1日が終わるのだろうと思っていた時。

黒月から電話がかかってきた。

『錬君！大変だよ！』

「急にどうした？」

俺は慌てている黒月に冷静に聞いた。

『原田一族の娘さんと岡崎君がいなくなったの！』

「!?!?」

俺は驚いて何を言えば良いのか解らなくなった。

「探してみる！」

そう言つて一方的に電話を切つた。

俺は家を飛び出し近くの屋根に飛びつく。

さらに別の屋根に飛びつく、それを30分ほど繰り返した頃…。

「岡崎と…。原田の…」

二人を見つけ森に向うのが見えた。

その後を追う。

後々気づいたのだが、追っていたのは俺だけじゃなく。

原田組も追っていた…。

(ざつと数えて20…。最悪、俺一人で相手できるぎりぎりか…)

原田組に戦いを挑むことも考えていた。

考え事をしているうちに屋根がある場所はなくなり、木に取り移る。

(そろそろ、追いつくか…)

俺は速度を上げて岡崎たちに追いつく。

「よお。岡崎、こんな夜中にデートですか？」

走っている岡崎はこちらをみて一瞬は驚いた。

「錬。悪いが帰れ」

「言ったはずだよ。大丈夫だから君は何もなくて良いって」

(なんか、いきなり起こられたし…)

「いいよいいよ。後ろの追っ手に気づかずにお前らはつかまれよ」  
俺は意地悪に言う。

「気づいてるに決まってるだろ？相手できるわけない」

岡崎はこちらを見ることもなく走り続けながら言った。

「目的はなんだ？」

「言わない」

岡崎は頑固に口を閉ざした。

「この森の上にこの争いを招いた悪魔がいるんだ。だけど、私達でしか…。真悟にしかたどり着けない」

「なるほど…」

「霧！言うな。こいつだと…」

俺は岡崎たちに走るペースをあわせていたがここでやめ。立ち止まる。

「『足止めをするって言うに決まってる』か？」

俺が足を止めたことで岡崎も止めた。それにつづけて霧と呼ばれた原田一族の女性も立ち止まる。

「これは冗談でもなんでもない。死ぬぞ」

「私の一族は何十人で行動するよ。一人で止めれるはずなんか…」

二人が俺を止めようというが俺は怒鳴った！

「ぐだぐだ言っでんじゃねー！さっさと昇れ！」

紅翼を取り出す。

「え・・・？」

何もない床に刀が出てきて驚いていたが岡崎が霧の手を取って行くぞ。こいつは動く気がない！」

「でも…」

戸惑いながらも霧と岡崎は先を目指す。

岡崎たちが進むと入れ替わりに原田一族が現れた。

「貴様。やはり、岡崎の者か…」

「全く違うね！俺は俺のやりたいうようにやるだけだ！」

俺は怒鳴る。ここが住宅地なら苦情が殺到しただろう。

「通してもらえないかな？」

「無理だな、ここには硬い鍵で守られた門ができしまった。通りたければぶち壊してみろ！」

俺は原田一族に正面から喧嘩を売った。

岡崎 side

俺は走り続ける自分が戦うべき敵の下まで彼女とともに…。

「ねえ！本当によかったの？」

走りながら霧はたずねる。

「あいつはその気になれば、俺たちの一族に喧嘩売っても生きて帰ってこれる！」

足を止めることなく俺も答える。

「そんな！？何者なの彼は！？」

「前は、超能力者って言ってたけどな。実際なものなんだろうね」  
話しているともうすぐ頂上だった。

「俺たちは俺たちのできることをやるぞ」

「うん！」

## 戦う意味

俺たちは山を登っていき、古くなった木の建物を見つけた。

「ここか」

「うん。入るよ。中に」

俺は闇を召喚し右腕にまとわせ、ドアを殴り破った。

「でてこい、幻術野郎」

暗い闇の中から、現れたのは見覚えのある…。

幻術を使う悪魔がいた。

「良くここがわかりましたね。岡崎のいえ、何者かわからない人」

おかしいことを幻術師は言った。

「何のことだ。幻術師、門田」

「何者かわからない？」

後ろで霧も疑問をもった。

「原田のお嬢さんも一緒でしたか。どうやら、私が何をしたかわかっているようです。それにしても私の名前を知っているとは驚きますよ」

「おい！答える！何者かわからないってなんだよ！俺は岡崎真悟だ」  
門田はやれやれつと言つように説明を始めた。

「解っていないですね。あなたの一族は水を扱うのにあなたが扱うのは闇ですよ。このことから、あなたは一族の者じゃないってことは解るでしょ」

「違う！俺は、二人の悪魔から生まれた。だから、能力が違う！」

「解らぬか！貴様は一族に拾われた子供なんだよ！」

「違う！違う！」

「落ち着いて、言葉に惑わされているのよ」

霧に止められる。

（理性を失っていたか…。こんなことの為に来たんじゃない）  
「ありがとう。もう、迷わない」

「本当のことなのにな」

俺は再び闇を召喚。

「夜の俺は強いぞ」

「逃げれそうにはないですね」

視界が歪む。

「幻術を見せても無駄だ！」

俺は引力の力で門田を引き寄せせる。

「真悟、危ない！」

(え?)

『タン』

乾いた音が響いた。

俺の腹の中心辺りに何かが通り去った。

「がはあ！」

吐血する。

「な、なんだ？」

「引力の対策なんて考えているんだよ」

門田がもっていたのは拳銃だった。

「真悟！」

霧が能力を使用する姿が浮かぶ。

「引力のおかげで、必ず当たりますからね」

「貴様ー！」

「や、やめろ…！」

体に無理をさせて起き上がる。

「お前は能力をつかっちゃいけないんだろうが…」

「真悟…」

「おや、まで戦うのですか」

「まだだ…。俺は命をとられていない」

腹から血を流しながら俺は言った。

「それに、好きな奴のためならいくらでもやれるだろ？ 錬」

俺はその場にはいない親友の名を呼ぶ。

「当たり前だ。だから、最後までたっている。俺の親友」  
神社の入り口に奴がいた。

s i d e    E N D



## 戦う意味（後書き）

色々、訳ありな二名をメインとした話が続きます

## 仕事

時をすこしさかのぼる

後ろで二人が登っていくのがわかった。

「この人数を1人で何とかできると思っているのか？」

「さあな。知らないよ」

少し笑いながら言った。

次の瞬間に光り輝く光の玉が現れた。

その玉から電撃が放たれた。

俺はそれを切り裂いた。

電撃は消滅した。

（魔精霊か…）

「また不思議な…」

「半数と半数に分かれて突破しましょう」

俺は、原田組に向って走る。

刀一本で大人五人くらいをなぎ払う。

「人間か…？」

後ろの方で聞こえたが無視してさらに切り払う。

「うわぁー」

（あー、よえー…）

前に戦った黒月弥蛇さんとは恐ろしい違いだ。

「キン」

刀と刀がぶつかり、金属が触れ合った音が響き渡る。

「なめるなよ。ガキ」

（違う…。その辺の奴と…）

その後ろから光の玉が…。

俺は横に飛び横にいる奴らを切り倒す。

「があ!？」

次に真上に飛び木に飛び乗る。

「先に行け。あいつは俺がやる」

他の生き残り4名ほどが登ろうとした所の前に俺が降り立つ。

「行かさないよ」

俺は一人を切り払う。

他三人が山を登る。

それを追おうとすると後ろからさつき刀を受け止めた奴が俺に接近  
することを感ずる。

しゃがみながら、頭の上に刀を構えると両手に衝撃が来る。

「馬鹿な!？」

俺が刀を受け止めたことに驚く。

相手の刀を弾き、俺の刀で相手を狙う。

相手は後ろに飛び、着地すると片足で踏み込み力強く刀を振る。

それを受け流し、さらには左手で相手の襟を掴み足元に倒す。

「つく」

地面に手を突いてすぐに起き上がろうとする。

相手の顔のすぐ横に刀を刺す。

「動くな。降参しろ」

「いやだね」

頑固だ…。

「ん?何やってんだお前？」

山の上のほうから聞き覚えのある声がした。

声の聞こえた方を見ると、

「何でここにいんだよ…。親父」

そこにいたのは俺の父親の紅夜闘夜だった…。

「俺は仕事だ。最近この辺で悪魔同士の争いがあるからとか聞いたからな」

「仕事って？」

俺は頭の上にはてなマークを浮かべる。

良く見れば、親父の肩には、さつき通った。3人が乗っていた。

「言ってなかったか？」

「ああ、聞いてない」

「俺の事わすれんじゃねー」

倒れていた奴が起き上がり刀を振る。

「刀」

「了解」

俺と親父は一言ずつ言ってお互いの意思を言う。

親父が蹴り飛ばした石が相手の手に当たり刀を落とす。

俺の刀が相手を切り裂く。

「俺の仕事は悪魔関係の事件を解決させることだ。警察の裏部分から直接手紙が届けられるからな」

「へー」

(そういえば、親父が夜中に何度か出て行っていたことがある)

「そついや、お前もなんでここにんだ？」

「あ…」

俺は岡崎たちの事を思い出した。

「親父ここを頼む。訳はあとで」

「解ったよ」

そついい残して。俺は上を目指した。

「正しい方に進めよ。そして、こんな事件にもつ巻き込まれるんじゃないぞ」

闘夜のそのつぶやきを聞いた者はいない。

## 霞む世界

「錬、さすがだ。こんなにも早く来るなんて」

岡崎は血だらけで言った。

「お前は下がれ、ここからは俺が…!？」

俺が建物に入ろうとすると建物から追い出されるような力が入れなかった。

「下がるのはお前だ…」

拳を構えた岡崎は言った。

「お前…」

馬鹿なことを言うなそう言おうとすると、

「手出すんじゃねーって言っただろ!」

言葉がさいぎられた。

「解った…」

俺は解った何を言っても無駄だと。

「錬、悪い…」

「本当だ。親友の癖にな」

俺は右手を空に向けて上げる。

「お前に飛び切りの武器を渡してやる」

「ああ、頼む」

建物の中にいる幻想を使う悪魔はそつと拳銃を岡崎に向ける。

「私も人を殺したくないんだよ。そろそろ諦めてくれないかな?」

そんなことを悪魔はいった。

「俺はお前を絶対に許さない」

俺の頭の中では岡崎の武器を考え始める。

(あいつは何事にもまっすぐで…。絶対に曲げない…)

「武器補充!」

この感触は何時ぶりだろう何て考えはじめる…。

「な!？」

「何打貴様は!?!」

「え?」

俺の手の上には今だ見たことない白銀の槍を持っていた。

「岡崎!」

「お、おう!」

俺の返事をする。

俺は槍を思いつきり投げる。

岡崎の目前で突き刺さる形で止まる。

「ありがとうよ。使った事ないがな…」

岡崎はその槍に手を伸ばす。

『タン』

その瞬間に拳銃が煙を上げる。

「それを取らず。ここで終わりにしましませんか?」

悪魔がそんなことを言った。

「それは無理だ」

岡崎は言った。

岡崎は槍をしつかりと握る。

再び争いが始まる。

岡崎 side

槍を掴んだ瞬間に俺は右に飛ぶ。

『タン』

飛んだ瞬間にさっきまでいた場所に弾丸が飛ぶ。

「はああ!」

俺は槍で奴を突き刺す。

しかし、幻だった。

「それじゃ、さようならだ」

俺の目の前で拳銃を俺に向けられている。

「真悟!」

俺の愛した者の声がしつかりと聞こえた。

「碎ける。幻想者！」

俺は槍を目の前に投げる。

『タン』

その音を聞いた時、俺は死んだのだと思った。

( 肩が痛い…まだ、まだ生きたい。俺はまだ生きるんだ… )

「うわあああ！」

激痛によつて現実に戻される。

「はあ…はあ…」

目の前が霞む…。

かすんだ世界で奴の右腕に槍が刺さっていることを確認した…。

side END

## 岡崎

俺は倒れた岡崎と悪魔の応急処置をする。

その間に考えていたことがある。

俺の作り出した武具は特殊な能力があった。

作った白銀の槍にも何かの力が宿っているのだろうか…。

「真悟…。本当にこれでよかったのかな…」

隣で霧が心配そうに岡崎を見つめてる。

「これで争いが終わるのか…？」

霧は俺に戦争を回避するつと云ってことがある。

「ええ、私の言葉で私の一族は説得できるわ…。そして、この犯人  
さいいれば…」

『ギーーーーー』

聞き覚えのある音が霧の言葉を遮った。

ドクン…。ドクン…。

心臓の鼓動が早くなっていく。

「やばい…。霧、この二人を早く離れたところに！」

(来る…。デウスチルドレン神の子！今度はどいつだ…。どいつが来た…)

「なんなのこの音」

「良いから早く！」

紅翼を取り出し槍を消す。

『バン！』

俺たちのいた建物は強い衝撃で壊れた。

「きゃー！」

「つく！」

建物のすぐ近くに歪みがあった。

歪みから出ている機械仕掛けの腕と』。

「早く！逃げろ！」

俺が叫ぶと光り輝く矢が放たれる。



俺は矢を紅翼で切る。

紅翼に当たった瞬間矢は消え去った。

「出て来い！アレース」

俺がそう言うのと歪みからアスラ・マキーナ機巧魔神機械仕掛けの神が現れる。

『実験体09。破壊の神を崩したようだな』

アレースと呼ばれた神の子が話す。

シヴァと違って知能が高い戦の神。

（厄介なのが出てきた…）

俺は焦っていた。アレースは戦いの神。破壊の神であったシヴァよりも強い。

能力しては武器の召喚。（鍊と同じような能力）

「アスラ・マキーナ機巧魔神…」

後ろで霧が立ち止まっていた。

『皆殺しだ』

「つち！」

アレースの弓から放たれる矢を俺は打ち落とす。

『ほう』

アレースは無数の矢を放った。

俺はそのうちの3本くらいしか打ち落とせない。

「キヤー！」

霧はつまずいて転んだ。その時、悪魔が倒れたところに矢が落ち。

悪魔の体を矢が貫通した。

悪魔は矢と共に消え去った。

（何だあれは…）

しかし、そんなことを気にしている時間なんてない。

『実験体09』

そうつぶやいたアレースは巨大な剣を持っていた。

振り下ろされる剣を俺は紅翼で受け止める。

「があ！」

（何て力だよ…）

『必至になったてここにいる者は皆殺しになることは解るだろ』

「神のさだめた運命がそんな物なら俺は変えてやるんだ！」

『ほう』

アレースが力を加える。

「うわあああ！」

支えている足が痛む。

「俺の息子に何してんだ」

横から親父の蹴りでアレースは倒れた。

倒れながら武器を入れ替え矢を放つ。

矢は霧の方に飛ぶ。

俺は動けなかった。

霧に当たるはずだった矢は軌道を変え横にそれた。

「能力全開でそれるだけかよ…」

岡崎が立ち上がりながら言った。

「真悟！」

霧が心配そうな目で叫ぶ。

「大丈夫。大丈夫だから」

岡崎は冷静にそう言う。

「でも…。左腕が…」

岡崎の左肩から先はなくなっている。

「ただの非在化だ…。悪魔の運命なんだよ」

「岡崎…」

悪魔は能力を使いすぎると非在化の症状が現れる…。

雄は大切な記憶を失うことで回避できる…。そう言ったのは岡崎

だ…。

『悪魔が消える』

アレースは矢を放ち続ける。

その矢を岡崎は斥力で軌道をずらす。

「やめろ！」

俺はアレースに向って飛び切り裂こうとして刀の届く少し手前でア

レースの腕に叩き落される。

岡崎は非在化がほとんど進んでいく。

「なんで、なんでそこまでして私を覚えてるの？そんなに大切じゃないの？」

「逃げてくれたら助かるだけだね…。大切だよ…。でも、俺は自分に偽ってきた。大切なのに大切じゃないって思い続けた。そうすることで忘れないで入られた…」

「私のことなんて忘れれば良いのに…」  
霧は泣いていた。

「アレース、お前を殺す！」

俺はアレースの腕に押し付けられたまま言う。

『09、お前はここで死ぬ』

再び剣を取り出す。

「つち」

親父が現れた剣を蹴って弾き落とす。

アレースは冷静に親父を掴み地面にたたきつけ。剣を拾い親父に向けて突き刺す。

その剣は親父からずれて何も無い地面に突き刺さる。

『悪魔が…。小賢しい！』

俺を押し付けていた手がどかされアレースは岡崎の方に飛ぶ。

「死ぬなよ霧…」

岡崎は最後の力を振り絞り斥力の力で霧をできるだけ遠くに飛ばす。

「やめて！」

霧は斥力で飛びながら言った。

それと同時に岡崎は消え去った…。

## 岡崎（後書き）

メインキャラが一人消えてしまっ…。  
この神の子どっしよ…。

## 黒衣現る

「嘘だろ…。岡崎…」

俺は自分の目が信じれなかった。

『消えたか…。まあ、良いだろ』

アレースはこちらに向きなおした。

「鍊、逃げる！」

親父の声も届かない。

俺は絶望の中にいた…。

『目的はこちらにあるのだからな』

アレースが飛ぶ。

「お前があいつを殺した！」

『闇の深淵に封じられし』

呪文を唱え始める。

『！！？』

驚きはしただろうが止まりはしない。

「やめる！」

『其は、夜を紅くれないに染める者！』

俺は紅翼を持ちアレースを迎え撃つ。

お互いの武器が交わり衝撃のような物が発生する。

「つく」

『これがシヴァを討ち取った力か』

アレースは後ろに飛びながら武器を変える。

『はあああ！』

俺は闇雲にアレースを追う。

アレースの手には二本の刀。

俺はアレースの胴体に向って飛び、刀を思いつきり振る。

一本の刀で止められ、もう片方の刀で切られる…。

『その程度か』

まるで哀れむように言われた。

「錬！」

俺はこの時に死ぬと感じた…。

『バキン！』

俺の横でアレースの刀を受け止められた。

「…」

『な…』

俺の隣に黒い服に包まれ人物が立っていた。

「どけ」

そいつは俺を片足で蹴った。

俺はとつさに防ごうとしたが間に合わない。

蹴られた俺は地面を転がり木にぶつかり止る。

「がああああ！？」

ここに来て体中に痛みが走る。

（暴走封じのあれか…）

体の異変も消えた。

『貴様何者なんだ』

「黙れ。そして、去れ」

一本の刀を受け止められている黒衣に二本目の刀が背中から襲つ。

黒衣はそれを足で受け止めた。

「…！？」

足が切られるつと俺は思った。親父もだっただらう。

『ガン』

金属の塊に当たるような音がした。

（靴の底に金属でも入れているのか）

『…！？』

黒衣が力強く二つの刀を弾く。

そして、片手で持った黒い剣で二本の刀を折った。

『キン』

切れ味の良いものに斬られたかのようにあっさりと…。

「元の世界に戻るんだな」

そう言つて黒衣は新たな刀を取り出し何も無い場所に向けて刀を振る。

『ギーーーーー』

次元が切り裂かれた…。

『貴様：何者なんだああ！？』

アレースは切り裂かれた次元に吸い込まれるように入り。

次元はふさがった。

「…」

俺と親父は見てるだけだった。

「ふう…」

黒衣は初めてこちらに向く。顔が隠れるように黒い布があった。

「次に現れるのは三時間後だ」

まるで解っているように言った。

「2つほどいいか？」

「ん？」

「あなたは、出てくるタイミングがよすぎだ。もしかして、岡崎が

…。非存化の少年が消えてから来たのか？」

空気が凍りついた。

「…ああ…」

黒衣は正直に言った。

「お前！」

俺は黒衣に掴みかかろうとしたが見通したように黒衣は避けた。

「やめろ、錬」

親父が俺を止める。

「放せ！こいつはこいつだけは！」

「まだなにか？」

黒衣は平然と聞いた。

「もうひとつだ。お前は何者だ？」

「秘密だ」

黒衣は即答だ。

「その答えを知りたければついてこい。れ……。少年」  
そう言うと黒衣は再び次元を裂いた。

「この次元はまた別の物だ。恐れないなら来い」  
そう言っつて黒衣は次元に入っていた。



黒衣現る（後書き）

さあ、すかさず新キャラ登場。

『お前、何でもありだな』なんていわれたってかまわない！  
なんでもありなんだからな！

## 俺とお前

「くそ、なめやがって…」

俺は異次元に入ろうとするが親父が俺を止めた。

「待て、冷静になれ。あいつが敵かもしれないんだぞ」

「知るか！俺はあいつを許せない」

俺は親父を振り払い異次元に入る。

その中は上下左右があるのかと思うくらい何もなかった。

目の前が光。目を閉じると俺は地面に立っていた。

その場所は夕日と草原だけの世界。

「恐れずに来たか、ほめてやろう」

夕日をバツクに黒衣は立っていた。

「貴様！」

俺は紅翼を取り出し切りかかる。

黒衣はそれを簡単に避けて俺を蹴り飛ばす。

何回転した後、立ち上がった。

手元には紅翼はない。

「真剣はなしだ木刀で来い。一発でも当てれば色々話してやろう」

「なめるなよ！」

俺は真剣を取り出したかったが紅翼以外にはないので木刀を出す。

黒衣も片腕を黒い服から出した。その手には木刀を持っている。

両手で持った木刀を全力で振る。

普通の人間なら腕をちぎられる感覚になるはずだが…。

黒衣は片手で持った木刀で受け止めた。

「その程度か」

そのときになって俺は力の差を知った。

(強い…。強すぎる…)

「剣には想いをのせる」

黒衣が言うと同時に駆け出し。

力強く縦に振る。

俺は木刀を盾に両手で受け止める。  
足に強い力がかかる。

「お前の剣は何ものっていない」  
黒衣は話を続ける。

「だったら、お前には何がのってるんだよ！」  
俺は相手の木刀を弾くと右足で蹴る。

黒衣はそれをジャンプしてかわし。  
空中から木刀で俺の肩を叩く。

「つつ！」

一撃だけだがその一撃が重い。

俺の後ろに立った黒衣は俺を再び蹴り飛ばす。

「そんな力で何が救える！」

草原の中に俺は倒れこむ。

(強い…。恐ろしいほど…)

俺は覚悟を決める。

お守り袋を消す。

(これでストッパーはなくなった…)

「力に溺れるか。いいだろう」

奴が俺の力を知ったように言う。

『闇の深淵に封じられし』

「ならば、俺も行くだけだ」

『闇の深淵に封じられし』

(奴も…！？)

『其は、夜を紅くれないに染める者！』

『其は、天命さだめを背負いし者！』

俺は髪と瞳を赤に。

黒衣は変化が見られない。

同時に空中に飛ぶ。

『まだ、闇に囚われているのか』

黒衣は俺には見えない速度で木刀を振った。

俺は木刀を振る前に、腹部に強い一撃をくらい地面に落ちた。

「っが！」

気絶しそうな一撃だった。

『自分自身が闇に囚われているままで神に勝てるのか！』

黒衣が叫ぶ。

「まさか……」

(ありえるはずがない……。俺以外にこの力を持っている者なんて……)

「俺はお前の未来だ」

黒衣は顔を隠していた。黒い布を取る。

その顔は自分にそっくりだった……。

「どうして……、なぜ俺が二人……」

全く解らない……。

「俺は今から15年後……。30歳のお前だ」

目の前のそいつは俺にそんなことを言った。

俺とお前（後書き）

これは初めから考えていたシナリオです。

これしかない！と途中から考えたアイディアではありません

## 救う

「え…?」

思わず聞き返してしまふ。

「俺はお前の未来であり、お前は俺の過去であるって言ったんだよ。目の前の俺（以下：黒衣）はそう言った。

「そんな、タイムマシンがあるとでも…」

「お前は知らないだろうが遺跡があるんだよ。過去に行く」  
遺跡とは何なのかと聞こうとした時。

「おっと、時間がない。続きをしよう」

黒衣は木刀を取り出す。

「え?」

黒衣が俺の目の前に現れ、黒衣が木刀を振る。俺の持っている木刀に当たり俺の木刀が宙を舞う。

「俺には時間がない。短い時間にお前は強くなるといけないんだ」

悲しそうに黒衣が言う。

「っ!」

俺は新たに木刀を出す。

「お前の剣は軽いんだよ」

黒衣は再び振る。

俺は両手で木刀を握り、相手の木刀に目掛けて振る。

木刀同士がぶつかる。

『ボキ』

そして、俺の木刀が折れた。

「な!？」

驚いてる間に攻撃は続く。

再び木刀を横に振る黒衣。

「お前は弱い! たった一人の女性を守れないほどな!」

自分で自分の説教をする。

腕に木刀が当たる。

腕が痛む。

「たった一人の女性…?」

思い当たるのは…。

(黒月…!)

「お前は誰も守れやしない!」

黒衣が木刀を縦に振り俺の顔をたたきつけた。

「っぐ…」

地面に倒れながら考える…。

(こいつの後悔…。今の言葉がそれを物語ってる。なら何で…)

「なら、なんで、岡崎を見捨てた!」

木刀を取り出し振る。

黒衣は簡単に受け止める。

「それが奴の償いだからだ!」

その言葉が奴の意思のように思えた。

俺の木刀を弾いて後ろに下がる。

「はああああ!」

俺はそれを追う。

木刀を大きく振りかぶり横に振る。

「その程度なのか…」

残念そうに黒衣は俺の木刀を受け止め、弾き飛ばす。

「っぐ」

力の差がありすぎなのだ…。

「自分が憎いか!神に作られたこと…。神に友を殺されたこと!」

「黙れ!」

黒衣の言葉をさえぎるように大声を出す。

「何時まで否定するんだ!受け入れるんだ。それが俺とお前の罪!

存在することが罪なんだよ!」

黒衣からのつらい一言。

自分を振り返ってしまっ…。

今までやってきたこと…。今までの俺がやったこと。

「お前が救った人なんてどこにもいないんだよ」

確かに救った者など…。

「違う…」

救った俺は確かに救った。

「『俺は黒月を救った』か？だが、何度命の危険を見せた？それで救ったことになるのか？」

黒衣がツなげる。

「っ！？」

確かにその通りだ。

「所詮お前の救うはその程度なんだよ！」



## 封印

何も言い返せしない。

俺が救った人なんていない…。

「だったら…」

木刀を再び呼び出す。

「これから救ってみせる！お前が救えなかった黒月を！」

木刀横に振る。

「だったら、自分を超えるんだな！絶望から生まれた者！」

黒衣が木刀で受け止める。

「絶望なんかじゃない！俺は俺が生まれたことを罪だっていうなら

それを償っていく！」

お互いの木刀を交わりながら言葉を交わす。

「償うか…。なら、その罪から逃れた者を超えて見せる」

『神々より、封じられし…』

さつきと全く別の呪文を唱える。

『其は、神を殺す刃！』

黒衣の目が金色に変わる。

「お前は一体…」

『俺はお前の未来だ』

黒衣が真っ直ぐこちらに走る。

『闇の深淵に封じられし』

俺も呪文を唱える。

だが、奴は早い。

下から上に木刀を振る。俺のあごに当たり俺の体は宙に舞う。

『つが…。其は、夜を紅くれないに染める者！』

体の変化を感じる。

『遅い』

黒衣は飛び、空中で木刀を叩きつける。

(木刀が…。見えない…!?)  
『が!?!』

黒衣の攻撃が見えない…。

それほどの速度で木刀を振ってるいるのか?  
背中から地面につく。

『まだ、まだ!』

着地する黒衣に向って走り木刀を振る。

『遅いんだよ』

先に俺が仕掛けたはずなのに、黒衣の木刀が俺の腹に当たっている。

「があ…」

腹を押さえながら膝をつく。

『暴走じゃ俺に勝てない。勝ちたいと思うなら。封印を解くんだな』

(封印?なんだそれは…)

『神々が作ったとき、存在を削る事をセーブさせるために作られた封印を…』

(何か…。何かが頭の中に…!)

「あああああ!」

叫びながら頭を両手で抑える。

封印を解くのは簡単なんだー

頭の中に声が響き渡る。

ー神々より封じられし…ー

『神々より…封じられし…』

ゆっくりその言葉を唱える。

ー其は…ー

『其は、鎖を解かれた者!』

黒衣とまた違う、呪文を唱えた。

『それがお前の力か…』

『いつもと違う感じがする…』

それが感想だった。

『存在の力を使って力を得てるからな、まあ、俺と同じだったらだ

けどな』

『存在の力って…』

(まさか、非在化が代償なのか…)

『さあ、ここからが本番だ』

黒衣が紅翼を取り出し俺の方に投げる。

俺はそれをキャッチする。

『今までは様子見って事なのか』

『正確には、これからが様子見だ』

相手も紅翼を持つ。

『この刀だけが…。唯一、俺と最後まで戦った…』

言い終わるとすぐに、こちらに向って走ってくる黒衣。

目の前で横に一回転して紅翼を振る。

『キン』

それを紅翼で受け止める。

『十ふ…』

俺は喋ってる黒衣を蹴り飛ばす。

黒衣は地面を一回転した後立ち上がる。

『良い攻撃だ…』

『そりやどうも』

俺のほうに余裕が出てきた。

会話がなくなり静かになった瞬間。

『キン！キン！キン』

金属同士がぶつかる音が何度もした。

『はあああ！』

『やあああ！』

『キン！』

そんな時間が数分続いた。

「はあ…はあ…」

二人は息を切らし倒れた。

「これで…。良い…」

「何が良いつて言っただよ  
俺が聞く。」

「これで、お前は救える」

「黒月をか？」

「ああ、そうだ」

その言葉を聴いた時。

なんだか安心をした…。

「ここからは体力を回復と共に、俺の経験してきた話をしよう」  
黒衣の経験したこと…。つまり、俺の未来である…。

「まずはこれを見てもらおう」

戦ってる時も身に着けていた黒衣を取った。

「!?!」

それを見た俺は驚いた。

黒衣のしたには鍛えられていた筋肉があるのは想像できていたが…。

「俺は戦いで左腕を落とした」

黒衣の体には右腕はあっても…。

左腕がないのだ…。

封印（後書き）

書いていたどっちの台詞か解らなくなるが多々・・・。  
次回は黒衣視点で進めようかな…。

## 未来

黒衣 side

これは俺が左腕をなくす前の話。

デウスチルドレン  
神の子をすべて殺し。世界は安全だと思っていた…。  
付き合い始めていた俺と黒月と一緒に帰っていた。

「もうすぐ2年生だね」

「ああ、そうだな。来年も…。同じ教室になると良いな」  
「うん」

幸せだった。

平和で争いもない。この世界に入ることが  
だが、偽りの平和だった。

その日の夜。胸騒ぎがした。

いや、強い殺気を感じた。

殺気するほうに俺は向った。

森の中で奴はいた。

「お前が…、錬か？」

俺と同じくらいの少年が

「お前は誰だ…」

答えずに奴は地面を蹴った。

奴の蹴りを受け止める。

「さすが、神の子を滅ぼした力…」

神の子を知っていることに俺は驚いたが奴の行動にも驚かされる。

俺は奴の片足を持っている状態。

つまり、奴は片足で体重を支えている。

その状態で飛ぶ。

そして、踵落しをした。

俺は思わず奴を投げ飛ばした。

奴は地面を転がっていく。

「俺はクリア、お前と同じ神の子に作られた者だ」

「バカな！神は滅んだ！」

「いや、滅ぶ前にいたらどうする？」

確かに滅んだ。だが、滅ぶ前から作られた…。それだけの事なのか

…。

「神の最後の命令だ。お前を始末する」

そう言つて飛び出し。殴りかかる。

さつきよりも早かった。

奴の拳を掴む。

「やめろ。お前が勝てるはずないだろ」

俺にはまだ余裕がある。

奴の行動はすべて見えている。

威力もそれほどない。

「神々より作られし」

奴は呪文を唱え始めた。

「其は、すべてをつかさどる神」

クリアの周りに光の粒が現れる。

俺はクリアの拳を放し後ろに飛ぶ。

「闇の深淵に封じられし」

俺も呪文を唱える。

奴は気にせずこちらに飛ぶ。

「其は、天命を背負いし者！」

体の変化を感じつつ奴の攻撃を…。

「があ！？」

すでに奴が俺を蹴っていた。

地面を転がり木にぶつかり止る。

俺は立ち上がるうとすると目の前に膝があった。

木と膝に押しつぶされる。

『弱いな。本当に神の子を殺したのか？』

強すぎる…。どの神の子よりも…。

「錬君！」

ぼんやりした意識の中、はっきり聞こえた。

そこには黒月がいた。

『逃げろ！』

叫ぶが逃げない。

『君は終わりだ』

クリアは俺にしか意識していない。

奴の手刀を右に避ける。

奴の手刀は刀のような切れ味で俺の左腕を切り落とされる。

『うわあああ！』

激痛が走る。

「錬君！」

近づく黒月。

『とどめ』

クリアの冷たい一言…。

再び手刀…。

ぶしゅ…。

そんな音が聞こえた。

「錬君…」

痛みは無く。声だけは聞こえた。

黒月は俺の盾となつてかばってくれたのだ…。



## 託された思い

『黒月！』

俺は涙を流す。

「生きて…」

黒月の胸から手が抜かれる。

『次で終わりだ』

黒月の体が重力によってこちらに倒れてくる。

『黒月ー！』

黒月を片腕で受け止める。

再び、奴の手刀が襲い掛かる。

片腕で黒月を守るように攻撃を受け止める。

『神々より、封じられし…』

そして、手刀を弾く。

『其は、神を殺す刃！』

暴走と違うからだの変化を感じた。

そして、気がつく俺だけが立っていた。

周りにあつた木も倒れていて、俺だけが倒れてなかった。

side END

「これが、俺の歩んだ未来だ」

黒衣がつかさどりに言った。

（何も知らなかった…。まさかこんなことがあるなんて…）

「お前が使った力は最強だ。恐れずに戦えば勝利を取れる。だが、存在の力が無くなつていく。意味は解るな？」

使いすぎれば岡崎と同じ運命をたどるとのことだ…。

「ああ、解った」

はつきりといった。

「それでこそ、俺だ」

「これから、あんたはどうするんだ？」

一番の疑問だった。未来から来た者なんて聞いたことが無いのに黒衣は簡単に過去に来た。その謎が…。

「ああ、消えるよ」

簡単に答えた。

「!？」

「驚いたか？俺の使った遺跡の代償だ。三時間で俺の存在は消える。非在化だ」

そう言つて黒衣を完全に脱ぐと両足は完全に消えていた。

「そんな…」

「これが世界を乗り越えるつて事だ。未来の者が過去にいけることは無い。それなりの代償をなくてはな」

「なんで、死ぬつて解つていて何で来た！」

黒衣をつかんで怒鳴る。

「第一の世界で、夏目は自分の命が途絶えることを知つていても第二の世界に行った。なぜだか解るだろ？」

第一の世界と第二の世界のことを知っている者なら誰でも解る問題である。

第一の世界に未来は無い。だから、別の世界…、第二の世界に未来を託したからだ…。

「答えはそう言うことだ。そして、お別れだ」

黒衣は消えかかった腕で次元を切り裂く刀を取り出して振る。

『ギーーーーー』

次元が切り裂かれる。

「行け、行けばすぐに戦場と変わる。お前は戦場で生きていけ」

黒衣は刀を自分の足元に落とした。

「すまない…。迷惑をかけた…。託されたからにはやってみるよ」

そう言つて、次元の裂け目に入つていく。

S i d e 黒衣

(終わった…。すべては過去の俺に託した…)

消えていく体、そんな俺は目の前の刀を抱きしめる。

(そういえば…。時間が無かったが奴もそのうち気づくだろうか、  
自分の力の事を…)

「なあ、黒月。お前はどっ思っつ？」

S i d e E N D

託された思い（後書き）

次回再び神の子との決戦

## 覚醒者

目を開けると見慣れた風景と親父がいた。

「帰ってきたか」

親父は立ち上がり俺のほうに歩いてくる。

「ああ。黒衣のあいつは消えたよ」

それから親父に少し次元の中での話しをした。

黒衣が未来の自分だということは言わずに。

「一体何者なんだ？お前の力を知ってることといいあの力…」

不振がる親父。

何度もごまかしているうちに時は来た…。

『ギーーーーー』

神様やらの再来だ…。

「親父逃げろ」

「子を置いて逃げれるわけないだろ？」

親父はこの場から動く気がない。

『消える！』

腕が見えた瞬間から矢を何本も撃って来た。

それを紅翼を取り出して切り裂く。

親父は飛んでくる矢を避ける。

『あの力はなんだ！』

怒り狂う神。

「知らないよ」

アレースは弓を剣に変えて振り回す。

俺はそれを紅翼で受け止めるが…。

俺の小さな体は吹き飛ばされ近くの木にぶつかり止る。

「錬！」

親父はアレースを蹴り飛ばす。

アレースは剣を落とす。

『人間ごときが!』

神様は相当怒っていらっしやる。

『神より…与えられし…』

アレースが呪文を唱える。

『其は、神より託されし剣』

アレースの周りに剣や斧、槍色んな武器が現れる。

『神々より…封じられし…』

それを見て俺も呪文を唱える。

『錬逃げる!』

親父はアレースから離れる。

『其は、鎖を解かれた者!』

俺に向って武器が飛んでくる。

それを紅翼で斬り、壊していく。

『はあああ!』

俺の周りに武器の残骸が残る。

その残骸もアレースからの魔力供給がなくなったのか消えた。

『どういうことだ。さっきまでの力と違う』

『はああ!』

飛び紅翼をアレースに向けて振る。

『だが、まだ弱い』

『え?』

目の前にいたアレースはすでに入らず。

アレースが上から落ちてくる。

剣をこちらに向けて。

空中では避けられない…。

『危ない!』

親父がアレースを再び蹴る。

アレースは俺の横に落ちる。

(あれ?この力弱くない?)

『邪魔な人間め』

(あの時の力が出せない…)

異次元で使えた力が出せない。

『神の力を見せてやる』

アレースの左腕が変化した。

指が無くなり左腕が真っ直ぐの棒のようになる。

右腕でつかみ引つ張ると…。

『おい…ありかよ…?』

「神だからってなんでもありだろ」

左腕は抜けて武器となったのだ…。

大きな剣になった。

アレースの体を見れば腕が減っただけなのに立派な刃がついている。

『はああ!』

振り下ろされる剣を刀で受け止める。

『があ…』

少し俺の周りの地面がへこんだ。

(う、うそだろ?この剣凄く重い…)

剣を下ろすのをやめたと思うと横から剣が来る。

再び紅翼で受け止める。

俺の体は簡単に飛んで行き親父が俺をキャッチする。

「やばいな…」

『どうして…。力が…』

あの時の力が出せたら…。一瞬で倒せるはずなのに。

そんなことをしてる間にアレースは近づいてきて剣を振り下ろし始

めている。

親父が俺を投げ飛ばし親父は普通に避けた。

(いや、投げなくてもいいんじゃない?)

思いながら、地面を引つかくようにして止まり立ち上がる。

どうして、力が出せないんだ…。

「恐れずに戦えば勝利を取れる」

思い出す。あの時の言葉…。

一奴（俺）の言葉を思い出す

「所詮お前の救うはその程度なんだよ！」

（違う…）

確かに救えていない。

助けられるばかりだ…。

（だから、強くなるんだ…）

『神々より…封じられし…』

自然と口にしていた気がする。

『其は、鎖を解かれた者！』

何かが来た気がする。

紅翼を強く握り締め…。

アレースの持つ剣を斬りに行く。

「無茶するな！」

アレースは俺の行動に反応して横に剣を振る。

横に振られた剣を切り裂く。

俺の目には見えている。奴の剣の軌道が…。

紅翼の刃の部分を剣の刀身の中央くらいところに叩き込む。

『バキン』

これが俺の得た力である。

神の体からできた剣は折れた。



## 覚醒者（後書き）

守るべき物があると力がでるって設定ですね。

ちなみに、今の戦闘力を表すと。

黒衣（覚醒） > 黒衣<sup>ノーマル</sup> > 錬（覚醒）    アレース > 親父 > 錬<sup>ノーマル</sup>

となっております。後、黒衣の覚醒と錬の覚醒が戦っていた時は黒衣の存在の力がだいぶなくなっていたので同等な戦いをしてました。

## 戦いの神

…。

（あれ…。神の一部の剣が折れた？）

『がああああ！』

それは叫びだった。

神の叫びだ…。

「しゃがめ！」

何も解っていないが親父の声に従う。

しゃがむと頭にアレースの腕が直撃する。

『いつてー！？』

横に転がって頭を抱える。

「錬、大丈夫か！？」

思いつきアレースが振り回していた腕はずなのに痛みは少ない。

（これが覚醒の力なのか？）

『おかしい！作り物の体にやられるなんて…』

『そろそろ、終わりかな？』

紅翼を構えると…。

紅翼が腕によつて弾き飛ばされた。

そして、紅翼は高く飛んでいった。

『「え！？」』

親父と俺が驚く。

紅翼は森に落ちた…。

『うおおおお！』

振舞わされる腕。

『打撃で壊せるかな？』

こちらに来る腕を殴る。

腕は止まったが壊れはしない。

『無理か…』

「武器はないのか？」

（白翼は消えた。紅翼はどこか行った。煉獄はない…）  
そして、思い出す。

一本の槍を

『来い』

目の前に槍が現れてそれをつかむ。

（思えば刀とか剣以外使ったことないな）

『あああああ！』

狂い暴れる神はその手に剣を持つ。

槍の柄で剣を受け止める。

（俺の作った武器は硬度が高い）

硬度に驚きながらも体勢を維持。

「さて、そろそろお別れだ」

今までたっているだけだった親父が飛びアレースの頭を殴る。

「結構硬いな…」

（今まで散々蹴っていたのにな）

アレースの剣が離れた。

『食らえ！』

槍をほうり投げる。

槍は一直線に飛びアレースの胴体を貫通した。

『…』

そして、完全にアレースは停止した。

「終わった？」

覚醒を解きながら聞く。

「動かないからな」

親父が答える。

アレースを貫いて地面に刺さっている槍を消す。

それと同時にアレースは音を立ててバラバラになった。

（神って存在でもこうなるのか…）

その後、紅翼を捜して山を降りた。

## 戦いの神（後書き）

長く続いた悪魔騒動 & a m p . 神の子が決着。  
次回は岡崎の秘密が明らかに…。

### 第三の翼（前書き）

今回は自分でもないなって思う作品になってます。  
今回のことをどうすれば良くなるか教えていただけると嬉しいです。

### 第三の翼

山を下りれば岡崎一族の人が2名いた。

「うちの真悟は…」

頭のような人が聞いてくる。

「残念ですが息子さんは…」

親父が事情を話した。

俺はそれを後ろで聞いているだけだった。

「私達がバカな争いをしたから…」

二人は涙をこぼす。

俺の心の中には何も無かった。

次の日

遺体無き葬式が行われた。

葬式と行っても集まった者があいつの冥福を祈るだけの物だ。

俺と親父に原田家の霧が呼ばれた。

俺は部屋に入るなり用意された席で顔を下に向けていた。

何も見たくない。

俺は何もできなかった…。

俺は目の前で起こっていたことなのに…。

突然、肩を叩かれる。

前を向くと昨日の二人のうちの一人である。

「君は責任を背負いすぎているよ。私達の問題なのです」

優しく言う。

「違います…。俺が、俺ならとめられたんだ。それだけの力があつたんだ」

力はあつた…。紅翼を岡崎の体のどこかに当てていたら能力は使えずに存在が消滅することは無かった。

「俺が、俺が！」

『パン』

俺の頬を霧が叩いた。

「あなただけじゃない！私が真悟を連れ出した！」  
泣きながら霧は言う。

静まりかえる。そのときに来たのは、

「真悟の遺書がありました…」

そんな知らせだった。

「おい、しっかり聴いとけよ。お嬢さんも鍊も」

親父が真剣な目つきで言う。

そして、遺書を読み始める。

『この手紙が読まれているっと言うことは自分は争いで死んだか、非存化で消えてしまっているでしょう。』

今までお世話になったお父さんやお母さん、どうしようもない息子ですいません。

自分は親不孝者です。なんせ、親より先に逝くのですから…』  
呼んでいる人が涙を拭く。

(岡崎どうして…)

『ですが、これが自分で考えた道です。どうか許してください。  
岡崎一族と原田一族に争いをさせた者が許せなかったのです』

〈ここから岡崎一族の個人向けに書かれている内容なので省略〉

『後、親友ってお前が思ってるのか知らないが鍊へ、自分が死んだ  
ということを聞けばお前は自分を責め続けるだろう。』

自分が気づいてやれなかったなどって自分を責め続けるだろ  
う。

だが、勘違いするな俺はお前にそんなことを思って欲しくなんかな  
い。

お前はお前の守る者だけを見続ける』

自然と涙が零れ落ちた。

(いなくなるって言うのに人の心配しかできないのか…)  
隣にいる親父が俺の頭を撫でる。

「自分を責めたって何もならないって言われてるんだ。今日くらい  
思いつきり泣け」

「う、うわああああ！」

俺の瞳から溢れていく水は止まることを知らないように流れていく。

「ちょっと、うるさいが少し目をつぶってやってください」

親父が頼み込む。

そして、遺書はすべて読み終わられて呼んでいた人が自分の涙を拭くときに手紙の中から小さく折りたたまれた紙が落ちた。

それを拾った人が読む。

『最後に愛しき人へ、

書こうか迷ったよ。

ずっと、幼い頃から君の事が好きだったよ。

忘れないために紙に君の事を書いていた。

自分で記憶を騙し続けた。

君を忘れ』

「ここで終わっています」

呼んでいた人が言う。

霧は立ち上がり外にでた。

それから俺たちは式場を出ていた。

「紅夜闘夜さんですよね？」

後ろで親父が呼ばれる。

「やはり…、俺ですか…」

親父は知っていたかのように呼ばれたほうに歩いていく。

「そだ、先に帰って飯食って寝ろ」

俺に向って言った。

その後、すぐに家に帰って飯を食った。

眠る前に今までの事を考えると自然と涙がでた。



「どうしてなんだ…」

涙が止まらない。

「岡崎…」

岡崎のことを考え。

ひとつのことを考える。

「俺をもう少し支えてくれ…」  
ウェポンチャージ  
武器補充

奴の事を考えていると自然と形ができ、その姿を現す。

「仕方ない奴だな…」

同時にそんな声が聞こえた。

手の中には刃が黒い刀が現れている。

「黒翼…」

俺を支える第三の翼…。

### 第三の翼（後書き）

次回からはまた日常に戻ります。

岡崎の事は全く引きずっていないかもかもしれません…。

皆さんに納得ができる作品になるかは解りません。

## 真実と動き出す影

side 鬪夜

「俺が呼ばれたってことは山で殴ったのが問題ですかね？」  
呼ばれて頭のような人の前で言う。

「いえ、それは原田組でしょう」  
「ならなぜ？」

俺が呼ばれた理由はわからない。

「あなたが噂のデビルキラーですよね？」

俺は警察の問題を解決するために動くたびにデビルキラーと呼ばれるようになった。

「そう呼ばれているようですね」

（何か怨みでもあるのだろうか…。かわりのある悪魔が多すぎてわからない…）

「本名は…」

「紅夜鬪夜」

（なぜそんなことを…？）

俺には理解できない。

「第一の世界から来てませんか？」

「良く知ってますね…。確かに、第一の世界の住民だ」

（何かがおかしい…。意図のない質問にしか思えない）

「それなら…。あなたに伝えなければならぬことがあります」  
周りの雰囲気が変わる。

いきなり襲われた時のシュミレーションをする。

（一人なら何とか逃げれるな…）

「あなたの息子さんを私達が預かっていました…」

…。  
なんていったんだ…。

(息子？錬のことか…？意味が解らない)

「すいません。何のことか解りません。息子って錬ですか？」

「いいえ、違います。私達が言っているのはあなたと篠<sup>さか</sup>さんの間の息子のことです…」

！？

正直何のことか理解できなかった。

冷静に聞くと篠つと言った。

篠つと言えば第一の世界に置いてきた。俺の妻の事になる…。

(いや、篠つと言っただけなら別人かもしれない…)

「確認をしたいのだが…。江宮<sup>えみや</sup>篠<sup>さか</sup>のことですか？第一の世界から来た…」

心の底から思った。

(違うと言ってくれ…)

「残念ながら…。そうです」

「そんなバカな！あいつは第二の世界にくることがあるはずがない！」

立ち上がり言った。

「私達がそのことを知っていることが何よりの証拠だと思ってください…」

「じゃ、あわせてくれ！あいつに会えば解る！」

興奮気味に俺は言った。

冷静になれつと自分に問いかけるが無理だ…。

「できません…」

「なぜだ！」

「…。お亡くなりになっています…」

俺は話している人に飛び掛り殴ろうと思ったがその拳を止める。目の前に飛びかかっているが驚くこともなく座っている。

相手の目を見るとその真剣さを感じる。

「嘘だろ…」

俺は膝をついて座り込む。

「何時ごろ…。篠はこちらに入ましたか？」

「15年前、門の前で倒れているのを見つけていました」

（皮肉にも俺がこの世界に来た1年ほど前だ…）

「そのときには妊娠をしていて子供を産み。その後すぐにお亡くなりになりました」

話している相手も悲しそうに言った。

「あああああああ！」

涙を流す。すべてが真実だとわかり叫びながら…。

「そうだ…。その子は…その子はどうしているのですか…」

「これも話しにくいことですが…」

この時に俺の中に1つの考えが思いついた。

「まさか…」

15年前ということは今は中学3年か高校1年である。

「岡崎…。いや、真悟って子供が…」

「その通りです…」

頭も涙を流す。

「そんなことなんて…」

涙が止まることなく出て行く。

「あ、ああ！あああああああ！」

ただひたすらに叫ぶ。周りも涙を溢していく。

それから30分ほど叫び続け。

部屋を借りて1人にさせてもらった。

そして

「すみません。篠のお墓の場所を案内してください」

俺の頼みを岡崎家は快く聞いてくれた。

岡崎家の敷地内に墓石が何個か立ってある場所があり、歴代の岡崎家の者が眠っている。

「こちらです」

その中にひとつ紅夜家とかかかっている墓石がある。

「私はこれで失礼します」

気を利かせてくれたのか案内をしてくれた人は戻っていた。

「なあ、篠。どうしてこっちに來たんだ？」

俺は一人話しかける。

「まあ、お前のことだから寂しかったんだよな。昔からそうだったな…。そういや、息子が入たんだな。俺もびっくりだぜ。お前と俺の息子は立派に生きたぞ。自分の好きな人を守ったんだ。さすが俺の息子だよ。俺もお前を命に代えてでも守ってやりたかったんだがな…。力不足みたいだな…」

永遠に続くような独り言。

「そうだ。俺も息子がいるんだ。いや、浮気なんてしてないぞ。森の中で拾った子なんだ。驚くなよ。俺とお前が出会った時のようなガキが森の中で刀を振り回してたんだぜ。それでおとなしくなかって俺の息子にしたんだ。今じゃ真悟と同じで高校生だ。さらに、真悟と一緒にクラスで親友って言ってたよ。運命なのかな？あ、名前言っってたな。錬って言うんだぜ。もし、錬がいなければ俺もそっちに逝っていたかもな。まだ、錬がこの世界にいるからもう少し俺は錬を守らなきゃいけない。だから、少しそっちで待っていてくれ。そう告げると何だが心の中がすっきりした。

その後、岡崎家の頭に会って帰る事とまた來ることを伝えた。錬に真悟の事を伝えるか迷ったが伝えずにすることにした。

(親友のまま入ってくれ錬…)

side END

side ????

ここはどこだろう…。

冷たい液体の中にいる感じた。

突然水が無くなる。

『目覚める実験体34』

その声で目覚める。

「ここは…」

「お前は実験体34だ。お前が生まれてきた理由は強い者を消すことだ。そう、実験体09だ」

「奴は反逆者だ始末して来い」  
認識をし始める。

（プタハ、クヌム。私を作ってくれた神。最も強い者…。任務を認識…。認識完了）

自分はプタハの体に手刀を入れる。

「!?!」

プタハはそれだけで機能を停止する。

「34何をする!?!」

「その答えですが強い者を消しています」

そう、自分の中ではこの二人が最も強い者なのだ。

「やめr…」

クヌムの首を手刀で切り落とす。

（任務の完了。次なる任務。反逆者09の抹殺を実行）

何もない世界の中で2体の神が瞬時に消え去った。

それを実行した者は新たな任務を実行しに何もない世界を歩き出す。

side END

## 真実と動き出す影（後書き）

今回は裏設定の話と新たな敵の出現です。

今回、プタハ、クヌムは神の子で、創造の神なだけで戦闘能力はなく瞬殺です。

この二体の神は鍊も作り出した。

これで神の子の5体中4体が崩れました。  
物語も終わりに近づいています。



## 親友

次の日

重い気持ちで学校に向った。

朝のHPのギリギリに着くように向った。

「珍しいね…。ギリギリなんて…」

黒月が心配そうに聞いた。

（狙ってきたんだがな…）

「ああ、危なかった」

焦った風に言う。

「それで、昨日の問題は…」

これは昨日の岡崎が入なくなったことだろう。

「大丈夫解決はしたよ…」

明るく言ったつもりだが黒月が不安そうに俺を見つめる。

「もしかして…」

黒月が話し出したときに先生が入ってきた。

話は中断して前を向く。

未だに出席できない岡崎の席を黒月はちらちらと振り返って見ている。

（嘘で通せるなんて思っていない。だけど、どうしても言う勇氣はない…）

「あー、岡崎だが、親御さんの仕事の都合により本日から転校することになった」

（そう言うことになっていたのか…。もう、会えはしないが…）

「それじゃ、解散」

そういつて、先生は教室から出て行く。

教室は岡崎の話題ばかりだ。

俺は気分が悪くなり教室をでた。

そして、屋上で大の字になる。

チャイムが鳴ったが教室に戻る気にならなかった。

「どうしたら良いんだろうな…」

つぶやいた後、眠った。

夢の中で夢を見た。

あの時の夢だ。

アレースとの戦いで初めから覚醒を使いこなしていて誰も悲しまずに戦いは終わる。

そんな夢を見た。

俺は目が覚めると泣いていた。

「何でだろうな…。こんなにも涙もろかったけな…?」

制服の袖で涙を拭う。

そうすると屋上の扉が開いた。

「ここだったんだね」

あけたのは黒月だった。

「まるで見通しのようだな。授業はいいのか?」

「授業はおわったよ。錬君は気分が悪くなって帰るって言ってたって伝えておいたよ」

「あ、ありがとう」

(そういや、初めて授業をサボったな…)

今更だがそんなことを思う。

「後、解るよ。錬君は解りやすいから。岡崎君は…」

「岡崎は消えたよ。愛する者を守るために戦ってね」

俺は正直に話し始めた。

「あいつが守ってるのに俺は何もできなかった。戦っても勝てはない。でも、未来の俺を名乗る奴が来たんだ。岡崎が消えてから俺の信じられないような話を静かに聞いてくれる。」

「それで、その力があれば救えたんだ。すぐに倒せたんだ」

「うん」

「それなのにな…。あいつは遺書に俺のことを親友なんて書くんだぜ。何もできなかったのにな」

袖で拭いた涙がボロボロこぼれていく。

「それは違うよ」

「え？」

「鍊君にとつて岡崎君は親友じゃないの？何かしてあげなきゃ親友つていけないの？」

「……」

「親友だよな？私はね。何かができたとかじゃなくて気持ちが大切なんだと思うよ」

（ああ……。何を思ってたんだろうな。これじゃ、岡崎が笑うな……）

「すまない。俺が間違っていたな。あいつは親友だよ。俺の大切な奴だ」

「うん。大丈夫そうだね」

そう言つて黒月は満足げに笑つた。

俺は立ち上がり黒月のほうを向いていった。

「黒月。お前は離れないでくれ」

「もちろんだよ」

そう言つて笑顔で優しく声を返してくれた。

その後、俺は黒月と別れて家に向つた。

ふと、黒月の笑顔を思い出すとなんだか俺も笑顔になれる気がした。

「やあ。君だね」

俺しかいない道で俺に手を振る知らない奴。

「誰だ……」

「なに、明日から君に変わる存在だよ」

そして、当たりが真っ白になった。

親友（後書き）

さて、新たな章に突入ですね。

## ありえない日常（前書き）

違和感を感じる会話ばかりですがどうぞ気にしないでください。

## ありえない日常

気が付けば家にいて夜だった。  
見てみれば洗濯物を取り込んでいない。

「ぼー」としているとだめだな……」

俺は慌てて洗濯物を取り入れた。

「それにしても、これから学校生活が退屈になるな……」

一人つぶやきながら晩飯を食べた。

ある程度の筋トレをした後風呂に入って眠りについた。

朝、腕を伸ばして起き上がる。

いつものように弁当と朝食を作り。家を出る。

親友のいない非日常が始まった。

学校では誰に挨拶をすることも無く、自分の席に座って文庫を読み始める。

「今度、君の家の人にも挨拶をしたいんだけど」

前の席では黒月と華瑛がいつものように喋っている。

（黒月か……。高みの花だな……。華瑛の彼女って噂ってかそうだしな）

初めて出会ったときからなんだか綺麗だなんて思っていたって関わりが無いのである。

話すきつかけも……。

授業も適当に受けて、休み時間バカをやることも喋ることもなく時間が過ぎていく。

岡崎が入なくなってから俺の周りに誰も入なくなった……。いや、あいつ以外に誰もいなかった。

それが日常になりつつあった。

岡崎が入なくなつて4日後。

校内放送で第一生徒会に呼ばれた。

(1人を呼ぶたびに校内放送ってどうなんだろうな…)

俺も学校内では名前は有名である。

生徒会長である川…。誰だっけ？

「錬入ります」

名前を思い出せないまま生徒会室に入る。

「何でしょうか？会長」

いつものように椅子に座った会長。

「いや、悪魔達の乱戦とか、そういうことじゃないんだ。黒月のことは良いのかい？」

(…？夏の暑さでねじが何本か飛んでいるようだ。こんな冗談を言うなんて)

「クラスメイトだけでかわりなんてないでしょ。綺麗だな何て思いますけど話かけることすらしてませんよ」

俺が正直に答えると

「何を言ってるんだ君は？」

逆に驚かれた。

「君は彼女を守るために戦ったことを忘れたのか？修学旅行、夏休みに会ったことも、黒月家の騒動も君が関わっていると岡崎く…」

「あいつの名前を出さないでください…」

冷たく言った。

「解った。すまない。それで、良いのかね？」

「何度も言うように関係はありません。話がそれだけなら失礼します」

俺はすぐさま出て行った。

(つまらないことを言うようになったな…)

そのまま家に帰った。

帰ると考え込む。

(会長の言っていることが冗談だったのか…)

俺の中でいくつもの疑問が現れる。

『ピンポーン』

インターホンがなり扉を開けると若い女性がいた。

「あの、新聞の勧誘ならいらないんで…」

そう言っただけで静かに扉を閉めようとしたら。

「待って、錬君」

名前が呼ばれて立ち止まる。

「なぜ、俺の名前を？」

「やっぱり、解らないんだね」

不思議なことを言う…。

「私は黒月静音の親戚の楓って言うけど。周りから静音ちゃんのことを聞かれたりしなかった？」

この人の言う。黒月静音とはクラスメイトである。

「そうですが何か？彼女とは全く話すこともなかった。ただのクラスメイトですよ」

「そうなっているのね。良いわ。錬君、紅翼を取り出して」

楓という人はさらりと言ったが俺の中では焦りを隠せない。

（なぜ、俺が物体を取り出せることを…。いや、紅翼の存在すら知っているのがおかしい）

「何ですかそれは？」

「隠しても無理だよ。君の能力は知っているよ。刀などを取り出したり、瞳を赤くして身体能力を上げるでしょ？」

（暴走まで知っているとはね…）

俺はしぶしぶ紅翼を取り出した。

能力を知られているなら隠す意味もないし紅翼は持ち逃げできないからである。

紅翼を地面に刺す。

「これで良いのかな？」

そう言っただけで一瞬のうちに楓は刀を地面から抜いて俺に向って切りかけた。

切りかかったと行っても逆刃なので切られることはないが紅翼をつ



かむ。

「あああ！」

楓が悲鳴を上げるが…。構っている余裕などない。  
俺の頭の中に凄い衝撃が来る。

(何だこれ…。記憶が書き換えられて…。いや、戻って行ってる?)

「何だこれ…」

「戻った？」

目の前で紅翼を地面に落としている楓さんが両手を押さえながら聞いた。

「ああ、でもなんなんだ？」

「多分だけど、悪魔の力だよ」

どういふことかと考えてしまう。

「記憶を操る。強すぎるために2年前に滅んだて聞いたけど。生き残りが痛んだよ」

ありえない日常（後書き）

とうとう、悪魔の力に限界はあるのか？と考える範囲まで来たぜ…。  
闇の次は記憶、そろそろダメかな？

## 鈴芽

俺は必至に走る。

(どうしてだろうな……。こんなにも厄介ごとばかりよ)

楓さんの話によれば鈴芽<sup>さすが</sup>一族の生き残りらしい。

鈴芽一族は記憶を使った能力で相手の記憶に干渉したり、自分の記憶を飛ばして攻撃する。

悪魔にとつての記憶は生命である。大切な人の記憶を消して自分の生命を維持しているのだから……。

さらに、鈴芽は今、黒月一族に行っているらしい……。

あそこで記憶操作をされてしまえば終わりかもしれない……。

黒月家が見えて来たところで足を止める。

(どうする？ 記憶操作をされていたら部外者だ。だが、記憶操作をされていなければ事情を……。いや、黒月の記憶操作をしている時点で黒月家はされている……)

その考えにいたったのには理由がある。

黒月の記憶だけを操作すれば黒月家ではれることが大いにありえる。その危険を避けるためだ。

(さて、どうするか……)

考えてみても良い方法が思いつかない。

無駄に頭を使うこと数分。

力で突破するしかないと決断。

チャイムを鳴らすと門が開き、男性が出てくる。

「何のようだ？」

この対応からして俺のことを全くしらないと見れる。

「えーっと。道開けてください」

そう言うと相手は疑問に思っただろうがすぐさま紅翼を取り出して軽く叩く。

「な……!?!?」

驚いたのが一瞬で紅翼で記憶が戻されると、

「錬さん？」

「ええ。そうですよ」

俺は手短かに状況を説明をする。

現在、黒月のお客が来ていて外の見張りは一人だが中には大勢いるようだ。

「なら、普通に見張っていてください」

そう言っただけ俺は家の中に入っていく。

「お邪魔します」

と扉を開くと…。

「誰だ？」

近くにいた黒月家の人聞く。

「ああ。こういう者ですよ」

そう言っただけ、紅翼を見せる。

全面戦争の始まりである。

「少し騒がしいな」

家の奥で弥蛇は静音と華瑛がいる。

「そうですね」

華瑛が同意する。

「まあ、静音が男性を紹介してきたんだ。皆も気になるんだ」

「うう…」

恥ずかしそうに静音がうつむく。

「いえ、自分は騒がしい方が好きですよ」

そう淡々と言葉をつなげる華瑛。

『バン』

そのときに障子を破って一人の男性が部屋に入ってきた。

「あー、ちよっとやりすぎたかな？」

同時に部屋の外から声が聞こえた。

「さて、華瑛。俺の大事な物、返してもらおう」  
俺が紅翼もって現れる。

「華瑛さんへのお客さんみたいですが…。ちょっとやりすぎですね」  
座っていた弥蛇が立ち上がる。

「静音、離れるんだ」

「あ、はい」

「静音さん。こちらへ」

華瑛が黒月をつれて出て行くのを俺は見逃した。

「弥蛇さん悪いですが倒させてもらおう」

「なぜ、俺の名前を？」

「そのうち解ると」

鈴芽（後書き）

黒月家最強との対決再び

## 奪還者

弥蛇さんが

魔精霊のペクを呼び出す。

「まあいい。家の家族に手を出したんだ。死んでもらおう」  
突進してくる弥蛇を紅翼で迎撃しに出る。

（一発でも当たれば終わる）

その考えは甘かった。

紅翼を振った瞬間に上に飛び空振りに終わり。

弥蛇の後ろからペクが突進してくる。

（やばい）

以前俺の肩を貫いたくちばしが俺の喉を狙って進んでいる。

そのとき、誰かに足を蹴られた。

体勢を崩して倒れる。

「社長。なぜ、錬さんを…？」

さっき、殴って正常に戻した人が助けていた。

「あ、ありがとうございます」

「なにわけのわからないことを言ってるんだ？」

弥蛇は助けてくれた人に問う。

話に夢中になっているところを…。

俺は紅翼で思いつきり斬りに言った。

さすがに驚いて両手で刀をつかむ。

「よし！」

「う…？錬さん？」

どうやら記憶は戻った。

同時に紅翼の能力でペクもいなくなった。

俺は紅翼を消す。

「さて、状況は悪いです。黒月が華瑛と共に逃走。弥蛇さんは俺を倒したつと言う事で追ってください」

俺は素早く説明して指示をだす。

「でも、なぜ？」

記憶の操作の法に不安があるのだろう。

「鈴芽一族らしいですよ。俺は知りませんが…」

そついで残して俺は黒月を探しに出る。

(どこだ、どこにいる…)

俺は屋根を飛び回る。

(そいや、会ったとして。記憶を操られたら終わりじゃ…。いや、なぜあつたときに能力を使わなかった？ ばれるからか…。それでも対策を考えないとな…)

そして、俺は策を思いつく。

後は探すだけだが…。なかなか見つからない…。

(どこだ？ 華瑛は町に詳しいのか？)

考えてもどこに行つたか解らない。

「くそ！」

(黒月が先導してるなら…。あのビルか…)

昔、飛び降りをした廃ビル。

(よくあの時助かったな…。まあ、記憶を取り戻した俺にとっては当たり前にも思えるが…)

この人間のように思える体を持ってても中身は化物なのだ。

ビルの前に付く。

「追つてこれるとは思いませんでしたね」

華瑛がビルの前で立っていた。

「悪いな。奪つた物を返してもらつ」



**奪還者（後書き）**

次回の戦闘凄くしょぼいかも…（今まで以上に）

## 紅色の翼(前書き)

タイトルに深い意味はない！

## 紅色の翼

紅翼を構える。

「まあ、もう一度するか」

そう言うと華瑛の後ろから白く光る球体が現れる。

（あの光る球体がぶつかった時に記憶が操られた…）

「もう、記憶を操らせない」

俺は近づいてくる球体を切り裂く。

「！見えるんだね。驚いたよ。並みの悪魔には見えないんだけどね」  
驚いた顔をした後に無数の球体が現れる。

「でも、これをすべて打ち落とせるかな？」

一斉に飛んでくる。

「なるほど。力の限りいくらでも出せると…」

俺は一斉に襲い掛かる球体を打ち落とす自信などない。  
だから俺は、

自分の左手の平を紅翼で突き刺した。

「っつ…」

少々痛む。そして、赤き液体が地面に流れ出る。

「バカが。記憶をなくして死ね」

光が俺を包み込む。

「そうそう、悪いが俺は悪魔じゃない」

光を振り払い前にでる。

「記憶を失わない！？化物か！」

この球体が記憶を消す物だというのは正しいようだ。

「悪いが俺は化物だよ」

左手に紅翼が刺さっているので、消されてもすぐに記憶が戻る。  
「行くぞ」

踏み出す。

一瞬で華瑛の目の前に出る。そして、右腕を思いっきり振る。

「つく」

華瑛は体を曲げて攻撃を避ける。

避けた華瑛を追うように追撃を仕掛ける。

「華瑛くん！」

俺と華瑛の間に黒月が入ってきた…。

俺は攻撃をとめる。

（黒月…）

右目を赤く染めている。

（相手の心を読む能力その力を使ってでもそいつを守りたいか…）

動きが止まっていた間に蹴られていた。

倒れる前に地面に手をつける。

「ぐあああ！」

手をつける時に刺さっていた紅翼が斜めになり傷が広がる。

「はあああ…」

（やべ、深く刺しすぎた。目が霞んできたぞ…）

「静音どいて！」

後ろに隠れていた華瑛が倒れている俺を蹴る。

その足を俺はつかんだ。

「返してもらっぞ…」

握り締めて睨む

「っぐ。放せ」

つかまれている足に力をかけるが

「テメーに俺の大事な物はやらない！」

華瑛を持ち上げる。

「華瑛くん！放して！」

黒月が俺に向ってタツクルする。

黒月のタツクルを受けてバランスを崩し倒れる。

「華瑛君！」

叫ぶ黒月。

足を握る手を離し。手のひらに刺さる紅翼の柄を持つ。

「後悔しろ」

俺はそのまま刀を引き抜く。

元々赤い刀だが血の色でさらに赤くなっている。

「俺の手の届く範囲に来てしまったことを…」

「その刀が力を消しているんだろ！」

刀が抜かれた今、記憶を操作される可能性がある。

（もう、そんなことどうでもいい…）

これ以上、黒月にこんな奴の為にがんばってもらいたくない。その  
気持ちで俺を動かせる。

目の前に球体が現れて俺に向って動き始める。

『神々より…封じられし…』

刀を振り確実に球体が消えていく。

『其は、鎖を解かれた者』

唱え終わった時には球体はなくなっている。

「何だ…その力は…」

『記憶を隅々まで見たわけじゃないんだな』

「なに、これ…」

『終わりだ』

言葉より早く紅翼が華瑛の顔を切り裂く。（もちろん逆刃なので実

際に切られてはない）

「があ！」

『はああ！』

もう一発華瑛の体を切り裂く。

華瑛の体はビルの壁に当たり止る。

（よし…。後は紅翼で黒月を…）

そこで俺は力尽きた。

その場に倒れこみ闇の中に沈む…。

## 紅色の翼（後書き）

誤字脱字などあれば報告してくださるとうれしいです。  
もちろん感想なども

## 神の子の子

目が覚めれば、見覚えのある天井があった。

「夢…？」

起き上がるうとしたら体中が痛み今までの出来事が本当だと認識する。

「起きたかな？」

現れたのは弥蛇さんだった。

「あれ…、俺の家知ってましたっけ？」

第一の疑問がそれである。

「静音が知っているからね」

暗くて解らなかったが俺の隣で黒月が眠っている。

「『錬くんが起きるまで私が看病する』って言ってたんだが、流石に疲れが溜まっていたんだな。さっきまで起きていたんだが」

ああ、そんなこと言いそうだなって考えた時ふと頭に浮かんだ。

「なぜ、黒月の記憶が？後、華瑛は…」

黒月が起きないように声を小さめに言った。

「ああ、それね。話は向こうで使用か」

まるで自分の家のように言われたが気にせず寝室を出た。

「まずは、静音の方から話そう」

真剣な表情で話し始める。

「俺があの場合に着いた時は、まだ記憶が戻って無くてな。倒れてる錬さんに止めを刺そうとしていたところで見つけたんですよ」

（あれ？さらっと恐ろしいこと言ってない？）

「それで、止めたんですけど元に戻すためにも落ちてた刀拾って叩いたんですよ。ビックリしましたよ。刀持っただけで火傷なんてね」  
握り締めていた右手を開いて見せると火傷の跡があった。

「どうも、すいませんね」

「いや、君が入ることでもただけ助けられているか」

俺が頭を下げれば慌てて弥蛇さんが言った。

「いえ、俺が関わったことで問題が起こったこともありますから」  
これは事実である。もしも、黒月が俺と関わりを持たなければ、神ステルドレンの子に襲われる事も無ければ俺の暴走を止めるなんて事もせず  
にすんだ。

「でも、反対に考えれば。君がいなければ静音は死んでいる…」

「…」

それも事実である。

入学式、校外学習、今回の件。色んなところで俺は黒月を助けきたと自分でも思っている。

「錬さんがいたから今の静音がいると思っている。感謝もしているよ。錬さんさえよければ静音を「そんなこと言っちゃダメですよ」「弥蛇さんの会話を遮って言った。」

「俺はこの世界の間人じゃないんですよ。世界を滅ぼそうと存在なんてしない世界から送り込まれた奴に一人娘を任せたいなんて言ったらダメですよ」

俺は静かに言った。

「本当に、そう思ってるんですか？」

いつもより真剣な眼差しが俺を見つめる。

「そんなことを言い聞かせないとダメなんですよ…」

悲しげな声で言ってしまった。

俺は黒月が好きで結ばれたいと思っている…。

黒月を殺そうとした。そんな罪悪感が俺の中に残り続けているのだ。

「さて、話を変えましょうよ。華瑛はどうしたんですか？」

俺は素早く会話を変えた。

弥蛇さんは不機嫌な顔をしたが話をし始めた。

「川井と言う人が回収したよ。何でも、悪魔の能力を封じるとか言っ  
て連れて行ったよ」

「川井…？」

俺の中には思い当たる人物がいた。



( 確実にあの人が…。なぜ、あの場所に…？ )

「そうですか。なら、安心ですね」

そう言っただけ席を立った。

「錬さん、最後に聞きます。貴方は静音をどう思ってるんですか？」  
率直に弥蛇さんが聞いた。

「どうしても答えないとダメですかね…」

無駄な話だと自分でも思う。

無言の肯定って奴だろう。

「好きですよ。誰より思うくらいに」

## 神の子の子（後書き）

駄文& amp · 短文。どこに良いところがあるのだろうと考えはじめるこのころ

## 沈黙の登校

俺の正直な気持ちを書いて弥蛇さんは安心したような顔をした。

「聞けてよかったよ」

「それじゃ、俺は別の部屋で眠りますから」

それに部屋には黒月が寝ている。

そこに戻って眠れるわけがない。

顔が赤くなっていることを見せないように退出した。

そして、別の部屋で上着を布団代わりに掛ける。

side 弥蛇

質問に正直に答えるなど思ってもいなかった。

(正直で良い子だな…。本当に静音を思っている)  
静音の婿に来てくれればどれだけ良いかを考えれば、どうにかなら  
てもらいたいと思うばかりである。

(それとは別で…)

「静音、起きているんじゃないか？」

そう、少し開いている扉に向かって言えば

「解っていたんですか…」

扉から静音が出てくる。

会話が聞こえていたのかじやつかん頬が赤く見える。

「聞いていたのか？」

聞いてみれば

「…はい」

小声だったが聞こえはした。

(目から涙しそうな所を見ると最初の方から聞いていたな)

「そうか、後は自分で考えなさい」

私は特に何も言わずに部屋をでる。

そして、鍊さんの家を後にした。

side END

目が覚めれば朝だった。

朝食を準備しに台所に向う。

台所に行けば誰かが料理をしていた。

「あ、おはよう」

エプロンをつけた黒月がいた。

「…」

いつも以上に優しい笑顔に見惚れていた。

「鍊君？」

挨拶をしない俺に疑問を感じ首をかしげる。

「ああ…。おはよう」

(ダメだな、弥蛇さんに言われたことを意識でもしているのか?)  
いつもと違う違和感を感じる。

「もうすぐできますから座って待っていてくださいね」

「いや、俺も「大丈夫ですからどうぞ」」

手伝うと言おうとしたら遮られたので座って待つことに…。

本当にすぐ出来上がった朝食をいただいた。

「相変わらず。うまいな…」

素直に言つと黒月は顔を赤く染めて「そんなことないです」と言つた。

黒月からしたらまだまだまだなのか…。つと黒月の料理のレベルを改めて認識した。

食べ終われば一緒に学校へと向つた。

何も会話も無く…。気まずい…。

「あの…」

そう感じ始めたときに黒月が話を切り出す。

「ん？」

「えっと…」

その場に立ち止まり顔を赤く染めてもじもじと…。

「なんでもないです…」

「そうか」

(なんでもないと言われてしまうと逆に気になってしまっ…)

再び静かになり気まずく登校した。

何事もなく学校生活を半日終了させるが珍しく黒月と一言も喋ることが無かった。

## 沈黙の登校（後書き）

思えば黒月は錬の気持ちを一方向的に知っていくばかりですね……。  
ぐだぐだ続けて1年間。50話でおわらせれるかな？って思ったら  
初めに考えていた設定以外の物が出てきたり……。デウスチルドレン（神の子とか……）。  
短文ばかりで話数ばかりが増えていたり……。  
静音や弥蛇の言動も一定か不安で仕方ないですね……。

感想やアドバイス等お待ちしてます！

## 告白

昼食になって気づいた。

正確に言えば昼食を取り出すためにカバンを開けた後だ。

（弁当を作っていない…）

いつもなら朝食の時に簡単に作るのだが今日に関しては黒月が作ってくれていたので弁当を準備できていない。

仕方なく、学食に向う。

足を運ぼうと思ったときに服の袖を後ろからつかまれた。

「あの」

振り返れば俯いている黒月が左手で袖を掴んでいた。

「ん？どうした？」

無言の黒月が隠していた右手を見せた。

俺の家にある弁当箱の包みである。

「朝、お弁当も作ってきたので…」

（ああ…。あの時、作ってくれたのか…）

好きな人に弁当を作ってもらえて幸せになる。

「迷惑かな…？」

不安そうに尋ねる。

「ありがとう」

俺は黒月の作ってくれた弁当を受け取る。

そして、やっと気づく。

（視線が痛い…）

教室の中でいちゃいちゃするなっという視線が鍊を貫く。

「屋上で食べよう」

そう言って黒月の手を掴み屋上を目指す。

屋上に着いて黒月の顔が赤かった。

(速く走りすぎたか?)

そして、手を繋いだままだと気づく。

「あ、ごめん」

慌てて手を離す。

黒月は何か名残惜しそうにしていたが気のせいだろう。

「た、食べようか…」

少し残念そうな声で言った。

弁当を食べる。

相変わらずおいしかった。

おいしいのですぐに食べ終わった。

「ご馳走様」

「はい、ご馳走様」

満足そうに黒月も言った。

「でも、勝手に冷蔵庫の物使ったけどよかったかな?」

心配そうに言うが

「こんな美味しい料理が食べれるならいくらでも使ってもらいたい

ものだ」

「そ、そうかな?」

顔を赤くしてうつむく黒月はやっぱり可愛い…。

「さて、教室戻ろうか。あの様子だと何か変なこと聞かれるかもな

…」

考えるとため息がでてしまう。

「まだ、ここに入ませんか?」

珍しい提案である。いつもなら戻ると言いそうだが

「ん? いいぜ」

特に戻って話す相手も入らないから黒月と一緒にいることにする。

「あの…」

「どうした?」

「れ、錬君」

「だから、どうしたんだ? 顔赤いぞ」



「す…。好きです」

「へ…?」

突然の告白…。

(どうして、今…。弥蛇さんがアドバイスでもしたのか?)  
急なことに俺は反応できない。

「あの錬君…?」

「あ…」

「錬君」

「ご、ごめん」

この謝罪はぼつとしていたものではない。

「え…」

「俺には黒月を幸せにできる事なんてできないよ」

「そんなことないです!」

俺の冷徹な言葉に引き下がらない黒月。

(いつもなら、そこまで主張しないのにな。そこまで大切に想ってくれているのか…)

こんなことを言っても内心では心が痛い…。

俺だって、黒月と幸せになりたいと思っている。

それほど黒月 静音が好きだ。

「俺に幸せになる資格なんかないさ。存在しない世界で作られ。この世界を滅ぼすための存在。そして、黒月。お前を不幸にする…」  
死なせたくない。

これから先は黒月を守れない。

黒衣が言っていた。クリアが俺の盾になった黒月を殺した。そんなのは嫌だ…。

「そんなことないです!私は、錬君の傍にいただけで幸せなんです!」

「黒月、俺はお前の相手になれない」

そう言うつと。

黒月は声を殺して涙し。屋上を出て行った。

(何やってんだよ……。俺は……。好きな人に告白させて、断り泣かせて……)

その後、午後の授業を全く覚えておらず終了した。

## 告白（後書き）

とうとう、静音の告白。

しかし、自分の気持ちを抑え断った。

自分の気持ちを殺しても黒月を守る決意を守る。

次回はまたしても事件

俺の一幻想（物語）はどこまで行くのだろうか、そして、みんなの  
幻想を壊していないだろうか…。

まだまだ、幻想が終わる気がしない。

アドバイス、感想お待ちしてます

## 悪魔使い

俺は今、第一生徒会室に入る。

もちろん好き好んで来たわけではない。

放送で呼ばれたからである。

そうでなければ今すぐ家に帰っている。

黒月に告白されて断った。

精神的にはすごく疲れている。

「さて、黒月もよんだはずだが…」

一緒に黒月も呼ばれていたがここには来ていない。

授業にすら出ていないところを考えるとすでに家に帰っているのだろっ。

「こないと思います」

俺が正直に伝えると川井会長はびっくりしながらも

「それはまずい…」

一人つぶやく。

「なんのようなんだ？」

「黒月が狙われているんだよ」

暗い表情で言った。

「誰にだ！」

俺は川井の制服につかみかかっていた。

「落ち着け。今話すから」

俺は掴んだ制服を離す。

それと同時に扉が開かれた。

「その狙っている奴には捕まえた者に懸賞金が出るほどの大物だろ？」

現れたのは体がつい男が入ってきた。

「翔太か…。確かに上から賞金が出ていると言われている人物だ」

翔太と呼ばれたその男は聞くと満足そうな顔をする。

「誰だ？いや、入ってきたほうじゃなくて狙ってる奴はだ」

「俺は第二生徒会会長。箕翔太だ。よろしく」

どうでもいい奴が自己紹介をする。

「狙っている奴の名前は不明だが「悪魔使い」と呼ばれている。

2体の使い魔ドウターと1体の機巧魔神アスラ・マキーナを扱う魔神相剋者だ」

「は？」

意味が解らなかつた。

ドウターとは女の悪魔と性的な関係を持ったときに生まれる愛の結晶。それが2体ということはそういう関係の奴が2人入ることになる。

さらにアスラ・マキーナを持っている事で魔力の上昇。

正直に言つてどれほどの力を持つか解らない。

「まあ、倒すことができるなど考えられない。そいつを倒すために3名の演操者ハンドラーが返り討ちにあつた」

「三人も！？」

さすがに3対1でも捕まえることが不可能とは思っていなかった。

いや、ドウターと悪魔を入れれば3対5なのか…。

「黒月を狙う理由はさらにドウターを増やすつもりだろう」

「っ！」

(黒月との契約を狙っているのか…！?)

「契約がそう簡単にできるはずない」

俺は冷静に考えたことを言う。

「ん？キスするだけで契約終了なんだ簡単だろ？」

後ろでさらりとそんなことを言われた。

「キス？」

「ああ、女の悪魔とキスすることで契約となっている」

「ちよつと待て。川井は性的な関係を持つって言つてたぞ！」

キスが性的関係だといふのかこの人は！

「言つたさ。性的な関係だろう！」

話しているのが無駄に思えてきた。

その時、黒月の身が危ないことを思い出す。

「失礼する！」

俺は窓から飛び出し近くの屋根に渡り黒月を探す。

## 悪魔使い（後書き）

やってみたかったんです。アスラ・クラインでドクターを2体持つてるとかアスラ・マキーナを2体持つてるとか。

契約の方法はアニメの方がキスだったらいいのでそちらを採用します。

ちなみに作者はアニメはぜんぜん見てません。

## 遭遇

屋根から屋根に飛び移り。

黒月を探しはするが見つからない。

(くそ、どこにいる！)

ふと、頭の中にあのビルを思い出した。

(そういや…。あの時の原因になったのって…。俺に嫌われたからだっけ…)

嫌な汗が出てくる。

ビルに到着すると俺はビルの周囲を回り最悪の事態は無かったことを確認する。

「ほんと…。何やってんだろうな俺…」

好きな人泣かして危ないと知れば探す。どれだけ自分勝手なのだろうか。

ビルの入り口に向かうと

「本当にここなのか？」

「ええ、強い魔力を持った者がいるわ。屋上ね」

「…良かったね」

ビル内に入っていく3人の声が聞こえた。

(黒月を探しに来ている？悪魔使いか…?)

ビルの中へと入っていた。

追うか迷ったがビルの窓が開いているところがあるので近道を選んだ。

窓にめがけて飛び窓から別の窓に飛ぶ。

そのまま屋上まで飛ぶ。

「到着つと」

簡単に屋上に着いた。

「きゃ…」

驚いたような声が聞こえた。

「よお。大丈夫か？」



驚いた黒月に声をかける。

「どうしてここに…」

黒月の目の周りには涙した後がある。

「理由は伝えたいがさっさと逃げないと…」

黒月の手をとろうとしたが黒月が拒む。

「どうして！」

恐れるように俺から離れる。

そして、屋上の扉が開かれた。

「魔力の少ない人がいると思ってたけど屋上にまで飛ぶなんてね」  
扉から両目に包帯を巻いている女性が出てきた。

「まさか、契約者コントラクターか？」

次に現れたのは男性である。

「…聞いたことない」

同時に後ろからもう1人の女性が…。

「誰…？」

「あなたと契約をしに来ました。和馬つといます」

「え？」

突然な話で驚く。

「黒月こっちに来い」

俺が呼ぶと黒月は俺の後ろに隠れた。

「カー君が契約してくれるって言うてるのに勿体無いね」

「…うん」

向こうの女性が言ってるが

「契約って一人と結ぶ物じゃないのか？」

「ええ、そうですね。本来は1人でしょう。でも、僕は力を欲する  
あまりいろんな人と契約をしてきました」

俺の質問に堂々と答える。

「用は、浮気野郎ですか」

「いえいえ、孤独で存在を消えそうな者に救いの手を刺し伸ばして  
いるだけですよ」

重症患者がいます。精神科で直るかな？

「あいつ、カー君に失礼なことを考えてるよ」

「…許さない」

殺意を俺に向けられる。

「錬君…」

「安心しろ。守ってみせる」

紅翼を取り出す。

「悪魔でもないのにすごいですね」

「特別なんだよ」

言い返していると向こうさんの悪魔が1人こちらに来た。

腕には炎を纏わせて。

「焰月！」

後ろで黒月が驚いている。

「ああ、嵩月家と関わりあるんだね。あれは真似事だよ」

何もしていない眼帯女の方が説明をする。

俺は近づいてきた。炎女の炎を切り裂く。

紅翼によって能力は消され炎女の腕を切る。

「…痛い」

腕を摩りながら後ろに引く。

逆刃刀なので切れはしない。

「刃が逆とはまた不思議ですね」

「それだけじゃなく、あの刀に触れた瞬間魔力が無効化されたよ」

両目眼帯で何も見えていないはずなのに説明をする。

「魔力が見えてるの…？」

「そうだよ。正しく言えば能力は魔力や物を感知する能力。360

度死角なしだよ」

「しゃべりすぎだよ。戦いなんだからね」

和馬が優しく声をかける。

「…」

一方、炎女はこっちを睨み付けているだけである。

「錬君どうする?」

黒月が囁く。

アスラ・マキーナ

「機巧魔神が出てくる前に逃げようと思ってる」  
囁き返す。

「さて、そろそろ行くね。仇!」

男は優しい声をかけるが残酷である。

いつの間にか後ろに大きな狐がいた。

俺は黒月の体を抱きしめ横に飛ぶ。

「キヤ」

再び驚いて声を上げるが気にしている暇を与えてくれない。

狐の尻尾から火の玉が打ち出され紅翼でそれを切り裂く。

「刹」

和馬が短く言うのと屋上の扉から狼が現れこちらに走ってくる。

「逃げるぞ!」

最後の火の玉を切り裂くと紅翼をしまい。

黒月を抱えてビルから飛び降りた。

「え…!キヤー!」

黒月は大声を上げる。

俺は片手にアールスを貫いた槍(命名: 董すみれ)を出す。

取り出すとビルに思いつき突き刺す。

ビルに突き刺さり勢いが止まる。

董をしまい。地面に着地すればそのままダッシュでビルから離れた。

## 遭遇（後書き）

### 錬の武器設定

武器：槍

名前：董

能力：どんなものでも貫ける槍。（使用者の意思で貫かないことも可）

武器：刀

名前：黒翼

能力：切り裂いた魔力を吸収する。（吸収するだけで攻撃に使えない。悪魔に使った場合。触れている間だけ魔力を吸収する）

## 生徒会

そして、一気に学校まで走った。

黒月家に行きたかったが生徒会の報告を優先させてもらった。

そして、第一生徒会、第二生徒会に報告をする。

「なるほど。解った。そのビルに警戒態勢をとろう」

川井会長が言っている…。

「うわぁー」

悲鳴が聞こえた。

真っ先に動いたのは算会長。

すぐに生徒会室を出た。

俺と川井会長はまず外を見た。

外には2人の悪魔と使い魔。そして、和馬だ。

「何故だ…。俺の速度についてこれるわけ…」

「実際に来ている。それが現実だ。行くぞ」

川井会長も算会長の後を追う。

「黒月はここから出るな」

そういつて窓から飛び降りた。

「来ました」

眼帯女がこちらを向く。

「なぜ、ここが解ったのかな」

着地してすぐに紅翼を取り出す。

「さぁ、何故でしょう？」

簡単にはしゃべってくれはしない。

「今度こそ、黒月さんをもらいに来ました」

会話をしていると算会長が校舎から出てきた。

「行くぞ。恵けい。来い青玉サファイア」

誰かに掛け声をした感じなことを言ってアシラ・マキーナ機巧魔神を呼び出す。

「なるほど。演操者ハンドラーですか」

「悪魔使い、貴様を捕まえる」

「怖い怖い。刹」

短く言えば刹と呼ばれる狼が箕会長に向かって走っていく。

「返り討ちだ」

青玉の右腕に水が集まり刀を作り出し狼を切り裂く。

狼の斬られたところからは血がわずかに流れ出る。

「厚い毛皮だな」

「ええ、刹の自慢の毛皮ですから」

自分の近くに退いた刹の頭をなでる。

「見ると、水を集めて凝縮できる能力のようですね。まあ、相性が

悪かったです」

炎女が仇と呼ばれる狐に乗り仇が走り出す。

俺もそれを追う。

「良いから和馬を取り押さえる！」

箕会長は自信満々に言い切った。

俺は方向を変え和馬の方に足を向ける。

「背中だよ」

何の前拍子もなく眼帯女が言った。

「刹」

俺に向かって刹が走り出す。

「はああ！」

俺は紅翼を刹に思いっきり叩きつける。

刹は倒れそうになったが俺の一撃を耐え抜いた。

「もう一撃！」

軽く回転しながら横に振る。

ガン！

まるで鉄を叩いた音だった。

実際は刹が爪で紅翼を受け止めた。

「な！」

驚いた瞬間には刹が大きな口をあけて俺に噛み付く。

後ろに引き噛み付かれることを避ける。

鋭利な牙に噛まれれば簡単に肉が食いちぎられそうだ。

ガシャ！

今度は後ろで鉄が倒れた音がした。

振り返るうとしたが刹が突進してきて振り返る余裕が無かった。

「恵……」

算会長の弱弱しい声だけが届いた。

「翔太！校舎に戻れ」

川井会長の遅れての到着だ。

刹が俺から離れていって少し後ろを振り返れば……。

少し前に呼び出された青玉が倒れていた。

「アスラ・マキーナ機巧魔神があつさり……」

「所詮、アスラ・マキーナ機巧魔神の魔法装甲は魔力が通ってるから一番薄いとこを

攻撃すればすぐにおわつちゃうものだよ」

眼帯女が丁寧の説明してくれた。

確かに魔力を無力化する白翼で用意に傷つけた。

さらには、眼帯女は魔力を見れる。

「解つたぞ……。魔力を探知してここに来たのか……」

「そうだよ」

和馬が答えた。

「さて、アスラ・マキーナ機巧魔神はもう使えませぬね」

（ルビー紅玉も呼ばれても瞬殺か……。使うしかないな）

「さて、そろそろ。終わりましょう」

刹と仇、炎女が同時に攻撃を仕掛けてくる。

『神々より……封じられし……』

呪文を唱えると力があふれ出る。

『其は、鎖を解かれた者！』

唱え終わると同時に攻撃を避け、炎女に向けて紅翼を叩きつける。

炎を腕に纏わせるが魔法を無力化するこの刀を受け止めることは無く肩を切り裂く。

骨が何本か折れる音がした。

（力を入れすぎたか…）

「あああ！」

肩を掴み声を上げる。

「仇！」

仇は炎女の服を銜えて和馬の近くに連れて行く。

「カー君、目の前の子何か言ってから変だよ。魔力じゃない何かを体に纏ってるように見える…」

『諦める。あまり、怪我をさせたくない』

俺が忠告するが

「どうやらアスラ・マキナ機巧魔神でしか止められないようですね。行けるかい？梨

花」

和馬が何もいないところを見て話しかける。

（何をしている…）

「行くよ。トバース黄玉」



生徒会（後書き）

オリ機巧魔神

名前：青玉<sup>サファイア</sup>

演操者：笥会長

見た目：紅玉<sup>ルビー</sup>の赤い部分が青に変わっただけ。

能力：水を集めて武器として使う。

## 人の中の化け物（前書き）

書き始めるとすごい量になってしまっな…。  
自分のなかでは長いほうですぞぞ。

## 人の中の化け物

現れたのは黄色いアスラ・マキーナ機巧魔神…。

赤の次に青が入たのにびっくりしていたが黄色まで入るのかよ…。

『アスラ・マキーナ機巧魔神が来ても止められないぞ』

紅翼を（トパーズ）に向ける。

『アスラ・クライン魔神相剋者でもかい？』

それは ドウター 使い魔 と アスラ・マキーナ 機巧魔神の魔力の共鳴。

黄玉が動き始める。

地面を蹴り、弾丸のごとくおれに直進してくる。

それに気づいた時には黄玉は俺の目の前にいた。

『速い！？』

両手を組み振り下ろされた拳も速かった。

目の前にいるのに気づいてた時点で後ろに飛んでいなければ重症になっ

ていただろう…。

後ろに飛んだ俺を待ち受けていたのは…。

炎だった。真後ろには俺が入り込むほどの炎があった。

紅翼で切り裂いてみれば炎は簡単に消えた。

炎が消えたと同時に左からの衝撃。

地面に強く叩きつけられて大きくバウンドしながら吹っ飛び校舎に

ぶつかることで体は止まった。

『があ！』

無理やり肺の空気が外に出されそんな声がでた。

それと一緒に吐血もしている。

たった一撃で体はぼろぼろになっている。

もしも、一般人いや…。悪魔が同じ一撃を受けたら即死だろう。

「やり過ぎたかな…」

心配そうにこちらを見る和馬。

『化け物か…。あいつは…』

木刀を出し杖にすることで立っているのがやっとである。

「え……」

「あれでも、力残ってるなんてね……」

「……すごい」

相手もびつくりしている。

『緊張感なさすぎなんだよ!』

地面を強く蹴り相手と同じように一瞬で黄玉の前まで出て紅翼を……。振る時には俺は倒れていた。

倒れた時に気づくが最初の攻撃のように組まれた両手が振り下ろされてきたのだ。

体が動かない……。

「びつくりした……。あんな余力があるなんて……」

「カー君。おかしいよ。この子、悪魔でもないし、一般人でもない。そして、何かを纏ってる……」

「……危険?」

「かもしれないよ……」

「……殺す?」

炎女の言葉が恐怖を感じさせる。

「やめてください!」

大きな声が聞こえた。

首だけを必死に動かしてみれば黒月が立っていた……。

「契約しますから……。その人に危害を加えないでください」  
深く頭を下げお願いする黒月……。

(何一つ守ることができない……)

「いいよ。もともと、殺すつもりは無いから安心して」

和馬がそういつて黒月に近づく。

『らああ!』

持っていた紅翼を和馬に向けて思いっきり投げた。

和馬は驚いた顔をしたが……。

刹が和馬の前にでて紅翼を防いだ。

「驚いた。助けてあげるつてのにまだやるのかい？」

「るっせ…。守りたい人を守れないくらいなら死んだほうがましなんだよ」

必死に起き上がる。

「錬君…。もうやめて！」

黒月の言葉を無視して立ち上がる。

時間がかかったが邪魔をする者はいなかった。

しかし、誰が見ても立ってるのがやっとの状態である。

「さあ、覚悟をしやがれ…」

「契約者 コントラクター でもないのにそこまでこだわりますか」

「俺は、守りたい人を守るって決めてるんだよ…」

黒翼を取り出し駆ける。

刹の目の前に出て刹の左足の爪が襲ってくるがそれを避けて刀をしたらから振り上げる。

刀を口にくわえることで受け止めた。

「な…」

啞然としている間に右から黄玉が攻撃を受けて再び倒れる。

手加減をされていたが体中がぼろぼろだ。

「錬君！」

黒月が近づき俺の頭を持ち上げ涙目でこちらを見ている。

いや、涙が俺の頬に落ちる。

「もう、やめてください」

和馬をにらみつけて言う。

「そつちがやる気なんだよ。こつちも抵抗するさ」

「そつだよ。あきらめないその子が悪いよ」

「錬君、もう良いですから…。守ってくれなくても良いですから」

（なら、何でそんなに悲しい顔をするんだよ…。なんで、守れないんだよ。守りたいのに守れない…）

「さあ、こつちにおいで」

和馬が黒月に向けて手を差し出す。黒月は恐る恐る手を伸ばしてい

く。

行ってしまっ…。黒月が…。大好きな黒月が…。

「嫌だ…」

小さな声だった。黒月の手が止まった。

「行くな…。行かないでくれ。黒月」

かつこ悪く涙を流してそんな言葉しか言えなかった。

「しかたないですね」

和馬が黒月の腕を掴み引つ張る。

「きゃ…！」

黒月が驚いて手を離され頭が地面に落ちる。

そして、和馬はそのままキスをしようとした…。

「やめろ！」

倒れていた状態から両腕をばねにして起き上がり和馬に頭突きをします。

「つつ！つつこいやつめ」

痛みに耐えれず黒月の腕を放す。

「ああ、しつこいさ…。俺の好きな人の事となるとな」

頭がぼんやりしてそんなことを口走った…。

「え…」

「なるほど、そういうことが」

「どうするのカー君」

急に雰囲気が変わった。

「普通なら引き下がるんだけどね。黒月さんの力はすごいからね。

強引にも契約をさせてもらうことにするよ」

そう、さっきまでやさしそうに黒月を読んでいたが今度は強引にっ  
と言っている。

それを聞いて敵が動き出す。

黄玉が俺に向かって殴りかかる。

俺は黒月を突き飛ばし攻撃があたらないようにする。

ドン！

これまでと比べ物にならない攻撃だった。  
俺の体はまっすぐに飛び。校舎の3階当たりを当たり校舎の壁に軽くめり込んだ。

side 黒月

「そんな…。殺さないんじゃないの!?」  
涙を流しながら必死に声をだした。

(好きだった人に好きだと言われたのにこんな事…)

「そのつもりでしたが、さすがに我慢の限界が来ましたね。さあ、こちらへ」

笑顔だが怒鳴り声で黒月を呼ぶ。

今の和馬は不気味でしかない。

「嫌! 錬君と一緒にいる!」

「しょうがないですね」

いつの間にか炎を使う女性が後ろにいた。

「…動くな」

隠し持っていたナイフを私の首に突きつけて言う。

(嫌…。こんな人と契約をするのが…。私は錬君と契約をしたい)  
涙を流しながら瞳を緑にする。

「やめた方が良いでしょう、君、消えかかっているんですよ?」

(な…)

誰にも言っていない秘密を眼帯をしている女性が言った。

「魔力を感じることで消えかかっているかも解るんだよ」

「…」

啞然とする。

「…無駄な抵抗」

耳元でささやかかれて力が抜けてしまう。瞳は元に戻る。

「もしかして…」

「ええ。考えている通り、消えかかっている悪魔を目当てにきました」

よ。その方が契約してくれそうでしょ？」

和馬の行動は悪魔を侮辱するようなものだった。

「そんなことをして…」

「ええ、覚悟してますよ。私が契約した悪魔は6名ほど入りましたが消えていきましたよ。まあ、十分に戦ってくれたんですけどね」

何かのスイツチが入ったかのように和馬はしゃべりだす。

「そんなのであなた達はいいの!？」

「私は、カー君に助けてもらったよ。助けてくれてなかったら10歳で消えてたよ」

「…いい」

周りの悪魔たちも何かおかしい。

「さて、君には立派な人がいた様だけど。奪わせてもらうよ」  
和馬が寄ってくる。

「い、いや…」

「よし、放て！」

その時、校舎から銃声が鳴った。



## 人の中の化け物（後書き）

錬さんの口が滑ってしまった告白。

和馬が身を引いてハッピーエンドでも良かったかなっと思いましたが…。

ここで倒しておかないと駄目だと思いました（え）

さあ、この和馬の登場する話も残り少なく…。

オリジナル機巧魔神

名前：黄玉<sup>トバース</sup>

演操者：和馬

見た目：紅玉<sup>ルビー</sup>の赤い部分が黄色に変わっただけ。

能力：魔力を運動能力に変換して戦う。武器は無いが魔神相剋者<sup>アスラ・クライン</sup>の無限に近い魔力を使い強力な力を出せる。

神に作られし者 (静音) (前書き)

戦闘シーンばかりですが…。呼んでいるとわけが解らなくなっていくかもしれません…。

神に作られし者（静音）

校舎から一発の銃弾が飛び黄玉トパーズの足元の地面に当たる。

それから、雨が落ちてくるかのように銃弾が飛ばされる。

「気をつける！ 使い魔ドクターに機巧魔神アスラ・マキーナが出てる」

校舎から川井会長の声が聞こえる。

「数いればどうにかなるとでも思ってるんですか？」

和馬に向かつて飛ぶ銃弾を黄玉が受ける。

銃弾は黄玉に当たるが装甲が硬く弾かれる。

「やはり無理か…」

「…お仕置き」

仇に乗った炎使いが生徒会の人を襲う。

「怯むな、撃て！」

川井会長の合図で校舎に入っている仇と炎使いに銃弾が飛ぶが炎を纏っている二人に当たることは無かった。

「つく、機巧魔神アスラ・マキーナも銃弾も効かないか」

川井会長が隊員を撤退させる。

「…弱い」

「もうやめてください。あなたの狙いは「あなたですけど邪魔をされると少々腹が立ちますからね」」

これが腹いせだっと言う和馬の態度。

（何で、何でこんなことに…）

自分のせいで好きな人を傷つけられ。自分のせいで学校に迷惑をかける。

（何で、私が迷惑ばかり…）

そう思うと涙があふれ出てくる。

「あああああ！」

暗い闇に飲み込まれそうな時彼の叫びが私を連れ戻してくれた。

side END

少し時間が戻ってます

体が痛い。デウスチルドレン神の子との戦いでも、ここまで一方的にやられた事は無かったと思ひ出す。

(覚醒以上の力が…)

アスラ・マキーナあの、機巧魔神の絶対的な力の前に手も足も出ない。校舎の壁に埋もれる中、彼女の瞳から涙が零れ落ちるのを見た。

「ああああ！」

(力が劣ってしようと、何であれ黒月を泣かした…。許さねえ!)  
動かそうとするが体がうまく動かず。校舎の壁から落ちるっという形で抜け出した。

左肩から落ちたがあまり痛みを感じなかった。

「和馬。覚悟しやがれ」

そういつた時にやっと覚醒が解けていたことに気づく。

思えば、覚醒だけでは勝てないなら…。

「錬君。もう、良いから。もう、私のために立たないで…」

涙を流した彼女が必死に言った。

「お前のために立たないで。笑わせるな。お前のためにならゾンビになっても立ち上がって見せるさ」

「ふざけたことを」

和馬が笑い。それと同時に機械仕掛けの黄色い悪魔が動き出す。

『神々より…封じられし…。其は、鎖を解かれた者!』

覚醒をして、黄玉の一撃を何とか避ける。

さらに踏み込み黄玉は追撃をする。

『闇の深淵に封じられし』

今までは頼っていた力を再び使う。

『其は、夜を紅くれないに染める者!』

覚醒状態で暴走をする。二重に発動できるなんてやったことも無か

つたが何とかうまくは行つた。

黄玉の攻撃を両手で受け止める。

『ああああ!』

勢い良く飛んできた拳を俺は受け止めた。

「な!」

「……え?」

見ていた全員が驚いた。

『ガフ』

俺はそんな音を出しながら血を吐いた。

2つを同時に発動することに体が耐え切れて入ない。

それでも、受け止めた機械仕掛けの拳を思いつきりに投げ飛ばす。

『らあ!』

黄玉は空高く飛ばされ、その瞬間に俺は落ちていた紅翼を拾い上げる。

二、三メートル距離があつたが一瞬で紅翼のところまで行つた。

見ていた全員は気がつけば俺が紅翼を拾っていたと言つ認識をするほど速かつた。

「ば、化け物が」

『さあ。どっちが化け物が…』

「はああ!」

いきなり、校舎から飛び出して炎の刀を持った炎女が襲い掛かるが…。

空中で炎の刀を振ろうとしている彼女に紅翼で7回ほど切り裂いた。

「があ!」

彼女は何が起こつたかもわからずに打ち落とされ地面を転がっていく。

「カー君、危険だよ…。彼の纏つてたものがどんどん大きく…。黄

玉の魔力以上かも…」

「馬鹿な…。アスラ・クライン魔神相剋者の共鳴以上だと?そんなことが」

『ありえるかもな、俺人間じゃないから』

会話をしている和馬の目の前に行き、渾身の一撃を放つ。その攻撃を仇が和馬と俺の間に割り込んで和馬を守った。仇は俺の一太刀を受けて吹っ飛び地面を滑っていく。

（つつ！踏み込んだときに足に痛みが）

「危ない危ない」

立ち上がりながら言う。

再び、和馬に攻撃を仕掛けようとするが、後ろで黄玉が落ちてきたので振り返る。

着地した瞬間に機械仕掛けの拳が俺に襲い掛かる。

それを蹴り上げ、拳を弾く。

蹴り上げた足を地面にしっかりと踏み込み刀を振る。

強化された俺が神速の斬撃を放つ。

左右上下からの斬撃を放ったがすべて弾かれる。

（ツチ、化け物が…）

化け物同士の戦いである。

周りの人たちからすれば細い刀は見えず。械仕掛けの腕が高速に動いていることしか解らない。

だが、俺は休むことも無く刀を振り回し続ける。黄玉は刀を弾くことしかできない。

俺が攻撃をしているが体はぼろぼろでいつどこが壊れるか解らない状況である。

それに対して黄玉は魔力の共鳴をしているが二体の トウター 使い魔 がいるので一体が共鳴をし、それが終わればもう一体が共鳴をすることで魔力の共鳴が永遠に続く。

状況を考えれば俺が不利である。

刀を片手持ちに変えながら切り裂き。黄玉はそれを機械仕掛けの手で掴む。

（白翼ならこの状態で切り裂けたな…）

シヴァに壊された刀を思いながらも片手に董を出し片手で黄玉に向かって突き刺す。

黄玉は董も掴み取る。

「はあああああ！」

両手に力を込めるが機械仕掛けの手を貫ける気がしない。

黄玉も俺を押しつぶそうとする力は互角だ。

お互いに動きが止まって仇が動き出す。

「危ない！」

黒月が空気の弾丸を放つ。

仇に命中して仇は飛ばされる。

仇の影から何かが近づいてくる。

「いけ！刹！」

和馬が叫び黒月が再び弾丸を放つが外れた。

刹は銜えていた黒翼を俺に向けて振る。

しかし、刹に今までのような速さがない。俺が強くなりすぎなのか

は知らないが地面を蹴り。

両足で刹の顎を蹴り上げる。

「がう！」

刹の牙が折れる。

黄玉は霞と紅翼を思いつきり地面に叩きつける。

俺は勢いに負けて手を離してしまい地面に叩きつけられ大きくバウ

ンドする。

さらに黄玉は董を握りを持ち俺に向けて投げた。

空中じゃ避けることはできなず。左腕で董を受け止める。

グシャッと手のひらを貫く嫌な音をしたが勢いの止まらない董を消

す。

痛みに耐えながら俺が蹴り上げた刹の頭を掴み黄玉に向けて投げる。

銜えられていた黒翼は途中で落ちて地面に刺さる。

黄玉が刹をキャッチしている間に俺は着地し、途中にある黒翼を掴

み取り、黄玉に切りかかる。

切りかかる時に目に血が入り目を閉じながら刀を振る。

狙いは外れ、黄玉の右腕を切り落とす。

(真つ二つのはずが…)  
刹は腕とともに落ちる。

「「な!?!」」

包帯女と和馬が驚く。

『つらあああああ!』

目に血を拭わずに少し赤い世界を見ながら刀を横に振る。

黄玉の動きが急に鈍くなっていて俺の攻撃を弾くことすらできない。

「黄玉の魔力が減っている!?!」

黄玉の胴体に刃が入った時…。

俺の体の限界が来ていた。

踏み込んでいた左足と右腕の骨が折れる感覚がし俺は横に倒れた。

(ここまで来て…。力不足か…)

最後の最後に倒れた鍊を見て黒月が叫んだが鍊にその声は届いてない  
ど入なかった。



神に作られし者 (静音) (後書き)

覚醒と暴走の並列によって、溢れ出す力に耐えれずに倒れる錬もつづく、この章も終了！

あ、でも100回記念で何かやりたいな…。

## 100回突破記念(前書き)

まあ、記念はできなかつたけど…。  
これで章がおわりますから…。いいよね？)あ

## 100回突破記念

「錬君！錬君！」

何度叫ぼうが錬は動きはしない。  
体の変化も消えている…。

（もしかして…。死ん…）

一瞬最悪を考えたがすぐに頭から消す。

「ハハハ！かつこいいこと言ってもその程度なんだよな！」

和馬が倒れている錬を指差して笑う。

「やめてください！」

能力を開放する。

「カー君あぶない！」

和馬を狙って空気の弾丸を放ったが眼帯した子が和馬を突き飛ばし  
弾丸を受けて吹き飛ぶ。

「キャ！」

「つく」

すぐに立ち上がる和馬。

正直に言って驚いた。かばうとは思っていなかった。

「何でそこまで守ろうとするんですか？」

軽く地面の砂利で切ったのか血が出ていた。

「カー君が誰を好きになっても…。私はカー君が好きだからだよ」  
そういつて私の方に走ってきた。

私が弾丸を放つがそれを避けつつ走ってくる。腕に当たったりする  
が怯まずに走り続ける。

「だから、私がカー君を守る！」

悪魔の力は能力だけじゃなく身体能力も人間と比べると高い。

悪魔の拳が私に向かってくる。

私は避けようとするがうまく避けれずに肩の当たりに強い衝撃を受  
ける。

「つつ!」

後ろによるける。

「その点、あなたは守られてばかりだね」

「つつ!」

前を向いた時に顔に拳を受ける。

背中から倒れる。

(本当…。私は守られるばかり…)

今までを振り返ると、私が危険な時には錬君が危険も気にせずを守ってくれる…。

「あなたは、あの子を好きなんじゃなくて。守って貰ってる罪悪感じゃないの?」

その言葉が胸に刺さった。

その時に眼帯した子が私のそばから離れる。

黄玉トパーズが襲い掛かってくる。

恐れあまり目を閉じた。

だが、攻撃は来なかった。

「黒月君。紅夜君をよく守った」

聞きなれた声がして恐る恐る目を開ければ黄玉と紅玉ルビーが組み合っていた。

「こいつは任せたまえ」

「はい。ありがとうございます」

私は立ち上がると和馬が錬君の方へと走っている。

弾丸を放とうとしたが力が込められない。

体を見てみれば左手が手首のところまで消えかかっている。

「力の使いすぎだね」

真正面に現れた眼帯の子。

見ていたときには拳が腹部

に刺さっていた。

「あ…」

一瞬、怯みはしたが…。

力を振り絞って殴り返す。

相手は反応できずに直撃する。

「…じゃない！」

「つつ…」

肩当たりを当たり後ろによるけた後すぐに踏み込み殴ってくる。

それを避けて相手の横っ腹を殴る。

「罪悪感なんかじゃない！」

殴られ怯んだ隙に和馬に向けて弾丸を撃つ。

「させない！」

眼帯の子が私にしがみついて邪魔をするがもう遅い。

打ち出された空気の弾丸は和馬に命中する。

和馬は吹っ飛び学校の壁にぶつかり、立ち上がらない。

「カー君！」

私から離れて和馬の下に向かう。

見てみれば非在化は腕をの関節まで来ていた。

（もう、すぐか…）

自分の消滅までの時間が刻一刻と短くなっていくのを感じる。

和馬が倒れると同時に黄玉も消えた。

「ふう…。強敵だった…」

会長も紅玉をしまう。

「れ、錬君！」

私は彼のそばにすぐに行つた。

彼は動けないもののスヤスヤと眠っていた。

「良かった…」

「あの状態から眠るとは…。すごい神経だ…」

安心と驚愕である。

確かに倒れて眠っているとびっくりする。

その後、私の家に錬君を運んだ。

おじいちゃんが「骨がボロボロじゃぞ！なにをやったらこうなるんじゃない!?」と驚きながらも診察をしてくれた。

## 100回突破記念(後書き)

最後には自分の思いを込めて戦う。

そんなことを考えながら書きました。

さて…。次回からどうしよう(いつもながらだな…

## 真（前書き）

えっと、前書きに謝罪の言葉を載せさせていただきます。

感想で外伝書くよ見たいな発言をしていたが…。

やっぱり、無理でした…。ごめんなさい。何も思いつかなかったんです…。

自分にラブストーリーなんて不可能なんです。

期待した人本当に申し訳ないです。

以上。屑な作者の駄目な謝罪でした。

## 真

目が覚めたら…。

布団の中で見覚えの…。ある景色だった…。

「黒月の親戚の家か…。」

目覚めた俺はすごく冷静だった。

色々なことがありすぎて慣れてきてるかもしれない。

(何日くらい寝てたって考えたほうが良いか…)

体を起こそうとしたら…。

動かない…。

全身が鉛のように重い…。

(ダメーシ抜けてないな…)

微かに指先を動かすくらいしか今はできない状態である。

「それにしても…。良く、生き残ったな…。」

思わずつぶやいてしまう。

アスラ・マキナ 機巧魔神の ドクター 使い魔 2体の アスラ・クライン 魔神相剋者…。

そんな、化物つという枠にすら入るのか解らない奴と戦い体はボロ

ボロだが命はある。

(思えば…。あの後どうなったんだ？確か…)

そこで気づいた。

(あれ、黒月は…？確か トパーズ 黄玉に切り込んでるときに倒れたから…。

まさか、和馬の奴のそこに行くから俺を助けた？)

事実を確認するために起き上がろうと必死に動こうとする。

「があああ！」

無理やり動こうとすれば激痛が走る。

「錬君！？」

俺が叫んでいると扉が開かれ慌てている黒月が入た。

「あ…。」

目が合う…。叫んでいた自分が恥ずかしい。



「目が覚めましたか？」

「ああ」

……。そして、静寂。

（気まずい……。気まずいよ……。確か、あの発言したんだよな……）

あの時の発言、『俺の好きな人の事となるとな』なんて、何で言うてしまったんだろうな。

（なんて、話しかければ良い……。誰か教えてくれ……）

「えっと……。大丈夫ですか？」

あれこれ考えていると黒月が話しかけてくれた。

「ああ、まったく、動かない。動こうとしなければ痛みも無いな。

そういや、あの後どうなったんだ？見る感じ、お前は大丈夫そうだが……」

質問に答えつつ、気になっていたことを問う。

「あの後、第一生徒会の人たちが助けてくれたよ。黄玉だけど、川井会長の紅玉ルビーが倒したよ。黄玉の魔力も限界だったみたいだね」

その話を聞いて疑問が生まれた。

（確かに黄玉は魔力を消耗していたかもしれないが……。魔神相剋者アスラ・マキナの共鳴を常に発動していた奴がただの機巧魔神アスラ・クラインに負けるだろうか……。俺が倒れる直前まで弱っている幹事はまったくしなかった）

「そうか……。ありがとう」

「それにしても、心配したよ。丸々2日間も目が覚めないから……」

「へ？」

「もう、私……。鍊君が死んじゃったんじゃないかって思って……」

黒月の目から涙が出そうになり……。

「ちょ、やめろ！黒月が言うつと冗談に聞こえない！」

「本当に、本当によかった」

ついに泣き出しちゃったよ……。

なんか、俺が泣かしたみたいだ……。

「大丈夫。俺は簡単には死なないからさ」

俺は優しく声をかけることしかできなかった。

「紅夜くん。目覚めたかい」

老人が出てきた。

名前は確か……。弦祭さんげんさい

「はい、まあ、動けませんけどね……」

「それにしても、すごいね。普通なら死んでいるよ。砕けていた骨も後二、三日で元通りじやろう。恐るべき再生力じゃ……」

弦祭さんが言う。

「……。俺は普通じゃありませんから……」

俺の体は普通じゃない……。悪魔といった人間がベースである存在でもない。

神によつて作られた存在……。

「悪いが、その当たりの事は静音から聞いておる。確かに、人間に存在しない物があり人間じゃないかもしれないがな、それでも、わしは君が人間だと思っっているんじゃない」

真剣な表情で俺を見る。

「だから、それほど気にせんで良い」

そつといい残して去つていた。

「人間か……。俺には程遠い言葉だな……」

人外の俺にとつて程遠い言葉。

「あの、私は……。それでも私は、鍊君が好きです」

「え……」

突然の2度目の告白。

言った後、恥ずかしくなり黒月は部屋を出て行った。

それを見て笑顔になる。

（俺も隠さなくても良いんだな……）

あのときの発言は偽つた自分を消してくれたのかもしれない。

「俺も好きだよ」

正直な気持ち声をにした。

改めると恥ずかして小声で誰にも聞こえていなかったらう。

恥ずかしさを隠すように、また深い眠りについた。

真（後書き）

誰にも聞こえない。

それでも口にした自分の気持ち。

偽りなんて無かった。

え？非在化？まだ、大丈夫なのS A

## 幕間

次に目を覚ませば、片腕は回復していた。何とか日常生活はできるようになった。

もしも、片腕が回復できていなければ、黒月が俺にご飯を食べさせたりする予定だったようだ。

そんなことされたら、恥ずかしくて死ぬぞ俺…。いや…。まあ、嫌だったって事は無いんだけどな…。

まあ、生活は順調で俺は次の日には、体が完全に回復した。もう、日常生活に問題はないまでなった。

「ってことで、お世話になりました!」

俺はお世話になった黒月の親戚にお礼を言っている。

「本当に君はすごい。もっと、時間がかかると思ってたんだがね」

「まあ、回復するの早いですからね。俺は」

「おめでとう」

どこか寂しそうに黒月が言う。

「寂しがらなくても大丈夫でしょ? だって…」

「あああ! わーわー!」

楓さんの言葉に黒月が慌てる。

「ん? どうした?」

まったく解らない。

「また、学校であえるからだよね。お姉さん」

「ああ、そうだな。また、学校で」

俺が手を振る。

そうすれば…。

ズドン!

爆弾が爆発したかのような爆音が鳴り響いた。

「なんだ!?!」

「キヤ!」

「…」

「キヤー」

音のした方を見れば近くの山から砂煙が上がっている。

「行つてきます！」

俺はそういつて駆け出す。

「無茶はするんじゃないぞ！」

弦祭さんの言葉は聞こえていたがそれより気になることがあった。

（時期が違うが…。黒衣の言っていた奴か…？）

## 幕間（後書き）

短いです。テキストデータにして1・15KB。

もうじき、一周年と半分をやっている中でもっとも短いのはって感じてしまう短さ。

次回から新章突入。

え？次回とこれつなげて1話で良いだろって？

区切りよかったし2日に1回更新したかったんだ…。

## 未来への道

山の中で俺が見つけたのは地面の大きな窪みだった。

（何だこれ…。上空から何かが落とされたのか？それとも爆発なのか？）

原因不明の穴を前に立っていると何かが近づいてくる気配がした。

（奴か…？）

紅翼を取り出し構える。

その瞬間、硬い何かが紅翼に当たり、俺の体が後ろに滑っていく。

驚きつつも、転ばないようにしながら、前を向くと俺に似た少年がたっている。

その少年は頭以外は黒い鎧のような物を身に着けていた。だが、手首から上だけは鎧が無く。素手が見えた。

「何者だよ…」

そうつぶやいたが相手は答えない。

相手は地面を蹴り、俺に向かって走り出す。

（おかしい…。現れる時期も、質問に返答が無いのも黒衣が言っていた事と異なる…。それ以前に、神を滅ぼしてから出現するとも聞いた…）

黒衣が経験した事とまったく異なる未来に行こうとしているのか…？  
相手は蹴りを放つ。それを紅翼で受け止める。

『キン』

鎧と刀がぶつかり、相手は蹴った足を後ろに引きながら手刀を放つ。所詮、手だろうつと俺は紅翼を相手の頭に目掛けて振るが…。

『ズシヤ』

「っえ…？」

手刀は俺の体を貫いていた。

「いっば」

口から血を吐く。



相手は無言で手を振り払う。

まるで鋭い刃物で切られたかのように体は簡単に切られる。腹部から血が流れ出ていく。

「嘘だろ…」

俺は紅翼を手放し腹部を押さえて倒れこむ。

「09を処分します」

初めて口を開いたと思えばそんなこと言われた。

さすがに死んだと思った時。とどめを放とうとした相手が倒れる。

「錬君！」

遠くから黒月が駆け寄ってくる。

そして、思い出す。黒衣の言っていた未来。

「黒月は俺を庇って死んだ…」

「来るな！」

必死になつて大声をだす。

それを聞いて黒月は立ち止まる。

黒翼を取り出し、無理やり立ち上がった。

俺が立ち上がった時には奴はこちらに向かって走っていた。

「逃げる！この場から早く！」

そう叫んで、奴の手刀を避ける。

「神々より…封じられし…。其は、鎖を解かれた者！」

能力の開放。傷口も徐々に治っていく。

奴が放つ手刀を黒翼で受け止める。

「キン」

金属同士がぶつかった音がするが相手はただの手刀。

（なんで、金属のような…？）

考えている内にもう一本の腕が俺に向かってくる。

「ツチ！」

「錬君！」

一度後ろに下がる。

（黒月はまだ逃げてなかったのか…）

声の聞こえたほうを意識しつつ、目の前の敵を意識する。  
敵はゆっくりと間合いを詰めていく。

今度は俺が先に動く。

黒翼を下から切り上げる。

相手は靴で受け止めて手刀が俺の首を狙う。

黒翼を手放し横に倒れるようにして避ける。

運がよく。目の前に紅翼が落ちている。

それを拾い上げ振り返りざまに切りかかる。

相手はそれを手で弾く。

『キン』

手に触れてるはずなのにさっきから金属に触れている音がする。

(まさか…、こいつの腕が刀なのか?)

そう考えれば今までおきたこともすべて説明がつく。

『腕を刀にするのか…』

俺と一緒に相手にも能力があることに気づく。

「…」

無言だった。

黒翼を相手に向ける。

『神々より作られし』

『つつ！はあああ！』

奴が呪文を唱え始めて驚いたがすぐにしとめようと前にでた。

『其は、すべてをつかさどる神』

奴の周りには光の粒が現れる。

俺は紅翼を持てる力をすべて込めて振る。

『ガキン』

それが受け止められた。

## 風は止められない

呪文を唱え終わった奴は覚醒状態の俺の全力を片腕で受け止めた。だが、俺に驚いている暇などない。

奴のもう片方の腕が俺に向かって伸びている。

後ろに飛ばうとしたが遅すぎた。

奴の腕はすでに俺を貫いていた。直りかけていた傷口に再び突き刺さる。

(見えなかった…。速度に対応できない…)

俺は紅翼を手放し、右手で奴の腕をしっかりと掴む。

『な、なめんじゃねえ!』

左手に董を取り出し奴の顔面に向けて突き刺す。

奴は俺の手を振り払い。後ろに飛び董を避けた。

『ガフ!』

血を吐き出す。この感覚は何度味わっても気持ち悪いものだ。

奴は地面を蹴る。

その瞬間に奴がいた場所の地面が軽くえぐられている。

そして、奴の姿が見えなくなる。

『ドドド』つとなるたびに周りの地面が軽くえぐられ土が宙を舞う。

すでに奴の速度は俺の目では追えないものになっている。

(嘘だろ…。速すぎる…)

俺の直感が殺気を左から察知して董をそちらに向ければ

『ガガキン』

何度かの攻撃が来てまた移動をする。

(もう、あれしかない…)

『闇の深淵に封じられし』

俺の暴走の方向の呪文。

『其は、夜を紅くれないに染める物!』

二重発動。

この状態ならば奴を見ることができた。

俺も地面を強く蹴り奴の目の前に出て槍を突き刺す。

奴は槍の側面に腕を当てて軌道をそらした。

お互いに後ろに飛び距離を取る。

この一連の動作で俺の左腕は大ダメージを受けた（二重発動の副作用）。

お互いに動かさずに入る。

（狙われている…。一瞬の隙でやるつもりだ）

互いに動かない。

動かなくても俺の左腕の痛みが増すばかりである。

（決めるしかない…）

俺が先に動くことになった。

全速力で落ちている黒翼を拾いに行く。

奴は俺を追う。

俺は黒翼の前まできたら奴に向けて董を投げつけた。

奴はそれを腕で弾く。

弾くために使った一瞬で俺は黒翼を持つ。

この時、肩にまで痛みが来ていた。

俺は片腕で刀を振る。

それを片腕で受け止められる。

「がああ！」

獣のように叫ぶ。

刀を素早く振り回して逆側に攻撃を仕掛ける。

それをもう一方の腕で受け止められる。

敵の片腕が俺のほうへと伸びてくるが…。

俺はさらに刀を早く振り回す。

敵の攻撃を弾きさらに敵の鎧に傷をつける。

「な！？」

さすがの奴も驚いたようだ。

俺の攻撃は止まることが無い。

刀をもつと早く、もつと早く！

その一撃一撃に魂を込めて振る。敵に反撃などさせない。

俺の斬撃は風よりも早く。誰にも止められない。

頑丈な鎧も次第に砕けていく。

「ああああ！」

その砕けた部分に俺は紅翼を突き刺す。

手ごたえがあった。生身の人間を切る感触というものだろう。

そして、鎧に刀を突き刺したまま。押し倒し、刀に全体重を乗せた。

奴は口から大量の血を吐く。体の変化も解けていく。

この時、紅夜錬は初めて人に近い物を殺した。

二重発動をした前回と比べれば被害は少なかった。

きつと、抵抗か何かができて板のだろう。

そして、覚醒も暴走も止めてから気づいた。

（黒月は！？）

ボロボロになつた手足を無理やり動かしながら少しずつ移動する。

「黒月」

呼んでみるがいつもの俺の声ではなく弱弱しく、小さい声しか出せ

なかった。

どれくらい当たりを調べただろうか。そこまで遠くでもなかったが

足が痛いせいか。ちよつとの距離を移動するのにかかりの時間をか

けた。

時間をかけた事で黒月を見つけた。

俺が見つけたときの黒月は片腕と片足が消えかかっていた。

「黒月！黒月！」

必死に声出すが大きな声が出ず。俺の声は黒月には届かないのか？

風は止められない(後書き)

黒月が消えかかっている。

あなた(錬)の選択は…。

## 契約

「黒月……。返事をしてくれ！」

黒月の前まで歩きつつ問いかける。

「……………くん」

わずかに声が聞こえた。

「黒月！黒月！」

「錬君……」

どンドン黒月の意識が回復していった。

「もう……私駄目みたい……」

嘘だと思いたかった。だが、真剣な瞳が真実だと俺に教える。

「ふざけんな……。どうやったら助かるんだ？」

非在化は知っただけでも助け方を知らない。

いや、助けられるものなんだろうか……。

「……錬君」

「何だ？」

地面を倒れているまま俺の瞳を真っ直ぐ見つめる黒月。

「私と……。契約してください」

その言葉は悪魔の一生を左右するほどの大きな物。

黒月からの三度目の告白だった。

一度目の告白は断り、二度目は黒月の入らない時につばやいた。

そして、

「喜んで」

正直な気持ちを伝えた。

俺は黒月に顔を近づけて行き。唇が重なった。

これが、黒月静音を一生愛する誓いであった。

重ねた唇を離して真っ赤な黒月を見て

「俺、紅夜錬は。黒月静音を愛します」

言っていて、恥ずかしくなる。

「…はい」

黒月はリンゴのように赤くなった顔で頷いた。

俺は黒月の体が元に戻ったことを確認してほっとする。

何だが気まずくなくなってしまった。

黒月は立ち上がり服についた泥を払い、俯いている。

「あの…」

何かを決心したかのように、黒月は俯いていた顔を上げる。

「え…。な、何だ？」

俺は驚きつつも返事をする。

「錬君のことが好きで好きで…。錬君に嫌われているんじゃないか

つて。でも、本当に良かったです。生まれてきて…。本当に…」

黒月は嬉しくて涙を流した。

「今までそんな気持ちにさせていてごめん。これからは、ずっと、

黒月のそばで入るから」

やさしく黒月を抱く。

黒月は自然と泣き止んだ。

「はい」

そして、笑顔で答えた。

「それじゃ…。帰るか…」

俺と黒月は黒翼や紅翼、董を回収する。

つと言つても、黒月は俺に付いてきたただけだが。

「そっいえば、この人…」

黒月は鎧を着て倒れているあいつを指差して言う。

「俺と同じ…。人間でも悪魔でもない、神の子デウスチルドレンに作られた者だよ…。

反逆者である俺の抹殺が目的だったようだ…。…息の根を止めたは

ずだ…。」

黒月は死体や俺が殺した事に驚くこともしなかった…。

(子供のころから命を狙われていたつと言っていたからこんな事が

多かったのか…)

「錬君のように仲良くなれなかったんでしょうか…」



「無理だと思う…。俺は欠陥品なんだと思う…。こいつは完成されている。命令に忠実なように…」

「そうですか…」  
残念そうに声を出す。

誰かが死ぬ。知っている誰かが殺す。そんなことがおきるのが辛いのだろう。

「帰ろう…」

「はい…」

俺はこの場を離れる事を勧めることしかできなかった。

俺はボロボロで黒月の肩を借りて歩いていく。

（そういえば、キスは色んな味をするとか言うけど…。何にも感じなかったつと言うより暇が無かったかな…）

そんなことを思いつつ少し顔を赤くする。

「また、寝たきりの生活かな…」

ちよつと、思考を変えるために苦笑しながら言う。

「その時は、私が看病しますね」

彼女が笑顔で言う。その笑顔が見れて自分は幸せだと思う。

「ああ、たの…『ダダダダ』!？」

会話をしていて真後ろに来るまで気づかなかった。

あいつは死んでおらず。全力疾走して俺の真後ろまで来ていた。

俺はとつさに黒月を突き飛ばす。

黒月は突き飛ばされ尻餅をつく。

「がああああ！」

あいつは怒りに狂ったかのような声を出し。右腕を左胸に向けて突き刺す。

それを両手で掴むと剣を掴むかのように手のひらが切れる。

それでも胸に届く前に止まった。

ほんのわずかな時間安心すれば左腕が飛んでくる。

相手の左肘に目掛けて膝蹴りすることで起動が上にそれた。

奴の手が俺の肩に刺さった。

骨が切られた感覚を感じた。

「があああ……」

情けない声が

「ヴアアア！」

奴の雄叫びの様な声にかき消され。

「錬君！」

黒月の叫びと頬流れる涙。

（血が流れすぎだ……）

力がどんどん入らなくなる。

奴は肩に刺さっている手を外側へと切り裂いた。

俺の血が辺りを赤く染めた。

「にげ……ろ」

黒月に声をかけながらその場に倒れる。

## 契約（後書き）

確実に死んでいると油断がすべてを変える。

まだ、あいつは死んでいなかった…。

さあ、次回は…？

## 守ると決めたから

(これは…。本当にまずい…)  
さすがの俺も終わりかと思う。

「逃げる！逃げてくれ！」

俺は精一杯叫ぶ。

だが、黒月は逃げない。

俺と奴の間に入り。

「もう、逃げません。錬君は私が守ります」

side 静音

錬君が傷つけられた。

私の初恋で私を愛してくれる人…。

もう、私は泣いてばかりじゃない。私が錬君を守る。

「だから、安心して」

そっぴいなながら能力の開放をする。

契約者 コントラクター がいることで両目が緑色に変わる。

「ヴオオオ！」

目の前の相手は雄叫びを上げて飛ぶ。だが、

私は飛んだ敵に空気の弾を撃つ。

敵は弾丸に吹き飛ばされる。

「ガアアア！」

すでに言語能力もない敵はただ叫ぶだけだった。

私は冷静に空気の弾を命中させていく。

しかし、何度命中させても敵は立ち上がる。

威力が無いのだ。

ふと、頭によぎるのは神の退治に関わった従姉の姿 デウス。

懐剣を媒体にした炎の剣で目の前の敵も切り裂く強い姿…。

私は弱い。  
嵩月一族のように強い力を持っていない。  
黒月一族の娘。  
でも、私が…。錬君を守る！

side END

ふざけた話だ。

男が倒れて女が戦う…。

何が愛してますだ…。

愛してるなら…。ここで立たなきゃいけないだろ！言つこと聞きや  
がれ俺の足！

いまだに地面に倒れている俺は念じ続ける。

その間も戦いを見つめている。

そして、はつきり心の中では解っている。

黒月では…。あいつを倒すことができない。

両腕は剣で刀を突き刺しても死ななかつたあいつが空気の弾で死ぬ  
はずが無い。

死なない限り、あいつは俺や黒月を狙い続ける。

だから、ここで仕留めるしかない。

必死に体を動かす。

だが、体は答えてくれない。

それ以前に肩から血が流れ出て意識が遠のいていく。

(最後に…。黒月の…。ために…。武器を…)

わずかな意識を集めて集中する。

黒月の事を思い出していく。

最初の出会いは他の悪魔に追われている事だった。

それが始まりだ。

校外学習、ゴールデンウィーク、夏休みいろんな事があって。

泣かしてしまつた事もあった。

告白を断つて、悲しい涙を告白をして嬉しい涙。  
思い出が俺の手の中に集まっていく。

俺が愛した黒月の思い出を形に…

「ウェポン武器、チャージ補充」

俺の右手に握り締め、形にしていく。

黒月を守る刀を…。

俺はそれを右手でしっかりと握っている。

「ぐるつぎ！」

何だか声がうまく出せていない。

黒月が振り返るのを見て、鞘に納まっている刀を投げた。

（後は…。頼む…）

それと同時に意識が途絶えた。

side 静音

錬君が投げた刀は私の目の前で地面に刺さって止まった。

（錬君の武器って…）

拒絶反応のことを思い出す。

それでも、私は錬君を信じて刀を抜く。

まるで重さが無いかと思うくらい軽い物だった。

先ほどまで倒れていた敵は立ち上がり今度はあたらないうように左右  
にステップしながら近づいてくる。

私は嵩月の炎月のように刀に魔力を流し込む。

刀は流し込まれた魔力を纏う。

つまり、空気の膜を纏っている。

（行ける！）

そう確信した。

敵は私の右側に現れ右手で私の心臓を狙う。

私は軽い刀を振り右手を弾こうとした。

だが、弾けなかった。

敵の腕は簡単に切れて上空に舞い上がった。

(嘘…)

纏っている空気が振ることによってかまいたちのように放たれたのだ。

「アガアアア」

と叫ぶ敵を私は横に切り裂く。

敵はバックステップで避けたが…。

かまいたちが容赦なく敵を2つに切り裂いた。

「があ!？」

「ごめんね。死にたくないだろうけど…。私は守ると決めたんだ…」  
二つになった敵の体が地面に倒れた。

動かないそれを見て安心して錬の側に行く。

「錬君、帰ろうね…」

黒い瞳になった静音の表情は暗いものだった。

錬の腕を肩に乗せて錬君を連れて行く。

重い錬の体を支えようと無理をして前に倒れる。

倒れる瞬間に錬を抱きしめて、下になるようにする。

(っっ…!?)

痛みを感じながらも見えたものに驚く。

先ほど真っ二つにした敵が何事も無かったかのように立ち上がり攻撃を仕掛けてきていた。

もしも、倒れていなかったら串刺しだっただろう。

敵はすぐさま、倒れている私たちに向けて左腕を下ろす。

私は空気の弾で攻撃をして、時間を稼ぎ、起き上がる。

何故、真っ二つになった敵が復活しているのかを考えるより、もう一度倒すことに集中させる。

再び刀を抜き、魔力を纏わせる。

敵も学習をしてるようで真っ直ぐに向かってこない。

何度か刀を振り、かまいたちを飛ばすがすべて避けられる。  
避けるつつ近づき、攻撃までしてくる。

攻撃は私ではなく錬に向かつてされている。

私は錬君を抱き寄せたり攻撃することで守り続けた。  
どうしても守りたい人だから…。

この守る戦いつ終わるのか…。



守ると決めたから（後書き）

刀を突き刺されても、真つ二つに切られても死なない。

化物を相手に戦う静音。

守ると決めたその覚悟の結末は…。

あ、テスト近いので来週更新できないかもしれないけど、後悔はしていない！

戦わないで(前書き)

そろそろR15つけるべきだと思ってつけました。

## 戦わないで

俺が目覚めたらオレンジ色の空だった。  
体を動かそうとしたら全身に痛みが走る。

これが現実だと思い知らされる。

ここが倒れた場所だと気づくと周りを見る。

（黒月は…。どこだ…）

「黒月！」

叫ぶ。

声が届く範囲にすることを祈って、

『ボタン』

何かが倒れた音が俺に最悪のシチュエーションを浮かばせる。

「黒月！」

もう一度叫ぶ。

「れ、んくん…」

薄れた声。だが、俺には届いた。

無理をして立ち上がる。

体力は回復しているようだ。

肩の傷も治っている。いや、動かせば痛いが…。

「黒月どこだ…」

「来ちゃ…。だめ」

かすれた声がした方へ歩く。

少し動くだけで息切れをする。

「黒月…」

黒月は俺の作り上げた刀を持って真っ二つになったあいつの前に立っていた。

（今度こそやった…？）

「ここから離れて…」

「は？」

黒月は疲れきった顔で言う。

(なんでだ…？終わったはず…)

色んな戦いを見てきた俺だが、これもまた驚いた。

二つになった体が1つになりまた立ち上がったのだ…。

「っな!？」

「ここは、私が、何とかするから…」

黒月の疲労は限界まできている。

「もう、いい…」

黒月は刀を振る。風は吹き、奴の体は再び2つになる。

「もう、戦わないでくれ!」

俺は涙を流してそういった。

「もう十分だから。俺のために戦わないでくれ」

「私は、まだ、戦え、るよ」

つらそうに強がる。

その間にもあいつは体が再生する。

「私、が…錬君を守る、から…」

強い意志が黒月を戦わせていた。

黒月は刀を持ち上げ振り下ろす…。

その前に俺は黒月を抱きついた。

「ありがとう。でも、俺に黒月静音を守らせてくれ。好きな人を守

りたいんだ」

「れ、ん君?」

黒月は刀を落とした。

刀は刃の方を下に地面に突き刺さる。

「俺が勝つことを信じてくれ。俺は、必ず勝つから」

俺は黒月から手を離せば黒月は地面に座り込み、涙を流した。

紅翼を取り出し、振り向きながら奴の手刀を弾く。

「はい」

後ろで黒月が答えた。疲れで眠り始めた。

その言葉に俺は力を貰った気がした。

獣のように雄叫びを上げる目の前の敵。

無理やり生き返らせ、死ねない苦しみを味わっているようだ。

「悪いが…。俺はお前を助けない」

お互いに呪文を使える状況ではない。

相手は理性なんてものは無いから使えない。

俺は体が耐えないだろう。

奴の手刀と俺の刀。

命令を実行するために奴は攻撃を続ける。

俺は好きな人を守るため武器を取る。

腕をクロスにして俺に突進してくる。俺は当たる少し前にしゃがみ

奴の足をける。

奴は倒れそうになる。そこを立ち上がりながら左の拳で奴の顔面を

殴る。

「ぐうあ」

口から血を出し俺の肩にかかる。それでも腕を俺の方に伸ばす。腕を右の裏拳で叩き落す。あいつの腕が右足を少し切り裂いたが気にしてなどいられない。

俺は殴りあげたあいつより上に飛び紅翼の刃の方で切る。

奴は体をひねって鎧のある部分があたるようにする。紅翼の刃が鎧にぶつかり金属同士が当たる音がして奴は俺の振る刀によって地面に勢い良く落ちる。

「頑丈な鎧が…」

覚醒状態の俺と黒月の戦いでポロポロになっている鎧だが所々残っている部分はその役目を果たしている。

あいつは立ち上がり俺のほうに両手を向けて飛んでくる。

「!？」

空中で自由に動けるほど俺は人間離れしていない。

一直線に俺のほうに向かってくる。

俺は紅翼をこちらに向かつてくる腕に向けて振り下ろす。

敵の軌道を変えることはできなかったが、空中で俺が少し動けたお

かがで胸に向かって来たを右足にに替えることができた。

「っ！」

痛みあまり俺は紅翼を握る手を離してしまった。

足に刺さった腕を引き抜きあいつは着地をする。俺は背中から落ちた。

そんな俺を待つわけも無く、腕を俺に向けて突進してくる。

しゃがんだ体制になり敵の攻撃を避ける。

そして、右の掌底を俺が最初に殺したときに突き刺した鎧の裂け目に入れる。

「グウ！」

獣のような声を出しながら怯んだ。

右肘に左手を当てて

「はああ！」

左手で右手を押し出す感じに掌底を出す。

奴の体は2mほど飛んで着地し、倒れることは無かった。俺は畳み掛けるように前に出て董を取り出し敵に向かっていく。だが、右足で踏み出した瞬間倒れた。

体の限界を超えている。そんな状態で刺されたのだ。不思議ではない。

俺は倒れる前に董を思いっきり投げ飛ばした。

奴の左胸、心臓を貫き木に刺さって止まった。

これで終わりだ……。誰かが見れていればそう思うだろう。

目の前の化物は槍で心臓を突かれたって終わりはない。

手で自分の胸を貫いている槍を持って抜こうとする。

「化物め……」

黒翼を取り出し杖の代わりにして立ち上がる。もう、走ることすらできない。

左肩も激痛で上げることすらできない。今動かせるのは右腕、左足。

現状を把握してる間に槍を抜き。こちらに向かって走り出した。

その場に立ち止まり、迎え撃つしか俺に選択肢はない。突き出された右腕を避けて敵の顔面を斜めに切り裂く。

「あああああ！」

両者が雄叫びを上げる。

黒翼を真上に振り上げ奴の左肩から先を切り落とす。奴の右腕が振り下ろされ左肩から激痛が走る。奴の右腕が振り下ろされ左肩から激痛が走る。

痛みを殺しながら、片足で後ろに飛ぶ。

着地ができず右膝を地面につける。

膝が地面とこすれて痛むがしつかりと相手を見る。

元に戻った左腕が俺の首に向かってくる。

後ろに倒れるように避けたが鼻の頭が軽く切られた。

起き上がる要領で頭突きをする。怯んでいるうちに黒翼で胴を切り裂く。

真つ二つになった体はすぐに戻り両腕が俺を狙う。

そこからはひたすらに刀を振り続けた。

体のところどころが切られていく。

「わおおおお！」

下から上に腕を振り上げそれを黒翼で受けると黒翼が宙に飛んでいった。

もう片方の腕が俺の腕に向かってくる。

すべてがスロー映像のように見えた。

徐々に近づいていく腕を見て、もっと、早くに素直になって、黒月に気持ちを伝えるべきだったと後悔をする。

そして、奴の腕が俺の胸を……。貫かなかった。

「な…!?!」

奴の腕が消えていたのだ。

「がうう！があ！」

苦しそうに叫ぶ奴の体が徐々に消えていく。

「非在化…?」

腕から始まった非在化は体全体を消し去った。

俺は感じた。今の奴がこれから先俺に待ち受ける運命なのだと。いづれ、消えてしまう存在なのだと、知らされる。

宙から落ちてきた黒翼が地面に刺さり、俺の体は倒れた。

「たす、かった……」

そのまま深い眠りについた。



## 戦わないで（後書き）

これで、黒衣が言っていた敵との戦いは終了になります。

さあ、ラストスパート…。

その前に、黒月一族との話もいれたいですね…。苦手なんですけどね日常の方を考えるのは…。ずっと戦うシーンだけ考えたい（どっちを書いたって駄作だけどね…。

訂正：空中で胸に向かってきた攻撃が左足に変えることができた  
右足に変えることができた。

後々、で刺された足のほうが動かせるんだよ…。 ; w ;

神の孫(前書き)

さあ！三連休。

連続更新目指すぞ！

では1回目どうぞ

## 神の孫

目が覚めた時、ここがどこなのか一瞬で解った。

「ありがとう…。」

ここまでつれてきてくれた人に礼を言う。

「寝てるよ馬鹿息子が」

見えない所で答える。

俺の父、紅夜鬪夜だ。

「どうして場所が？」

寝てるつと言われても質問をする。

「雄叫び上げて近所迷惑だ」

素っ気無く言われた。

つまり、雄叫びが聞こえて行ってみれば俺と黒月がいたと。

「黒月は…?」

「ああ、お嬢さんもいる。隣の部屋だ」

扉が開けられて黒月の寝顔が見えた。幸せそうなその寝顔を見てい

ると何だが幸せに…。

なんてことを考えていると親父がその扉から入ってきて扉を閉めた。

「また派手に戦ったようだな。神の子でも現れたか？」  
テウスチルドレン

真剣な目を見れば先ほどまでの幸せな感情はどこかに行ってしまった。

「いや、俺と同じ感じの神の孫とでも言おうかそんなのが現れた」

「お前と同じ?」

不思議そうに聞く。

「ああ。まったく能力は違ったけど俺と同じ、神に作られた人だった」

「た」

「へえ、どんな奴だった?」

それから今までの出来事を話した。

話していなかった黒衣の事も現れた奴のこと。そして…黒月のこと

も…。

「そうか、背負ってやれよ彼女のことを…。守り抜いて見せる。自分の大切な人を」

悲しげに語る親父は黒月家に言ってくるつと出かけた。

会話する相手もいなくなり静かになってきた。

耳を澄ませば森の中の生き物たちの声が聞こえた。

平和な時間である。

機械仕掛けの神もいなければ、両腕が剣のような人が襲ってくることも無い。

平和な時間だった。しかし、神の子が滅びたわけではない。後3体の神が存在している。

その神たちは、親である神が殺されたこの世界に必ず来る。

それを倒すことが今の俺の使命だと感じている。だが、今の俺で黒月を守ってやれることができるだろうか…。考えれば考えるほど不安になって行く。

今回のことも2体の<sup>ドクター</sup>使い魔が来た時も守りきれてなどいない。

今回に関しては黒月に守ってもらったのだ。

何一つ守れない。黒月がいなければ、俺の命は終わっていただろう…。

気づけば、涙を流していた。

「強くなりたい…」

もう、涙を流したくない。

何が最強だ…。嘘つきじゃないか…。

黒衣！お前の言った力は最強でもなんでもない！ただ、力を与えただけじゃないか。

消えていった黒衣の残した言葉に不満を抱く。

「俺の救うは、この程度でしかないのか」

涙が止まらない。

最後に残した言葉以外の言葉が俺の胸に刺さる。

「お前は弱い！ たった一人の女性を守れないほどになー！」

俺は弱かった。黒月を守る事などできないほどに。

「なあ、どうしたら、強くなれるんだよ」

誰もいない部屋での小さなつぶやき。

「強くなくても良いんです」

微かだったが確かに聞こえた。

「弱くたって…。戦えなくても良いんです。その時は、私が鍊君を守りますから」

扉の向こうで黒月が答えた。

「だから、私の側にいてください」

これが黒月の勇気が振り絞った言葉と感じた。

話すのが苦手なのでつと紹介されてから大きな進歩だと思う。

「駄目だよ」

「え…」

「俺は強くあり続けないと駄目なんだよ」

「何で…何で、そこまで一人で背負い込むんですか…」

「俺は神の子に作られた子。神の孫って感じなんだよ。だからさ、

俺には神に対抗する力があるんだ」

「でも…。神の子はあの時倒したんじゃ…」

「神は死ぬ間に5体の分身を作った。それが神の子で、5体の内の1体だけなんだよ。まあ、その後1体を倒したから残っている神の子は3体」

「あんなのが…。まだ、3体も…」

「2体は戦うことより作り出す神だから問題は無いが…。1体は動き出す前に止めなければ大変なことになる…」

「大変なことって…」

「消されるよ。世界の非在化だ」

「それって…」

向こうで驚いた声が聞こえる。

「神と同じ能力を受け継いだ神だ」

世界を混乱へと導くかも知れないといわなかった神の子の能力。  
そして、神の子の目的…。

それを自分の大切な人に伝える。

「神の子の目的は…。神を倒したこの世界を壊すことだ」  
デウス

## 神の孫（後書き）

ついに、神の目的が伝えられる。

複線などは無かったが復讐ということでも簡単に想像がついたでしょう。

そして、この作品で最後の神はやっぱりデウス。

能力としては「存在の力を吸収する」としています。

さあ、ラスボスも言ったし、そろそろかな…。

## 日常

眠い目を擦りながら目を覚ますと

「…であるから…」

物理の先生がまだ、授業をしていた。

現在時刻、朝の10時。

俺と黒月は6時ごろ、親父と共に実家を出て親父に担がれて俺の住んでいる家に運ばれた。

その後、黒月は授業の準備をするために黒月家に戻り、俺は足から来る激痛に耐えながら登校をした。

黒月は授業を真面目に受けて、俺は完全熟睡中である。

正直な話、昨日の戦闘の疲れが消えていない。

だから…。俺は…。

もう一度、深い眠りに落ちる。

次に起きたのは昼休み10分前である。

大きなあくびと背伸びをする。

「あ、起きたました？」

隣から黒月が話しかけてくる。

「ああ…。頭痛い…」

頭を軽くかく。

「錬君がずっと眠っていて、先生が起こそうしてたから…」

なるほど、起きない俺を教科書丸めて叩いていたって感じか…。

「後、10分程度か」

「昼ご飯どうするの？」

「何にも用意してないな…。購買も何も残ってないだろうから、何も食べずだな」



言った後に朝も抜いたことに気づく。

「あの、錬君の分も買っておいただけ…」

そういって、自分のかばんからパンを2つ取り出す。

「え…。良いのか」

「うん。錬君のために買ったから…」

「じゃ、いただくよ。ありがとう」

黒月からパンを貰ってすぐに食べ始める。

周りからいちゃいちゃしゃしゃがってとか聞こえたが気にしない。

黒月にも聞こえたのか恥ずかしそうに頬を赤めてうつむいている。

「食べながら聞いてほしいんだけど」

俺は1つ目のパンの最後の一口を口に放り込んで黒月を見る。

「今日…。家に来ませんか？」

教室がいきなり静かになった気がした。

まるで教室の時間が止まったかのように…。

周りがひそひそと話しを始めた。

囁いてる程度なんだろうが俺の耳にはばっちり聞こえている。

「おい、付き合ってるんじゃないかって思ってたがまさか…」

「くそ、紅夜の奴いつか殺してえ！」

「黒月さんがあんな奴に毒されていくの」「馬鹿な。黒月と紅夜だぞ、不釣合いだ」「リア充爆死し

る」「明日、紅夜殺人計画を実行する」

うん…。自分の評価を聞くってつらいな。

毒されるとか不釣合いと…。

最後の方に関しては殺せるものなら殺してみろって思うな…。

「あの、忙しいですか…」

黒月の悲しげな瞳に俺が映る。

いや、周りのこと気にしないのか…。

「いや…。忙しくはないよ」

囁いたつもりだが…。

周りにも聞こえていたようで、また騒がしくなった…。

弥蛇さんに何を言われるかを考えれば…。恐ろしくて午後の授業は

眠れそうに無い。

「眠ってた!」

午後の授業も眠っていた俺が大声を上げて起きたのは6時間目の事である。

声をあげ立ち上がった俺の額にチヨークが激突する。

「俺の授業の邪魔をするなら眠って良いがな…。邪魔をするなら容赦しないぞ」

現在の授業をしているのは男悪魔の先生で投げられたチヨークは人が投げても絶対に出ない速度で飛んできて避けることができなかった。

「があ!」

いくら俺でも今のは痛い。額を手で押さえる。

「さつさと、席に着け」

脅迫まじりの先生の声に聞いた全員が怖いと感じたらしい。

「はい」

俺は洪々席に付いた。

そして、静かに黒板の字をノートに写した。

時は進み…。

下校時刻。

俺の隣には黒月が心配そうな顔をしている。

何を心配してるんだろうな。

「錬君…。嫌なら今度にしようか…?」

俺のことでしたね。

「い、嫌な事なんてないよ。だ、大歓迎が…、大歓迎だよ」  
噛んだ!初めて大歓迎で噛んだ気がする。

「そ、そう? 歓迎するのはこっちだと思っただけど…」

そんな雑談をしていると黒月家の門の前である。

「本当に大丈夫…?」

「ああ、大丈夫だ」

もう、覚悟はできている。

腕の一本で終われば良いなと想いながら、門の中へと入っていく。

## 黒月家訪問

黒月に連れられて、大きな広間に入る。  
俺は周りを見渡す。

「どうしたの？」

隣の黒月が不思議そうに聞く。

「いや、広いなってな」

体育館と同等くらいの広さがある。

不思議がるのは普通だと思う。

「やあ、錬さん」

ついに登場した。黒月の父、弥汰さん。

「こ、こんにちは」

かなり、緊張している。

「まあまあ、そう緊張せずに」

緊張をせずに……。無理！

「気にせじゅにどうぞ」

やべ、噛んだ。

「はあ……」

弥汰さんが不安そうに返事をした。

「静音から、契約者コントラクターになったって聞きましたが本当ですよね？」

わっぱりっと思いつながら

「はい。そうです」

そう、力強い言葉を口からだした。

最初から指示されていたのか黒月は何も言わずに隣で頬を赤く染める。

「そうか、なら、覚悟ができてるんだろっな」

そういつて四方の襖が倒されて沢山の人が見れる。

「覚悟ならできてますよ」

木刀を取り出し立ち上がりうとしたところを黒月に服の袖を引っ張

られて止まる。

「もう少し座っていて」

真剣な眼差しを見て俺は元の位置に座る。

「それでは…」

いきなり、出てきた人が頭を下げた。

「娘の事を…」

「…お嬢様の事を…」

「……よろしくお願いします!」「…」

一瞬、何が起こったのか解らなかった。

「え…え…」

「私からもよろしくお願いします」

隣でも頭を下げ頭を上げているのは俺だけになってしまった…。

どうしてこうなったかもよくは思い出せない。

だが、言わねばならない台詞を言う。

「俺が静音を幸せにします!だから、俺に大切な娘さんをください」  
俺も頭を下げた。

それから数十分もしたら、祭り騒ぎだ。

個々から「よろしく」や「幸せにしてあげてくれ」と泣きながら言われ握手をした。

酒やら豪華な食事を貰いながら過ごした。

いつの間にか眠っていたようだ。

記憶の最後にあるのは夕日で今見えるのは夜空だ。

眠っちまったか…。

吐く息から軽い酒のにおいがしたので俺のコップに酒が入れられたのではないかと疑っている。

目が覚めてしまったので、あたりに眠っている人を踏まないように、こっそりと外に出る。

今夜は月が綺麗に輝いていた。

軽くジャンプして、屋根に乗る。

屋根の上で大の字に寝転んで夜空を見る。

どこまでも続く暗き世界で輝いている星と月。

「綺麗だな」

景色を見ていれば自然とつぶやく。

綺麗だなっと感じる裏では、自分の目の前の事を考えている。

デウスチルドレン  
神の子、俺を生み出し、この神を倒した世界を壊すだけのために生まれた存在。

在。

「さて、次に現れるのはいつになるのやら…」

デウス  
神の能力を引き継いだ神はまだ未完成だ。その証拠は未だに現れないことだ。

もし、動けるのなら神同様、世界を消しに来れば良い。

今は、それができない。

「なら、今の内に倒すしかないよな…」

「倒すって何をですか？」

「え？うわああ」

後ろから急に声をかけられ驚く。

「く、黒月か…」

「ビックリしすぎだよ」

そういつて笑う。つられて俺も笑った。

「それで、何を倒すの？」

笑うのをやめて問われる。

「神かな？」

「そう…」

寂しそうに俯く。

「そんなお通夜じゃないんだから寂しそうな顔をするなよ」

「でも、あの時。よりずっと怪我して…傷ついて…。死んじゃうかもしれないんだよ」

「第一の世界で、夏目は自分の命が途絶えることを知っていても第二の世界に行った。なぜだか解るだろ

？」

ほんの少し前に自分に言われた事である。

「それは…。滅ぶ世界を救うために…」

「それと同じだよ。違うところは俺は死なない。必ず、帰ってくるよ。いつだってそうだろ？」

少し、静かになって黒月の口が開く。

「だけど、怖いんです。学校で錬君が戦っていた時も、森で戦っていた時も錬君が死んでしまっくんじゃない

かって…。怖いんです」

俯いたまま腕で零れ落ちてしまいそうな涙を拭く。

「いつも、ごめん。でも、これが俺の使命なんだと思うから…」

「…誤ったって、許しませんよ」

「なら…。これからは静音って呼んで…」

…。

一気に話が変わっているのは気のせいですか？

「なあ、黒月…」

「許しませんよ」

「…」

その時の黒月の目は本気の目だった。

「解ったよ。静音。絶対に生きて帰ってくる。そして、あの時の約束も守る」

「ん」

黒っ…。静音とそっ誓って新たな決意をする。



## 黒月家訪問（後書き）

三連休終了！

さあ、リアルが忙しくなってくる季節に入ったな…。

## 俺の武器

次の日の放課後、俺は戦った時に使った武器の回収をするために戦いの傷跡が残る山へと向かった。

山にいきなり、穴やら、森林伐採とニュースになって人も多かつたが、俺の武器は俺や一部の人が触れば拒絶反応をするおかげで戦った場所におかれたままだった。

まあ、問題は人が多すぎる。

武器の周りにも沢山の人がいる。

木の上で身を潜めている俺はどうやって回収するかを悩んだ。

まあ、チャンスは簡単に来た。

森の中から熊が現れたのだ。

人たちは逃げて、一部の銃を持った人たちが熊と応戦する。

この隙に人たちの遠くに落ちている。董と紅翼を回収した。

後は無名のあのときに作った刀と黒翼だ。

騒ぎを起こした熊が倒れ人は徐々に戻りつつある。

「おい、ここにあつた槍が消えてるぞ！」

誰かが董が無いことに気づいて叫んだ。

まあ、その後にお前らの会社が持つて言ったんじゃないかとかくだらない争いが起こった。

俺は一向に離れない人たちを追い払うため…。

熊の背中まで隠れながら移動して、熊の両腕を持ち上げる。

「おい！熊が起き上がったぞ！」

誰かが熊に気づいた。

「撃て！」

火薬がはじけて銃弾が飛んでくるが熊を貫通しないところを見ると銃弾ではないようだ。

「弾が切れた！」「こっちもだ！」

ところどころで、銃を持っていた人が叫ぶ。

「ぐがあああ！」

俺が熊を持ち上げ叫ぶ。

それだけで人は悲鳴を上げながら逃げていく。

静かになったところで誰もいないのを確認して、残り2本を回収する。

「ん？」

俺の作った刀の方を見れば見覚えがあるきがした…。いや、作ったんだから見たことはあるんだが、作る前から知っていた気がする。

「こつちだ！熊がいるのは！」

どうやら弾を持って帰ってきた様でゆつくり考えていられない。

2本の刀を回収し、熊を担いで木から木へと飛び移りながら親父の家を目指した。

「でだ…。何しに来た？」

「嫌だな、息子が親父の顔を見に来たって言うのに」

「どうして、熊を持って息子が来るんだよ。おかしすぎるだろ」

「食生活に困ってないかなって思って持ってきたのに」

「持つてくるならイノシシにしる」

「それもおかしいよな!？」

そんな会話をしながら熊の丸焼きを食す。

「時にお嬢さんとは仲良くやってるか？」

熊を齧りながらさりげなく聞いてきた。

「静音とはうまくいってるよ」

「ほう、静音さんね…」

親父はそういつて何かを察した。

「まあ、お前の人生だ。契約者コントラクターになろうと死のうといいや」

「親の癖にすごい言いようだな!？」

「ただ…。親より先に死ぬな」

今までより真剣な目で言った。いや、真剣というか。怖い目だった。

「親より先に死ぬるかつての。だから、長生きしやがれ」

「はあ、年寄りを楽にさせるよな」

そういつて俺に背を向けた。

「そっぴゃあ…」

さつき、抱いていた疑問を思い出す。

名も無き刀…。あの戦いで作り上げた刀を出してよく見る。

「どうした？刃こぼれでもしたか？」

俺の真剣な表情に気になったのか問いかける。

「いや、見たことある刀だと思っただけ…。やっぱり、見たことある物だった」

「お前は、自分の刀すら覚えられない残念な頭なのか…」  
手を頭に当てて真剣に悩む、親父。

「これは、前の戦いで作り上げたんだよ。でも、それより前に見たことある感じがした。やつと思っただけだよ。これ、黒衣が持っていた刀だ…」

「ん？そうか？もともと、特徴の無い刀だったからな…」

そう、特に違いの無い刀である。だけど、柄などがまったく同じである。

過去の俺が作り出したものだから…。今の俺が作り出してもおかしくは無いのか…。

「次元切りだっけ？」

「ああ…。次元切りできるなら、神の世界に入れる…」

「神の世界？」

「俺が作られた。いや、<sup>デウス</sup>神が死ぬ間際に作り出した世界。もちろん、<sup>デウス</sup>神の子がいる場所」

## V S 親父

「ほう、神の世界か……。行ってどうするつもりだ？」

デウスチルドレン  
「神の子を絶滅させる」

「無理だ。神の作り出した敵にすらボロボロになった奴が敵うはず無い」

「向こうは、作り出す神と不完全の神しかない。今なら……」  
「なら、俺を倒してみろ」

急に投げられた木刀をキャッチする。

「親父、悪魔が神の孫に勝てると思ってるのか」

「変化はなしで俺に勝ってみろ」  
すぐに家をでる。

「上等だ。くそ親父。どうなっても知らないぞ」

「お前はまだ、弱い」

俺が木刀に全体重をこめて振り下ろす。

親父が構える木刀が俺の木刀を受け止める。

「その程度なんだよ。お前は！」

親父が俺の一撃を押し返す。

「な!?!」

受け止められたことにも驚くが押し返されたのにさらに驚く。

「隙だらけだ」

親父が振った木刀はそこまで早いわけでもない。

今まで戦った化物のような敵と比べれば弱い。

だが、バランスを崩している俺に避けることも、木刀で防ぐこともできない。

親父の攻撃は俺を何mもふつとばすなんてことは無い。

今までを考えれば弱い攻撃だったが、異常なほどその攻撃は重かった。

「かあ…」

「どうした？神の孫。悪魔の一撃でそんなにダメージ受けるのか？」  
もう一度、親父が木刀を振る。

今度は、木刀を盾に防御をする。

「その程度か…」

「え…」

再び驚かされる。

親父の木刀は俺の木刀を一撃で折ったのだ。

その勢いは止まりはせず。親父の木刀が俺に叩きつけられた。

「かあ…」

「まだまだ。行くぞ！」

親父の振る木刀が俺に向かって叩きつけられる。

何度か叩かれてから木刀を素手で掴む事で攻撃を止めた。

「ただの木刀なのにな…」

「ああ、お前のと変わらない。ただの木でできた刀だ」

冷たい言葉だった。

だが、言いたい事は分かった。

同じ物だけど。お前と俺とじゃ違う。

親父の言いたいことはそんなものだった。

「さあ、代えの木刀をだせ。これは木刀同士でやる意味がある」

親父が木刀を構えて言う。

構えながら言うのかよ…。

俺が木刀をだす。

「なるほど…。力、スピードじゃなく。経験の差ってやつか…」

木刀を横に振る。

「いいや！違うな。乗っているものが違う。ただ木刀を振り回すお前と、想いのすべてを乗せてる俺の木刀が違うんだよ！」

俺の木刀に向けて木刀を振る親父。

木刀がぶつかつた時、俺の木刀が砕けた。

「だから、お前の木刀は弱い」

「意味が解らねーよ親父！」  
さらに木刀を出し振り下ろす。

「お前は武器の性能と自身の能力に頼りすぎだって言ってるんだよ！」  
それを弾き俺の肩に木刀を振り下ろす。

親父の重い攻撃に倒れそうになるが何とか耐える。

「それ以外に何に頼れって言うんだよ！」

木刀を持ち直し下から上に振り上げる。

「自身の想いを刀にこめて振れてないんだよ！それじゃ、いつまでたっても成長しない！」

俺の木刀を左足で踏みつけられ、顔面を木刀で叩かれる。

声も出さず後ろにただ倒れる。

背中から倒れて少し大きめの石が背中に刺さり痛む。

「あああ！」

刺さった部分を押さえながら起き上がる。

「成長しろ！俺と違って、お前は能力も力もある！後は、想いを武器にのせて振れ！」

「自分の都合ばかり言ってるじゃねえよ……」

俺は怒りに身を任せてゆっくりと立ち上がる。

## side 闘夜

無理やり自身の体を立ち上がらせ、髪が赤く変化する錬。

『闇の深淵に封じられし』

「お前が今求めるものは力じゃない。気づくんだ……。錬！」

『其は、夜を紅に染める者！』

唱え終わった瞬間。錬の木刀が目の前に来ていて俺は避けることもできず叩きつけられた。

「ああ！」

頭蓋骨が割れそうな痛みだ。

頭から地面に落ちる。

気を失いそうだ。だが、ここで目を閉じてしまえば二度と目が覚ませないだろう。

起き上がる前に横に転ぶ。

耳元でザクつと土に何かが刺さった音を聞けばその判断が正しかったと解る。

「があああ！」

土に刺さったままこちらに向けて刀が向かってくるのが音で解る。

俺は勢いよく起き上がる。

いつの間にか錬が持つてる物が木刀ではなかったがあまり驚かない。

「暴走止めのお守りはどうしたんだよ馬鹿息子が！」

その場の勢いに任せて錬の顔に向かって木刀を振る。

それを紅翼で受け止められ次に来たのは拳だった。

軽く3mは吹き飛んだ。

木にぶつかって止まったことを考えると、気が無ければどこまで飛ばされていたのか想像もできない。

立ち上がるうとしたが足がふらついて立ち上がれなかった。

まずいつと想いながら錬の方を見れば錬は倒れていた。

息を切らしながら現状を整理する。

「考えてみれば当然だよな…。おとこの怪我が癒えてないんだからな…」

死ぬと思っていたが意外と人間は死なないものだった。

いや、俺は悪魔だったな…。

side END



## VS 親父（後書き）

VSって言うっても稽古だったね…。（途中から錬の一方的な殺人になっっているけど。

力、スピード色んなものを持って生まれてきた神の孫である錬に欠けている物を教えるために親父は戦う。

次回も「目が覚めたら…」から始まるんだろうな…。

## 学生の平日

気が付いたら夜だった。

親父の家の布団だと気づくと上半身だけを起こす。

今までであったことが夢のように思えた。

何事もなく、神の孫と戦って親父に静音と一緒に運ばれて、今起きたのだと。

いや、思えたんじゃない。そう、思いたかった。

そう思えば思うほど、悪夢が思い出される。

暴走した己がやった過ちを…。

「うっ」

涙が出てきた。

悲しいからではない。辛いのだ…。

力に溺れる自分が…。自分の弱さが…。

だから、涙が流れ出てくる。

止まれといくら念じても…。

瞳から溢れ出した止まりはしない。

「悲しいか？」

驚きながらも声のするほうを見れば隣の布団から親父が聞いていた。

「力に溺れ、弱い自分が悲しいのか？」

親父は背をこちらに向けたまま問いかけた。

「ああ、悲しいよ。なんでこうなってしまつのだろっつって考えれば考えるほど涙が出てくるよ」

親父の背中を見て言った。

「力を欲するな。弱気自分を認める。そして、明日を待て。明日で卒業だ」

この言葉の中に俺の成長は終了だと意味している。

「ありがとう。親父…」

「もう、寝るぞ」

一度も振り向かず親父は言った。  
すぐに親父は寝息をたてて眠った。

俺は中々眠れなかった。

暴走する前に言っていたあの言葉が気になったからだ。

「成長しろ！俺と違って、お前は能力も力もある！後は、想いを武器にのせて振れ！」

自分の想いを振れ。戦っている中で何度も何度も親父が言ったことだ。

未だにその本当の意味は理解できない。

想いつて何だ…。親父は何を振っている…？

訳の分からないまま、眠ってしまった。

「これがお前に最後に教えることになるだろう」

朝、飯を食べて軽いウォーミングアップを済ませてお互いが木刀を持って向かい合う。

本日は平日だが、学校に行っていない。

いや、神を殺せなかったら学校なんていつでも意味が無くなるんだが…。留年に一歩ずつ近づいていっている…。

「変なことを考えるな、戦うことだけに集中しろ」

考えを読まれていたのか、親父に怒鳴られる。

「解ってる」

両手で木刀を掴む。

それに対し親父は片手で構える。

どこかでイノシシが木に突進でもしたんだろう。木がゆれる大きな音がした。

その瞬間にお互いが動いた。

俺は振り上げた木刀を親父に向かって振り下ろし、親父は横に振る。真正面からぶつかった訳ではないので俺の木刀が親父の木刀を弾く

だけで終わった。

親父が何歩か後ろに下がって木刀を構える。

「まるで変わっていない。ただ、木刀を振っているだけだ」

「解らないんだよ。馬鹿で悪かったな！」

「理解をしなくて良い。ただ、自分の感情を武器にのせて振れば…。力は変わる」

そういつて突進してくる。

木刀を振る。

「これが、俺とお前が出会う前からの感情を乗せた一振りだ」

木刀で守ろうと一瞬考えたが木刀が折れるのを感じてとっさに後ろに下がる。

なんだかんだ言っても、親父の木刀は遅い。避けられないものではない。

「逃げ続けるのか？何も成長なんてできないぞ！」

挑発、いや、親父の稽古だ。

教えているのだ親父の力を…。

「ふざけんな。体勢が悪かったただけだ。叩き折ってやるから今のうち心の準備でもしてる」

感情を乗せた一振り…。

それが想いを振るということ。

考えてみればそのまんまじゃねえーか…。

今までの想いを一振りに込める！

木刀を両手でしっかりと握る。

親父が先に動き、下から上に斜めに木刀を振る。

「これが俺の想いだ！」

木刀にむけて全力の一撃を叩き込む。

木刀と木刀がぶつかり衝撃のようなものが発生した。

「意味は理解したか、だが！軽い！」

俺の木刀がべきつと折れた。

破片が俺の首をかすり、小さな傷から血が流れる。

「嘘、だろ…」

「実際、思いを乗せれば長い間生きた俺の方が込める思いがある。

その差だ。まあ、合格ラインだ」

そういつて、折れていない自分の木刀を持ったまま家の方へと行く。

「待ってくれ！」

「なんだ？」

俺の言葉に立ち止まり、こちらを見る。

「もう一回だ。次こそ「真剣で戦った時に次はあるのか？」っ！」

親父の言葉に黙るしかなかった。

真剣で戦っている最中に俺の得物が折れたりすれば、その瞬間に殺されるだろう。

「まあ、良いだろう。もう一度くらい」

親父が構える。

「次こそは…」

心を落ち着かせて、木刀を握る。

思いをその一振りに乗せる。

今までの苦しいこと、楽しいことすべて…。

そこでふと、黒月の事を想う。

俺が始めて恋をした事…。辛くて泣いた事、泣かせてしまったこと。

優しさ…笑顔…。

「馬鹿が、隙だらけだ」

親父の声にて我に返る。

まだ間に合う！

親父の木刀に目掛けて叩き込む！

「っち！」

親父が嫌そうな顔をしたが気にしていられない。

木刀同士が触れた瞬間に衝撃のようなものが生まれ…。

俺の木刀が砕けた！

## 学生の平日（後書き）

V S 親父の続きですね。

これにて戦いは終了。

さあ、ラスト…。

## 幕間

「認めてやる」

家に戻るまで一言もしゃべらなかつた親父が唐突にいった。

「え？」

いきなりのこと過ぎて理解などできなかった。

「神の領域だったか？そこに行くぞ。ただし、俺も連れてな」  
そこまで告げられてようやく理解する。

「な、何言つてんだよ。神の領域だぞ！何が起こるかなんてわからない。命を捨てに行くようなもんだ！」

「ガキが一人前に説教か！？お前はテメエどうなんだよ。そんな場所に行くお前は！」

「う…」

「ガキが親より先に死に行くんじゃないぞ」

そう、怒鳴りつけてから俺の荷物を放り投げた。

「土曜日だ。次の土曜日にここに来て、出発だ。破れば殺す」

勢いで言葉を言って、追い出した。

驚きながらも家から出て行く。

「もう、どうなつても知らないからな！」

閉ざされた扉に向かって叫んだ後、俺は山を降りた。

「神の子は俺の子供の仇なんだよ…」

閉ざされた家の中で親父のつぶやきを聞いた者などいなかった…。

次の日の俺に待っていたのは教師たちからの昨日サボったことについての追求だった。

俺は必死に「しんどくて、一步も動けなかつたんです」と言い続

けた。

中々信じてもらえなかった（いや、まったく信じられていなかったと言おう）。

しかし、静音が俺の家に来て看病をしてくれたっと言う発言により教師たちも信じざる終えなかった。

一難去つてまた一難…。

次に始まったのは静音の追求だった。

教師たちより、俺のことを知っている静音には真実を明かすしかなかった。

できれば、何も知らないでほしかった。知ってしまった…。

「私も行きます…。」

こういうに決まっているのだから…。

「駄目だ。連れて行けない」

当然拒むが聞き入れてくれるわけなど無かった。

何度拒んでも聞き入れずに、1時間ほどの話し合いによって決着はついた。

もちろんだが…

俺が静音に負けたのだ。

最大の決め手となった。静音の最後の二言は

「連れて行ってくれないと錬君のことを嫌いになります！」

それだけでも俺の心に大ダメージを与える言葉だったが次の言葉も強力だった。

「錬君のことが嫌いになったら私はまともに生きていく自信がなくなつて…。死んじゃうかもしれない」

こんな事を涙されて言われたら白旗を挙げるしかない。

結果、静音も同行となつたのだ…。

なんか…。俺つてすごく弱いね…。



時は進み、出発の前日の放課後。

静音の親戚でどうしても俺に合いたいと言う人がいるということ、俺と静音は親戚の家へと足を運ぶことになった。

## 幕間（後書き）

闘夜の許しを得た鍊。

そして、ついでに行くことになった闘夜と静音。

最終章最終章つと良い続ける。作者の最終章詐欺！

さあ、物語はどうなってしまうのでしょうか…。

## 最強の悪魔（前書き）

もう、いや…。

118話の力に続いてこの話も抜けてたよ…。

みんなごめんなさい。

## 最強の悪魔

俺が連れてこられたのは普通の畳の部屋だった。

「…で、誰に合うんだ…」

隣で行儀良く正座をしている静音にたずねた。

「潮泉<sup>しほいずみ</sup> 律都<sup>りつづ</sup>って言う人なんですけど…。最強の魔力を持った悪魔だと思えます…」

「最強ね…」

「ええ、そうよ。鍊君」

襖が開かれると同時に俺の名前が呼ばれた。

「私が紹介を受けた潮泉 律都よ。律都ちゃんと呼んでほしいけど静音ちゃんが怒っちゃうから、律都さんと呼んでね」

嵐のようにしゃべる人だった。

俺ははあっと生返事しか返せない。

静音に関しては律都ちゃんっと叫んで顔を赤らめる。正直可愛いです…。

「さて、本題に入るけど、君を呼んだ理由だね」

「はい」

「私の悪魔としての能力はあらゆる並行世界、あらゆる時間に存在する私の記憶や感覚を共有できて、私の存在する範囲ならすべての時間と世界の出来事が分かっちゃうんだね」

意味の分からないことを言われている。

「たとえば…。実験体08?」

俺は驚いて、静音の顔を見つめたが横に顔を振る。

「静音ちゃんは何も話してないよ。私の能力で他の私が教えてもらったの」

説明をする律都さんだが…。

「何で知ってるのかって聞きたい所もあるが…。08じゃなく…09です」

「え……」

元気だけがとりえのような人が表情を固まらせて止まった。

「08つて言つてたはずなのに……」

小声で何かを言ってるが状況が読めない。

何を言っているのかもわからない。

「君の力に武器を作り出す能力とかあつたりしない？」

これもまた俺の能力を正確に言い当てた。

「君の力のことを黒い服装の人が教えに来なかった？」

「!？」

もう、驚いたレベルのものじゃない。

黒い服装の人とは十中八九、黒衣……。未来の俺の話である。

「君の未来……。世界を救つた英雄だよ」

「はあ……。英雄？」

何が言いたいのかわからない。

「その英雄が未来の君。君はこれから再び現れる神デウスから世界を救つ

者となるよ」

「何を言つてんだ……」

俺も年上に話してるなんて気にしてられなくなってきた。

知らない人いきなり世界を救えと言われているような物だ。

「錬君落ち着いて」

立ち上がるうとする俺を止めたのは静音である。

「まあ、急すぎるよね。でも、未来の君からの伝言だよ」

「黒衣か？」

「そうなるのかしらね」

とぼけた様に言つて両手を上げる。

「『お前の力の源は思う力だ』『封印を解き放て』『武器の製作は

他者の心を形にする事だ』だそうよ」

2つ目の言葉がああ黒衣の物だと分かった。

どうやら、別世界の自分の記憶の中に伝言のようなものがあつただと理解する。

しかし、後二つは何だ？

1つ目は親父と同じことを言ってるのだろう。

3つ目は…。武器補充ウェポンチャージか？

他人のための武器を作る時、何も起きなかったのに対し。俺のための武器を作る時拒絶反応のようなものを感じることが多々あった…。そのことを告げているのだろうか…。

「さて、私が受けた伝言はそれだけよ」

そういつて立ち去ろうとする律都さん。

「待ってくれ」

俺の声に立ち止まった。

「あなたは…。何を知ってるんだ…」

まるですべてを知ったかのように話す相手に恐れてしまったのかも  
しれない。

声に振るえがあつた気がする。

「私は、他の私が知ってる物を知ってるだけよ。それ以上でも、それ以下でもないわ」

そういつて立ち去った。

立ち去ると同時に俺は安堵のため息をついた。

「錬君…？」

心配そうに見つめる静音に「大丈夫だよ」と声をかける。

内心では大丈夫ではない。色々なことをいっぺんに知ってしまった  
…。

もつとも気になるのが…。

「再び現れる神デウスから世界を救う者となるよ」

この言葉は…。つまり…。

神は…。もう、目覚めている可能性が高いのだ…。

## 最強の悪魔（後書き）

就職とかで忙しいからかなって言うたら良いわけになるねごめん…。

## 本当の最終章突入

出発の日。

親父の家に集合した俺と静音は動きやすい服装をしていた。

「なんだかんだで、この刀の力使ったこと無いが…。これだけ準備してできないとかになったら恥ずかしいな…」

未だ名も無き刀である次元刀（仮）をみてつぶやく。

「どうなんでしょう…」

これに対しては静音も相槌をうつだけである。

「さあ、準備できたぞ」

親父が俺の作り上げた。大剣を持って出てきた。

「それじゃ、行けるかやってみるか」

刀を持ち、勢い良く振り下ろす。

『ギーーーーー』

次元を切り裂いた。

「…できた…」

「ほんと、うるさいな…」

自分のやったことに実感を持ってない。

親父と黒月はその大きな音に両手で耳をふさいでる。

「さて、行くとするか」

一番に動き出したのは親父だった。

「はい」

その後ろを静音が続く。

「待った！」

その二人を見て俺は叫んだ。

こちらを向いて「どうしたの？」と問いかける静音に対し、親父はさっさと次元の中に入った。



「帰れないかも知れないって事を考えて…。もう、入ってるし!？」  
「帰りなんて知るか!行くぞ!」

俺の心配を他所に親父がどんどん先に進む。

「行きましよう」

静音がため息をついている俺の手を引いた。あぁと返事をして中に入っていく。

神の世界は不思議なもので塔のようなものが1つだけ立っていて地面も空も白かった。

「不思議なところですね…」

怖いのか前を歩いていった静音が俺の後ろに付いた。

「俺はここで作られた。あの塔の中に神たちがいる…」

俺の誕生されて少しの記憶の中にある景色と合致したので間違いないだろう。

親父が塔の前で待っていた。

「どこにも扉が無いぞ」

待っていたよ言うより、入れなかったの方が正しいようだ。

「どうやって入るかは知らないが…」

こうすればいいと、俺は塔の壁を蹴り破った。

「ええ…」

静音はびっくりした声を出し、俺と親父が塔の中に入っていくのでそれに続いた。

「簡単に壊せるんだな。神の住む家の癖に」

「いや、壊すのは簡単だが…。時間がたてば修復されるようになってるはずだ」

見れば、壊した破片は消滅しており、徐々に入ってきた穴がふさがっていく。

「なるほど」

「どうして、そんなに気楽にいられるんですか…?」

反応が人外過ぎる二人についていけないように静音が問うがその答えは簡単だった。

「神の世界で何が起こつても不思議じゃないからさ」

答えて上に行く階段を見つけたので上っていく。

2階は1階と同様にただの広い部屋だった。

三人が上り終わったころ親父と俺は上からの気配に気づいた。

「来るぞ！」

親父は大剣の柄を持ち、俺は静音を抱いた横に飛ぶ。

「きゃ！」と可愛らしい悲鳴を上げるが気にしてなどいられない。

親父が立っている位置の真上辺りの天井が崩れた。

破片を軽く避けながら一緒に落ちて来た襲撃者の蹴りを受け止める。

「「な!?!」」

「嘘……」

襲撃者の姿を見たとき全員が驚いた。

襲撃者は黒いオーラを纏った……。

岡崎だったのだから……。

『やあ、ようこそ。神の塔へ』

岡崎の声でぺらぺらとしゃべり始める。

『ここは、存在が消えてしまった者が存在を持てる場所。神によって存在を与えられた者が来る場所』

無表情でしゃべり続ける。

『そして、俺は存在を消してしまった存在だが、ここの番人をやっているのだよ』

「やってるのだよって……。ふざけんよ！」

相手がしゃべらなくなっておれが怒鳴った。

「落ち着け！」

刀を出し、構えようとしたりとところで今度は親父が叫ぶ。

「先に行け。こいつは、俺が殺す」

蹴りを繰り出した足を掴みながら言う。

「殺す……?」

「ああ、そうだ。こいつは神の味方。俺はこいつを……」

「落ち着いてくださいー！」

俺と親父の会話に静音が割り込んだ。

「とりあえず。お前らじゃ、こいつと戦えない。だから、俺がやる。お前らは先に行け」

舌打ちをして言ったのは正論だったかもしれない。

『無理ですよ。俺の能力を知ってる錬ならわかるだろ？俺を突破することはできない』

岡崎の言うとおりだ。引力と斥力を使いこなす岡崎にとって門番という役目は最適である。

「親父、あいつの能力は…」

「上だ」

親父が言った。

それと同時に気づく。

『さあ、そろそろだな』

黒のオーラを纏った岡崎が駆け出し、親父に蹴りを放つ。

その速度は普通の俺でも反応できる程度だ。

親父が大剣で受け止めるが大剣は簡単に砕けた。

「な！？」

「あぶない！」

「つつ！」

俺も駆け出したが遅い。

親父は蹴り飛ばされ塔の壁に背中をぶつけることで止まった。

「がふ！」

肺の中の空気を無理やり抜かれ倒れたまま動かない。

苦しそうに呼吸をする。

『その程度か…。能力の限界を気にしなくなると結構行けるんだな』

岡崎はつまらなそうに言った。

「岡崎！」

俺は黒翼を取り出して振る。

振り下ろす前に後ろに弾き飛ばされる。

『お前は厄介だからな』

「錬君！」

静音が吹き飛んでいる俺の手を掴む。勢いを止めよう止め様としたのだから、静音も一緒に吹き飛ばされる。

俺はとっさに静音の後ろになるようにして、静音を守る。

背中から壁に衝突し、激痛に絶える。

「どうして…」

「守るっていつも言ってるだろ…」

『錬…。君は弱くなったね。もっと、強いと思ったのにな』

「黙ってる」

俺は起き上がる。

『もう、おしまいだ。今のお前じゃな』

「お前テメエ！！」

『神々より…封じられし…。其は、鎖を解かれた者！』

覚醒し、落とした黒翼を持ち再び振る。

『な！？』

俺の急激に上がった身体能力に驚く。

そのまま、一刀両断する。

上半身と下半身は切り裂かれた。

『悪いが…。先を急ぐんでな』

**本当の最終章突入（後書き）**

突然の友の登場…。

操られた友の屍の先にある者は…。

力（前書き）

すいません…。

何だか…自分のミスで一話抜けてアップしていました。

今までぜんぜん気づきませんでした…。

これが抜けてた一話です…。

## 力

『それじゃ、急いでるのは悪いがくたばってもらおう！』  
真つ二つになつた岡崎の声が上から聞こえた。

上を向けば岡崎が天井から落ちてくる。

空中で叩き切ろうと動いたが遅かった。

岡崎は俺の頭を掴み地面に床に叩きつける。

『がああ！』

俺は必死に頭を上げる。

『つつ！化物だなまるで！』

俺の力に勝てないと悟つたか、手を離し距離をとる。

『ドツペルゲンガー…』

俺がつぶやくと『やっと、気づいたか』と笑う。

『お前には俺の手の内は教えてやったのにな』

「なにが…」

『岡崎の能力の使い道は沢山ある…』

『俺の力を使えば、お前なんて敵じゃないんだよ。錬』

俺の体が岡崎の方へと引き寄せられる。

引力！？

岡崎の右手に黒を纏わせる。

『これで終わりだ』

引力で引き寄せられる俺に右手を向ける。

「しゃがんで！」

後ろから静音の声に反応するように地面に黒翼を突き刺し勢いを殺してしゃがむ。

俺の横を空気の弾丸が通っていく。

『つち！』

岡崎は空気の弾丸を避ける。

その時に、引力がなくなつてその隙に俺が駆け出す。

下から黒翼を振り上げる。

それを黒い右手が受け止める。

闇によって硬化された手は黒翼を止めた。

『受け止めたか…』

『また変わった刀だな』

『俺が作り出した刀だ!』

刀を手前に引きながら後ろのに下がる。

『そついや、神の孫のお前にはそんな力があるんだな!』

岡崎は闇を足に集めて追撃をする。

俺がしゃがんで刀を振る。

岡崎が俺を飛び越える。

俺の真上当たりで俺の顔を思いつき蹴る。

その瞬間、俺と岡崎が別々の方向へと吹き飛ばす。

『くつ…。すまない』

『大丈夫!?!』

蹴られる瞬間に黒月の援護射撃によって威力は乗っていないかった。

あの硬化した足で思いつき顔を蹴られたら気を失うことは間違いない。

なかっただろう。

『黒月、そついや、両目が変わってるって事は契約したのか』

『うん』

『お前のように、相手か俺が人だったら良かったのにな』

小声でつぶやいた岡崎は再び駆け出す。

『おーかーざーきいー!』

俺も遅れながら駆け出す。

俺の最高速度での4連撃。

『はあああ!』

全身に黒を纏わせてこちらに向かってくる。

『がああ!』

手が焼けるように熱い。4連撃の時に僅かに当たった場所を押さえ  
る。



「錬君」

静音が心配そうにこちらに来た。

俺は激痛を味わっていた時に倒れた親友を見る。

『甘いな…。止めを刺さないとはな…』

「何で俺とお前が…」

『これが、消えたものの宿命なんだろうな』

「はあ…。親父を連れて、上に行こう」

そう、余所見した瞬間だった。

岡崎が動いた。俺に向かって一直線に走りだす。

「錬君危ない！」

静音が俺を突き飛ばす。

静音が俺の盾になるうとしてるのだ。

最悪の状況が浮かぶ。

その時、静音と岡崎の間に大剣が飛んでくる。

「お前は、俺が殺してやるよ」

殺意のある目で岡崎を見る親父…。

## 力（後書き）

本当にすみませんでした…。  
これからこんな事がないようにしていきたいと思えます…。

## 親（前書き）

はい、side を入れるの忘れてましたね…。  
読んでいれれば気づいていただけだと思います。  
本当に脱字とかすいません。

## 親

side 闘夜

俺はゆっくり歩いて、実の子と拾い子の間に突き刺さっている大剣の柄を握り引き抜く。

「鍊、さつさと上に進め」

俺は真悟のほうを向いて言う。

「でも…」

「さつさと行け！」

後ろに向かつて叫ぶ。

鍊も驚いてか何もいえなくなる。

「鍊君、行こう…」

静音さんが鍊の手を引いて次に進む。

目が赤くなっているのを見た俺は少々驚いたが目の前の敵を見る。

『これでいいんですか？あなた一人で俺を止めれるとでも？』

真悟が自信満々に言う。

「悪いが止めない。ただ、殺させてもらう」

大剣を横に一閃。簡単に避けられる。

『そんなものか…。デビルキラーなんて呼ばれた方が』

「よく知ってるな」

『有名だったからな』

「いやー」と照れるように良いながら大剣を振り回す。

黒い物を右手に纏わせて大剣を受け止め、大剣は砕かれる。

『脆い剣だ！』

そのまま踏み込んできて右手が俺の首を狙う。

「っあぶねー！」

真悟の体を蹴り、右手には振れなかった。

次の瞬間には次の攻撃が来る。

能力を開放し、闇の剣を作り出し右手で持つ。  
黒き手を黒き剣で防ぐ。

『今度は、固いな』

「ああ、俺の想いがつまってる」

砕けた大剣が再生する。

再生したのを見てすぐに振る。

『錬の作り出した武器か』

真悟は後ろに下がって体勢を立て直す。

「ああ、知ってるのか」

俺は大剣の二刀流で構える。

『神が教えてくれた。色々な真実をな』

「ほう」

岡崎の周りに薄い黒を纏ってる。

『さあ、親父殿。俺を止めてみる』

「っ!?!」

驚いて反応が遅れてしまった。

あいつの拳が俺の顔面に入ってた。

「があ!」

後ろに倒れる。頭から地面に落ちてかなり痛い。次の拳を避けなければ行けないから無理やり体を動かす。

動かなければ、俺の心臓のあった場所に拳が来ていた。

『なあ、親父殿。その程度かよ』

「これも、神のシナリオってことか…」

『さあな』

次に来たのは、岡崎に引き寄せられる力。

…引力!?

剣を二本とも地面に突き刺す。

『はあ!』

引力で引っ張ったまま岡崎が迫ってきて、俺を殴りかかる。  
動きながら引力ってありかよ!

両方の剣を抜き、襲い掛かろうとしたが、剣が振れる少し前に引力によって俺は壁まで突き飛ばされる。

「ひどすぎだろ、引力と斥力って…」

「悪いが、俺の能力だ」

距離をとれば引力、攻撃すれば斥力…。

恐ろしいなこの力は…。

「さあ、そろそろとどめだ」

纏っていた黒が右手だけに集まる。

ここまでできたらわかる。

次の攻撃は引力からの全力の拳で終わらせる。

思ったとおり、引力で引き寄せられる。

剣を突き刺すが地面を切り裂いて真悟の方に進む。

「死んでくれ、親父殿！」

後ろを向いているが真後ろに真悟が殴りかかろうとしているのが解る。

なら、俺のやることは？

ここまでできたら一つだ。このまま自分の腹に剣を刺して真悟を貫く。剣を俺に向けて思いつきり突き刺す。

肉を切り裂く嫌な感触だ。だが、これで仕留めれるなら…。

あいつの能力を考えればやはり、このやりかたしか思いつかない。

剣がずいぶん刺さったが真悟を貫いた感触が来ない。

「親父殿、そんな方法が通じるなんて思ってたのか？」

真後ろに入れたと思っていた真悟がずいぶん遠くにいる。

攻撃が読まれていた…。突き刺すときに斥力を使われた…？

「かあ」

死ぬ前に脳が働くとか言うけど確かだな…。

「さあ…。追うk「糞親がああ！」な!？」

天井が崩れて錬が落ちてきた。

「目覚ましやがれ！」

俺に刺された剣をすぐさま抜き。声をかける。

本当に、死ぬ間際まで騒がしい奴だ…。

親（後書き）

とうとう、メインキャラ2人目の死亡…。

あ…。俺が書いてはいけないシリアス部分か…。

まあ、目を瞑ってくれよな？



## 友

「錬たちが上の階についた頃に戻ります」

「錬君大丈夫…？」

親父に睨まれて、怒鳴られる。いつでもある光景だった。だが、今回は振るえが止まらない。足が、がたついて言うことを聞かない。

「ああ」

返事だけでもして心配させないようにしているが弱弱しい俺の今の声だと逆効果にしかない。

「ねえ、聞いて」

突然手を引いていた静音が立ち止まり言った。

「私、錬君のお父さんと岡崎君の心の中を見たの」  
何を言ってるのか解らなかったがすぐに理解できた。  
静音の赤い瞳を見れば。

「岡崎君は、好きな人を守るために番人をしてる」

「な、なんでそうなるんだよ。確かに、そこまでして助けようとする相手はいるだろうけど…」

あいつには存在を消してでも、守った者がいる。  
今、そんなことが関係あるはずがない。

「その人は消えかかっていて、神はその人の存在を消すって言うって岡崎君を利用してます」

「な…ばかな!？」

一旦否定するが考えれば、存在を消すことができる力を持っている。そんな奴が脅迫すれば…。

「ふざけやがって、神の野郎!」

俺が下の階に戻ろうとするのを静音が止める。

「通してくれ!あいつを何でも一人で背負ってるあの馬鹿を殴りに

行く！」

「駄目！岡崎君だって、苦しんでるんだよ！錬君と戦いたくないから、上の階に行かせたんだよ！」

「知るかそんなこと！」

「錬君に岡崎君を殺すことができるの！？」

今…なんて…？

「岡崎君を止める方法は動けなくして能力も止めるなんて…。殺すしかないんだよ！」

静音が辛そうに言う。

「それが解ってるから、錬君ができないって解ってるから…。実の子を殺そうとしてるんだよ！」

親父の殺意ある目を思い出す。

「ちよつと待ってくれよ。実の子って？」

「え？鬨夜さんがそんなことを考えてたよ…」

親父の本当の子がいる？そんなことを言っていたか？いや、記憶にない。それに岡崎がって。

「何が何なんだよ！親父！何があつたんだよ！」

地面を殴る。

「錬君落ち着いて！」

「落ち着けるはずないだろ！」

拳から血が流れ落ちる。

「親父は他に何を思ってたんだよ…」

息を切らしながら問う。

「…刺し違えてでも岡崎君を…」

「糞親がああ！」

全力をこめた拳で地面を殴り破る。

下の階に落ちれば親父は自分の剣を自分に突き刺して刺さっている所から赤に染まっていく。

「目を覚ましやがれ！」

剣を抜き声をかける。

親父が俺の顔を見て笑顔を作る。

「れん」親父の声とは思えないほど弱弱しい声だった。

「親父！引き分けだったんじゃないのか！？また、今度決着をつけようって言っただろ！」

〈回想〉

「木刀、同士の戦い」

俺の木刀が砕けた。

「何で何だよ……」

「悪いが、今度も俺の「ボキ」」

それは軽いしぐさだった。持つてる木刀を肩に軽く当てるといっ。

それだけで、木刀が折れた。

お互いが驚いた。軽い衝撃も耐えられないほどになっていたのだ。

「え？」

「あー、折れちまったな……。また、今度決着つけるか」

そんな気楽なことを言っただけで家に向かった。

涙があふれてくる。

「ごめんな。お別れだ」

「親父！」

そのまま、ゆつくりと目を閉ざし、目を開けなかった。

『親父殿が死んだか』

「あああああ！」

振り向き、黒翼を持って岡崎に向かって駆ける。

『闇の深淵に封じられし。其は、夜を紅くれないに染める者！』

『無駄だ』

後ろに引っ張られる力が発生する。

それでも前を見て足を動かす。

一步一步が斥力に逆らって動く。

『はああ!』

黒を纏った足の蹴りを放つが少し力を抜いて斥力で後ろに行き、攻撃を避け、持っている黒翼で切り裂く。

『あぶねえな』

黒翼を足でガードして、軽い傷しかつかない。

『止めてやる。親父の変わりに俺がお前を殺す!』

『来い! 錬!』

黒翼を構える錬と全身に黒を纏う岡崎。そして、遅れて到着する静音。

友達同士の殺し合いが始まる。

友（後書き）

さて、軽いかな？

しかし、これが限界！

そろそろ、就職とか忙しくなるので長期に渡って書けなくなるかも  
…。

## 別

一番に動いたのは岡崎だった。

右足に力を集めての蹴り。

黒翼で防ぎ左手で肩を殴る。

『あめえ』

肩が黒を纏って、肩を守っている。

鋼鉄を殴るような痛み。

『あう！』

『俺の力を良くわかってないな！』

再び蹴りを放たれる。

避けれない。そう感じた時、岡崎が吹き飛んだ。

『黒月か！』

『私が錬君を守ります』

手を岡崎に向けて静音が言う。

『お前の能力は厄介なんだよ』

手のひらを静音に向けて引力で引き寄せる。

『俺を忘れてないか』

岡崎の真横に飛び出した俺があいつの腹を思いっきり切る。

それは空振りに終わった。斥力によって俺の体が後ろに移動された。

『厄介なのはお前だよ』

そうつぶやいて静音と岡崎の間に入る。

『お前には言われたくないな』

岡崎が体に薄く黒を纏い全体を強化する。

『やめようよ！岡崎君！こんな争い』

『黒月は俺の心を見たんだろ？』

『はい』

悪気があるのか脅えた声だった。

『それでいいんだ。誰かの心を見るその力をうまく使っしかないだよ』

『まるで、知って欲しかったようだな』

黒を纏った。岡崎が笑う。

『そうかもな』

「どうして、そこまで」

『解るぜ、そこまでしてでも守りたいって事がよ』

あいつの覚悟も知ってる。

『それでも俺は、神を殺す！』

『ああ、それしか道はないんだろ？』

俺が飛び出したが斥力が俺の邪魔をする。

『悪いが決める』

『そんな余裕あるのか？』

右手に黒が集まる。

「錬君…」

『止めんなよ。お互いに色んなものを賭けてるんだ』

黒翼を鞘に収めて抜刀の体勢になる。

あれ…抜刀とかできたけな…。

抜刀の体勢を作ってから気づく。

『抜刀か…そんなこともできたんだな』

俺の心中もしらずに良いように惑わせれる。

『行くぞ』

岡崎が先に飛び出す。

俺もそれに続くように岡崎の方へと飛び出す。

『はああああ！』

飛び出した後に違和感に気づく。後ろに引き戻されるような…。

斥力。その単語が俺の中に出てくる。

限界の力を出した状態で斥力も使えるのか…。

『撃て！』

考える前に叫んでいた。それでどうにかなるかと思い…。

後ろから前に押し出される。静音の空気の弾丸が俺を押し出したのだ。

『ああああ!!』

右足で踏み込み。抜刀する。思ったより形になっていた気がする。普通に振るよりも早い斬撃が繰り出されるかと思っただが、岡崎が鞘から抜き出されかけていた黒翼の柄を殴り、鞘に押し戻された。

『終わりだ!』

柄を殴った拳はそのままアップするように俺に向かっていく。

『神々より…封じられし…』

身の危険を無視して…。

『其は、鎖を解かれた者!』

その一振りにすべてを賭ける。

抜刀する。

俺の持つ黒翼が岡崎の体を今度こそ真つ二つにして、岡崎の拳が俺の顎に命中する。

「ああ…!?!」

空中殴り飛ばされ背中から落ちる。

『れ、ん…。あ、と…まかせ…あ』

真つ二つになった友が何かを言っていた気がするがまったく聞こえず。消えていった。

元は、存在が消えたもの。一度消えたものは…。帰ってくることはないんだ。



別（後書き）

岡崎の復活もなく消えていく…。  
残るは神のみ、さあクライマックス！

## 神

咽ながら口の中の血の塊を一気に吐き出す。

倒れたまま息切れをしつつ回りを見渡す。

泣いている静音とその近くに倒れている親父…。

「何で、何でこんなことになるんだよ」

考えているだけで涙が零れ落ちる。

親を亡くし…。友を殺す。

一体、俺は何をしに来たんだ…。

「錬君…」

悲しげな顔でこちらを見つめる。

「過去には戻れない…。進むしかないんだ。生きる者は！」

黒翼を地面に突き立てて起き上がる。

かなり、限界まで来ている。

「錬君、最後に二人の遺言があります」

涙を拭き言つ。

「鬨夜さんが…岡崎家の敷地に妻の墓がある」それと…「自慢の息子。世界を守れ」って」

あまりの事に涙で何も見えなくなりそうだった。

静音の能力…。二人の最後の考えた言葉を伝えているのだ…。

遺言。その言葉が一番正しいだろう。そして、伝える静音の心情を考えるとどれだけ辛いのか想像もできない。

「岡崎君が…錬、お前に託す」って最後に伝えてくれって…」

「っつ…」

涙が出た。最後の最後に自分を殺した者に大切な人を託すつと言う友と何度も、何度も殺しそうになったそれを自慢の息子と言ってくれた親。そして、伝えてくれた者に…。

「ありがとう…。俺の親父で入ってくれて…。友達で入ってくれて…。そして、隣にいてくれて」

もう、涙で前なんて見えない。

「これからも…。隣にいるよ。だから、辛くても苦しくても…。頑張る」

そういつて、優しく抱きしめられる。

「ううあああ！」

叫びながら涙を流し続けた。

それから2分ほど泣き続けた俺は泣き止んだ。

「落ち着いた？」

いつもの優しい声で問いかける。

「うん。ありがとう…。」

力強く立ち上がり黒翼を掴んで消す。

「行こう。神を許せない」

「うん」

次の階へと目指す。

親父の遺体に「必ず戻ってくる」と伝えて。

それから最上階までひたすらに登った。

広い部屋はいくつかあったが岡崎のような番人はいなかった。  
最上階に待っていたのは

『来たか09』

人の大きさをした機械仕掛けの神。

「ああ、殺しに来た」

神はそれを聞いても何にも反応をせずデウスに

『神も私だけになってしまったな』

「え？」

それを聞いて静音が驚く。

「惑わされるな、戦闘力はない神だが後2体いるはずだ！」

『信じないな。まあ、入ても入なくてもどうでもいいけどな』

そういつと、手を出して刀を出す。

俺と同じ力である。

「やっぱ、その刀か…」

その刀が出ることは予測できていた。

『さあ、09。神の剣と戦うか』

煉獄。俺が持っていた最強の刀。

「あの刀…」

「静音、離れてる。あの刀に触れるなよ」

触れた物すべてを壊すことができる能力を持った刀。

『さあ、神が勝つか。人が勝つか！』

神が踏み出した。神と言っても戦うための存在ではない。

戦うために作られた俺の速さを超えることはできない。

神の太刀筋を見極め、避ける。

『神々より…封じられし…』

白翼を出しながら唱える。

『其は、鎖を解かれた者！』

反撃の一撃を食らわせる。

白翼を顔面に叩きつけられた神はすぐに立ち上がった。

『さすが、神に作られた戦いの人形』

『あきらめるよ。ただの神であるお前デメエに俺を止められない』

『人形の癖に頭が高い。そして、解ってない』

「錬君は人形じゃない！」

静音が口を挟んだ瞬間に神が静音を睨みつける。

『あああ！』

神の次の行動がわかった俺は駆ける。

叩きつけた時に横に飛んだ神は僅かに静音に近い。

そして、静音を守るといふ俺の行動を読んでいる。

だから、静音を狙いに行く。

静音が空気の弾丸を飛ばすが神は避けることもなく。

煉獄の前に出し、空気の弾丸を消す。

『間に合え！』

静音に向けられた刀を弾く。

能力を無効にする白翼でなら煉獄に触れることができる。

『はあ！』

弾かれた勢いに逆らうことなく、弾かれた方向に回転して煉獄の刃が俺に向かってくる。

『つつあ！』

煉獄の方に向けて白翼を盾のように構えて何とかやり過ごす。

一発あたれば死亡。この緊張感の中戦うのは辛い。

どうにかして…。短期で決着をつけないと…。

神（後書き）

とうとうラスボス登場。さらにはあの懐かしい刀も……。  
さあ、どうなる？

## 崩壊

『今の攻撃で決まると思ったがな』  
神が気楽に言う。

『厄介な奴が…』  
どうにかして短期戦で決めたいというのに。

『すぐに決着がつけたいようだな』  
心を見透かしたように言われあせったが逆の立場になって考えれば  
すぐに解ることだ。

『その望み叶えてやろう』  
神が地面に煉獄を突き刺す。

一瞬、何をするのかわからなかったがすぐに知ることになる。  
この塔を砕いた。

煉獄の触れているものを思いのままに壊す能力だ。

『静音！』  
ボロボロになって崩れ始める足場を蹴り。静音の方に行く。

「錬君！右に飛んで！」  
何のことかと思っただが右に飛ぶ。

『そういう能力もあるのか』  
俺がさっきたっていた場所に神がいた。

静音の指示を聞いてなければ、天国に直行だっただろう。  
自分が立っている場所も崩れ始めてきた。

もう、この塔は完全に崩壊される。  
神は追撃をしに俺のほうに向かってくる。

振り下ろされる煉獄を白翼で受け止めるしかない。

『邪魔だよ！』  
力任せに押し返す。

力と速さなら俺のほうが何枚も上手だ。  
バランスを崩した神に追撃を仕掛けようと踏み込んだ事で床が抜け

た。

神の起っている場所も崩れ始めたが神は何事もないようにたつたま  
ま煉獄を振る。

『なあ！？』

抜けた足場に気をとられ反応できなかったが抜けた箇所が拡大して  
行き、俺が下の階に落下する事で生

き残った。

下の階から上を見上げれば神が空中で止まっている。

『飛べるのかよ』

つぶやいていると神は崩れて穴ができた天井から塔を出た。

「もう、崩れるよこの塔！」

上から静音が叫ぶ。

神様は高みの見物かよ！

「え…。わああ！」

上の階から瓦礫と共に静音が落ちてくる。

『ああああ！』

叫びながら走る。走ってる中で床が抜けそうだったが、崩れる前に  
次の一步を踏み出す。

スライディングをして、何とか静音の下敷きになった。

「錬君、大丈夫！？」

『ああ…。余裕だ。それより、ここからですよ』

慌てて退ける静音に冷静に言う。

『静音、しっかりつかまってるよ』

静音をおんぶして俺が言う。

「はい」

しっかりと俺の肩を掴む静音…。えっと…。やわらかい物が背中に  
…。いえ、なんでもないです…。

そんなことしていると上から瓦礫が落ちてくる。

それを蹴りで落とし、床に目掛けて力いっぱい蹴りを入れる。



『すまないが我慢してくれ』

小さな石などまで打ち落としている余裕はない。

「大丈夫だよ」

そうは入るが、少し大きいのがあたりたりして大丈夫には思えない。だが、立ち止まっている暇がない。

今にも崩壊しそうなこの塔から親父の遺体を出さなければ。

何回も床を壊して移動することで岡崎と戦った階まで来れた。

『静音。平気か？』

「う…。うん。大丈夫だよ」

言葉でそういつても肩を掴む力は弱くなっている。

ごめん。俺が弱いばかりに…。

心の中で誤り。冷たくなつた親父の手を掴む。

『これで終わりだ』

塔の壁を壊す。

それと同時に塔から飛び出す。

そして、着地。

『ここなら大丈夫だろ…』

二人を下ろして言う。

「危ない！」

静音が俺を突き飛ばす。

神が俺と静音の間を横切る。

『さあ、決着の時か』

神が空を飛びながら言った。

## 崩壊（後書き）

次回当たりで神戦も終わりにしたいなって思ったり…。  
えっと…。116話が抜けていたので割り込み投稿させていただきました。  
ました。  
どうぞ、そちらもよんでいただけるとありがたいです。

## 愛の形

決着のときつと言ったわりには神は空中をただ飛んでいるだけである。

『何してんだ…』

真上を見ながらつぶやく。

「時間稼ぎかな…？」

自信のない疑問を言うが多分あっている。ただ、何を待っているのか解らない。

ただ時間だけが過ぎていく。

「あの、次元を切った刀貸してください」  
結構な時間が過ぎてから静音が言う。

俺は疑問を持たずに刀を出し。渡した。

刀を親父の横に置いて構え…

「はああ！」

神のほうに向けて刀を振る。

次の瞬間。突風が上に吹き風の刃として神の方へ飛ぶ。

神も予想外の出来事に反応できず左腕が切り落とされた。

切り落とされた破片は真下に落ちたさいにズドンと音をたてた。

どれだけ重いんだよ…。心でつぶやきながら神を見る。

腕はすぐに再生していた。

『存在の力がある限り。復活できるってか…』

もともと、存在の力で生まれた奴だ今更驚きはしない。

「もっと。もっと鋭く！」

つぶやいた後に刀を振る。

今度の刃は先ほどより速い。

神は煉獄をこちらに向けるだけで攻撃を無力化させた。

この遠距離攻撃が通じないとなるとやはり、白翼で叩くしかない…。

『そつだ…』

静音に耳打ちをする。

「え…。できるけど危ないよ…」

「でも、それしかないから」

「ドクター 使い魔 が来てくれたら…」

俯いてつぶやく。

俺と静音の間に ドクター 使い魔 がまだ生まれていない。

人間ではない俺が コントラクター 契約者 だからかもしれない。

現れない存在に期待していても仕方ないので作戦を実行する。

「行くぞ」

「はい！」

俺が全力でジャンプする。

その背後から空気の塊が来る。

俺がジャンプした後には黒月の空気の弾丸で俺を飛ばすという単純な作戦だ。

「愚かな」

神は煉獄をこちらに向けて飛んでくる。

俺は飛んでくる。煉獄に向けて白翼を叩きつける。

ガキン。

鉄と鉄をたたきつけた音が世界に響いた。

俺はそのまま白翼を煉獄の上で滑らせ左手に出した黒翼で神を狙う。

この一撃を逃せば…。きつと空中で刺されて死ぬだろう。

「はああああ！」

俺は神の首に目掛けて黒翼を突き刺す。

「があ」

機械仕掛けの神にとって首がどんなに大事かは知らないが苦しそうに声を出した。

殺った。

そう確信をした。

煉獄を持たない手が黒翼を持っている腕を掴んでいることに気づくまでは…。

『きえ…ろ』

確かにそう聞こえた。

その瞬間から黒翼を持つ手の感触が消えた。

否…。俺の黒翼を持っていた左手が消えたのだ。

『な！？』

俺は地面に目掛けて落ちていく。

「危ない！」

地面に落ちる前に静音が俺をキャッチした。

『ああ…』

左手から消え始め。もう、左肩まで消え始めている。

「非在化…」

静音が震えた声で俺に起こっている症状を告げた。

『そうだ。その状態は存在の力を消耗して力を得ている。さらに我

が力で非在化を進めていた。悪魔のように非在化を防ぐ対策など0

9にはないからな』

まったく言ってその通りである。

黒衣も言っていた通り。存在の力を消耗して力を得ていたのだ。

それを存在の力をコントロールできる神の前で使うなど自殺行為で

しかない。

きつと、黒衣は暴走だけで戦っていたのだろう。

決定的な俺のミスである。

「静音…。逃げる！」

煉獄に唯一対抗できていた白翼も落ちるときにどこかに落ちてしま

った。

普通の状態に戻っても非在化は徐々に進む。顔の半分が今消えて入

る。

「嫌だよ…。錬君、置いていかないでよ！」

『さあ、裁きの時だ』

神は首に刺さったままの黒翼を静音のほうに投げ捨てた。

「逃げるよ！あの刀に触れたら即死だぞ！」

一向に離れようとしないう静音に怒鳴り声を上げた。

「ずっと、鍊君の側にいるから……」

涙を流しながら半分以上消えかかっている俺を抱きしめた。

「私の側から入なくならないで！」

静音の言葉に反応して、静音の背中から青き鳥が現れた。

鳴きながら神に体当たりをする。

「え……」

青き鳥は風の刃を放ち神の体に傷をつけていく。

『<sup>ドウター</sup> 使い魔 かうつとうしい！』

神の一振りであれと静音の<sup>ドウター</sup> 使い魔 は内部から血を出してボロボロ

になった。

「あ……」

<sup>ドウター</sup> 使い魔 は愛の形。誰かが言っていた言葉だ。

今、愛の形がボロボロにされてしまった。

言葉も出ない状況に驚かされる出来事が起こり続けた。

こちらに向かつて歩き始めた神が前に倒れたのだ。

先ほどボロボロになった青い鳥が復活して、後ろから襲ったのだ。

『死に底ないが』

怒り気味の神が鳥を切り刻む。

切られた場所が燃え上がり体が元通りになる。

「不死鳥……？」

静音がつぶやいた。

伝説の中の生き物。不死鳥、フェニックス。

俺の記憶の中では傷を負っても炎で焼かれすぐに再生すると聞いた

ことがある。

そんな存在が俺と静音の下で生まれたことに驚きながらも神と戦う

<sup>ドウター</sup> 使い魔 を見ていた。

非在化は進み。体の7割がたが消えていた。

「静音……頼みを聞いてくれ」

俺はあえて最後とは言わなかった。

『不死身か。化物と2つの能力を持った者からできたのも化物か』  
刀である程度傷つけてこちらを向いた神は驚き動けなかった。  
すでに、右腕から顔の右側しかない俺が神に黒翼を向けて飛んできたのだ。

静音に頼んだ願いとは、「黒翼を俺に渡して、神に向かって投げしてくれ」ということだった。

消えかかった俺の最後の一撃は神の右腕を貫き、そのまま肩まで突き刺した。

「ああああ！」

そのまま力いっぱい振ろうとするが力不足で刀は動かない。

『虫の息が！』

神は煉獄を左手に持ち替えて黒翼を粉々にした。

黒い破片で俺の視界は黒に包まれた。

## 愛の形（後書き）

<sup>ドクター</sup> 使い魔 が不死鳥ってどうなんだろうって思いつつ書き上げた。

まあ、化物と2つの能力持ちだし、なんでもありかなという広い心を持っていただけるとありがたいです。

さあ、終わらなかつたねVS神。

次、どうするんだよって声も多そうだな…。

次回こそ、VS神終わらせませす。

今度こそ本当だよ？



## 存在しないはずの黒の世界

見える黒。

その先から神の攻撃が…。来ない。

「こつち向けよ」

後ろから声が聞こえた。静音の声ではない。後ろを振り返れば、

「岡崎…」

黒い岡崎がいた。

「俺は岡崎をイメージに作られた武器黒翼のイメージだ」

黒い岡崎いや、黒翼そういった。

「岡崎をイメージして作った。何故あらわれた？」

「使い方の荒いお前さんのせいで壊れたからさ」

黒翼は怒りもせずに行った。

「壊しやがってとか怒らないのか」

疑問を聞くため息をつかれた。

「解ってないな。お前が作ったんだ。どうなっても怒りはしないさ」

黒翼はあきらめたように言った。

「さて、本題だが、どうする？ここは、黒翼のイメージされた世界。

時も流れなければ敵も何も無い」

「何で、そんな力が？」

「持ち主なのに、何も知らないな。俺の能力は魔力や存在の力を吸収し蓄える。蓄えた物は何にも使えない。だから、ずっとたまってきた」

「なるほど、溜まっていた力が壊れたことで解放された。その勢いで世界まで作ってるのか。どこでそんなにも力を？」

「魔神相剋者アスラ・クラインの無限の力と戦う時にかなり吸収した」

確かに、魔神相剋者は無限の力を持つてそれを吸収し、一気に放出したら…。

「世界ができましたか…。で世界に招いてくれて何がしたいんだ

？」

「さつきも聞いたように、お前の意思だ。この力を使えば非在化からも戻ることができる。ただし、神の目の前で復活しても死を避けれるとは思えないがな」

黒翼は俺にこう聞いているのだ。

この世界で生きるか、死ぬ間際に戻って戦うかと。

「答えは簡単だ。戦う」

「良いだろ。せいぜい死なないようにがんばるんだな」

黒翼がそういつた瞬間。黒い世界にひびが入った。

現実に戻った俺に最初の難関が来る。そう、煉獄の刃が近づいている。

俺は、取り戻された体のパーツを動かし、右に転がった。

「あぶねー！」

後2秒遅かったら刺さっていた。

「戻った!?なぜだ」

「良かった」

嬉しそうに声を出す静音だが

「喜んでいられないぞ。一瞬で決める」

紅翼を拾い構える。

『闇の深淵に封じられし、其は、夜を紅に染める者!』  
くれない

体の変化を感じつつ敵を見つめる。

神は使い魔と戦っている。

『うつつうしい。消える!』

煉獄で消滅をイメージしたのか、不死鳥は消え去った。しかし、消えた場所が燃え上がり一から体を作る。

『消して消えない愛の形てか。最高だな』

神に切りかかる。

神はそれを見越していた。

俺の攻撃を避けて、自分の攻撃を繰り出そうとする。

腹部に向けての突き刺し。

『神々より…封じられし…。其は、鎖を解かれた者！』  
覚醒状態になり後ろに飛ぶ。

『つつ！』

『終わりだ』

着地したところから一気に駆け走る。

神が俺に目掛けて振るが今の俺の速度に追いつけていない。  
軽い刀だ。

何も乗っていない。

それに対して俺は、俺のすべてが乗っている。

負けるはずなどない。俺の想いがあいつに負けるはずなどない。

煉獄を紅翼で弾く。

『な！？』

神の手から煉獄が飛んでいた。それを使い魔が空中で捕まえる。

『さあ、お別れだ』

紅翼の刃の方で神を何度も切り裂いた。

粉々になった鉄くずはもう、神とはいえない。

「終わった」

上を見上げ涙を流す。

「うん。終わったね…」

色んな物を失つてとは、静音はいえなかった。

こうして、神の子に作られた者と神の子の戦いは終わった。

世界の危機が救われた事を知るものは極わずかであった。

神の世界から帰ってきた錬たちは鬨夜の遺体を岡崎家にある江宮篠えみや  
という合ったことのない義理の母と同じ墓に埋められた。

次の日には、錬は学校を辞めた。親父がいなくなり、学費なども問題になったからだ。黒月家が学費を出すという話も出たが錬が丁寧に断った。

錬は親父が裏で受けていた悪魔同士の交戦を止める仕事をし始めて

いた。50人くらいの悪魔がいつせいに戦いはじめるそんな戦場にて、誰も殺さず。争いを止めるのには苦勞をし、仕事始めの初日はかなりの傷を受けて、2日間静音に看病をしてもらうことにもなった。

ちなみに、静音は学校に通っている。俺のいない学校生活は嫌と言いつ張ったが家の事情などで通いつけている。錬の家に泊まることも良くあつた。

神がいなくなつて9年…

「おかーさん！」

家全体に聞こえるような大声。

「どうしたの？誠二？」

「みんなが僕のことを鳥としか仲良くできない弱虫つて言うんだ」

誠二の肩に止まつている青いがピーと鳴く。

「誠二は弱虫じゃないことは私が一番知つてるよ」

「うん」

「でもね。誠二は強すぎるからみんなを傷つけちゃうんだ。だから、力を守るために使えないとダメなんだよ。何を言われても我慢しないとダメだよ。嫌なことを言われて、争つちゃうことのほうが弱いんだよ」

優しくなだめると少しして、「うん。がんばる」とうなずいた。

「ただいま」

誠二と話していると一人が帰つてきて、

「お父さん」

誠二は元気良く駆け出し、玄関にいる父に飛びついた。

「ただいま。誠二」

私の夫の黒月錬である。

私にした話を父にもしているのを聞きながら晩御飯の準備を進める。「そんな奴ぶつ飛ばしちゃえばいいんだよ」

「もう、お父さん。そんなこと言っちゃダメでしょ」  
私は慌てて言った。

「ああ、そうだな」  
楽しそうに笑う。父の隣で誠二も笑う。

2つの能力を持った悪魔と神に作られた者の間に生まれた誠二は悪魔の力と錬の運動能力を引き継いだ。もしかしたら、他にもいろんなことができるかもしれない。

それでも、私の使い魔のリルに常に横にいてもらっている。もしも  
の時に止めてくれるように。

色々と不安なことがあるが楽しい日々を過ごしている。

「それじゃ、ご飯にしようか」

死にたいなんて思ったこともあったが、今は生きていることに、側に大好きな人が入ることに感謝をしている。

## 存在しないはずの黒の世界（後書き）

長きに渡って続いた存在するはずのない世界。

この話にて本編は完結になります。

長かった……。本当に完結できるなんて思っていなかったな。これまで、ありがとうございました！

律都の色々な発言のなぞとか解いた方が良かったかな？

まあ、また人気によって考えます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0845j/>

---

存在するはずのない世界

2011年9月26日09時12分発行